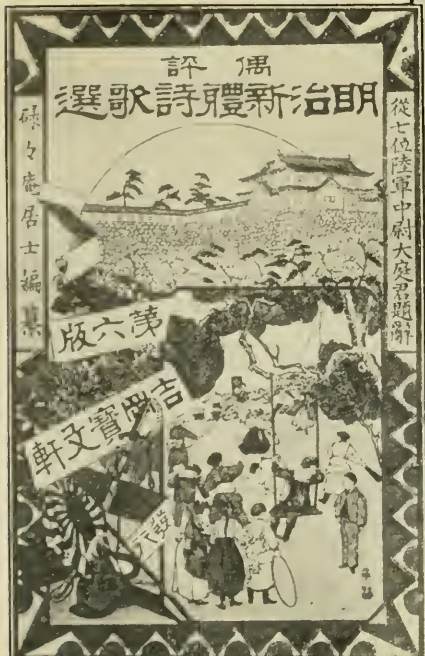
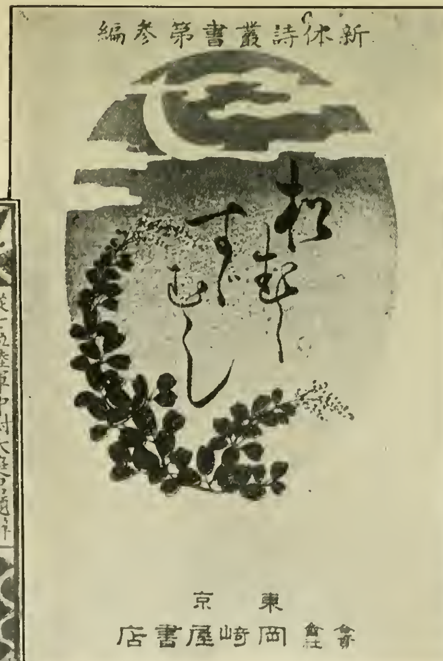
文學博士藤村作
文學士久松潛一共著

明治文學序說

東京　山海堂出版部

明治新體詩歌選
明治二十二年二月刊





松むしすずむし
明治三十一年六月刊

半月集 湯淺半月
明治三十五年八月刊



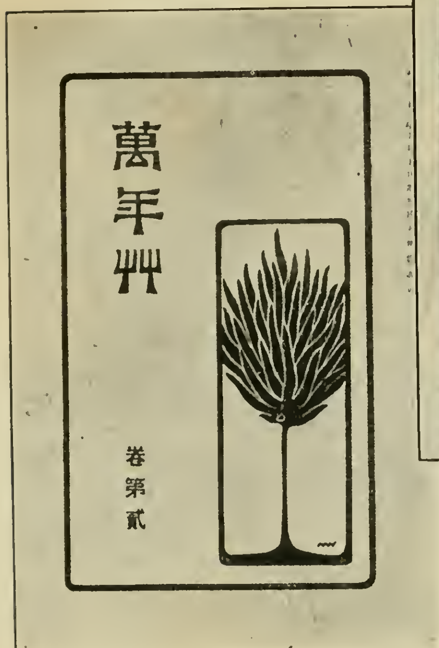
日本之文華第一號



やまと錦第四號



萬年草第二



歸省

湖處子著

第一　歸思

少無適俗韻、性本愛丘山。
誤落塵網中、一去三十年。
羈鳥戀舊林、池魚思故淵。………陶淵明歸田園居

去年の秋吾最愛の父斯世を去りしより、月の十七日は我か爲に安息日の外なる聖日となれり。此日に於て我は事業を執る前に密室に籠り、楣間に挂かれる吾父の肖像に對して、多時の默思を經るを例とせり。此の二三年來は、過ぐる月日の倍へに急ぐと思はれしか、今は早や吾遊倦に終身悲しかるへき秋立ち回り、淋しき一室も亦七月十七日となりぬ。我は定例の如く未明に起きて漱き、朝餉を了へて端座しけるに、楣間より瞰下す面影の、今日に限りて物言ふはかりに慈愛に觀えたり。徐ろに其頭の波線を算へ、溯

一



第五號
主筆
與謝野鐵幹

本號要目

麗影



定價金六錢

序

久松潛一君の明治文學序說に共著者として名を列ぬるの光榮を荷ふことになつたに就いて、こゝに一言余の感想を述べて置きたい。

共著者として余の名を列ねた次第は、久松君の序文に盡きてゐるが、余よりすれば、それは余に對する君の好意を示されたものに過ぎない。他人の好意には決して甘ふべきものではなく、又好意は私情で、私情は好んで勝手に公にすべきものでもあるまいが、喜んで君の好意を受けた以上、余の心持も進んでこれを明にすることは、余の義務であらうと思ふのである。

數年前のことである。某學校から明治文學の講義を請はれた。當時余にはこれに應じ得べき餘暇の持ち合せがなかつたのでこれを斷つた。そして余の代りに君を推薦した。その頃は明治文學の研究は、專門學者の間に未だ振はない時であつたので、色々考へた上、結局余は君の國文學者としての將來に多く期する所があつたので、特に同校の委囑に應せられることを勸說したのである。そして君は君としての

新しい研究の野を明治文學に開拓する決心を以て應ぜられた。君の古代文學研究は當時既に定評があり、又近世精神に關する造詣もよく知られてゐたが、余は更に君の研究の範圍を明治文學まで擴げて置かれることを特に希望したのであつた。爾來幾年、君はこの方面にも幾多優秀な論文を發表されてゐる。かういふ次第で、君の明治文學研究に直接益をなし得た所はないが、その研究の出發點には淺からぬ關係を有つてゐるともいへるであらう。從つてこの度本書の稿成るを聞いて、余は人の知らない、我が事のやうな喜びを感じてゐるのである。余が共著者たるの光榮を敢へて受けたのも、この喜びを有つた爲である。

余は君と共に日本文學の研究と普及との爲に幾多の計畫を立てゝ共に努力して來た、今も尚ほ努力してゐる。これ等の事業には、各自の名を以て世に公にしたものもあり、又余が代表してゐるものもある。又本書の如く共著共編としたものもある。その何れにしても、學者として負ふべき責任を自覺してゐることは言ふまでもない。いさゝか感想と覺悟とを述べて序に代ふる。

昭和七年九月

藤村作

序

この書はかつて試みた明治文學に關する啓蒙的な講義の稿本をもととしてまとめて見たものである。

自分が國文學史概說の一部として明治文學を扱ひはじめてから數年の年月が過ぎた。その間扱方としては藤村先生の國文學史總說の明治篇を基礎としてこれを敷衍して居たが、ある時は時代的區分を明らかにして文學史的體系をたてようと試み、ある時は時代區分に拘らず主なる作家作品を中心としてこれを敷衍して扱つた。本書は後者の場合である。從つて文學史としては文學史的組織を閑却したといふ非難はあるであらうが、文學は所詮作品を中心として、時代との交渉を考へ、民族精神を理解するにあると考へられる點から見て本書のとつたやうな態度も存在すべき理由はあると思ふ。さうして作家作品を論ずるに當つて、主なる作家作品に限定して可及的作品の構想等を記した。この點は在來の明治文學に關する著書に對してさゝやかながら特色をばなし得ると思ふ。

顧みれば自分も明治の中頃に生れて少年時代を明治期にすごした。紅葉が歿して自然主義が起りかけた頃からともかく小說や歌を讀みはじめた。それ故に明治文學を考へることは自分の少年時代を回顧することでもある。自分の明治文學の作品によみふける心にかういふ回顧的憧憬的な心持があることが考察の方法を主觀的にして居る點もあらう。しかしそれだけ自分には明治文學を自分に近いものに感ずる。それは廣く言へば祖國を愛し祖國文學を愛する心持にも共通するものである。

この書は成り立ちの上から自然に國文學史總說の明治篇による所が極めて多いので藤村先生に共著の名をつらねていたゞくことを御願ひした。自分の國文學研究に於てさゝやかな考察をつゞけて居る諸問題は先生の激勵による所が多いのであるが、明治文學も先生にすゝめられて扱ひはじめたのであり、先生から資料や扱方その他に教示を受けたことが多い。「評論」といふ雜誌の存在を知つたのも先生からであり、自分のたまたま藏して居る「明星」の闕本を先生の藏本によつて補つてもいただいた。その上題簽をも先生に御願ひすることを得たこゝに深く感謝の心持を表

したい。その他從來發表されて居る多くの明治文學の研究書に負ふ所も多い。この點も深く感謝する。

また卷末の年表は吉田精一、廣田榮太郎兩君に作製を願つたのであり、索引は前原正鐵君をわづらはした。ともに御禮を申上げる。

また口繪ならびに挿入の寫眞は自分の貧しい家藏のものによつたために一面的であるが多少內容の一端を示すことを目的として必ずしも珍らしい材料を主としたものではない。

昭和七年九月

久松潜一

目次

第二章　寫實的傾向の文學……四八

明治文學序說

緒論　明治時代文學の扱方と區分

一　扱方に就いて

明治時代文學の扱方に就いて一言しておく。明治文學史が全體として扱はれたのは大和田建樹の明治文學史をほゞ始めとして、岩城準太郎氏の明治文學史が在り更に同氏の明治大正の國文學と明治文學史の改版がなつた。また高須芳次郎氏の現代文學十二講や宮島新三郎氏の明治文學十六講もなつた。この外太陽の增刊の明治文藝史や早稻田文學の增刊の明治文學研究號も注意される。かういふ全體としての扱ひ方の外に、新體詩、もしくは長詩のみは福井久藏氏の明治新詩史や日夏耿之助氏の明治大正詩史、湯地孝氏の近代詩の發達の如きが見られる。小說史、和歌史、演劇史の如きは未だまとまつてゐないが、齋藤茂吉氏の明治大正短歌史概觀(現代文

學全集所收)の如き和歌の上のやゝまとまつたものである。しかし是等の研究によつて明治文學史には大體その輪劃は作られて居る。さうして一般文學史としては小說史がその質に於ても量に於ても中心を占めて居るやうである。文學史の組織の上では小說史本位でありすぎる程にも感じるのである。今明治時代文學を扱ふに當つて特に注意したい點を擧げておく。

第一は文學作品そのものよりは文學作品の生れ出る動機をより多く注意するために文學思潮を常に顧慮しつゝ扱つて見たい。日本文學史の上で、文學的な立場もしくは主義或は文學評論が作品を生み出す原動力になるやうになつたのは明治文學史に於てはじめて見られるからである。たゞ創作の體驗の結果を斷片的に記した明治以前の文學評論に對して尠くとも、文學評論が獨立して來たのによつても、かういふ立場をとることの理由をなしてゐる。

第二はかういふ立場をとる必然的の結果として、形態的方面の區劃よりも、思潮傾向の上の區別を重んじた。卽ち和歌、俳諧、新體詩、小說、劇といふやうな形態論の上から扱ふことは文學史の各論的扱方として妥當ではあらうが、總論的文學思潮的扱方

としては必ずしも妥當でないと見られるのである。從つて功利主義、寫實主義、理想主義、浪漫主義、自然主義といふやうな思潮的區分をとつたのである。

第三はかういふ文學思潮的區分をとる所から陷りがちの抽象的傾向をさけて、文學の具象性特殊性を重んずるためにさういふ思潮を代表すべき小數の作家を中心として考察することにした。もとより明治初期の如き作家の個性の稀薄な時代にはかくの如き方法をとることをさけたいが、中期以後の作家の個性の鮮明となつてきた時代からは代表作家を中心として考察することにした。たゞ多くの作家や作品を擧げるよりも小數の作家從つて作品を多少精細に扱ふこととしたい。それとても限られた量のもとにまとめるために精細を期することは出來ないが、可能の範圍に於て小數の作家を精密に考察したいのである。

大體以上のやうな立場のもとに扱つて見たい。

二　明治時代文學の區分に就いて

大體以上のやうな扱方をとるとして、次に文學の區分であるが、從來明治文學の區分に就いては外面的、内面的に種々の方法が取られた。嚴密な史的展開の考察とし

ては、重要なる點であるが、本書に扱ふ所はむしろ思潮の横斷的な考察を本位とする故に、年代的には自由な區分を標準として大體前期・中期・後期の三區分とする。前期は啓蒙主義時代として明治初年から明治十八年頃をさし、中期は種々の傾向、特に寫實主義と、理想主義・浪漫主義の對立時代として明治十八年から明治三十五六年までを含めたい。後期は自然主義の時代として明治三十七八年から明治四十五年までとする。これに就いて次に大體の輪劃を記しておく。

前期は西歐思潮や文學を無批判にとりいれる所から啓蒙的性質が多く、また文學的自覺の乏しいために素材を尊重する傾向が多いが同時にそれは近世以來の傳統的文學を破壞しようとすることであつた。しかしなほ傳統的文學も多くの作品を殘して居り、殊に劇文學の如きは藝術的價値に於ては、前期文學の中で最もすぐれてゐたと言へる。

次に中期の文學に於ては素材本位と啓蒙的な傾向から漸く文學的自覺を生じ、そこから寫實主義や理想主義・浪漫主義等の種々の傾向が起つてきた。寫實的傾向から見ると坪内逍遙氏が小說神髓によつて寫實主義を主張し、書生氣質によつて實例

を示し、殊に二葉亭のうき雲によつて、そのよき作品が作られて以來、寫實主義は文壇を支配しようとした。かくて最初は浪漫的傾向から出發した尾崎紅葉を中心とする硯友社もこの寫實主義を中心とするに至つた。それは未だ狹い一面的な寫實ではあつたが、都會の外面生活を寫實しようとする態度はある程度まで實現せられた。殊に多情多恨の如きは寫實主義としてはうき雲の如き態度のもとに作られたのである。さうして硯友社から出た廣津柳浪は寫實主義を最も徹底せしめ、樋口一葉の小說とともに寫實的傾向として最も注意される。この寫實的傾向は詩歌の方面に於ては正岡子規の俳諧和歌に於ける寫實的傾向となり、戯曲の方面に於ても團十郎等の主唱した活歷物や川上音次郎等の壯士劇、新派劇は素朴なる寫實とも言はれるが、殊に逍遙氏の唱へた史劇は逍遙氏の寫實もしくは心理主義を戯曲の上に適用したものと見られる。しかし是等の寫實的傾向は未だ文壇のすべてを支配するに至らなかつたのであつて、一方にこの寫實主義に對立するやうな理想主義・浪漫主義も行はれて居つたのである。文學評論としては森鷗外や石橋忍月は理想主義を主張して逍遙氏と對立したと見られるが、作家としては幸田露伴氏は理想主義を主張し

て永遠の理想を人生や藝術の上に建てようとした。さうして北村透谷に於てはより主情的な浪漫主義が主張され、この傾向は評論に於ては高山樗牛にまで發展して居るのであるが、作品としては矢崎嵯峨の舍や、森鷗外・北村透谷の作品によつて浪漫主義が主張された。泉鏡花も觀念的な所はあるが、その本質に於て浪漫主義と見たいのである。さうしてこの傾向は新體詩の發生から完成に至るまでの過程に見ることが出來、與謝野鐵幹・晶子兩氏の明星派に於て浪漫主義が明らかに現れて居るのである。この意味で理想主義と浪漫主義殊に後者は、寫實主義と相對立する傾向であつたのみならず、次の新しい文學を生出すべき母胎でもあつたのである。なほこの時代に饗庭篁村や齋藤綠雨の如き傳統的立場にたつものもあつた。その中には寫實主義・理想主義といふやうな新しい傾向も多少はあつたが、むしろそれに反抗して近世文學の世界を憧憬する處に中心があつたのである。かくして第二期は種々の傾向が對立して居つたが、寫實主義と浪漫主義とが殊に大きな勢力をもち、意識的には寫實を主張しようとしたが、浪漫主義が心の底に大きな力となつてゐた。外國文學に於てもシエリやキイツの如き浪漫詩人が愛賞されたのである。

さうして後期は日露戰爭時代からはじまる自然主義時代である。この自然主義の隆盛になつたのにも中期の浪漫主義の洗禮をうけて、その必然的展開として生じたのと、フランスのゾラやモーパッサン等の影響をうけて生じたのとある。この傾向は作家の上にも多少區別されるが、全體として日本の自然主義が浪漫主義の洗禮をうけて生じてきた點の多いことは明らかである。自然主義作家としての島崎藤村氏や田山花袋氏等すべて浪漫主義から出發して居るのである。これは自然主義の基調としてはどこまでも現實の眞の上にたつことに意味を有するのであるが、一方の浪漫主義はそれが空想的であつても若き時代の浪漫的傾向は、若き時代の心そのものにとつては、あくまでも眞實である。かくて固定した寫實主義からよりも流動的な浪漫主義から自然主義が生れてきたことは却つて自然であると思ふ。さうして自然主義の傾向の中心となつたのは評論及び小説であるが、戯曲に於ても近代劇、飜譯劇の如き自然主義的影響とも見られるし、和歌に於ける石川啄木の短歌や若山牧水、前田夕暮の如きその影響が見られ、俳句に於ける新傾向句にしても長詩に於ける泡鳴の象徴詩の如きもその影響が見られる。しかしこの時代に於て和歌は浪

漫的傾向が勢力を得て居り、長詩には象徴詩が中心となつて居るやうに、詩歌では一歩遲れてゐる感がある。また小說に於ても夏目漱石・高濱虛子氏は自然主義に對して餘裕派として高踏主義を主張してゐるし、また自然主義のやゝ倦かれようとする時に谷崎潤一郞氏の唯美派的傾向も出て居る。さうして自然主義の反對派によつて、自然主義の弱點がとかれ、自然主義がやがて衰退してゆくのであるが、この自然主義の衰退によつて明治時代文學は終り、新しく新理想主義・新浪漫主義を中心とした大正時代文學が開かれるのである。

以上のやうな區分を考慮において、明治文學が展開してゆく現象を次に觀察してゆきたいと思ふのであるが、中期文學の考察が中心となるためにこれを二章に分けて一章を寫實的傾向の文學とし一章を理想的傾向と浪漫的傾向の文學とする。さうして、前に前期を啓蒙的文學と傳統的文學として考察し、後期を自然主義の文學の成立として考察する。

第一章　啓蒙的文學と傳統的文學

序　說

明治初期の文學は啓蒙的の文學と傳統的の文學とに分れる。

啓蒙文學思潮として、注意されるのは功利主義的傾向と素材主義的傾向とである。卽ちこの時代に於ては外國思潮の輸入に急であり、實際生活の上に役立つことが主として求められたのであるが、文學に於ても政治的知識もしくは科學的知識を文學によつて得ようとし、また文學によつて傳へようとする傾向が生じたのである。それは文學としての表現よりは素材を尊重する立場である。新奇な、複雑な思想や素材を用ゐることが文學として重んじられたのである。かういふ傾向が作品として現れたのが、政治小說･科學小說及び新體詩の發生であり、また飜譯文學の行はれるに至つた點であるのである。

また明治初期に於ける傳統的文學は、それ自身として近世文學の名殘として持續したに過ぎないために新しい意義は尠いのであるが、小說・戯曲の如きに注意すべきものがないではない。

こゝではこの二傾向にわたる初期の文學を考察したいのであるが、その前に明治の新聞雜誌に就いて一言しておきたい。新聞の起原は既に德川時代にも見ることが出來る。所謂讀賣は是であつて、極めて粗末な木版で時には瓦版などで市井の事件を記して之を市中に賣り歩いたのであるが、今日の新聞の號外といふべきものであつた。江戸末期になつて文久元年小栗上野介の如きは、新聞紙を發行する建議を起したけれども容れられなかつたが、元治元年三月一日に至つて岸田吟香が「新聞紙」といふ新聞を橫濱から發行して月二回刊行であつたが九號ほどで廢刊になつた。後岸田吟香は更に藻鹽草といふ新聞を出し、月二回から後週刊となつたが、間もなく廢刊となつた。然し吟香の新聞紙などが先驅となつて、種々の新聞が刊行されるに至つたのである。柳川春三の中外新聞、宣敎師べリイの萬國新聞、福地櫻痴の江湖新聞、官省で發行された太政官日誌の如きを初め極めて多いが、櫻痴の江湖新聞は最も

注意すべきである。 櫻痴は後年劇壇に投じて脚本作家となつたけれども、最初は新聞紙の方面に活躍したのであり、懷往事談といふ著書の附錄に新聞紙實歷といふ文を附して、自らその經驗を語つて居るのである。 それによると櫻痴は中外新聞などに刺戟されて同志とはかつて江湖新聞を起して半紙を二つ切にし、凡そ十枚乃至十二枚を一冊としたのであつて、今日の雜誌の如きものであつたのである。 櫻痴が雜報、寄書、時論等の欄を一人で記して三日もしくは四日目毎に刊行したのであるが、櫻痴は薩長を攻擊したりしたので、發行停止にあひ、禁獄までせられたのである。 從來の新聞も皆亡びて了つたのであるが、更に時勢は新聞を要求するに至つたので、明治五年より七年の頃にまた種々刊行せられたのであり、横濱には横濱每日新聞が出來、東京日々新聞(五年)、郵便報知(六年)、朝野新聞(七年)、(初めは公文通誌)曙新聞(初は新聞雜誌といふ)日新眞事誌など刊行されたが更に讀賣新聞、東京繪入新聞が刊行されたのである。 而して櫻痴は東京日々新聞の主筆として活躍したのである。 この時代の政治的野心をいだくものは新聞によつたのであつて、それ〳〵文筆の士が集つて政論を戰はしたが、殊に日々の櫻痴、末松謙澄、朝野新聞の成島柳北、報知新聞の矢野文雄

の如きはその著しきものである。櫻痴は西洋思想にも理解があり、輕妙の筆を以て平民主義を稱へ

サア變つた日本の時勢が變つた、最早日本の平民たる我輩が是迄の如く閉口低頭して居るのが日本人の勤めで御座らぬぞ。古語に天下は天下の天下にして一人の天下にあらずと昔より唐の學者は申されたり。

といふが如き、洒脱な筆致を用ゐて居る。而して上に述べた新聞の中、東京日々新聞、報知新聞、讀賣新聞の如きは今日に至る迄存して居るが、更に明治十五年には時事新報が出て福澤諭吉の主宰する所となつて、從來の政治本位の新聞を改めて一般社會の現象にも注視するに至つた。又國民新聞は第二期の二十三年一月になり、その他今日現存する有力なる新聞も多くは二十年代になつたのである。是等新聞紙は最初は政治論の發表の機關から一般社會の批評報道にも及ぼしたのであるが、更に新聞が文學の發表機關ともなるに至るのである。卽ち小說は新聞紙に連載され、又俳句の如きも之による事が多くなつたので、次期に於ける尾崎紅葉の讀賣新聞に於ける、正岡子規の日本新聞に於ける如きその最も著しきものである。

次に雜誌を見ると明治の初期に作られた新聞は江湖新聞の如きも雜誌の形式であつたのであるが、新聞が日刊となるに從ひ、純粹の新聞紙としての形式をとり雜誌は別に發達して來た。その初めともいふべきは明六雜誌であつて、明治六年森有禮が歸朝して時代を指導するために中村正直、西周、西村芳樹、大槻文彥、福澤諭吉、加藤弘之等の學者を集めて歐化主義を鼓吹したのである。明治七年には西周によつてローマ字論も主張されその他注意すべき學說が現れた。又慶應義塾では家庭談叢といふ雜誌が作られたが間もなく亡びて民間雜誌が生じた。又田口卯吉の東京經濟雜誌が作られ、明治十四年には六合雜誌が出でて基督主義を鼓吹したが、未だ明治十八年以前には文學に關する雜誌はなかつたのであるが、明治二十年に德富蘇峯氏によつて國民の友が現れ文學的方面にも力をそゝぐに至つたのである。又三宅雄次郎氏等の日本人は明治二十一年に刊行されたのである。而して純粹の文學雜誌としては紅葉等の硯友社の我樂多文庫は明治十八年の春硯友社が組織されるとともに五月創刊して居るが、初めの中は書寫した回覽雜誌であつて印刷されたのは明治十九年十一月の第九編からであり、發賣されるやうになつたのは二十一年五月から

である。後には文庫と改題し、やがて廢刊した。又硯友社から離れた山田美妙の都の花の出たのは同二十一年であり、森鷗外のしがらみ草紙は二十二年に創刊され逍遥氏等の早稻田文學は二十四年に現れ、北村透谷等の文學界は二十五年に現れ、二十八年には帝國文學、太陽、文藝俱樂部が現れた。また批評雜誌である出版月評は明治二十年八月に刊行され、歌學は明治二十五年三月、歌林は明治二十五年九月に刊行されれた。かくの如くして新聞雜誌の刊行さるるものの極めて多くなり、政治、社會に關する評論、報告の外に文學作品の發表をも之による事の多きに至つたのは明治文學の特徵であつて明治文學を見るに當つて、新聞雜誌の功績は忘るべからざるものがあるが、而も新聞雜誌の萠芽はこの第一期に於て見られるのである。

一　政治小說の性質

一　政治小說の發生

この第一期に於てかくの如く外來思想が重んじられて居る時、其思想が文學的作品として最も具體的に現れたのが政治小說である。卽ちこの時代の文學の特質を最もよく現すものは政治小說であるけれども　明治維新は國家精神の强調であるけれども一面から見れば武家によつて專斷された政治の國民的にされたと言ひ得る。明治維新に參與したのは武家政治の下に於ける高官ではなくして、極めて微賤なる地位にあつたものである。平和の時代ならば一生微祿で終るべきであつたものが、維新のために從來の諸侯主君を凌駕して政治的に一大勢力を得たのである。加ふるに立憲政治として國會の開設せらるゝ如き機運になつたので、功名心に燃える靑年は政治界に於て維新の功臣の如き大業をたてる事が唯一の希望となつたのである。而してかくの如き外面的事象の大變化のため人間の心は常に外面的にのみ向ひ、感情の奧深く沈潛する事も思索を深める事も出來ずに、たゞ外面的に花やかなる政治

の方面のみに眼を向けたのである。而して白面の書生が國會議員となり、政治が唯一の興味であり青年の夢想する所であつたが然しすべての青年が悉く政治的功名心を滿足させる事は不可能であつて、たゞ夢想し空想するのみに止つたものも多い。而して胸中に鬱勃たる理想をいだき空想を夢みる所、その空想や理想を文筆に託して現さうとするのは當然である。加ふるにルーソーの民約論の如きものの、青年に感化を與へる事によつて、政治的思想や知識、それは外來思想の外面的心醉にすぎないにしても、とにかく一通りの知識を與へられて居る彼等は、新聞紙により或は雜誌によつて、政治論が盛んに論議せられたのであるが、更に進んでそれを小説として表現するに至つたのである。かくの如くして作られた政治小説は極めて多くあるが、最も當時愛讀されたのは矢野龍溪の經國美談と、東海散士の佳人の奇遇及び末廣鐵腸の雪中梅、花間鶯である。是等三氏の作はそれ〳〵傾向を異にして居るがこれらによつて、政治小説の特質を伺ふ事が出來ると思ふ。而して是等の小説が如何なる態度のもとに作られたかを見るに、既に前に述べたやうな理由で小説を純粹文學として鑑賞するよりはそれによつて、何等かの功利的目的を有して居つたと思はれる。

たとへば雪中梅に尾崎行雄氏が序を書いて

小說の品類此の如く其れ多しと雖ども概して之を論ずるに虛に過る者は怪譚と爲り、實に過る者は歷史と爲り、傳記と爲り學藝書と爲る。巧みに虛實を湊合し、人をして開卷手を釋くこと能はざらしめ、而も娛讀の間覺えず益を得せしむる者にして、始めて有用の小說と云ふべき乎。

とある點から見ても何等かの利益を小說から豫想して居つたのである。即ちそれは政治思想の鼓吹といふ如き意味があつたのである。而してこれは政治小說のみならず飜譯文學に於ても、敎訓を主眼とするとか何等かの功利的な觀念を念頭においたのである。この觀念は文學に於ける表現よりは素材としての思想を重んずる結果、緻密なる感情とか美の世界は未だ認める事が出來なかつたと思はれるのである。それだけに文學としては素朴なる傾向といふべきであり、また高い價値もおき難いにしても、そこに時代的意義はあるであらう。次に主なる作品を考察する。

二　經國美談

經國美談は矢野龍溪の著であつて齊武名士經國美談とあり、明治十七年一月十三日に

成稿したのであつて、明治十七年二月の藤田鳴鶴の序や森田思軒の跋もある。ギリシヤのセーベの勃興の歴史的事件を主として之に多少の脚色を施した小説である。その組織を見るに、夕日が西に傾く頃、ギリシヤのセーベ(齊武)のある少年子弟を敎へる學校に於て、老敎師がアテヌのゴドリウス(格德)、スラスブリユス(士良武)の二名士の肖像を示して、その功績を語つたのに對して、後年セーベのために義をつくしたペロピタス(巴比陀)、イパミノンダス(威波能)、メルロー(瑪留)等を初めその一群の童子等が、義に勇む心から、スラスブリユスを讃美した所から筆をおこして、是等の少年が青年となつた時、奸黨起つて齊武危き時、或はアテヌにゆきて援を請ひ、百折たわまずある宴會の時、女裝をして奸黨を殺して齊武を平和に導いた所までを前篇とし、更に才略拔群人品優美なるペロピタスや、寬厚深沈なるイパミノンダス等の力により、セーベがギリシヤの盟主となるに至るまでの事柄を記述してある。そこには武斷的專斷的なるスパルタに對し、民主的なるアテネ、セーベの態度を對立せしめて武斷を退けて民主的傾向を謳歌してあるのは、明治初年の自由の精神を最も強く表したものである。而してかゝる勇壯なる政治的飛躍の間にアテネの民主黨に屬する行政官リシ

ス(李志)の娘レオン(令南)とペロピタスとの戀愛をも織込んであるのである。而して敍事の中にはペロピタスの明快とメルロー(瑪留)の力あつて才足らざる性質とを對立せしめ、ペロピタスの暗殺されんとする危機を、レオン(令南)の告げによつて救はしめて、其の交情を増さしめて居る。この編はセーベの勃興の歴史を主として記したものであつて、文學的の見地よりすれば飜譯小説にたゞ一歩を進めたに過ぎない。しかしながらセーベの勃興を題材とした事がすでに明治初年の思想を語つて居ると思はれるのである。思ふにギリシヤ興亡の歴史に於て、スパルタの武斷的貴族的精神とアテネ、セーベの文治的民衆的精神とは著しき對立をなして居り、世界史の上に於てギリシヤが光を放つのはこのアテネ、セーベの文化及びその文化を尊ぶ民衆的な精神である。經國美談に扱つた所はこのセーベがアテネの救をかりてスパルタの武斷的精神に對抗し、これを破つて自由な民衆的精神を主張せんとした點である。而してこれは維新以前の幕府を中心とした武斷的精神から解放されて、自由の精神を以て民權をとき國會を開いて國民の政治を行はんとする時代思想と一致する所である。この意味に於て經國美談は西洋史の一片をえがいた歴史小説ではあ

るけれども、明治初年の青年の理想を明らかに語つてゐるといふ事が出來る。而して同じく材を西洋諸國に主としてとつてゐるけれども日本人の經驗として描いたものが佳人の奇遇である。

三　佳人の奇遇

佳人の奇遇は東海散士の著であり十卷からなる。明治乙酉二月東海散士の序がある。會津亡命の士、東海散士が世界を周遊して亡國の士にあひ、慷慨の情を談ずる。米國費府（ヒイラデルヒヤ）の獨立閣に登つて、自由の破鐘を見て感慨にふける。亡國西班牙の妃幽蘭女史と英國のために虐げられた愛蘭の熱血の女丈夫紅蓮と獨立閣にあひ、更に江濱に再びあつて忽ち相識となつて亡國の悲痛を語る。更に明朝の遺臣鼎（名は泰璉字は范卿）と稱するものも出で來つて談ずる。一旦別れ更に幽蘭女史をとふに父の危難のために去つてゐない。その後書を以て愛蘭烈女波寧流女史にあひ、幽蘭の事をきき幽蘭との結婚をすゝめられる。東海散士は或は米國の自由の神フランクリンの墓をとひ、ポーランドの亡國の狀をいたむ。がやがて波寧流女史は死に、墓前に於て紅蓮とあひ、范卿、幽蘭既に死したであらうときゝ悲む。紅蓮とと

もに住んで居る中、幽蘭、紅蓮とともに居つた骨數斗夫人來り、最初は紅蓮をなじつたが、後解り三人交々談じ後骨數斗は去り、紅蓮も又幽蘭の事をさぐりに歐州にゆく。が幽蘭の事分らずと消息あり、東海散士はなほ諸所亡國を弔ふが、父死すの悲報に驚き日本にかへる。時に東洋また多事であつた事を記して終つて居る。

全篇に於て亡國の悲運をいたむの情が強く現れて居り、又米國の自由を讃美する情が見える。會話の間に叙景を試み、又交々詩を吟じて悲をやる如き點も多く見える。文は漢文直譯流であつて華麗であり、かつ力強くはあるが、しかし描寫は粗笨である。この作は十巻からなる極めて大部なものではあるが、たゞ亡國をなげく感情のみ見えて人物に個性味の缺けてゐる事は物足りなく思はしめる。主人公の東海散士も亡國の志士で各國を歴遊するといふ點以外に何等の特色も有しない。又篇中に現れる幽蘭、紅蓮、及びその他の女性もたゞ亡國の女丈夫といふだけで個性の相違が少しも見えない。これはもとよりこの時代の作に求めるのは困難であらうが、經國美談の方がイパミノンダスにせよペロピタスにせよ、とにかく一個の個性を有する點と比較して物足らなく感ずる所である。更に佳人の奇遇が作として不滿足

である點は、事件に統一性がない事である。全體として見るとき東海散士が亡國の士とあひ、心事を互に語るといふ點を中心として考へれば、統一がある樣であるが、實際は幽蘭紅蓮等の亡國の烈女の行爲が主なる點となつてゐるのであつて、幽蘭紅蓮等を中心とする事件が、統一性を有しない事は不滿足とする所である。

更に東海散士を主人公とする事件と幽蘭、紅蓮を主人公とする事件とが、有機的に統一されて居ないので、幽蘭、紅蓮の全篇に於ける位置が浮動して居ない嫌があるのである。故に全體が東海散士の歐米漫遊記といふ樣な散漫なものになり了つたといふ嫌があると思ふ。この點も經國美談がセーベの勃興を中心として民衆的傾向を主張した態度の方が全體に統一があるのである。かくて佳人の奇遇よりも經國美談の方が朧げながら人物も描かれて居り、かつ表現の統一もたもたれて居る上に、思想に於て佳人の奇遇が、亡國の悲痛といふいつの時代いつの世界にも考へられる思想を主要なる點として居るに反し、これが自由な民衆的精神といふ明治初期の最も著しき思想を基礎とし、それを具體的に說いて居る所に、經國美談の方が心をとらへる事が多いのである。たゞ佳人の奇遇の淺薄ではあるが華麗な文が朗々として

吟ずるに興味をそゝつた樣であるが、事象を精細に叙するには極めて不適當な文體であつて却て經國美談の樣な特に修飾はしないが、力のある文體の方が文學としてもすぐれて居ると言はなければならないと思ふ。

四　雪中梅と花間鶯

次に末廣鐵腸の雪中梅は明治十九年に刊行されて居る。明治十九年十一月の尾崎行雄の序もある。同じく政治小説であつて、明治十四年の詔勅によつて今より十年後を期して國會をひらかんとあつた以後數年、往年の政事熱のやゝ衰へたるときの事件としてある。

國野基といふ青年政治家があり、井生村樓で演説をし好評を博したが、その國野を思ふ少女お春は國野の貧をあはれんで、三十圓を送つたがその無名の手紙のため、又政友武田にダイヤモンドといふ辭書を與へる所をダイナマイトと書き誤つたため、國野、武田は須田といふまわしもののために陷められ、鐵窓につながれた。が放免されて箱根にて靜養中お春にあつたが、叔母に妨げられあふ事が出來ない。叔父は野心ありお春の財產をとらうとし、國野の政友で權謀のある河岸といふものが、お春を得

んがために新聞にお春、國野の中傷をかき、お春の父の遺言書を僞造したりしたが、お春はそれを承認した風に見せ、國野と結婚の約束をする。お春は父の考へで深谷梅次郎と夫婦の約束があつたが、後寫眞で國野基が深谷梅次郎と變名してゐた事が分り、夫婦となるといふ脚色である。

花間鶯は明治二十一年の刊行であり、雪中梅の續篇である。初めは國野基とお春との結婚の披露を上野精養軒にひらき、政治上の名士を招待し、その席上河岸が保守的意見を述べ、自由黨の國野が反駁する所より、自由黨と保守黨との爭ひを述べ、更に武田は急進黨として社會主義的思想をとき、しば〳〵獄に入れられるが、國野が脱獄の武田を救ふ事より、國野も疑はれて牢に下されようとする。その後國野は故郷にかへりその途所々にて演說して、自由黨を擴張し名古屋にては武田のために名をかたられて捕はれんとし、又强盜にあつて殺されんとしたが、すべてのがれ、明治二十三年の國會の開設の時には自由黨勝利を占め、保守黨の河岸、急進黨の武田すべて議員となるといふ點で終つて居る。

この二作は前記の二書と違つて純粹に日本に於ける明治初期の狀態を描いた作

であつて、國野基といふ政治家を中心として、當時の政治界の狀態を描いた所に、當時の青年の理想が何であり、又政治觀が伺はれる。作中の人物の中、國野基は中心人物であり、人格才幹最もすぐれて居て、健全なる自由の思想をいだいて居る。他の保守黨の河岸が人格に於て下劣であり、又急進黨の武田が情餘りあつて才たらざる如き種々の缺陷を有するに反して、殆んど完全なる人物であり、種々の災難のため幾度か獄に投ぜられんとしつゝも、次第に政治的地步を得てゆく徑路は當時の政治家の現實の狀態でもあり、また理想でもあつたであらう。而して國野の抱いて居る政治上の意見は、著者の政治觀を示すものともいへる。而してこゝにお春といふ淑女を國野に配して乾燥なる全體に、和らかさを與へて居る。國野の演說に感じて金を未見の國野に進めるが如きは、女子としてあり得べからざる樣にも思へるが、すべて反動的の時代であつて西洋思想にかぶれ、殊に政治趣味をもつ女性として、かくの如き事もあり得たかも知れない。冷静な氣慨のある女性であつて、河岸の戀慕に對する冷靜なる處置の如きもそれを示して餘りある。かくの如くこの作に於て是等の主なる人物は性格の上に相違と特徴を有する事は明らかであるが、それは馬琴の八犬傳

に於て示された程度の概念的相違であつて、個性の細い描寫は殆んど見る事が出來ない。かつ描寫が外面的であつて事件の發展が偶然的作爲的である。たとへば國野とお春とが箱根で邂逅する如き、又演説をきいて初めて國野を知り、次第に戀愛に陷つた國野が實は彼女の許嫁であつた如き、從來の小說に見る如き不自然なる作爲の跡が極めて多いのである。かくてこの作はたゞ明治初期の政治思想を淺薄な外面描寫で表したものであつて、文學的價値は乏しいものであるが、當時の青年の理想を純粹小說の形式で表現した所に興味があるのである。而して二書の中、雪中梅は國野の未だ不遇の青年政治家としての時代である上に、お春との戀愛に陷る狀態などが敍せられてあるので、人情的方面がゆたかであるが、花間鶯はすでに國野が自由黨の首領ともいふべき地位にたつて行はれる事件であつて、政治的波瀾はあるが、人情的の描寫は尠く、一個の小說として見るとき、雪中梅の方がすぐれて居ると思はれる。

要するに經國美談、佳人の奇遇及びこの二書は主材及び表現の形式はそれ〳〵相違して居るが、何れにも一貫して見えるものは明治初期の自由を欲する政治的思想

を表現したものであつて、これを純粹文學の立場として見れば、特に深く論ずる價値のないものである。然しながら江戸末期の頽廢的な人情を現した人情本や、滑稽本更に勸善懲惡主義をとつた讀本などから、この政治小說に移つた徑路を考へると、外面的事件の變化がいかに文學をも變化させたかを認め得るのであつて、文學といふものが其環境の影響をうけることのいかに甚しきものであるかを示して居ると思ふのである。なほ政治小說としては須藤南翠の綠簑談、新粧の佳人等を始め注意すべきものも極めて多く、それ等を書史的に整理することも必要であるが、大體以上の四作によつて政治小說の性質を代表させる事が出來るのである。

二　飜譯小說と新體詩の發生

一　飜譯小說と谷間の姬百合

第一期に於ては政治小說が最も創作としては時代思潮を代表したものであるが、一面に於て各種の飜譯文學が現れた事は注意すべき事である。飜譯はもとより創作と異なつて譯者の思想ならびに、文學的技倆は直接には現れない。しかしいかなるものが譯せられたかといふ事は、その時代に於ける或は其の譯者個人の文學的興味を伺ふ事が出來るのである。又其譯筆の如何は、譯者の文學的才能の如何を語るものである。殊に詩歌の飜譯の如きは寧ろ創作と等しきものがあると思ふ。

その意味に於て飜譯文學の文學史的意義は少くないのである。日本に於て西歐文學が飜譯されたのは、イソップの譯である伊蘇保物語の如き初めとすべきである。萬治二年版もあるが文祿版などもある。キリスト敎の傳來などと相俟つて西洋文學にも多少親む事を得たのであらうが、近世に於ては殆んど見られないのであつて、解剖書の譯である前野良澤等の解體新書の如き、僅かに見られるものである。明治

の初期盛んに行はれるに至つた西洋思想に對する極度の心醉は、先づ飜譯となつて現れた。思想的作物ではルーソーの民約論(Contra Social)の譯である民約譯解の如き、スマイルスの西國立志編の如き出でたが、小說、戯曲にもそれ〲現れて居る。

殊に小說は最も現れて居るが、その最初のものは明治十二年に出た花柳春話であつて、譯者は織田純一郎氏であり、ロードリツトンのアーネストマルトラバースの譯である、譯文は極めて生硬な漢文直譯體であり、譯語も今日から見て洗錬されない感があるが、當時の人心には感興を與ふる事が深かつたのである。爾來飜譯小說は大いに出たが、リツトンのものは種々譯せられ、藤田鳴鶴の繫思談、坪內逍遙氏の慨世士傳の如きはそれであり、又關直彥の春鶯囀の如きはヂスレリーの作品を譯したものである。是等は材を歷史にとつた作品であり、明治の政治思想に呼應するものであるが、井上勤の譯した海底旅行や月世界旅行の如きは、科學的な題材を扱つた作品であり、そこに一面には政治的興味とともに新しき科學に對する興味をも見る事が出來るのである。が文體の如きは何れも生硬を免れないものであつた。しかし二十年頃になるに從つて、新しい文體もとられる樣になつて來たのである。それらの中

で最も注意すべきは、末松謙澄の谷間の姫百合であらうと思ふ。

この作は明治二十一年から出版になつて居るので、年代から言へば第二期に屬するものであるだけに、飜譯の態度も花柳春話以來の漢文直譯體ではなくして、流麗なる文を用ゐ、會話は言文一致體で表現してある。會話の飜譯は未だ精練をほこる事は出來ないが、地の文殊に叙景の如きは清新の趣を傳へて居るのである。

原作は謙澄の序によればベルサ・クレーといふ女性のドラ・ゾルンといふ作品であつて、英國の有洲伯爵家といふ家庭の事件を扱つて居る。

有洲家の嗣子成人は虎といふ長屋番の女を戀し、結婚するので親から勘當され、虎と貧しき生活をし繪をかいて生活を支へたが、次第に虎の教育なきために、成人の心にあきたらなくなり、その中虎は嫉妬のため成人の怒をかひ、夫婦別居し「虎は綠、瑠璃の二女を養ひさびしく暮す。その中伯爵は死に成人は嗣子として伯爵となり、綠瑠璃を手許に迎へる。綠は快活で派手であり、瑠璃は溫和である。二女は社交會の花となり、殊に綠はその美貌のため入江伯爵に愛せられ求婚され幸福によふが昔夏堀にて母と貧しき生活のとき戀愛に陷つて夫婦約束までした樋口半藏にしふねくまつ

はれ、心に悶々とする。瑠璃も伯爵家の嗣子となるべき手繰亮三と戀に陷り樂しくくらす。綠は苦みの餘り瑠璃に手紙を託して半藏との會見を延引させるが、その瑠璃と半藏との會見を亮三に見られ、亮三は瑠璃に詰問しても姉を思つて言はないので、亮三は怒つて瑠璃の許を去る。綠は庭園で最後の會見を半藏と行ひ緣を切ることをたのむが誤つて池におちこむ。しかし半藏は嫉妬の餘り救はず綠は死ぬ。半藏も悔悟の餘り一切を自白した手紙を、有洲伯に出し己れも死ぬ。亮三も初めてかの夜瑠璃との會見の事を知り瑠璃をせめたのを悔む。

瑠璃はそのため病に陷るが全快する。この事から虎と伯爵とは仲なほりし又亮三と瑠璃とは結婚して萬事落着するに至るのである。

謙澄もこの作品に就いて

抑姬百合ノ作ル所以ハ、徒ニ花月ヲ嘲弄シ讀者ノ眼ヲ娛マシメントスルニアラズ。彼ノ成人夫婦ノ事歷ハ以テ門葉素訓甚ダ相懸隔スルモノ、漫ニ伉儷ノ約ヲ結ブハ終生ノ不幸ヲ免レザルコトヲ示スナリ。綠瑠璃二女遭遇ノ異同ハ以テ處女躬行ノ抑揚ニ供スルナリ。凡ソ如此ノ類ハ皆世ノ風敎ニ關スルモノニシテ云々

と言はれた如く、貴族と平民との如き位置の懸隔する者の間に生ずる結婚が、破綻を生ずるといふ教訓を作品によつて現はさうとしたものであつて、純粹の寫實的でなく、功利的理想的な點を有するのである。しかも勸善懲惡主義とは異なり、すべて惡人なるものは存しない。大きなる人間性のまゝに進む所の種々の性格の解剖に外ならない。綠は浮華な性格ではあるが、惡ではない。寂しき家庭生活が彼をして半藏と戀に陷らしめたのも必然的であり、伯爵家の愛孃として社交界に活躍し、入江伯爵に愛されるに及んで、半藏をきらふのはそこに節操のないうつりやすき性格上の非難はあるが彼女は愛なき半藏にもいつはりを言ひ得なかつたのを見ても、彼の純なる心が知られる。半藏にしても戀に專念する純情の人物であり、綠が池におちても救はなかつたのは罪ありとするも、命までさゝげた綠にそむかれた心のいたでといふ上から解すると、是も必然的な心の動きと見られる。たゞ綠の如き性格の女性が終に死の運命に陷り、瑠璃の如き性格の女性が幸福なる運命に導かれるといふ事に、教訓的口吻が見られるのである。而して全體にわたつて英國人的教養である正直であれといふ信念が、あふれて居り、英國の貴族生活が躍動して描かれ自然の敍述

演劇史

日本演劇前史

總說

谷口政德編述

歌舞戯曲は其時世の嗜好に適するを以て正鵠となせるものなれハ即世態の真相を寫し出せるものに外ならずされバ世の變遷と文化の發達するに隨ひて漸次進化せしことハ各國皆一轍に出つるが如し我國演劇の源流に遡りて其進化の次第を探求すれば其根原は我邦固有の歌舞と外國より傳來せる伎樂と相混合して今の演劇を成形せしものなり其原素ハ素より一ならずと雖これを大別すれハ傀儡猿樂琵琶法師女舞念佛踊の五種にして各其系統を逐ふて變遷進化し傀儡ハ操りとなり猿樂よりハ田樂能狂言等を出だし白拍子の女舞ハ變して久勢舞となり又河原舞となり琵琶法師ハ平家物語となり又淨瑠理を出だし

演劇史　谷口政德　明治二十年二月刊

文學一斑

不知庵主人述

文學の不朽及び感應

第一　總論

ワシントン、アービングのウエストミンスター欽堂を訪ふや、累代詩人の墓碣に謁して後其所思を記して曰く、

人の無窮に傳へらるゝハ、大抵歷史の媒介に頼るなれバ、物變り星移るに連れて次第に朦朧暗淡に歸するを免かれず獨り文學者が同人に於ける信交ハ常に生新快活且つ直接にして、彼れ自己の爲めよりハ寧ろ諸人の爲めに生存し、四邊の歡樂を犧牲と爲し浮世の興を打捨てゝ、後の人また末の世と語らひとて、餘念なく一生を暮したりと云々。

文學一斑　内田不知庵　明治二十五年三月刊

も生々として居るのであるが、從來の飜譯小說が政治小說もしくは科學的題材を扱つたものであるに比して、純粹に人情を扱つた所に漸く文學が內面的感情の世界に入り來つたことを示してゐるのである。而してこの期に於ては小說のみならず、他の方面に於て坪內逍遙氏が明治十六年にシエークスピヤのシーザーを譯した該撒奇談の如きは戲曲文學の飜譯の先驅として注意すべく淨瑠璃體に譯されたものである。

二　新體詩の發生

更に詩歌の方面では明治十五年に出た新體詩抄が先づ注意されるべきであつて、明治以後の新體詩勃興は是におふ所が多いのである。この書は外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎三氏の共譯であつて、自作の詩もあるがその中にはテニソン、ロングフエロー、チヤールスキングスレー、シヤールトレアンなどの詩があり、またグレーのエレジイや、シエークスピヤのヘンリー四世やハムレツトの一節なども譯してあるのである。この新體詩の創始された原因を考へると、矢田部良吉が

西洋ノ風ニ模倣シテ一種新體ノ詩ヲ作リ出セリ。

といふ如く、從來短歌や俳句の如き小詩形のみが行はれたのに對して、西洋詩を模倣してこの詩形を作り出したのであるが、而もこの詩形を作り出した點に對する彼等の抱負を見ると、從來の短詩形では思想を十分表はす事が出來なく、從來の短詩形で滿足の出來るのは簡單な思想に過ぎないのであつて、

　甚だ失禮なる申分かは知らねども、三十一文字や川柳等の如き鳴方にて能く鳴り盡すことの出來る思想は、線香烟花か流星位の思ひに過ぎざるべし。

と非難して、複雜なる思想をこの長詩形によつて表はさうとしたものである。これには至當なる點もあるが、たゞ詩歌の素材としての思想に重きをおいて詩の本質が抒情詩的であるべき事を忘れた非難を免れないのである。而してこの理智的思想を重んずる結果は、詩の表現よりも、素材を重んずるといふ傾向を生ずるのであつて、これらの詩の實際を見ても知り得るのである。こゝに含まれて居る詩の形式は七五調であるが、詩味に乏しいものであつて、たとへばハムレツトの一節でも

　ながらふべきか但し又ながらふべきにあらざるか、茲が思案のしどころぞ、運命いかにつたなきも、これに堪ふるが大丈夫か、又さはあらで海よりも深き遺恨に手向

ふて之を晴らすがもののふか

の如く冗漫な表現になつて居る。ロングフエローの人生の詩でも
そも靈魂の眠るのは、死ぬといふべきものぞかし
の如く力の拔けた感じを免れない。感情を表現するといふ點は殆んど失敗したの
であるが、敍景の場合は比較的成功したのであつて、グレーの挽歌の如き
山々かすみいりあひの、鐘はなりつゝ野の牛は、徐に步み歸りゆく、耕へす人もうち
つかれ、やうやく去りて余ひとりたそがれ時に殘りけり、
とあり、すぐれた譯ではないが、抒情的な詩に比して遙かにすぐれて居る。是れは抒
情詩の譯が事實を傳へるのみでなく、感情の微細な點を傳へなければならないのに、
たゞ文字を逐つて譯するために、そこにまで入り得なかつたのであるが、敍景はその
點に於て具象的であるために比較的に傳へやすいのであらう。而して一面には譯
者等が詩人といふよりは學者的であるために、理智のために感情が抑制されて了つ
た點も抒情詩に成功し得なかつた理由である。是は三氏等の自作の詩に於ても同
樣である。それらの詩は多く主觀詩であるが、純粹感情の表現はなくて理智的内容

をうたつたものである。たとへば井上博士の人生の歌を見ると

眠る心は死ぬるなり　見ゆる形はおぼろなり　あすをも知らぬ我命　あはれは

かなき夢ぞかし　などとあはれにいふは惡し

の如き、外山博士の「社會學の原理に題す」の

宇宙の事は彼是の　別を論せす諸共に　規律の無きはあらぬかし　天にかヽれ

る日月や

の如き理智的内容をそのまゝに表現したに過ぎないのであつて、詩としての價値は乏しいと言ふべきである。是は感情よりも理智を重んじ表現よりも素材を重んじた氏等の見解と相まつて、この時代文學の一般的傾向であるが、ともあれこの新體詩抄が現れたのは、歴史的に注意すべき事であつて、これ以前にも讃美歌の如き作られたが、新體詩抄は文學的自覺を有しただけに、明治以後の新體詩や長詩の生れ出る搖籃となつたのである。

以上の如く各方面に行はれた飜譯文學は、極めて多く後の文學的運動に寄與する所は決して少くなかつたのである。

三　傳統的文學諸相

一　和歌と俳句

以上述べた各種の新文學とともに、この時代に於ける舊文學の傳統をも見のがす事は出來ない。それらに就いて少しく述べておきたい。先づ詩歌の方面で傳統的に存するものは和歌と俳句であつて、少しも新しき空氣によつて目覺まされる事がなかつのたである。近世の末期に出た大隈言道、橘曙覽の如きは、とらはれた和歌の態度から脱却して、自由なる感情を以て生活に觸れていつたのであつたが、明治二十年迄の歌はかゝる系統の歌ではなくして、香川景樹の桂園派の流であつた。調を重んじた景樹の歌の調べは溫雅な點はあつたが、一面に於て平弱な趣を免れなかつたのである。而もその末流は景樹の感情なくして、その形式のみを踏襲したために、獨自の生命に乏しい歌となつた。景樹の門人である八田知紀に師事した高崎正風、税所篤子などはこの時代の有力なる歌人であり、正風等を中心とする御歌所が歌界を代表した觀がある。その他中島歌子、海上胤平、松波遊山など歌人は少くなかつたが、

多くは從來の月を弄び、花に吟ずる態度を以て進んだのであり、生々とした感情からは遠いものであつたのである。一方俳句を見ても蕪村、一茶の後鮮明に個性を表現する俳人なく所謂宗匠風の傾向に流れたのであつて、それらの中、其角堂永機、春秋庵幹雄の如き初期の俳壇の代表者たるべきものも、因襲的な態度を持するに過ぎなかつた。思ふにこの第一期に於ける新しき機運は政治、生活の外形的方面に於て見られるのであつて、文學に對する影響もまたさういふ點に於てのみ見られるのである。而してかくの如き境地と關係なき短詩に於ては近世よりの歩みをそのまゝに續けるに過ぎなかつたのである。

二　假名垣魯文

次に小說戲曲に就いて考察したい。小說に於ては啓蒙文學としての政治小說や科學小說を出して居るのであるが戲曲としては前代に於ける傳統的立場を守つてゐたといふことを述べた。しかし小說の上にも近世文學の傳統をそのまゝ守つてゐた作家もあるのである。かくの如き傳統を追ふ所の小說戲曲に於ては文學に對する新しい自覺はなく、過去に於て作られたなぐさみ本位と勸善懲惡主義といふ文

學思潮を繼承し、過去に於て完成してきた技巧の力によつて作品を創作してゐたと思はれる。しかしその間に新しくとりいれられた西洋文化に刺戟を與へられる所から、それらの題材をとりいれたりまたは諷刺的にこれを扱ふに至つて居るのである。さういふ現象を傳統的な小説や戯曲の作品に見出すことが出來るのである。かういふ點を説明するために、小説に於ける假名垣魯文と脚本に於ける古河默阿彌とを擧げて見たい。この二人はともに近世に生れ、近世に於てすでに作品を發表して居るのであつて、明治に於ける文學的活動はいはゞ近世の繼承に過ぎないと言へる。しかも本質に於ては近世期の文學活動の繼承であるが、同時に明治期に於ては新しい題材をとりいれる事によつて多少とも新味を發揮しようとしたのである。

先づ魯文に就いて考へると、彼は文政十二年に江戸に生れ、東條文京の門に入り、種種の作を發表して居るが、その中で滑稽富士詣十卷は彼の特質をよく發揮し得たものである。即ち彼が萬延元年の夏富士山に登り、箱根七湯を巡り、その間に經てきた滑稽失策を材として作つたもので、その作品の特質は一九の膝栗毛と同一である。即ち彼は一九の亞流として、近世末期から明治にまで生きのびた作家であると言へ

るのである。さうして明治に於ける作品の中で、彼をよく代表するものは西洋膝栗毛十五篇である。この膝栗毛はその題名からも示される如く、一九の膝栗毛を繼承したもので彌次郎兵衞、北八と同じ二人の滑稽人物の旅行記的作品であつて、膝栗毛の模倣以外に出でないものであり、なぐさみ本位を中心とする作品であるが、たゞ題材的に見て西洋の旅行を扱つて居る所に特徴がある。即ちこの二人の人物が横濱の大腹屋といふ豪商に雇はれ、上海より英國に至る間に滑稽失敗を至る所に、演ずるのである。或は便器の水を飲んで笑はれたり、婦人に握手されて懸想されたと自惚れる如き極めて卑俗なる興味を以て描かれて居るのである。さういふ新しい題材に對して、一九式見方を離れないのであり、人物の性格も新しい文化に對しても何等の刺戟も與へられず、すべてを傳統的に解釋するのである。横濱より渡航する前の經歴を見ると二人は横濱のある店で酒をのみ戯作者とふれこんで饗應されるが、女房等がきて僞が分り妻に離別され、風呂屋にて衣服すべてを盗まれても洒々落々として居りそこに外國渡航のすゝめをうけるといふ如きも、一九の膝栗毛のそれと同巧である。明治初期に於て西洋旅行をするものが種々の失敗を演ずる點を題材と

したものでは末廣鐵腸の啞の旅行があり、後に太郎冠者氏の同名の啞の旅行といふ脚本も作られて居る。是等は同じく失敗を描いた輕い作であるが、しかしその主人公は明治の一紳士、もしくは一商人であつて、近世式の性質は見られないのであるが、魯文の作はその點に於てより啓蒙的であると思ふ。さうして魯文に於ては西洋文化に對する諷刺、皮肉が底に見られるのである。この點は彼が福澤翁の窮理圖解から脫化した明治四年の胡瓜遣によつて、福澤翁のといた道理を茶化して居り、安愚樂鍋によつて明治の人民が牛鍋をかこんで論議するといふ趣向を以て記してある中に一層よく見られるのである。何れも題材は新しき事件を採擇して江戶人としての觀察を行つたのであるが、西洋に對する心醉の心とは相違して近世に於けるなぐさみ本位の立場から、明治初年の開化を諷刺し茶化して居るのである。

三　古河默阿彌

魯文は表現技巧に於ても必ずしもすぐれてゐるのでもなく、明治初期の傳統的作家としても必ずしも唯一の作家ではないが、たゞ新知識を早く取材した所に多少の注意すべき點があつたと思ふのである。さうして事實に於て傳統的作家として明

治初期に注意すべきは古河默阿彌である。彼は近世の末に出た鶴屋南北に次いで脚本作家として最もすぐれた一人であるが、題材の上から見ると南北が最も多く怪談を用ゐて居るに對して、默阿彌は盜賊を多く用ゐて居る。さうして南北が怪奇な病的な陰慘の世界を描いて居ると言へるならば、默阿彌が歌舞伎そのもの丶諸要素を集成し、音樂的と繪畫的美とを合せて、惡の美を現して居ると言へる。從つて默阿彌の描く白浪は純粹惡としての白浪を描くのではなく、惡の中に美を見出すためである。而して美の構成要素として音樂美、繪畫美の形式美とともに內容美としての勸善懲惡思想を作の基調として居るのである。この音樂美と繪畫美と勸善懲惡思想の三つが巧みな諧調をなす所に、默阿彌の美があるとも言へる。それは徹底惡を描いたとも見られるやうな村井長庵巧破傘(勸善懲惡覗機關)に於ても最後には主人が怪我で死んだのを主殺と自首した久八の忠義に感じて、長庵をして前非を悔いて自白せしめるのである。かくして最後には「性は善なるものぢやなう」といふ判官の言葉を以て默阿彌の立場を示して居るのである。彼はこの勸善懲惡思想を最もはつきりと現すために最も惡なるものをとつて、その惡がいかにして滅び善がいかに

力を得てくるかといふ過程を現さうとしたのである。この勸善懲惡思想は一面から見れば理想主義もしくは、功利主義の立場であるが、別の見方からすれば美醜すべてをうつす文學を道德に結びつける手段となるものであつて、近世の作品に見える勸善懲惡主義も佛者の强い理想主義といふよりは民衆道德にこびようとする低級なる觀衆本位の立場であるともいへるのであつて、春水の人情本の如きはたゞ官憲をあざむくための手段であつたやうにも思はれるのである。もとより馬琴や默阿彌は春水等に比すればより深い根抵に立つて居るではあらうが、同時に表現上の一手段、卽ち美的意味もあつたと思ふ。ともかくこの勸善懲惡思想が彼の文學に於ける重要なる特質を占めたことは明らかである。

而して彼は明治に於ける幾多の作品もこの勸善懲惡主義と、音樂美、繪畫美とを基調として惡の華を表現して居たことには變りがない。なぐさみを中心とした魯文と同じくこの點に於てあくまでも傳統的作家であつたのである。然し彼に於てもこの根本基調の上にたちながら、明治の新文化に對して無關心ではあり得なかつたのである。それは彼の惡の華が近世的な歌舞伎情調、もしくは江戸情調の上にたつ

て居るために、明治文化に多少でも、關心を有したことは彼の純粹美の効果を幾分でも失つたやうに思はれるのであるが、それだけ文學史的興味はあるのである。この點を一二の作によつて說明して見たい。第一に明治十三年の作である木間星箱根鹿笛といふ作を見る。この作は四幕物であつておさよといふ士族の女が許嫁のあるにも拘らず岩淵九郎兵衛と不義して逐電したのであるが、士族であつた九郎兵衛も明治の初めに商人となつて失敗し、妻を小田原の海老屋に娼妓として賣る。九郎兵衛はおさより金を僞つてとり旅藝者のおきつとなじむ。海老屋の主婦おせんの世話でおさよは箱根に湯治にゆくが九郎兵衛とおきつのために月のない闇い夜殺される。その亡靈がたゝつて九郎兵衛は日夜苦しめられ、おきつを初め多くのものを狂亂の餘りに殺すに至るのである。卽ち女房を殺した報で苦しめられるといふ勸善懲惡の思想が中心となつて居る點に、江戸期の作品と同一な基調にたつのであるが、たゞ背景として武士から商人になつて、ふなれのために失敗する所から零落し惡事を犯すに至るといふ、明治初期の社會現象としてあり得た事件を扱つて居る所に、明治の色彩を多少帶びて居るのである。かつその部分的記載の中に明治の種

種の新しき事物をはさんで居る。 たとへばおさよが九郎兵衞を怨んで、

纔二錢で直に屆く郵便故なぜ知らせては下さんせぬ

と郵便をしばしば用ゐ、又おさよの言葉に

いかに男女同權とて貧苦に迫り夫から離緣狀を取つて生臭い法華坊主に私しや成る氣はありませぬ

といふ如き、更に九郎兵衞がおさよの亡靈に苦しめられる時厄介になつて居る弟の岩淵與七に向つて

手前は開化の世に泥み飜譯本の拾ひ讀みに西洋がつてないと言ふが、人の恨みに幽靈がないと言はれぬ、其證據は後ろにおさよが立つて居るが手前の目には見えねえのか。 と與七後ろを振返り見て(與)誰が立つて居るものか、夫がお前の神經病心の迷ひを晴しなせえ

といふ如き、いづれも明治の空氣を少し示したと見られるのである。

更に他の例として明治十四年の嶋衞月白浪を見る。 この作も四幕物であるが、默阿彌の得意とする白浪物である。 即ち作中の主要なる人物は悉く白浪である。 辨

天お照は枕さがしの旅藝者であり、望月輝は昔は盜賊で一旦牢に入れられたが明治維新の時大赦によつて出獄し、今は正業について居るものであり、松島千太、明石の島藏も白浪である。千太が銀行員に姿をかへてお照をつれ出し手籠めにしようとする時、望月輝に救はれ千太は千仭の谷に飛込み行方をくらます。お照は望月の妻となるが、松島千太が江戸にあらはれお照を風呂で見つけ、又別れ別れになり兄弟分の明石の島藏ともめぐりあふのである。千太はお照の所にゆき金をゆすらうとするが、望月が自分の素性をあかしておどすので這々の體で逃げかへり島藏をおとづれその力をかりて望月夫婦を殺さうとするが、島藏は改心して居り、それを斷るので、島藏、千太は立まはりの結果千太はくみしかれて終に改心し、望月もきあはせすべてが改心し又仲なほりし、千太、島藏は自首せんとする所で終つて居る。盜賊等がすべて悔悟するといふ所に勸懲主義の本領は見られるが、かゝるものが改心して商法を營むといふ所に明治初年の新空氣を思はせる上に、士族、官員、派出所、巡査、銀行員などの新しき語を用ゐ、千太のゆすりに答へる所に

送籍なければ妻にあらず、表向に公裁を仰がば證據は立ざるぞ

といふ如きにも見ることが出來るのである。かくの如く默阿彌の明治初期の作品の中から明治時代の新しい文化の影響を多少づゝ見られるが、それが彼の作品の効果の上にどうであつたかといふ點は、前にも擧げた如く必ずしも成功したとは言はれない。それは默阿彌の有する世界が江戸情調の上に築かれた世界であり、あわたゞしい明治新文化の上には描くことの出來ない幻影の世界であつたからである。

さうして明治初期に於てもこの歌舞伎の情調に對する非難の聲も起つてきたのであつて、歌舞伎をば夢幻劇として、より寫實的な劇を主張する機運も起つたのであり、市川團十郎が所謂活歴物を好んで演ずるやうになつたのも、また明治二十年代に近く演劇改良會が叫ばれ末松謙澄等によつて劇場の改革を行ひ、女優の必要が叫ばれるに至つたのであつて、かういふ機運の中に古河默阿彌の脚本作者としての苦しい立場もあつたと思はれるのである。

附記、この章に就いては「明治初期の文學論」(教育論叢、昭和四年三月拙稿)參照

第二章　寫實的傾向の文學

序　說

第一期が外來思想を謳歌し、これに心醉した結果、それらの思想知識をたゞ無批判にとりいれようとするに對してこの期に於ては國民的意識が目覺めて外來思想を調和しようとするに至つたのである。この國家的意識が明治中期には一貫して見られるのである。即ち二十年代に於ける啓蒙的な國粹主義と三十年代の初期に於ける思索的日本主義とはこれである。さうしてこの國家的意識は明治初期に於ける基督的思想とも論爭し、また種々の外來思想に對する批判ともなつてきたのであるが、この國家的意識の必然的展開として、日本研究の機運も生じてきた。所謂古文學研究といふ機運もこの中から生じてきたのである。さうして平安文學と江戸文學とはそれぞれ種々の立場から注意され、その作品も飜刻されるに至つた。かういふ機運が自ら文學思潮の上にも影響するのは當然であつて初期に於ては無批判に

小羊漫言

「讀賣叢譚」

坪内雄藏著

大人となれバ年波の返る毎に人さま〴〵の感慨ありて樂しき年賀の聲もさすがに樂しとは聞かされど一年を重ぬる毎に行末の見ゆて賴母しきは小兒の齡と國の齡と雜誌新聞紙の齡となりそは彼等の年とる毎に其だけにおとなびそれだけに智惠まさり又其だけに貫目もつき個人としては國の益とあり一國としては世界の益となり新聞雜誌としては世人の益となれバなり扨も我『讀賣新聞』が其たぐひに漏れぬこそ嬉しけれ吾人むかしは小新聞と貶しめられいがめしき向には小供あつかひにせられ心外の年月を經しこともありしがそは已に忘らるゝ昔となり雜譚は生ひたちて大人びたる論說とあり今年はまた初子を生り名けて叢譚といふは親の幼名に因るなり

叢譚何の爲に生れたるか親論說の手助して社會の評判をせんとてあり思ふに今年廿三年は國を人に喩れば國の爲の一月一日なるべし人の上にては一年の

春廼家漫筆

壹圓紙幣の履歴ばなし

逍遥生筆記
（二十三年二月稿）

第一回

吾等文本の門を叩きし上清童子の仙骨無ければ又スペクテートルの夢枕に立ちしシルリングの洒落あるにもあらず本來の滑べら其身貴からざれば半生の經歷に花も實もあらむ筈なきを所望せらるればとて衰だちての身の上話し嗚呼の限人間達の思はくもうしろめたしさかはあれど又思へば流れて〳〵の末當社の金箱にゝりしこと浮居氏のゝふ因縁のわざか此社の人達との宿世何とやら怪しくなつかし且は吾とても相應に思ふことのあれば過來しかた打明けていふて見たしと思ふなり物數ならぬ身の上なれど足下達人間とは離れぬ中の履歴なればきゝかたに因りてはをかしき節の無さにもあらじ物は見るばかりが放樂ならず聞いて置くも損は無しとさとりたまへつら〳〵案ずるにおしなべて人間は物の皮のみを見て骨に透る思ひやり無く兎もすればおのがする曲事を吾等一門に塗つ

とりいれられたのが、種々の文學意識としての傾向が明瞭になるに至つた。素材主義と功利主義とが、更に文學の立場に於て考へられるに至つたのである。即ち先づ寫實主義が明らかに唱へられ、それに對する理想主義、浪漫主義が稱へられて、こゝに文學論上に常に現れる二の傾向が明らかになつてきたのである。さうして文學論の基礎として美學が研究されるに至つて居る。

こゝでは寫實主義文學を考察して見たい。

一　坪内逍遙と二葉亭四迷

一　寫實主義の先驅

寫實主義の傾向の先驅として坪内逍遙氏と二葉亭四迷とを考察して見たい。我我がこの二氏の事業に於て興味を感ずる點は、二氏の事業は第二期の初頭に現はれたのみならず、明治文學全般の上にしば〳〵現はれて來る所にあるのであり、殊に逍遙氏の如きはその範圍が極めて廣く、また生命が最も長い點に殊に意義深きものがあるのである。而して逍遙氏が日本の近世文學と英文學の兩方面の知識を結合して居るに反し、二葉亭は露西亞文學の素養を以て潑溂たる生命を與へた點に著しき對比をなして居る。而も二氏の力によつて寫實主義が先づ根をすゑられたのは注意せられる。

逍遙氏の業績としては明治初期に政治小説をも作られ、沙翁劇を淨瑠璃風に譯したものがあるが、その第一の業績は小説神髓と書生氣質その他の小説の創作であり、第二は史劇論の主張と桐一葉等の史劇の創作であり、第三は樂劇の主張と新曲浦島

等の樂劇の創作であり、第四は沙翁の研究とその飜譯とである。また二葉亭の業績としては浮雲と、露西亞文學の飜譯と自然主義時代の其面影及び平凡とがある。
こゝには兩者の第一期の業績を考へて見たい。

二　小說神髓と當世書生氣質・細君

第一期の業績は小說神髓、書生氣質、浮雲等である。小說神髓は小說に關する考察を組織的にまとめたものであつて、これによつて小說の進みゆくべき道が明らかにされたのである。これとほゞ同時に有賀長雄氏の文學論もあるが、その組織的である點また寫實的傾向を主張した點に於てはこの書を擧ぐべきである。本書は二卷に分れ、上卷に於て文學本質論をとき、下卷に於てその表現技巧の問題をといて居る。氏は小說を美術の一種であるとして小說が道德等と異なる點を明らかにして居る。卽ち美術を有形の美術と無形の美術とに分け、無形の美術として音樂、詩歌、戲曲等を擧げて居るのである。さうして道德と藝術との立場を區別したのは先づ注意せられる。次に小說の起原變遷を叙し、更に小說は人情を描寫するのが、その主眼であるとして、馬琴一流の勸善懲惡主義を排して寧ろ人情本の方に文學としてのより多き

價値を與へて居る。　次に小說の種類、小說の利益をも擧げて居る。　即ち小說は第一に人の氣格を高尚にし、第二に勸善懲惡をなし、第三に正史の補遺となり、第四に文學の師表となる事の四點を擧げて居るのである。　この小說の利益論の中には結果論としてはなほ勸善懲惡主義をすてゝはゐない事を知るが、しかし目的論としてはこの點を破壞しようとするのである。　氏は小說に傳奇小說(ローマンス)と寫實小說(ノベル)との區別をたてゝ居るが、最も發達したものは寫實小說であるとして居るのは、明治に於ける小說の寫實的傾向を拓いたものとして注目されるのである。　而して氏は外面的事件の描寫に止まらずして其心理的方面の描寫を力說して居る。

それ稗官者流は心理學者の如し。　宜しく心理學の道理に基づきて其人物を假作すべきなり。　苟くもおのれが意志を以て强ひて人情に悖戾せる否心理學の理に戾れる人物なんどを假り出さば、其人物は已に既に人間世界の者にあらで、作者が想像の人物たるから其脚色は巧なりとも其譚は奇なりといふとも之を小說と謂ふべからず。

と論じて、勸懲の主旨を現はすために人情をまげ世態をまげて、不自然なる脚色を加

へる事を極力非難して居る。さうして馬琴の八犬傳に於ける八犬士の如きは仁義八行の化物であつて、決して人間とは言ひ難いと述べて居る。逍遙氏の全體の組織は外國の文學論をとり用ゐてはゐるが、同時に近世に於ける勸善懲惡主義と人情本との關係の上にたち、かつ宣長の「もののあはれ」論の基礎の上にもたつてゐたために日本的の立場もあつたと思ふ。それだけどこかに理想主義的色彩もあつたと思ふ。この點が自ら彼の作品の上に現はれたのである。

彼の寫實主義的傾向の一層明瞭に現れたのはむしろ短篇小説細君であると思はれるが、しかし歴史的興味に於て書生氣質の價値は忘れられない。書生氣質とほゞ同年（十八年）になつた、逍遙の妹と背鏡に於ては未だ敎訓主義が主で寫實的傾向は見られないが、書生氣質は寫實をとにかく開拓したのである。この作は東京に於ける書生生活の狀態を描いたものであつて、ある英學塾に於ける數名の學生を主として豪傑肌の學生や、柔弱なる學生等の性格の相違を擧げてその生活を赤裸々に描寫して居る所にその寫實的傾向が見られる。雪中梅に見える人物の如きは政治的野心に燃える心と事件とのみが描かれてゐるが、これには現實的な平凡な一日一日の

生活がそのまゝに描かれて居るのである。この時代の書生は一面に於て西洋思想をかぢつて半可通の英語を口にすると同時に、鯨飲馬食する蠻風と遊里に耽溺する遊蕩的氣分とが交錯して矛盾にみちた、また活氣ある生活を送つてゐたのであつて、それらの書生生活の種々相がこゝにありのまゝに寫し出されてあるのである。然しながらこの作は未だ寫實主義としては完成してゐないのである。即ち第一には氣質とあるによつても明らかであるが如く、個々の個性といふよりは書生の中に於ける種々の氣質の類型を主としたもので、未だその個性の内面的心理的描寫に向つてゐないのである。個性の心理的葛藤よりは表面的なる會話事件が主として描いてあるのである。第二には脚色が未だ不自然なる作爲的傾向を脱れることは出來なかつた點である。この作の中に一書生小町田粲爾と藝妓田之次との情話及び守山父子兄妹の奇遇の如きが寫されてあるのは、平凡なかつ散漫に流れやすい全體の描寫に變化と統一とを與へるものであるが、遊廓に遊んでよんだ藝妓が友人の妹であつたといふ點や最後に父子兄妹等悉くが偶然の運命によつて邂逅して目出度く終るといふ如き趣向は極めて不自然な宛かも近世の人情本に見られ得る程度の技

巧であつて、自然のまゝの描寫であると見る事は出來ない。第三にその文章も戲文的の所が少くないのであつて、たとへばその最初の部分の

　さま〴〵に移れは變る浮世かな。幕府さかえし時勢には武士のみ時に大江戶の都もいつか東京と名も新玉の年毎に開け行く世のかげなれや

の如きを見ても想像される。この三點の如きはこの作の短所といふべきであるが、全體として見れば明治初年の西洋思想に心醉しながら、一面に於て舊文化の名殘をもつてゐた新舊思想の對立の著しき時に、生活してゐた書生そのものの解剖はある程度まで見られるのである。さうして書生氣質の有する類型的な性格描寫は細君に於てはほゞ個性描寫にまで進んで居る。

細君は明治二十二年の作で花袋の如き書生氣質よりもすぐれて居ると、評された如くその寫實主義は一層進められた。一人の女中の目にうつつた紳士の家庭を寫し出した所にその當時の生活を思はせるものがあり、殊に細君の心理の觀察等に深さを認められるのである。事件的には一層平凡で單純であるがその手法は注意されるのである。しかし逍遙氏としてはかくの如き寫實主義を本格的に進めてゆく

事はされなかつたのであつて、二十三年になると一圓紙幣の履歴ばなしをかいて、寫實の中に機智とユーモアとを示して居られる。即ち一圓紙幣が多くの人の手にわたつてゆく徑路を紙幣の觀察として叙してある所に奇拔な着想が見られる。初めは地方人の手に渡つてゐたが終に柿橋といふ官吏で學校教師の人の俸給として拂はれ、彼の學校に於ける狀態や社會人としての彼、家庭としての彼の觀察を主としてその生活を描いて居るのである。かくの如き表現法は一筆庵の魂膽夢輔譚に於て猫のからだにのりうつつて人間生活を觀察する作が近世の末に作られて居り、また漱石の「我が輩は猫である」の作品も見られるが、逍遙氏のこの作もその意味で注意される作である。しかし寫實小說としては細君の如きが本格的ではないかと思ふ。さうして逍遙氏の寫實的傾向への發展は二葉亭の影響もあると思ふ。小說神髓の寫實主義が二葉亭に影響した點は認められるとともに、二葉亭の浮雲は反對に逍遙氏に影響したと思はれるのである。こゝに二葉亭の觀察をすべき順序となつた。その前に二葉亭の文學論に就いて少しく見ておきたい。

三　二葉亭四迷の文學論

逍遙氏の小說神髓によつて寫實主義的文學論を考察したのに關聯してふれておきたいのは二葉亭四迷の文學論である。二葉亭の藝術論としてはロシャの「ベリンスキーの藝術論」、「カートコフ氏美術俗解」、「學術と美術との差別」（國民之友明治二十一年四月）等の飜譯の外に逍遙氏の書生氣質批評の總論として彼の藝術論をのべた小說總論や具體的表現と心理描寫等の論文がある、平凡の一節にも彼の文學論を伺ふべきものがある。（是等は二葉亭全集、明治文化全集第十二卷文學藝術篇に收められて居る）。

是等を通じて見ると逍遙氏よりも徹底した寫實主義的傾向をとつてゐたことが知られる。もとより二葉亭も後年の作である平凡の中に、浮雲時代の自己の寫實を主とした立場を述べた所に

寫實主義は現實を如實に描寫するものではない。如實に描寫すれば寫眞になつて了ふ。現實の（眞とは言はなかつた）眞味を如實に描寫するものである。詳しく言へば作家のサヴジエクチイヰチー卽ち主觀に攝取し得た現實の眞味を如實に再現するものである。

とある如く、寫實の根抵に主觀があるのを認めて居り、そこから實よりも眞を重んじて居るのであるが、これは如何なる意味の寫實主義、客觀主義の藝術に於ても至當であつて、これによつて二葉亭の寫實主義を不徹底だとすることは出來ないと思ふ。さうして二葉亭の寫實主義の上には逍遙氏に見られるやうな功利的理想主義的色彩は殆ど全く見られないと思ふ。これは二葉亭のよつたベリンスキーの藝術論そのものから影響をうけて居るらしい點からも察せられる所であるが、小説總論に於ても端的に知られる。二葉亭はこの論に於て小説神髓の見解を大體繼承して居るやうであるが、一層徹底的である。卽ち小説に勸懲と模寫とあるとして、模寫の方が重んずべきを説いて居るが、何故に模寫が必要かといふに、

抑々小説は浮世に形はれし種々雜多の現象(形)の中にて、其自然の情態(意)を直接に感得するものなれば、其感得を人に傳へんにも直接ならでは叶はず、直接ならんとには模寫ならでは叶はず。されば模寫は小説の眞面目なること明白なり。

と論じて居るのである。同時に勸懲小説を論じて

夫の勸懲小説とは如何なるものぞ。主實主義(リアリズム)を卑んじて、二神敎(デュ

アリズム)を奉じ、善は惡に勝つものとの當推量を定規として、世の現象を說かんとす。是れ敎法の提灯持のみ、小說めいた說敎のみ。豈に呼で眞の小說となすにたらんや。

と難じて居る。この見解は二葉亭の哲學的な思索の傾向をよく示して居る。さうして更に模寫を論じて

模寫といへることは實相を假りて虛相を寫し出すといふことなり。

とし、實相界にある現象は自然の現れではあるが、偶然の形に蔽はれて判然と解らぬのであるが、それを言葉の言廻しや脚色の模樣によつて偶然の形の中から明白に自然の意を寫し出すことが、模寫小說の目的であるとしたのは虛實論の立場から巧みに說明されてある。小說は或はひろく言つて文學は、偶然的な人生の中から必然的な人生の眞を見出すにあるとするのであつて、精到な見解と見ることが出來る。さうして自然の情態を直接に感得し、直接に表現するといふ論の中に寫實に徹底して居るといふことが出來るのである。

この寫實主義的態度は彼の飜譯の態度に就いて述べた文によつても知られる。

彼のあひびきやめぐりあひ等の飜譯文學が、明治文學に與へた寫實主義的影響の大なるは言ふまでもない事であるが、後に飜譯の態度に就いて記したものによると、外國文の意味ばかりを考へて譯すると、原文をこはす虞れがあるから、原文の音調を呑みこんでそれを移す事につとめて、そのためにコンマやピリオドもおろそかに棄てなかつたと言つて居る。又文體はその人の詩想と關係があり、一人一人文體が相違するから一種の文體で何人の文をも譯するのは誤であるとして、各別にその詩想を會得して、嚴しく言へば行往座臥、心身を原作者の儘にして忠實にその詩想を移す位でなければならぬ。是實に飜譯に於ける根本的必要條件である。

と言つて居る所に、客觀的立場にたつた飜譯を理想として居つた事を知るのである。彼もこの原文の逐字譯とともに意譯の効果をも認めて居るが、彼自身としてはあくまで客觀的に終始したと思ふ。これは寫實主義をとつた二葉亭の立場としては至當の事であつて、この點からも彼の寫實主義的見地は見られる。また二葉亭の「具體的表現と心理描寫」といふ文章を見る時、彼の寫實は單に外面を寫すのみでなく、心理

の寫實を重んじたことを知るのである。

心の中を直截に寫すそれが單に智的に記述されて了へば、それは説明になるだらうが、情的の調があり響があればやはり一種の描寫をしてそれで心内の波瀾や葛藤を見せることも必要だがそればかりでは十分深い處まで這入り得ない。として心理を直截に描くことの必要をとなへて居るのである。かくて人間の日常の會話を寫すのみでは皮相な點のみしか知られないのであつて、人物の輪劃も明らかに知られないのであり、心理を直截に寫す必要があるとするのは氏が單なる平面描寫でなく、心理の内面的描寫を重んじて居つた事を知るのである。その他二葉亭が言文一致を唱道し、また實行して成功を收めた點を見ても、また彼が文章に對する態度を記した文の中に何處までも俗語本位をとつて、俗語の中に眞實のものが見出されるとした如き點を見ても彼の寫實的傾向を見得るのである。

かくの如くして二葉亭に於て初めて當時に於ける徹底した寫實主義にたつ見解を見得るのであつて、逍遙氏が寫實主義をとりながら、その素質的に有する理想主義的道徳的傾向が表はれるに對して、二葉亭は單に見解としてのみならず、素質として

も寫實的であつたと思ふのである。而も逍遙氏もこれを鷗外に比すると遙かに寫實的であり、また客觀的であつたと思はれる。かくて明治時代に於ける文學意識の中心である寫實的態度は逍遙、二葉亭二氏に於て先づ開かれたと見るべきであり、そこに新しい文學論の先驅者としての意義を認めることが出來るのである。

四　浮雲の檢討

然らばかくの如き文學論をいだいた二葉亭の作品は如何であるか。先づ浮雲の檢討を試みたい。

浮雲は三篇十九回から成り明治二十年に第一編、二十一年に第二編が刊行され、第三編は二十二年都の花に連載された。初めは春のや主人、二葉亭四迷の合著として出て居るが、二葉亭の作であつて坪内博士から加筆を得たに過ぎないのである。

この作を構想、性格、背景、表現の四方面から解剖して見ると、第一に構想は極めて單純である。叔父の家に寄遇して某省に勤務する内海文三といふ青年があつたが世才に長じなかつたために免官になつたので、今迄好意をよせて娘を娶せようとしてゐた叔父の妻のお政は急につらく當るやうになるが、文三はその一人娘のお勢を戀

して居たので、その家を去り得ない。その中に叔母の家に同僚で俗才にたけた本田昇が出入してお勢の心がその方に傾く、お政、お勢、本田等に嘲笑されても去り得ないで居るといふ構想であつて、平凡な構想であるが、それだけに書生氣質に比して何等の不自然もなく、自然であるといふ事が言へるのである。さうしてその平凡なかつ自然の構想の中に、第二の性格描寫といふ點に特質を發揮して居るのである。卽ち四人の人物がそれ〴〵個性を發揮して居ることは注意される。お政や昇にしてもさうであるが、文三の世才にうとい、眞實な情熱を有しながら意志の弱い性格や、お勢の明るい變化しやすい、外面的な性格はかつてない新しさを以て描かれて居ると思ふ。殊にお勢の性格は明治初期の時代を背景として作られた、また實際存在したと思はれる女性であつて、その西洋文化をとりいれて移りやすい時代が生んだ人物と思はれるのである。かくの如き少數の人物を交捗せしめるに當つてその心理描寫の精細で自然であることは注意せられる。文三が免職の事を叔母に言はんとして言ひ得ずして逡巡する時の心理描寫の如き、お勢へ愛着の餘りに叔母の家を出でんとしてお勢の言葉に中止する如き、お勢の一顰一笑にひきづられてゆくその心理の

如きは精細にして眞をとらへて居ると言はざるを得ない。殊にお勢が或時ははしやぎ或時はふさぐ心理の變化、文三に罵られて興奮する時の心理など驚くべき技倆を有して居る。さうして文三とお勢との心的葛藤をいかにも自然に活躍さして居るのである。第三に背景としてやはり明治初期の社會を反映して居る。それは默阿彌等の傳統文學のやうにたゞ強ひて新しい文化を材料としたのみでなく、材料と背景とが互に相俟つて時代といふものを浮出して居ると見られる。第四に文章、表現といふ點から見ると書生氣質に比して遙かに清新な文章となつて居る。これはツルゲーネーフを始めとしてロシヤ文學に造詣が深かつたためにその影響をうけて清新な文をなすを得たのであらう。言文一致としても極めてすぐれて居る上に、たとへば敍景の文の如き、景を眼前に躍動せしめて精緻なる描寫とともに清新なる氣分を與へて居る。

然しながらこの作にも歴史的立場を全く離れて自由なる立場から觀察すれば一二の缺點のある事は免れない。第一は今日より見ればなほ多少の戲作者的の文體のあるのを免れない。たとへば文三の免職に關してお勢が母親お政に議論をしか

略則議論世代貧富文化深淺極有裨益著者勉成之可也。

○椿説弓張月　前號の續

學海居士

爲朝舜天丸王女陶松壽等天孫廟にて阿公の自殺を憐むの條ハ因果應報のものかたりなれとも此段また極めて必用の事ありそハ爲朝ハ萬死を逃れて孤島に月日を送りし敗軍の將なり又舜天丸紀平治は智勇あれとも琉球の人心を得る暇あらす松壽もわつかに賤婦に身を寄するものなれハ恢復の爲に用ふへき兵士器械あることなし作者の意構をもてこれを集むることは容易なるわさなれとも然してハ作りものめきて妙ならす又幾多の月日を山中に費さゝれハその兵士器械を集むるたよりなし去かるに阿公かはやくも殘黨を駆り集めて興復を圖りしよしなれハ此時直に爲朝に降服すと爲し別に筆力を費すに及はす此等ハ自然の妙契に似て作者か老練の手段を見るへし

軍兵を集めたるハ前の説の如くにて遺憾なけれとも此に一つの難義ありそもまた作者の妙手段にてその難義を破りしハ殊に妙なりそは阿公か兵を集めて朦雲を輔けんと謀るといへとも前よりして朦雲ハ千里眼ありて能く敵の居動を察するよしいへり然るときハ阿公か兵を集むるを知らさるゆゑなし爲朝舜天丸ハ守護神の冥助ありとしいへハ朦雲その居動を知ること能はさる可きも阿公ハさることなし朦雲早くこれを知らハいかて打捨おくへきや此れ極めて處置しかたき事なるに舜天丸か一書を借り來りて朦雲これを知れとも彼我父君の手に王子と阿公を殺さし彼亦王子の爲に兵士を起しヽか父を討つと稱して愚民を誑すの謀なるへしといはせその痕跡を掩ひ又この事よりして舜天丸か聰明叡智を示し後回に至り琉球の亂を平くるハ全く舜天丸の功と

女學雜誌第八十四號

明治二十年十一月十二日

● 社説

○小説論

（第三）女流、小説を讀むの覺悟の事

小説の善惡を批評する標準既に相定まらば彼の小説を讀むの覺悟何如あるべき乎は之に從ひて自づから推論せらるゝものと云ふべし。蓋し小説には、著者が自己の意を寓して假りに人物を造り其人物等が浮沈轉變するの状況を用て隱に其意を洩らすの工夫に由て成れるものあり、彼の一個の大路巡禮者に由つて基督信徒の經歴を寫し出せるが如き、或は三人の哲學者を使つて人世の本源を探索せしむるが如き、或は政事家の生立を敍して陰に其政治論を主張するが如き、或は奴隷の困苦艱難を寫して其の動物の如く役使さるゝを慨歎するが如き、或は人間一心の思想を戰はせて心神隱微の相闘を明白にするが如き、或は仁義八行を人に造り勸王義挾の情を假設の人物に洩らす如き、凡そ斯の類の寓意小説は古往今來東西に其數はなはだ多し而して吾人が如此き小説を批評するに當りては別に亦た其寓意の當れるや否やを評せざる可らざるが如く之を讀むに當ても亦た先づ眼を此寓意の一點に着して專ら其主旨の在る所を承知するの覺悟あらざるべからず。然れども此等は所云る彼或は政治小説と云ひ或は勸懲小説と云ひ或は哲學小説と云ひ或は漫然として大要の寓意小説と片書したる則ち別種の小説に付て之を言ふのみ、苟くも小説の小説即はち小説の尤も發達したるもの更に言を換へて所云る彼眞正純粹の小説なるものに付て之を言はゞ、之を評するには其小説中の記事よく實際に當れるや否やを探つて之が善惡を批評すべし故に亦た之を愛讀するものは先づ之に依りて世上實際の有樣を味ふとを覺悟するを專一とすべきもの也。吾人が世の姉妹方に對して殊に勸告せんとする所のものは即ち實に右の一事に在り。諸君が小説を讀むの覺悟も此の一點に在らば女流が小説を愛讀するの習慣は或は轉じて以て其の利益となし庶幾くは其弊害を未然に防ぐを得べきかと思考す。例へば彼の當世書生氣質、妹と脊鏡、浮雲の如きは近年出版の小説中所云る純粹の小説部類に屬して殆ど第一位に列する所の名著ならん然るに此の三書は發賣の高相應に多かりしに係はらず評判は宜しからず十中往々之を嫌惡して手にだも取らざるものあるを見受く、中にも彼の當世書生の如き

けて互に爭ふ次第を記述した後に、

しかしながら此を親子喧嘩と思ふと女丈夫の本意に背く。どうして〳〵親子喧嘩そんな不道德な者でない。是れはこれ辱くも有難くも日本文明の一原素ともなるべき新主義と時代後れの舊主義と衝突をする所よくお眼を止めて御覽あられませう。

とある文の如きは不眞面目な文句であつて、深刻なる性格描寫、心理描寫の効果を滑稽化し又弱めるものであらうと思ふ。かくの如き道化的な言葉は所々に見えるのである。而してまた一面からいふと上の如き句によつて、折角の描寫を安價なる言葉で說明してしまふのであつて、かくの如く說明せられる事によつて讀者が實際に得來つた作品に對する眞面目なる批判をば茶化され、從つてその感動を弱められると思ふ。宛かも滑稽本を讀む如き戯作的氣分に引きいれられてこの作の有するすぐれた內面描寫をも淺薄なる概念化して了ふと考へる。是等は文體ならびに部分的表現上の缺點であるが、第二に性格なり心理の扱方を見てもその時代として見れば驚くべきであるが、今日より見れば淺薄なる感じがないでもない。主要なる人物

であるお勢はもとより物事に移りやすき浮薄なる性格を表したものであるから異論はないにしても、文三の性格が今少し深みのあるものであるべきと思ふ。尠くとも讀者をして文三の苦悶に同情せしむるだけの力を要求したい。これは或は二葉亭の作品のもつ大きな缺陷ではないかと思ふ。然しながら表面的な空想にのみ生きた明治初期の社會の反映として見れば、かくの如くなるのは或は當然であつて作者を責めるよりも時代を責めるべきものと思はれるが、かくの如き感があるだけこの作品もなほ明治初期の影響をうけて居ることを知るのである。なほこの作を全體の組織の上から見れば、終の一部分がやゝ說明的になつて了つて大部分の精緻な描寫に比して、物足りなく感ずる點は岩城氏も論せられた所である。かくの如くこの作品も多少の缺點のあるのは免れないが、明治二十年の頃に作られた作品として見れば、驚くべき傑作であつて明治文學史上に光を放つ作であることは疑ひない。

而してこの作が明治二十年代に出來たものであるに拘らず、その寫實的傾向が紅葉などの硯友社の一派のとつた皮相なる寫實に比して、遙かに內面的な傾向を持つ點に於て後に起るべき第三期の自然主義的傾向に通ずるものがあることは直ちに

認め得る所であつて、この點から二葉亭が自然主義的傾向の勃興するに及んで其面影、平凡の二作を製作し得たのを十分に理解することが出來る。浮雲の中には後になつて其面影、平凡を製作し得る力がすでに見られるのである。要するに二葉亭の浮雲は逍遙氏の小説神髓ならびに作品とならんで、明治小説に自覺の第一歩を與へた點に於て忘れることの出來ないものであり、この機運にうながされて多くの作家が輩出し種々の傾向を作るに至つたのである。

註、明治文學史第二期第四章

二　硯友社と尾崎紅葉

一　主情的時代の硯友社

二葉亭が浮雲を出して明治小説に新しき生命を與へた時、尾崎紅葉を中心とする硯友社は漸く文壇に勢力を占めんとするに至つたのである。硯友社の生じたのは明治十八年の初めで、初めは我樂多文庫といふ回覧雜誌であつたが、明治二十一年印刷發賣するに至つたのである。而してその中心となつたのは尾崎紅葉であるが、初め紅葉と鼎立し紅葉よりも寧ろ先に名をなしたのは山田美妙齋であり、美妙齋の去つた後紅葉が中心となつて多くの門下を率ゐて文壇に於ける一大勢力をなしたのである。この硯友社の設立は小説神髓の世に出でたよりも三月程前であるから必ずしも小説神髓の影響といふ事は出來ないが、硯友社が寫實主義をとなへたのはその影響であるといへる。即ち尾崎紅葉がはじめて寫實主義をとなへたのは明治二十三年であつて、それ以前は江戸の戲作者的傾向、及び抒情的浪漫的傾向であつたのであつて、それが寫實主義に轉じたのは逍遙、二葉亭の影響と思はれるのである。紅

葉の寫實主義は二葉亭のそれに比すると遙かに主觀的であり、偏狹ではあるがその影響であることは明らかである。

そこで先づ浪漫主義時代の美妙、紅葉に就いて考へて見る。浪漫主義時代の美妙と紅葉とは、美妙の方が最初の出發を見せて居る。即ち美妙の夏木立が出た時、紅葉は江戸末期の戯作的境地に安住するに過ぎなかつたのである。その意味に於て紅葉の浪漫主義的傾向も美妙の影響であると見られる。一體に紅葉は先驅的な作家ではなかつた。他によつて開かれた道をより完成してゆくのが紅葉である。紅葉には先驅者的な清新なる味がなくて、完成され切つた洗錬美があるのはそれを示すものである。さうして紅葉があくまで完成者であるに對して、美妙はあくまで先驅者である。否先驅者としてのみに美妙の生命がある。これが今日に於て美妙の文學に歴史的價値以外のものを殆ど見出せない理由であらう。ともあれ美妙の夏木立は浪漫主義の先驅的意味に於てまことに花やかなスタートであつたと言ひ得る。題材に於て籠の俘囚の如き西洋の清新な悲戀的なもの、柿山伏の如き政治小説を皮肉つた滑稽的なもの、武藏野の如き純抒情的のものそれ〲に異なつた色彩を有し

て居る。籠の俘囚といふ作品は羅馬の貴族厭ぴあすが平民の馬あじにあすの女、馬あじにやを戀し、裁判官の黑おぢあすといふものにうちあけ、馬あじにあを捉へ來らしめて戀を打ちあけ終に辱める。父、馬あじにあすが幽囚された女の所へ來り仇をうつ事をいひ、女を殺すのであり、所謂貴族の暴虐を背景として可憐なる少女の運命をよくうつして悲劇的効果を與へて居るのであり、西洋文脈をとりいれて文も流麗で味があるのである。次に柿山伏といふのは明治初期の時代をとつた諷刺的作品であつて、那須意外といふ文士が戀の辻占といふ作を作つて好評を博して箱根で豪遊して居る所を野間勇といふ政治家でかつて小説を作つた男にたのまれて代作したが賣れないので恥をかいたといふので柿山伏といふのであり、政治小說の作家の藝術的天分少きを諷刺的に記したものであるが、懸言葉の多い誇張した表現で幼稚を免れないが、滑稽を扱つた所に特色がある。更に武藏野といふ作品は材を歴史にとり南朝の新田義興の臣秩父民部とその婿世良田三郎は武藏野の秋の夕暮をとぼとぼとたどる中に敵にあつて二人は殺される。妻と嫁とは歸らぬ二人を待ちわびて居ると二人の戰死の報知をうけるので、母の看經をする間に嫁は武裝して外に忍

び出るが、やがて熊に殺されたと報ぜられるのである。武藏野の夕暮の叙景は詩の如き趣に富んで哀調の人を動かすものがあるが、説話としては極めて單調な不自然な感を免れないのであり、空想的な作品である。たゞその抒情的な所に特色があるのである。その他にも花の茨、茨の花、贋金剛石、仇を恩の如きを合せて六篇からなつて居るのである。が是等を通じて浮雲の如き雄大なる構想と深刻なる內容をもつものでなく、淸楚なる小品といふべきであり、文章の淸新にして抒情味のゆたかな所に特色を有するのである。第一期に於ける粗奔なる感情の外は見ることの出來なかつた政治小說を見た目で美妙の短篇を見る時、純なる搖籃の中にかへつた如き心持を感じるのである。

夏木立の後美妙は硯友社を去つて都の花といふ雜誌により花車、ぬれ衣、此子、いちご姬等を出したのであるが國民の友に出した胡蝶の如きは、最も傑作とすべきであり平家末路時代に材をとつて戀と忠義との葛藤を描いたものであり、胡蝶といふ女がその愛人の源氏について平家に仇なすを知りその情をすて、愛人を殺すといふ材を扱つて居るのであつて、夏木立の武藏野と同じく浪漫的な題材を豐麗な文體で表

現したのであり武藏野よりも構想が複雜であり、かつ胡蝶といふ主人公が中心となつてよく統一を得て居るのである。

美妙齋はこの時代に新體詩人としても活動して居つたのであつて、どこまでも抒情作家としての特色を見る事が出來る。しかしその作品は思想的のものも、生きた人物も、心理も認められないのである。而してこの胡蝶と同時に明治二十二年紅葉も二人比丘尼色懺悔を出して美妙と對抗した。紅葉はそれ以前にも我樂多文庫に貝屏風といふ作品を初めとして、二三の作を發表したのであるが近世の傳統的氣分に滿ちたものであつたが、色懺悔に於て獨自の作品を創作したのである。この作も美妙と同じく抒情的浪漫的の作品であつて未だ寫實的傾向から遠いのである。即ちこの作は時代物でありかつ場所も時も定めざる夢幻的な背景を有して居るのであり、木枯吹きすさぶ山里の庵に二人の尼が互に語る中、各々素性をあかすと主の尼は夫に死別して尼となり跡を弔ふものであり、客の尼も許嫁の夫が敵味方になり戰の結果傷きて己が許に養ふ中、義理と恩愛とのために自刄したと語るのであつて、而もその夫と賴む人は同じ人である事が明らかになり、驚くといふ說話である。題材

から言へば美妙齋の夏木立の中の武藏野や胡蝶と同じ傾向のものであるが、脚色から言へばそれらよりも複雜なる構想をもつて居る。もとよりそこに不自然なる作爲の跡もあるが、全體に夢幻的なる此種の作品としてはやむを得ない事である。而して內容としては夫を思ふ貞淑なる女性と、義理と人情との葛藤になやむ男性の心境とが感ぜられるのみで、特に新しき性格描寫とか新しき思想とかは見られないのである。又文章は言文一致でもなく雅俗折衷でもない新しき文體であつて、紅葉の巧緻なる技巧はすでにこの作に於て認められるのである。

蕭寂(さびしさ)はそも如何ならん。片山里の時雨あと、晨より夕まで、昨日も今日も凩の如く。あるほどの木々の葉一峯の松のみ殘して大方吹落しぬれば。山は面瘦せ衰え、森は骨立ちて凄まじ

といふ一節でもその特質は見られる。而して彼がこの作を涙を主とするといつた如く全體を通じて抒情的な哀感が中心となつて居るのである。

二　寫實主義に轉化したる紅葉

かくの如く美妙ならびに紅葉の第一期の作は主情的な作品から出發して居るの

であるが、色懺悔以後紅葉は小說神髓の說く寫實的傾向をとつて幾多の作を發表したのである。而して明治二十三年から二十七年頃にかけては、紅葉の第一期といふべく、寫實的傾向をとつて殊に女性の類型的性格及び、その性格から展開し來る運命の變化を主として書かうとした樣に見られる。次に二十七八年頃は飜案小說にかくれて、創作的方面から暫く遠ざかつた時代であり、卽ちそれ以前の作品に對する反省的の心境から進みゆくべき道について自己を凝視して居つた時と見る事が出來る。而してその自己凝視の心から生れ出たのが明治二十九年の多情多恨であり更に最後の作としての金色夜叉が三十年以後晩年に至るまでに創作せられたのである。次に紅葉としては比較的多作な第一期時代の作品の二三に就いて其特質を見たいと思ふ。

先づ明治二十三年に讀賣新聞に出た夏痩を見ると、この作には高貴なる家に生れて美貌ながら淫蕩なる女性ゆかりといふを主として、貧しき生れながら溫順にして主を思ひ夫を思ふ事の深き美代といふ女性を配してある。藤村家の小間使美代は、主人の好意によりその家に仕ふるものの子の蓮田震策と結婚したのであるが、藤村

家の令孃のゆかりは震策と不義をし懷妊までする。而も美代は夫をいさめるともに、ゆかりを病氣保養として修善寺につれゆき、出產させその子を震子と名づけて已が子とし、主家の娘を無事に結婚する事の出來る樣にしたといふ構想である。是等の中、震策は意思の弱い、女性にひきづられてゆく男性として描かれてあるに過ぎない。が女性の二つの性格の對比はこの作に於て紅葉の特に示さうとして居る所である。この時代に於ける紅葉の作の基調は女性の寫實であり、而も個性の具體的な性格描寫には進まず、女性の性格の種々の類型を描いて居る樣に思はれる。この作に於けるゆかりにしても淫蕩な生活に耽溺するといふ黠の描寫は精細であつて、この作の最もすぐれた黠ではあるが、たゞ淫蕩なる女性としてだけであつて他の方面の觀察に入つてゐないだけに、一面的に偏して居る。殊に美代の如きは主家に對する義理のために自分の夫の耽溺を怨む心をおさへつけるその心だけが現れて居るので、それ以上に個性を浮きださせるだけの描寫がないのである。紅葉の女性觀察がなほ一面的に偏して居る事を認めざるを得ないと思はれる。

次に明治二十四年に作られた作として都の花に出た二人女房と、讀賣に出た伽羅

枕とを擧げる事が出來るが、殊に伽羅枕は注意すべき作である。二人女房はある官省につとめる士族の娘二人の其性格の相違ならびに其運命の相違を叙してある、姉は容貌も美しく派手であり妹は醜くして地味を好む。其の性情の相違から姉は官吏に嫁ぎ、而も後には家運も衰へ家庭の風波のために苦しみ、妹は幼少の時から知つて居る職人にとつぎ而も幸福なる生活を送る、その兩者の運命の相違を叙してある。この場合の姉妹の性格も類型的な相違であつて、そのために生ずる運命の相違もありふれた平凡と言はなければならないが、この篇の主眼はこの異なつた類型の女性を對立せしめた所にある。而して描寫も他の作に比して寫實的要素がゆたかであるが、伽羅枕はかくの如き女性の對立的な興味から離れて一個の女性を精細に叙してある。水野石見守といふ旗本と遊女小鶴との間に生れたお仙は母の朋輩の遊女あがりの有龍夫婦に養はれたがその親からも玉の輿を夢みる事を敎へられたのである。有龍達が貧しくなつたので鴨といふ富豪の家へ貰はれたが、どうしても馴染まずして元の家に歸りそれから島原にかむろとなり里花太夫となのつたが、ある隱居に請出され、その後隱居に死にわかれて家にかへり、更に淺野家の前田新右衞門と

いふものに關はれ江戸へつれてゆかれたが、妻の嫉妬に苦しみ後新右衞門は紫水晶の製造に著手して失敗して死に、更に佐太夫となのつて吉原に出でそれより多くの男性を飜弄し、最後には罪亡しのため癩病者を看護し、終りに髮をそつて二十八歳から六十二歳まで侘しく靜かに世を送つた、その前半生を描いたのがこの篇である。張の強い男の美貌よりは意氣を尊ぶ佐太夫の性狀は近世には多く見られる所であつて、この作品はかくの如き近世の女性の類型を描いたものであつて、明治に於ける女性の性格といふ事は出來ない。吉原の遊女となるまでは平凡なる女性に過ぎないが、己が異腹の姉に對面する場合に、同じ姉妹と生れながら一方は花やかなる行列を隨へ、己れはそれに蔭ながら對面するといふ、その相違の甚しきを悲しむ情から、彼女の勝氣な性情が初めて現れたのである。

姉は大名の奧方とて見たりや行列の威勢は飛鳥も翼を斂めむに我その妹として味噌漉さげて腐らむは神ぞ神ぞ神ぞ口惜しからずや。さりながら運拙くして夫を持てば皆死なれこれまでの萬事末凶ならざるはなく、末々の辻占悪ければ正路(おみち)の立身出世は覺束なき事なり。凡そ人間に生まれながら良かれ惡かれ其

名を唱はれずして土に返るは蠅の夏に生れて秋果つるが如し。芳名を傳へずばあられぬ名にてもあれ、世に知られ其れにて姉に栖つかむも面白かるべし。われそも〳〵の一歩を踏違ひ女人は貞操にてあるべきものを白銀になめられかねに抱かれ大事の戀と情を散々に玩弄ばれ、砂糖の甘味なく菓子の香氣なく魚にしては脂膏ぬけたる三月比目魚、形はあれど其性なきは其物にして其物ならず。女にして女にあらず。女ならざれど男にもあらず。みかけ金屬の不具なることそ淺ましけれいでや……不治の不具となれるからは大不具となりて世間を氣味惡からすべきぞ

この氣象が彼女をして意氣と張とある遊女とならしめたのである。お尋ね者の宗兵衛をあくまでかばつてやるといふ俠氣もその意地から起つた心であるが、一面には世を嘲笑的に茶化して見る點もあつて、彼女の境遇がそのすねものとしての性情を造り上げたのであつて、その意地が生む種々の事件は極めて巧みにうつされて居るのである。而してこの作に於て西鶴より受けたる影響が最も著しく見えて居る、一人の女性を中心としたこの編は好色一代女と多少類似する所がある。たゞ西鶴

は性慾を作品の基礎として居るが、是に於ては意地を中心とする所に相違がある。更に文體に於ては西鶴の文に負ふ所が多く、その簡潔にして力强い所はこの作の特質であらう。紅葉には心理を奥深くたどる事は出來ないが外面の事象に對する描寫は他の及び難い所があると思ふ。紅葉が寫實主義を取るに當つて近世に於て寫實的傾向の最も鮮明なる西鶴に私淑した事は極めて意味深き事であるが、氏が西鶴に入り得たのは一方に俳句の方面に關係する所が深かつたためであらう。紅葉の西鶴私淑はこの伽羅枕に至つて極まつたのであつて、それよりは西鶴の模倣より次第に自己の個性を發揮して來るやうになる。

次に明治二十五年の作に三人妻がある。この作は葛城餘五郎といふ明治時代の一富豪が、麻子といふ妻の外に三人の妾を有して居るが、その三人の妾の性格の相違及びそのために生ずる運命の相違を描いて居る。餘五郎は無一文より一代の富豪となつただけに剛腹な性格であり、一人でも己が意に從はぬ女性のある事が堪へられない。かくて種々の策略を弄して妾とする。三人の中、才藏といふ遊女は菊住という愛人があつたために容易に從はなかつたのを、小〆といふ菊住を私に愛するも

のによつて、菊住を才藏より奪はせたので、才藏は菊住に對する當附として餘五郎の妾になつたのである。お艶といふ女性にしても無理に之を得たのであつて紅梅のみが進んで餘五郎の妾になつたのである。かくの如く餘五郎の女性に對する態度は戀愛を基礎としない主我的な利己心であるが、之は所謂成金とか俄大盡などの類型的性格を十分に現して居るが、もとよりこの作の中心興味は三人の異なつた女性にある。才藏は意氣も張もある遊女であつて菊住の如き何れの點より言つても取柄のない人物にあくまでも執着をもつ所に、利欲を超越して活達とした女性を見る事が出來る。伽羅枕の佐太夫の如きと殆ど類似する。之に反して紅梅は才藏ほどの意氣と張はないが、初々しき中に無量の情ありて媚を作らぬに媚ある女性であつて、餘五郎の最も心を向けたのも彼女であつたが、一面に利欲を念頭に於て事を行ふ淺はかなる才略を有する女性であつた。お艶は家柄に生れて而も零落して二十四まで琴のお師匠をして居つた貞淑なる女性である。而して餘五郎が少年の時貧賤の身分で己が姉に心を寄せた事をはぢ、餘五郎が富豪になつて郷に歸つた時琴を彈ずるために招かれても餘五郎の前に頭を下げる事を好まず、容易に行かなかつた程、

紅葉山人

第十　閉ぢさめる戀

三重の帶が二重まはり（其下）

大磯といふ所は波白く松青く。都を離れてまづ。新らしき浮を濯ぎまるは此處なり。其寺に「虎が石」といふありて。戀のある男は是を持つに輕く。あらぬ男には押でも動かぬ石……一口に木石のやうなといへど。これは情を籠めたる石とかよ。　男あり。一蹴と、に遊びて。試みに兩脇を擡げ擦抱きたりしに。何の苦もなし。　斯れと嬉しくむかしを思ふに。人に戀はれし孤毛頭の露ほどあく。さらば彼にこそと其暗は怨しく思ひ。今に彼は評をふるに。かつて……陰險にも丈一ツ抜つけられた例なしとつぶやきしが。わかしき語学と人の傳え待る。よく似たる身の上の二宮縮之助「虎が石」と讀みし「袖」の方は予辞上首尾なりしにとりかへつて見れば一枚鐵牛の角を咬む戀。一念の透らぬげなりけり。果は囁

文庫第十八號　　三百九十一

都の花第二號

花ぐるま

美妙齋主人

第三編　曳出す瀟閲の話。

かるく言へば封建の名殘で官途へ足を入れるのを榮望とする卑屈の世の中、よく言へば古學の箭を引いて政治思想の發達して(?)居る日本國。府下にある私立の五大法律學校はいづれも校堂の繁盛といふばかり。之によッて之を思へば地方の學術研究會その學術といふ言語の中には政治法律の一科目より外は含まぬのが至當な譯、誰やらの門迄で折角学と出しかヽッた理學さへ既に名義ヾ處生利學とか、計生利學とかあらためて仕舞ひました。　いや、も、これが……否、嘆かはしくは有りませんが、實に帝國議會も一寸先です。それでなければいけますまい。

あゝ能くも政治思想が是ほどに發達したものです。

これも或る私立法律學校の一間で、遲刻の教師を待ッて居る五六人の書生が居ます。いづれもオースチンを從者につれてビッドよ靴を磨かせやうといふ人物でしやう、今はこの教場でも職務をわすれず、えらさうよ辯論して居ますが、しかし經驗のため書物の外の題、すなはち美人の事を題として討論をして居ます。

イ「瀟町の、なア若貴婦人さ、學校でも評判の才女だやといふ事だやね」。

ロ「また初まッた。そンなよ君が自負したッて公事を頼みよの來ッからまア安心して居たまへッ」。

イ「來んけりやア安心出來んぢやア無いか」。

ハ「はヽヽ、眞面目になるから奇妙だ」。

第三の「ハ」は考へて居ましたが時計ヲ眺め、

ハ「おや、もウ二十分だ。　杉田め（教師の名）

第二號　一　　花ぐるま　　第一卷　七十一

自己を持する事の厚き女性であつた。而も一方には餘五郎の甘言を忽ち信用して了ふといふ世なれぬ無邪氣な正直さがあつた。かく夫々異なつた女性であるが、何れも金錢の前に屈伏せねばならなかつた所に人間としての弱さがある。貞淑なお艶にも東京の華やかなる生活に憧れる心があつた。而して三人とも餘五郎の妾になつた後もその性格の異なるに從つて別々の道を行くのである。才藏は餘五郎の愛が衰へるとまた零落した菊住と關係をつゞけて幽閑まであれ、餘五郎の死後には菊住とともに夫婦となる所に功利的な所を全くはなれて、意氣と情とで立つ面目が見えるが、紅梅は餘五郎の夫人に取入つて才藏を見下し、またお艶が子を設けると之を疎外し、夫人との間をさく如き、己が利欲のために朋輩を陷れて意としない女性である。表面は柔順で陰に惡策を弄する事をし、一旦は夫人の寵を得たが後餘五郎の死後奸策が暴露して、逐はれる運命に陷つたのである。之に反してお艶は内氣な柔順のために賴しく思はれるが、奸策を以て自分に近づく紅梅に乘せられ、主人との間を離間せしめられる事に少しも氣付かず紅梅を賴るために餘五郎の夫人に乘せられたが、後その疑がはれて夫人の妹分として幸福なる生活を送つた。かかる三個の

女性の性格は女性のある一の特質を持つて形づくつたもので、一個の人間として見る時は極めて一面的になながれたので、性格描寫を盡したものと言ふ事は出來ないが、かかる性格の類型がかくの如き運命になる其徑路は、常識的の解釋に於て自然であり、前の二人女房の如きよりも複雜なる構想と解釋とを有して居る。殊に紅梅の如きは性格も他の二人に比して複雜で精緻でありすぐれたものであると思はれる。然しながらこの作の三女性の性格行動も實際の人間生活を凝視したものでなく、紅葉一個の主觀によつて構成されたと思はれるのであつて、實際の寫實とは遠いものである。

是等紅葉のこの時代に於ける代表と言はれる作を見ると、多くは女性の種々なる類型を捉へ來つて、その運命のゆく所を解釋したものであると言ふ事が出來る。それらの性格は紅葉以前にも存在され、作品として描寫もされたもので、三人妻の紅梅の如きも近世のお家騷動物に於ける、後妻の如きものに常に寫される所である。從つて是等の作を讀んで新しきものの殘る事の少いのを覺えるのである。

三　後期の紅葉

前期の紅葉が、寫實主義的立場に於て意圖したものは女性の類型的性格を描くにあつたが、三人妻に於てかくの如き方面に總決算をした後、紅葉として向ふべき點は從來の類型的女性から離れて、個性的性格の描寫を行ふことであつた。さうして女性のみならずひろく男性の性格描寫に進み、かつ心理的推移をもとらへようとするにあつた。さういふ意圖を現したのが二十七年の心の闇であつた。即ちこの作に於ては盲人である佐市が得意先である旅館の娘お久米に戀しても打明けることもならず、お久米の結婚に懊惱するそのあはれむべき心境を描いて居るのであつて、こゝに男性であり、而も盲目といふ不具な人物の執念深い戀情を描いて居るのである。さうしてその描寫は個性的となり、かつ心理的推移にまで進んで居るのである。紅葉が三人妻以後進むべき道はこゝにあつたのである。さうしてこの心の闇の傾向は當然多情多恨に至るべきであつたのである。しかし紅葉としては、心の闇の傾向をより完成するためには準備の不足なるを感じたと見えて、一旦創作の筆をたつて飜案小說にかくれたのである。

即ち心の闇と第三期の多情多恨との間に二年間の反省時代を有するのである。

この間に隣の女、不言不語、冷熱の如き飜案小説を發表し、また紅葉が源氏物語をよんでこれに批評的書入を加へたのもこの時期であつた。即ち西洋小説をよみ、古典を顧みてこゝに新しい發展の基礎を築いたのである。然しながら飜案小説ともいふべき是等の作品も紅葉らしい精巧な表現をとつたのであつて、紅葉の特色はある程度まで見られる。島村抱月が「不言不語を讀みて所感を記す」の中に

> 不言不語はもと飜案なりといふ。されど吾人は之を既往に徴して全部紅葉の述作する所と見做すの妥當なるべきを信ず。何となれば飜案といふといへども、唯僅に想の彼方此方を彼れに取れるまでにして、之れに肉し之れに皮するはすべて紅葉の技倆に屬すればなり。

とあるのも一の正しき考へであらう。さうして是等の飜案小説の大體の傾向が、人間の深刻なる苦悶を多く扱つて居る所を見ても、この時代の紅葉の求むる所を知られるであらう。たとへば不言不語を見ても笠原家に仕へた小間使環が主人と夫人との間のむつまじからず煩悶する理由を探らうとする題材であるが、そこに一人の女性の煩悶を種々の方面から描寫して居るのである。冷熱の如きはボッカチオの

デカメロンの一節の飜案で比較的輕いものではあるが、なほ深刻な所もないではないのである。

さうしてかくの如き試錬の時代は文壇的には種々の非難を與へたけれども、紅葉の創作的態度はこの間に心の闇を完成させるだけの力を與へたのであつて、終に二十九年の多情多恨となつたのである。多情多恨は紅葉としては大きな自信を以て作つたのであり、文壇的再生といふ意氣を以て向つたと思はれる。殊に漸く觀念小説が一般の流行とならんとする時、紅葉は個性描寫、心理描寫を以て進まんとした所に紅葉の意氣が見える。それは一面からいふと二葉亭等の寫實に近づくことであつたのである。紅葉の多情多恨は心の闇の發展であるとともに、二葉亭の浮雲からの發展でもあつた。卽ち鷲見といふ妻を失つた男を中心として、その唯一の友人葉山と其妻お種の二人を配して構成されて居る。鷲見の亡き妻に對する追慕が主であつて、そのあきらめきれない弱々しき心の微妙なる動搖が精細に叙せられてある。外面的事件としては極めて平凡であり、一に鷲見の心理の推移をとらへてこの長篇をなして居るのであるが、殊に鷲見のお種に對する心持の描寫は精細である。初め

はお種に對して本質的な反感をもち、葉山の所へ訪問する事もお種あるがために憚られたのが後急に反對にお種に好意をもち、その家に寄留するやうになつて葉山の旅行中己が部屋には行かずお種の部屋に遲くまで居るやうになり、時に亡妻を想出して狂的になり深夜の二時頃お種の寢間に飛こむやうになり、舅に疑はれその家を出るやうになるのであつて、亡妻に對する幻想が次第に實在のお種に對する好意に變じてゆくその推移に心理の自然さを認めるのである。さうしてお種に對する心持に對して意識的には少しも不純を感じないのであつて、それが他人の嫌疑を招くといふやうな事は少しも顧慮しない所に、鷲見の非社會的な心持が見られるのである。この鷲見の性格は浮雲の文三に多少類似して居る。文三は眼前にあるお勢に對する愛著であり、これは亡き妻に對する愛着であるが、何れも意志の弱い自己の心持をいたはる人物である點に一致して居る。さうして鷲見に於てはその心理描寫のより緻密であるだけに多少冗漫であり、不自然さを感じられ、人間心理の寫實よりは人間心理を作つたと思はれる所さへあるが、ともあれこの鷲見の性格は紅葉の作に於ては殆ど見られなかつたもので心の闇の盲人佐市の心理、後の金色夜叉の貫一

の心理の如きとともに、紅葉の後期作品が男性のねばり強い性格の描寫に力をそゝがれた事は注意すべきである。さうして外面的事件的に走りやすい紅葉が僅か三人の人物の內面的心理的葛藤を主材として、これだけの長篇をなし得た所にこの作の價値はあるであらう。さうして心の闇と多情多恨を貫く藝術的精進は紅葉の中でも特に注意せられるのである。それは色懺悔に於ける紅葉の精進とともに彼を生かしたものであつた。

しかし紅葉は多情多恨の道をそのまゝ發展させることは出來なかつた。即ち多情多恨に於て完成し得た男性の執着的心情とともに、かつて伽羅枕や三人妻に於て開拓し得た外面的な類型的描寫と、同時に時代の流行である觀念小說的傾向とをとり入れて、製作したのが金色夜叉である。さうしてそれらが多少混雜して十分の統一を得なかつたのがこの作である。金色夜叉は明治三十年からはじめ、明治三十六年死してなほ完結しなかつた作である。多年月を費しただけに統一を得なかつた點もあらうが、この作に於ける紅葉の創作態度も多情多恨のやうに統一的ならずして、種々の傾向をとりいれようとしたかに見える。即ちこの作が外面的事件を豐富

にし複雜なる構想を用ゐたのは初期の紅葉の傾向をとつたものであらう。お宮と赤樫滿枝との女性の對立も女性の類型的性格と言はれるべき點がある。しかしこの作が女性の類型的性格の描寫に止まらない事はその主題から見ても明らかで、金のために戀を失つた貫一が、金によつて世に復讐しようとし、また金のために戀をすてたお宮が最後に至つて金ではかへない戀を自覺するといふ點を主題として、その主題の發展のために多くの人物を現し、事件を運んで居るのである。さうしてこゝに觀念小說的影響があると見られる。觀念小說は一の觀念を具象化するのであつて、人生をそのまゝに寫實するものではない。金色夜叉はその構想規模から言つて觀念小說の短篇的であるのと相違はあるが、やはりその影響は閑却されないと思ふ。而もこの作は觀念小說が觀念的であり、一の理論の說明に過ぎないのに對して、一の觀念を表現するのに相當に具象的であるのに注意せられる。その具象的である所以は貫一のあくまで執念深い性格ならびに心理にある。かつて自分を救つてくれた舊友に對する情誼もすて、あくまで悔悟したお宮を最後までゆるさゞらんとする貫一の心は心の闇の佐市、多情多恨の鷲見と同じ性格の現れである。このねばり强

い男性の性格心理は紅葉自らの性格の現れとも見られるであらう。以上のやうに見ると金色夜叉は紅葉の有するあらゆるものをすべて集成しようとしたものであつて、多情多恨のやうな一方面を開拓したものでないだけに不純なものはあり、通俗性もあるが紅葉の特質がすべて含まれて居るだけに注意せられると思ふ。

以上紅葉の代表作を概觀した上で紅葉を考へて見ると紅葉の最も中心とする所は性格の描寫であらうが、前期に於ては女性の類型的性格の描寫が主であるに對して後期に於ては男性の性格、特に個性的描寫に進んで居ることに注意せられる。女性描寫は紅葉の江戸趣味的な主觀に禍された所が多いが、後期の男性描寫は紅葉自らの性格の一面を中心としてほりさげたために見るべき點が多い。さうして前期に於ては文章に於ても西鶴的模倣があり、趣味にも江戸趣味的なものが多いが、心の閑邊りから清新な感が生じてき、文章にも獨自の風格を生じてきたと思ふ。而も全體を通じて紅葉が江戸人としての素質から人生をながめ、男性を見、女性を見てゐたことは言はれる。美妙に影響された色懺悔の浪漫主義的作品から出發し、逍遙、二葉亭に刺戟されて寫實主義的傾向に轉じ、觀念小說的影響をうけて金色夜叉を作ると

いふやうに、彼は新しい傾向に對する先驅的な作家ではなかつた。むしろそれをよく完成に高めようとする作家であつた。紅葉の特質はそこにあるであらう。

三　廣津柳浪と樋口一葉

一　寫實主義小說の發展

紅葉によつて開かれた寫實主義は硯友社の大體の傾向であつたのであるが、しかし硯友社の系統の中にも寫實主義を更に徹底させるものは多くなかつたのである。嚴谷小波氏にしても石橋思案にしても江見水蔭氏にしても根柢に抒情味が多いのであつて、小波氏が少年文學の方に進んだのもその抒情味が自然に導いた結果である。さうしてこの硯友社の系統は、二十年代の末に起つた觀念小說的傾向の態度をとるに至つて、その寫實的傾向と遠い道をとるに至つた。觀念小說はあらかじめ人生に對する一の解釋をいだいて、それを具體的に作品によつて表はさうとするのである。從つてそれは人生を克明に寫實するものではなく、主觀的な傾向が多かつたのである。川上眉山、泉鏡花、廣津柳浪等もこの影響をうけて居つたのである。しかしこの觀念小說はそれ自身への試に過ぎなかつたのであつて、やがてそれ〳〵の個性に從つて進んでゆくべきであつた。眉山が新しい個性の創造に失敗して了ひ、泉

鏡花が浪漫主義者として進んだのに對して寫實主義者として進んだのが廣津柳浪であつた。鏡花の開拓した浪漫主義が明治小說に於ける獨自の位置を占める如く、柳浪の開拓した寫實主義もまた獨自の位置を占めるものであつた。さうして柳浪の寫實主義が悲慘なる人生に直面し、それが情死、殺人、その他の悲慘なる事實となつて現れるに對して、さういふ悲しむべき人生に際しても、それが必ずしも悲慘なる事實として現れずに心理的苦悶として、而もあきらめの境地に入つたのが樋口一葉である。未完成ではあるが一葉の作品に寫實的傾向と言ひ得る所はそこにある。二葉亭以來、もしくは紅葉以後に於て、最も寫實的であつたのは柳浪と一葉であると思ふ。こゝにはこの二人を觀察して見たい。

二　廣津柳浪

廣津柳浪が作家としての出發點は明治二十二年の女子參政蜃中樓であらう。次いで硯友社の一員となつて尾崎紅葉等の新著月刊の中に殘菊を出した。女子參政蜃中樓は政治小說であつて、女子參政權の獲得のために奮闘する山村敏子を中心としての悲劇的葛藤を描いて居る。卽ち山村敏子が女子參政權の運動のために大阪

に來り、その從姉の櫻田艶子等とあふ。その女人の松山操もある。改進黨に屬し勢力ある久松幹雄と佞奸な浮田青萍とがある。艶子は久松を婿にしようとするが、ただ交際だけを行ふ中、浮田青萍に誤つて操をゆるす。久松は操と交り親しくなる。が浮田は離間策を施す。敏子は久松を愛するが後盡力して二人の仲を圓滑にする。二人は結婚する。艶子は青萍と內祝言するが、難波オペラの瀨川菊枝と親しくなり、家庭不和となる。久松は參政權に反對し、終に參政權は破れる。敏子は落膽の餘り、久松、操の結婚式の歸りに狙擊せんとして誤つて、浮田、菊枝を殺す、艶子も入水し、敏子行方不明になる。

以上の如くして悲劇的な結末をうむ所にすでに柳浪が後の悲慘小說を創作すべき素地が見られるのである。卽ちこの作は主題としては女子參政權を通過させるに對する賛成論と反對論とを中心として扱つてある點で政治小說的性質を離れないが、しかしその人物の描寫に於て敏子と操と艶子といふ、女丈夫と溫良なる女性と、浮薄なる女性の三類型をかなり精細にかきわけ、久松と浮田との人物の描寫など相當に細密になつてゐる所に柳浪の發展すべき跡は見られる。殊に結末の凄慘なる

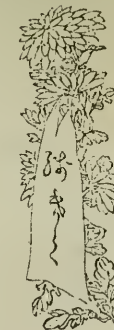
場面には柳浪の後年の作風を暗示するものが多いのである。

さうしてこの作に次いで新著百種の一篇として明治二十二年十月刊行された殘菊に於ては政治小說から離れて、寫實小說としての性質を十分に現して居る。卽ち殘菊は一人の女性が新婚後、夫は海外に留學し、一人の兒を得て母と留守を守る中、不幸肺を犯され、一旦は平癒に向つたが、ある日愛兒を負つて庭に出たために再び險惡に陷り、今や危篤とまでなつたのであるが、危く命助かるといふ極めて單純な構想の作品である。しかしこの單純なる構想の中に母や、乳母や、從姉や、子を點出させ、その間にその不幸なる女性の心理を極めて精細に描いてあるのである。危篤になつて周圍のもののうろたへる樣子をしづかに眺めて居る邊り、まさに絕えなんとして僅かに生きる邊りの描寫はすぐれたものがある。紅葉等の類型的性格描寫以上に出でて眞實の心理描寫に進んで居ることを見るのである。或は實際の經驗によつたとも思はれる。とにかく柳浪の特色は十分に見られるのである。この時代に柳浪は花の命その他の作品も公にして居るが、しかし必ずしも未だ盛名を博するに至らずして二十年代後期になつたのである。さうして紅葉が漸く創作力衰へて反省期

に入り、鏡花、眉山が觀念小說家として立たんとし、鏡花の外科室のなつた明治二十八年には變目傳、黑蜥蜴等を出して聲名を得、翌二十九年には河內屋、今戸心中の傑作を得たのである。所謂悲慘小說といふ名稱は柳浪の得たものであつた。この悲慘小說といふ名稱はある程度まで柳浪の傾向を示すものではあつたが、それは內容としての人生觀的方面としてであつて、表現として見れば寫實主義であつたと思ふ。さうして柳浪の注意すべき點は寫實の徹底してゐたことである。それは人生觀照の鋭さから人生の眞をつかんでゐたといふ事にもなる。たゞ柳浪によつて見られた人生が何故にかくも悲慘な結果になるかに就いては、强ひて悲慘に導き過ぎたといふ嫌があるかも知れない。卽ち柳浪の作品の結末は多く殺人か心中といふやうな死に導くのであつて、かくの如き悲慘な事實のみから人生が成立してゐない事は明らかである。しかし人生には柳浪の扱つたやうな事實がないのではない。尠くとも人生の一面に於てかくの如き事件は常に生じて居るのである。たゞ人生のすべてではない。そこには更に明るい人生もあり、また悲慘なるべき場合に當つてもあきらめによつて表面は靜かな平和な場合も多いのである。かういふ意味で柳浪の

世界は人生の特殊なる世界であるかも知れないが、人生の眞實の斷面を示して居ることは事實である。さういふ意味で、柳浪をむしろ寫實作家といふ點から見るのが至當であると思ふ。その點から柳浪の作を觀察して見たい。

第一に氏の最初に名をなした明治二十八年の黑蜥蜴、變目傳を見る。黑蜥蜴は片目で顏面の醜くはあるが、貞淑なる大工の妻がその舅の酒亂によつて貞操を奪はれんとするために、黑蜥蜴で舅を殺して自殺するといふ悲慘なる悲劇を構成するのであり、變目傳は傳吉といふ小さいめつかちの男が人に嘲弄されるが、尙ある女性に對し戀慕の心を起すが、その不具のためにそれも得られない結果殺人を犯すといふ悲劇を構成するのである。この二作に就いて見ると、その主題はいづれも自殺もしくは殺人といふ悲慘なる結末に到達するのであるが、その悲慘なる結末に至る動機としては、人物や環境の力が大きい。卽ち變目傳の如き、不具な傳吉の性情が人から輕蔑され、而も人間的な欲望を有する所からその矛盾を生じ、それが殺人にまで導くのである。また黑蜥蜴にしても舅の非道なる性格が主なる動機であるが、一方殺人、自殺を行ふ嫁が醜い人物であるといふことが一層この作品の基調を暗いものとする。



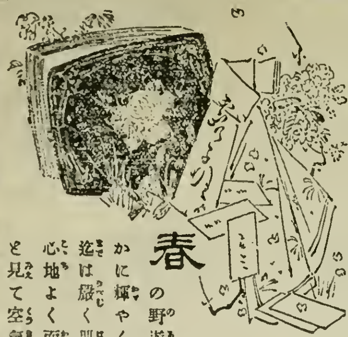
殘菊

柳浪子著

玆にお話いたす昔語。世の中に心細いと云ふて其時の樣な事はなく、悲しさ名殘惜しさも、また之に勝るものはありますまい。過し昔にあつた程の俤、今身に迫る苦艱、見ぬ世の覺束なさ――花ならば散ぎわ。あゝ、其時の私の心想へば夢の樣です。

私が十九の春の事。或日の夕刻、偶と熱が發ました。それに朝夕には咳嗽も出ます。左迄苦しい程にもないので、先

露子姫



第一回　色は匂へど

東都　忍月居士著

春の野に出て若菜摘む、何が何と云つても彌生の野遊びほど快よき遊びはあるまい、うらゝかに柔かに輝やく太陽、暖爐室で暖ためたやうな風――きのふ迄は嚴しく肌に徹ッた凛風、うつてかはッてけふは軟かに心地よく面を撫る、おまけに樹々の花の間を經過して來ると見て空氣は總て香にしみてゐる造化配慮の細かさ、出來る事なら此空氣を壜詰にして霜風凛烈の霜枯時に賣出したなら、夏の氷水より遙か利潤があるだらうとは飛んだ機商の目算、鳥も浮れだしておのが時を忘れ

しかしかゝる人物によつて起る事件の發展は、何等の不自然もなく發展して居るのである。變目傳の主人公が朋輩にあざむかれ、後に金錢にこまつて殺人を犯すに至る徑路には何等の不自然もない。そこには寫實精神が透徹して、人生そのものゝ凝視に於て精細なるものがある。これらの作をこの時代の紅葉、露伴の作品もしくは鏡花、眉山等の觀念小說の作品と比較する時、寫實性といふ點にはもつとも徹底して居ると思ふ。たゞこの作のなつた翌年に出た紅葉の多情多恨は、紅葉が自分の作品は米の飯であるといつた如く日常生活の平凡な事件からくる心境であるに對して、柳浪の作があくまで特殊的な外的事件である事は否定出來ないのである。それだけ緊張した表現を柳浪の作品が有することは明らかである。

更に柳浪は二十九年に河内屋、今戸心中の力作を發表して居る。この二作は量から言つても柳浪の力作であり、また創作的衝動の最も高潮に達した作品といふことが出來る。さうして河内屋に於て家庭の暗面を描き、今戸心中に於て遊廓の暗面を描いて居るのである。一方は質實な家庭を題材とし、一方は表面だけでも花やかであるべき遊廓を題材として居るが、柳浪に於ては遊廓を題材としながら何等花やか

な夢や幻影はなくしていたましき現實のみが見られるのである。

先づ河内屋を見ると、現れる人物は或保險會社の重役の重吉とその弟の清二郎と、重吉の妻のお染と、重吉のおもひもののお弓との四人が主なる人物である。重吉の妻のお染は重吉、清二郎と從兄妹同志であつて、初めお染は清二郎の妻となり、その姉のお久が重吉の妻となるやうに定まつてゐたが、お久が結婚前に死んだので、お染が重吉の妻となつたのであるが、清二郎はお染を愛して居り、お染も清二郎に情をたてて重吉に心をゆるさないので、重吉も自然に心面白からず、遊女のお弓を愛し、お染を虐待する。その中、お弓は重吉の家に迎へられるに及んでお染は一層はかない境遇になる。お弓は清二郎をひそかに愛し情を示すが清二郎ははねつける。それ以後お染は一層いぢめられ、清二郎も兄の家を出るやうに言はれるので、清二郎はお染を救はんがため、重吉の留守の夜をうかゞひ、お弓の寢所に忍びこむが、あひにく重吉も居り、騷ぐので、清二郎は重吉に重傷をあたへ、お弓を殺し、さうしてお染とともに死ぬといふ構想である。

即ち最後に於て殺人自殺といふ悲慘なる運命を生ずるのであるが、この殺人の起

つたのは重吉の留守と思つたのがさうでなかつたといふ寧ろ偶然の事件からではあるが、しかしそこに至る内的動機としては弟の妻となるべきであつたのが、兄の妻になつてしまつたといふ所から來て居る。このために弟の不滿、妻の打とけない所から、次第に事件は發展するのであつて、その發展の過程には何等の矛盾はない。ただ人生の眞實に於て、お染もしくは淸二郎の弱いあきらめから、表面には事件的に現れないのであるが、その眞實の心を進めてゆけばかくの如き悲慘なる運命になることもあり得るのである。かういふ構想は柳浪は後にも骨ぬすみに於て扱つて居るが、この河内屋には毒婦型のお弓が加はつて居るために、一層事件は複雜になつて居るのである。たゞこの作に於ては事件の發展がそれ〳〵の個性的性格の上から出發せずに結婚のくひちがひといふ所から出發して居る所に、事件が外面的になつて居る缺點は見のがせないと思ふが、これに比較すると今戸心中の方は主人公の性格に根ざして居る所によりすぐれた所がある。

卽ち今戸心中は、吉里といふ遊女が、その情人平田の故鄕の家の事情のために歸鄕しなければならなくなつて別れてしまつたので、哀切の情の餘りに、かつて素氣なく

した男で吉里のために家をも破産した善吉を同情して愛し、そのために周圍の朋輩に不義理をかさねて終に心では平田を思ひつつ、善吉と心中するといふ構想であつて、平田から別れたことが破滅に導く原因ではあるが、しかしこの場合により重要なのは吉里の性格であり、そこに生眞面目な彼女の性格がより重要なるものとなつて居る。さうして今戸心中の重要なのは單に事件の發展ではなくして、吉里を中心として遊廓の暗い生活がはつきり表はれて居ることである。恐らくは遊廓の眞實なる寫實と思はれるやうな精緻さを以て吉里とその周圍とが描かれて居ることである。吉里には少しも花やかな遊女らしい所はない。

吉里は髮を櫛卷にし、お熊の半天を被つて赤味走つたがす糸織に繻子の半襟を掛けた綿入に、緋の唐縮緬の新らしからぬ長襦袢を重ね、山の入つた紺博多の男帶を卷いて居た。島渡見た處は、もう五六歳も老けてゐたら花魁の古手の新造落と云ふ風俗である。

この描寫も男に別れた後の吉里の姿をよく髣髴せしめる。平田と別れる前後の吉里の苦悶の心理描寫の如き吉里を常にかばふ小萬といふ遊女、平田の友人の西宮、吉

里を愛する善吉の如きすべてよく描かれて、そこに事件としては極めて單純であるだけに心理や周圍の描寫に寫實性を發揮して居るのである。楞牛がその餘りに寫實的である點を以て非難したのもこの作の特色を示すものである。河内屋や今戸心中はとにかく柳浪の傾向を完成せしめたものであつて、その比較的規模の大きい點からも注意せられるのである。而して三十年代になつても柳浪はなほ活動を繼承したのである。たとへば三十年代の畜生腹の如きは雙生兒をいむ習慣から夫の旅行中、雙生兒を生んだ妻が女中にそゝのかされて一兒を殺した。その女中が秘密を知つたために增長し、我儘をするのを妻は制することも出來ず、事情を知らない夫は不快に思ひ、家庭が不和になるので、忠僕がその女中を殺すといふ構想で、些細な構想ながら、人間の弱點を巧みにとらへて迫眞性を示して居る。また三十二年の紫被布、二人やもめの如きはある男性に思をよせた女性がその情を忘れかねて、その時の思出に紫被布を常にきて、むしろ多情な生活を送るのを描いて居る。また三十二年の骨ぬすみは、事情あつて自分は主家の養子となり、許嫁の女性が他に嫁するやうになりそれをあきらめてゐたが、偶然、許嫁の女の嫁した家にとまつた所から女が自殺

するに至る過程を描いて居る。かういふやうにして柳浪の描く世界は悲慘な世相の上に、あくまで凝視を向けたのであるが、たゞこゝで注意せられるのは柳浪の題材が漸く固定してきたことである。即ち柳浪の描く題材は大體三の傾向に分れる。一は黑蜥蜴や變目傳や畜生腹の如く題材的に鋭い何物かをつかんだもの、一は河内屋や骨ぬすみの如く、許嫁の間をさかれたものの陷る自殺、殺人、一は今戸心中や紫被布の如く愛するものに別れ、それを忘れかねて陷つてゆく自棄自棄の三が注意せられる。さうして柳浪の長篇が河内屋型と、今戸心中型に多く限られたことは、やがて柳浪の破綻をうながす大きな原因でもあつたと思ふ。その意味では河内屋と今戸心中は傑作であるにかゝはらず、漸く柳浪の型を作つたことは惜むべきであると思ふ。

而も柳浪はなほその型にとらはれずに新しい方面への展開は忘れなかつた。その中で注意せられるのは明治三十五年にかゝれた雨といふ作品である。この作は若夫婦が雨で職業の口もなく困つて居る所へ、妻の母がきて無心をするので、遂に主家のものを質にいれるが、二人はその罪を恐れ、この世のまゝならぬを知つて心中す

るといふ單純なものであるが、それだけに若夫婦の心理の描寫が精細になつて居る。今戸心中よりももつと現實的に切實であり、かつて殘菊に示された心理描寫の精細も加はつて、河内屋もしくは今戸心中以外に發展すべきものを十分に含んで居るのである。たゞこの時代から次第に柳浪は自然主義の方に壓倒されるに至つたらしいが、柳浪の作品は自然主義への轉向も可能であつたほど寫實性がゆたかであつたのである。

三　樋口一葉

樋口一葉が明治小説の一偉才である事は明らかであるが、彼の注意される點は何處にあるかは必ずしも明らかではない。これに就いて起る第一の問題は一葉の二十餘篇の作品の中でどの作が最も傑作であるかといふ點である。これに就いてはたけくらべであるといふ事は定説のやうではあるが必ずしもさうではなく、十三夜はたけくらべよりもすぐれて居ると見る説もあり、またたけくらべ以後に作られたわかれ道が一番の傑作であると見る説もある。自分はたけくらべを最もすぐれた作と見る考に從ふものであるが、十三夜やわかれ道をすぐれたと見る説をも一應吟

味して見る必要がある。それは單に作の優劣といふ以外に一葉が如何なる作家であるかを定める標準ともなるのである。然らばたけくらべと十三夜とわかれ道とはどういふ相違があるか、といふ點が問題になつてくる。がはじめに一葉の全作品の中でこの三作品の位置を考へるために一通り一葉の輪劃を考へて見たい。

一葉は明治五年に生れて明治二十九年十一月二十五歲で歿して居る。明治二十五年三月に闇櫻を出してから僅かに、四年程の間に二十餘篇の作を出したのである。卽ち柳浪が活動を初めた時、紅葉が多情多恨をなした時はすでに世を去つて居るのである。一葉は早くから父に別れ母及び妹邦子と生活の苦をなめたのであつて、二十六年七月には下谷龍泉寺町に移つて荒物駄菓子等の店を開いたのであり、二十七年頃には家計のために、相場にも手を出さうとして居る所に單に溫順な女性でなく、勝氣な意志の强い女性であると同時に、世の辛慘をも經驗してゐたことを知る。駄菓子屋を開いたのは一年足らずであつて、やがて本鄕丸山福山町に移つて、こゝで世を終へたのであるが、龍泉寺町の大音寺前に住つた一年は一葉にとつては無意義な一年ではなかつたのであつて、たけくらべはその附近を背景として居り、わかれ道も

その附近をとつて居るのである。さうして彼女が若くして生活に苦しめられ、種々の經驗を積んだ事が一葉をして人生に對する經驗を豐富にするとともに、又人生をば悲しむべく、まゝならぬものと觀ぜしめたのである。それが一葉の作の傾向ともなり、基調ともなつたのである。さうしてまた一葉の交友として文學界の同人が親しかつたことも一葉の作風を考へる上には必要なる事である。

次に一葉の二十餘篇の作品を見ると、大體前期と後期に分れるやうである。卽ちにごり江等を轉機としてそれ以前の作と、以後の作品とは明らかに相違がある。前期は習作といふ觀があり、主觀的傾向があらはで、具體性が乏しいのに對して、にごり江以後に於ては一葉獨自の表現が完成され、具象性が見られる。前に擧げたたけくらべ、十三夜、わかれ道は何れも後期の作品であるのである。前期の作の中で、闇櫻は處女作である。構想は隣同志にすむ青年と娘とが互に戀しあつたがそれと語らず、娘はそのために病んで死ぬといふ極めて單純な作品であるが、纖細な王朝式の文章はすでに見られる。さうして前期の作品の中で力作とすべきは埋木である。埋木は二十五年の作である。この作の主人公入江賴三は陶器畫工としてすぐれた才能

と強き藝術欲とを有して居るが、餘りにも淸きその性格は世にいれられず、妹のお蝶と寂しき生活をして居る。この人物に配するに篠原辰雄といふ僞善者を以てし表面慈善を行ひ名望高きにより昔の罪を宥して親しくし、その力によつて資を得て不朽の作に着手し、妹のお蝶も戀慕して結婚せんとするがその僞善の行爲が現れて賴三は不朽の名作を破壞し世の儘ならぬをかこつに至るのである。この作に於て作者の試みた所は世の中に惡の存在する事と、それより起る純眞なる人格の傷けられゆく事である。世をあざむき善の假面をかぶる辰雄の如き人物は社會惡を現したものである。かくの如き惡が力を振ふために、あくまでも淸廉なる賴三の如きは辰雄の言によれば「遣ひ道不向」の人物であり、從つて不遇に沈むのである。賴三の世にすてられるのはまだあきらめられるにしても、罪もなきお蝶が妾になる事を强ひられて家出する如き虐げられてゆく事は作者にとつては忍ぶ能はざる所である。その點を描いてよきものに對し、殊に純眞なる女性に對するいきどほりを描いて居るのであるが、この作品には理想主義としての幸田露伴氏の影響が大きく、一葉獨自のものが尠い上に寫實性が稀薄である。前期の作品だけからすれば一葉はむしろ浪

漫主義の作家であつて寫實主義の作家ではなかつたとも言へるのである。むしろ主義と稱するだけの立場が確立してゐなかつたと言へる。同時に前期だけの作品ならば一葉の外に女流作家として立つた三宅花圃、大塚楠緒子、中島湘煙、北田薄氷、田澤稻舟、その他の作家に於てもなし得た所であつたのである。そこには作の中心人物に同情する餘りにこれを美化しすぎて居る。

かくの如き習作時代から後期二十八年に至つてはじめて獨自なものを見出して居るのである。こゝに見出されるものは現實の凝視である。これまでの空想的な題材と表現とが、現實に材をとり、それをあくまで凝視して居るのである。後期の中、にごり江は二十八年七月になつて居る。にごり江の構想はある場末の銘酒屋の女お力といふ女性の倫落の生涯を描くとともに、このお力のために産をなくし妻をも去るに至つた源七の悲劇的な家庭を描き、最後にお力と源七との無理心中によつて兩者を結びつけて居るのである。而してお力は貧しき家に生れて或時は僅かの金で米を買ひにゆき、溝にそれをこぼして寒き冬の夜家に歸る事もなし得なかつた樣な中に、人となつた女性であつて、そこに環境がもたらす悲劇的な運命を現して居る

のである。がこの作に於てすぐれて居る點はその描寫の精細で確實であり、殊にお力の心理の浮き出て居る點である。はかない境遇におちて常にいら〳〵としながら荒みきつてしまはない人情味のあるその心情に同感することが出來る。お力と同じ出女であるお高の如きも短い描寫で人物をはつきりと描き出してあり、又源七の妻お初のお力に對する憎惡から夫につらくあたる邊の描寫も極めて自然で眞にせまるものがあるが、この作の中心はお力の描寫にある。そこに寫實性が徹底して居るのである。たゞ構想からいふと、源七の家庭の描寫と、お力と源七との描寫とが對立的になつて、從つてお力と源七との無理心中がやゝ不自然な感を與へるが、ともあれこの作に於て開拓した寫實性は最も注意せられる。

さうしてこのにごり江とともに後期の代表的な作品として擧げられるのがたけくらべと十三夜とわかれ道とである。この中、たけくらべは明治二十七年の十二月から二十八年の十一月まで一年を費して居るのであつて、その着手はにごり江に先だつて居るのである。また十三夜は明治二十八年の九月であり、わかれ道は二十八年十二月になつて居るから、十三夜はにごり江についで、たけくらべの執筆中になつ

たものであり、またわかれ道はたけくらべを完成してから執筆したのである。是等に就いて一通り考へたい。

第一にたけくらべに就いて見ると、この作は廓に近い大音寺前附近を背景として少年少女の微妙なる心理を描いて居る。美登利といふ十四ではあるが早熟な少女の勝氣なお轉婆式の時代から性に目覺めてゆく頃の心理の描寫を中心として、多くの少年を點出して居る。一人は正太郎といふ家も性格も學問もすぐれた少年、一人は家は貧しく智慧もない、たゞ亂暴の長吉、今一人は龍華寺の信如といふ一見冷たい消極的ではあるが犯しがたい所のある少年が主であつて、それに滑稽的な三五郎といふ少年をも加へて町の祭といふ事件を背景として、それらの少年のいがみあひの間に起るそれ〳〵の心理性格が躍動して居るのである。一葉には男性の性格描寫として見るに足るべきはすくないのであるが、是等の少年は巧みに描かれて居ると思ふ。而して是等の少年と美登利との關係を見ると、長吉は美登利が正太郎に親しむのを妬むやうな心持もあつて、長吉が草履を美登利の額になげつけたのに對して反抗した聲には、性來のまけ嫌の氣性をあくまで發揮して居る。廓に全盛の遊女を

姉に持つ事をほこりとする美登利は無智な女性に過ぎないが、弱い三五郎をかばつて、

え丶憎らしい長吉め三ちやんを何故ぶつ、意趣があらば私をおぶち、相手には私がなる。

といふ所に勝氣な性格が發揮されるとともに弱者に對する同情が見られるのである。正太郎との關係は親しい遊び友達としての交情が極めて自然に描かれて居るが、最も注意すべきは信如との關係であつて、初めは信如が長吉に味方する所から生ずる憎からこれをさけて居るのであるが、次第にこれに、愛着を感じて來る心理の變化は自然にしてすぐれた描寫であると思はれる。信如の鼻緒を切つて困つて居るのを、ひそかに紅入友禪の切をなげてやる邊りの美登利を、長吉を罵倒した美登利と比較する時、そこに非常なる相違があるのであるが、何等その間に不自然を感ぜずして心理的變化が自然に描かれて居るのである。要するにこの作は寫實に徹して少年少女の世界を描いて居り、少年少女の心理の動きを自然にかつ細く観察し表現して居るのである。その清新な寫實性に於て同じやうな題材を扱つた綠雨の門三味

線と比すると、門三味線が近世からあり來りの鬼ごつこや、相合傘や三味線の稽古等の素材を扱つて居るに比して、たけくらべは生きた清新さがあり、心理の寫實に徹して居るのである。而もこの作が單なる客觀、形態の模倣でなく、あくまでも一の情調によつて統一せられて居ることが注意せられる。廓近くを背景として、祭を描いてそこにかもし出される情調はあはれにはかない哀感である。この情調は源氏物語の若紫や夕霧の卷にも匹敵し、式子内親王や俊成女の歌境にも通ずるものである。それはたけくらべの文章にも見られる。

赤蜻蛉田圃に亂るれば横堀に鶉なく頃も近づきぬ

といふ冒頭の句の中にも自然の推移に對する詠歎と感傷的な氣分とが現れて居る。角海老が時計の響きもそゞろ哀れの音を傳へるやうに成れば四季絶間なき日暮里の火の光りも彼れが人を燒く烟りかとうら悲しく茶屋が裏ゆく土手下の細道に落ちかゝるやうな三味の音を仰いできけば

といふ一節には廓近くの賑やかな環境の中にたゞよふ人生の哀感がにじみ出て居る。夜ふけにひゞく時計の音、火葬場の火、三味の哀音、これらの中に人生に對する寂

しさがひし〳〵と感ぜられるやうに思はれる。それこそこの作を貫く情調であるのである。たけくらべの描いた世界は複雜な人生の姿でもなく、たゞ少年少女のはかなき事柄を敍したに過ぎないのであるが、その中に人生がにじみ出て居る。それは寫實特に心理の寫實に徹しながら、なほそれを情調の世界につゝむその渾然たる世界であると思ふ。

然らばこれに對して十三夜はどうか。十三夜は構想からいへば身分の相違する家にとついだお國といふ女性が夫の愛のないのにたへかねて、離緣して歸らうとして、父母にさとされて力なく夫の家に歸る途中、乘つた車夫は已が戀人である事を知つて、まゝならぬ世をかこちながら別れてゆくといふ構想である。短いだけにまとまつては居るが、車夫が昔の戀人といふ點は先づこの作の寫實性を稀薄ならしめる。お國をはじめ父もいづれも類型に墮して居り、全體として寫實性は殆どない。たゞこの作の特徴は忍從してゆく女性を通じて見られる抒情味である。たゞその單純な抒情味を一葉の本質とするならばこの作は彼の代表作でもあらうが、一葉には更により精細な寫實性を認めたい立場から言へば、この作はたけくらべと比較する事

さへも出來ない作と思ふ。更にわかれ道は一人のお京といふ貧しいながらつゝましやかに仕立屋をする女性が、隣の傘屋の吉といふ持てあましの小僧を弟のやうに愛して居る。このお京が妾にゆくといふうはさが立つて吉は自分の事のやうに思つてそれを止めるのに

それでも吉ちやん私は洗ひ張に倦きがきて、もうお妾でも何でもいゝ、どうでこんなつまらないづくめだから、いつその腐れ縮緬着物で世を過ごさうと思ふのさ

といひ、吉が悲しく別れてゆくのを扱つて居る。こゝに見られるものは十三夜のやうな抒情の世界ではなく、たけくらべと同じ寫實、心理の寫實の世界である。たゞたけくらべにはより複雜な背景と構想とがあるに比して、これは單純な構想しかない。さうしてたけくらべの世界が將來への浪漫的な憧憬があるに比して、これには現實の絕望がある。それだけに深刻さがあるとも言ひ得るし、また寫實に徹してきたとも言へる。この點に着目してこのわかれ道を推すのは正しいと思ふ。たゞこの作にはたけくらべのやうな背景がない。從つて情調がない。もしこのわかれ道に大きな背景を與へ、複雜な人生をもり得たならばたけくらべ以上の傑作となつたに相

違ない。藤村の春をたけくらべに比するならば、家に匹敵すべき作となつたであらう。たゞしかしわかれ道だけでは家にまで至らないとともに、たけくらべにも至らないといふべきであらう。自分は一葉がわかれ道の境地を完成せしめ得なかつたことを殘念に思ふものである。さうしてわかれ道に於て到達した現實的傾向は二十八年十一月のわれからに於て官能的描寫となつて現れて居る。われからは夫の愛を得ない町子が、その書生千葉に官能的な愛をそゝぐ事から夫婦が別居するに至る點を主題として居るが、お町が千葉に對する感覺的な點を描いて居る所に現實的傾向が著しく見える。たゞこの作に於て境遇遺傳といふ事を着眼して、町子の母が虛榮心強く貧しき夫をすてゝ逃亡するといふ如き娼婦的の女性であつたが、その母の血をうけた女性として町子も多情な女性であることを描いて居るのであるが、餘りに母の事を詳しく書いて構想の不統一を來した點がある。この點はにごり江と同樣であつたのである。ともあれわかれ道とわれからは一葉の進むべき道を暗示したものであつた。たけくらべの世界はわかれ道とわれからのもつ現實的、官能的傾向に於て一層寫實性を發揮してゆくべきであつたと思ふのである。

以上考へた所によつて、一葉の大體の傾向を了解したと同時に、たけくらべと十三夜とわかれ道との三作に優劣をつけることが出來るに至つた。卽ち自分の解する所によれば三作の中たけくらべは一葉の第一の傑作であり、わかれ道はこれにつぎ、十三夜は更にこれにつぐものである。さうしてにごり江は規模の大きい點から言へばたけくらべにつぐもので、わかれ道よりすぐれて居るが、一葉の本質から言へば多少傍系にたつ作品であらう。

四　活歴物と史劇

一　活歴物と學海

第一期の劇文學は主として默阿彌によつて代表される歌舞伎劇であつたのであるが、二十年代に於てはこの歌舞伎劇が新しい方面に展開してゆくと同時に別の一運動が起つたと見られるのである。卽ち二十年代に於て最も注意すべきは史劇の勃興であると思ふ。史劇といふものは從來の時代物から來て居るのであるが、時代物はたゞ時代を過去にとつただけで、その精神なり表現なりに於ては世話物と同一であるか、もしくは夢幻的な表現をなして居るに過ぎない樣に思ふ。默阿彌の作品も世話物であるか、もしくは夢幻的なものに過ぎなかつたので史劇といふものとは餘程異なつたものであつたと思ふ。が二十年代に於て夢幻的な作品から離れて史劇としての第一義的なものに進んで來たと思ふ。思ふに史劇はその根抵に於て夢幻的な空想的な點から離れて寫實といふ精神に基礎をもつて居るのである。もとより歴史的事實そのまゝではないが、少くともその根抵に於て歴史の上に現れた人

間生活の解釋といふ點に基礎をもつて居る。この機運にうながされて、先づ依田學海の史劇が出來たのである。學海の史劇は夢幻的な立場からはなれて寫實を基礎として居たのである。吉野拾遺名歌譽や文覺上人勸進帳などの外、作品は多いのであるが、それらに就いてもその用意をのべて

俗にして野鄙猥褻に入らざるを旨とす、又殺伐殘刻なる形を示さず。又悲痛哀歎に過ぎて衰弱狼狽の狀を現さず。哀むと雖勇壯奮烈の意を寓し、武勇を示すと雖酷薄粗暴の所爲を見する事なし。

といつて居る如く、徒らに荒唐無稽の奇を求むることをさけて居るのである。が學海は創作的天分に於てゆたかでない上に、この全然過去を再現するといふ立場のために劇的な力に乏しいのである。この故に坪內博士は明治二十六年の頃に我國の史劇といふ題のもとに學海の態度を非難して、學海の史劇に至つては過去再現の主義を極端に解釋して、單に正史の事實を其儘にとり、道具衣裳、臺詞等も盡くこれにより、劇的でなく詩的でもない考古博覽會であるとして居る。かくて實際の劇の上から見ても學海の影響は餘り著しくないのである。がこの時代に實際の劇といふ點

から見て最も著しきは福地櫻痴である。

二　福地櫻痴

櫻痴は前にも記したやうに初めは新聞記者として政治の方にかゝはつたのであつたが、終に劇界の方に轉じたのであり、劇界に於ては默阿彌の後をついで團十郎と結んで雄飛したのである。所謂九代目團十郎は茫漠な不器用の中に大きい藝を見せたのであつて、一方に劇なるものの品位を高めた點に於ても演劇史の上に忘るべからざる人物である。五代目菊五郎、四代目の左團次との三人が明治三十六年頃まで歌舞伎劇の上に力あつたのである。この團十郎のために多くの作を著したのである。彼の作は多いがこゝに二三の作に就いて述べて見たい。

春日局は明治二十一年に稿して實際に演じたのは明治二十四年の頃である。この作は五幕になつて居るが山科に閑居して居る稻葉佐渡守正成の妻のお福が家康の拔擢により後に三代將軍家光となるべき竹千代の守役となるのである。がこの竹千代は兒であるにも拘らず秀忠やその御臺所は次男の國千代を愛して之を世嗣にもしようとするのである。といふのは竹千代は武勇剛毅の性であり、國千代は優

柔閑雅な性であるために國千代は奥女中などに愛せられるためでもあるが、一方に大阪の豐臣の恩を思ふものが徳川の大奥に入りこんで居るのであつて、國千代の傅の高圓といふのが刑部といふのと結んで優柔な國千代を世嗣として、徳川の家に亂をおこさせやうとするためである。この間に春日局が男まさりの性格を以て高圓等に反抗して竹千代を武あり文ある人物として養成するとともに、身をやつして駿河の家康の所へ下つて大奥の樣子を知らせるので、終に家康が竹千代を相續とすべきを定め、又高圓や刑部の陰謀を觀破して之を罪するのであるが、春日局の子や夫をも召つかはうとするのでその事を春日局を通じて告げると女のために立身するのは好ましからずと離縁するのであるが、家康のとりなしによつて夫も二萬石の領主となるといふ次第を叙してある。この曲に於ての中心は春日局であつて、竹千代のためお家のためにあくまでも盡す至忠と、その才智とはある程度まで現れて居り、夫から離縁の通知をうけて涕泣して、職を辭して田舍に歸らうとする所に女らしい人性が見られるのであるが、しかも生死を賭して幼君のために盡す强い力が見えない樣に見える。これは春日局が理智の方面に勝つて竹千代の守役とともに一方我子

の立身や夫の榮達を夢みるといふ樣な點が現れて、竹千代のために全力を集注せしめない所もあると思ふ。千代萩の政岡が我子を殺して幼君のためにつくすあの强い力と情とが見られない所に春日局が全篇を統一するだけに至つてゐないのである。むしろ惡人の奸膽をみぬき、すべてを處置する家康の明察といふものが强くうき出て、春日局はそれに使はれるに過ぎない樣に見える。卽ちすべての事件が餘りに平淡に自然に解決されるために力ある劇的葛藤が見られないのである。之はこの作が外面的事件の記述に偏して內面的の解剖を缺いて居るためであると思はれる。同時にまた櫻痴も、學海の如く、從來の夢幻劇の境致から離れて寫實的の立場をとつて居るために、不自然な點は比較的少いのであるが、眞に劇的な場面を構成しないと思はれる、之は櫻痴の作の多くに見える共通的缺點であると思はれる。

次に明治二十五年の關原譽凱歌といふ作を見るに、この作は浮田秀家が櫻狩の場に於て進藤三左衞門と矢野五郎右衞門といふ二人の武士に恩を施したために、三左衞門はその臣になるのであるが、關原の役に秀家は戰に敗れて落ちのびる時に三左衞門は最後まで從ひ、又浪人をする五郎右衞門も妻を離別して秀家をかくまふ次第

を叙してある。部分的に見ればたとへば五郎右衛門の浪宅に於ておちのびて來た秀家をかくまふ所の如きは歌舞伎劇としてはその五郎右衛門の苦節がよく伺はれて厭卷の所であるが、これとてもあり來りの扱法に過ぎないのである。殊に全體として見る時には一の歴史的事件としての意義の外、劇としての統一的な力が殆どなく散漫であるのである。もしこの作に於て敗軍の將としての秀家の苦悶を中心にして心理的に解釋するといふ風に出でたならば、深みのある作品ともなり得たであらうが、秀家はたゞ一箇の點景人物に過ぎないのであり、忠臣の苦節といふ點の普通の描寫に止まつたのは、此作をして何等新しい意義のないものとしたと思はれる。

この歴史的題材の外面的描寫といふ點は二十七年頃に作られた日蓮記に於ても同樣である。この作も日蓮が龍口の法難や佐渡の遷流など日蓮の生涯の著しい事件をとつて脚色してあるが、やはり外面的事實の描寫が主であるためにかくの如きすぐれた題材を扱ひながら、十分に活躍せしむる事が出來ないのである。

かくの如く彼の作には劇的な强い力がいづれの作にも乏しいのであるが、比較的すぐれたものとして俠客春雨傘がある。この曲は初め小說として作り後明治三十

年頃にこの作を脚色して舞台に上せたのである。大口屋曉雨といふ初めは淺草の藏前の札差であつたが、勝氣な惡に屈する事の嫌な性質から邊見一角といふ惡侍の金をかりやうとして額をわられた亂暴な行に對しても、此方から詫びねばならぬのにこらへかねて終に家督を弟にゆづつて俠客となるのである。廓に出入する中に丁山といふ遊女になじむのであるが、丁山が嫉妬が深くてその丁山のかぶろのお鶴といふ女の可憐な境遇をきいて金をやつたのを、後で丁山らになじられたといふ様な行がかりから、丁山と離れて、葛城といふ遊女の力によつてお鶴は薄雲といふ遊女になつたのを馴染む。このお鶴の父親今西玄之進は喧嘩の遺恨から邊見一角に殺されたのであるが、その邊見一角はかつて札差の當時曉雨の額をわつた男であるので、己れの恥辱をはらすとともに薄雲をしてこの父の仇をうたせる様につくすのである。而してこの邊見と親しくする釣鐘庄兵衛が丁山と親しい關係から常に釣鐘とはりあひ、釣鐘は曉雨を不意打にしようとするが失敗し、曉雨からさとされて死し、無事に薄雲をして仇をとらせるといふ構想である。卽ち曉雨の俠氣と、薄雲の仇討とを結びつけてあるが、この作は廓を背景とし、遊女を扱つて、櫻痴の作品としては最

も花やかである上に、全篇曉雨の俠客としての義俠的精神が發露し、一方に丁山や葛城の遊女の意地と張とがはつきり現れて居るために、他の記述的な作品とちがつて、統一と强い力とが見られるのである。他の作品が純粹史劇であるに比して、之は餘程世話物としての色彩があり、又俠客とか遊女の間のさやあてとか仇討といふ從來の歌舞伎劇によつて、既によく開拓されて居る題材を扱つて居る所に比較的巧に描かれて居ると思はれる。

春雨傘は櫻痴としては記述的な他の作品に比して餘程傳奇的な精神の見えるものであり、そこに興味があるのであるが、他の作品は史劇といふ新しい境致を開拓しようとして、それを開拓するだけの新しい素養にかけてゐた所に失敗したものと思はれる。かくて櫻痴の作品が全體を通じて從來の默阿彌等に比してその劇的効果の如何に拘らず、夢幻的から寫實的自然的に進んで來た所にその特質があるのである。が然し史劇といふ立場から見れば今一歩進んで人物の内面的解釋を必要とすべきである。かつ櫻痴は團十郎と結びその登場俳優を眼中に於て脚色するといふ樣な點があつたために、脚色の上にも手心を加へるといふ樣な點もあつたと思はれ

るが、櫻痴の作は舊來の歌舞伎を以て見るものからはその夢幻的な技巧の乏しいために單調とせられ又新しいものを要求するものからはその外面的に失する點から非難を加へられて晩年に於てはすてられて不遇の中に明治三十年頃に歿したのである。

三　史劇

かういふ樣に史劇としてなほ十分開拓し得なかつた時に出でて性格劇を唱へたのが坪内逍遙氏である。氏は前にも述べたやうに學海等のたゞ史實の記述なるを難じて所謂劇は個々人物の性格を因となし境遇を緣となし、此因緣によつて來る著大なる業果を描いて人事の眞相を現す所に精髓があるとして、史劇にしてもその人物を過去の特殊の境遇の下にたゝしめて人事の眞相を過去事實の中に表現するのが目的であつて、史上の事相と人物とを寫實的に舞臺に現すのは末であるとして居る。かういふ彼の立場から試みられたのが桐一葉であつたのである。彼はこの作に於て豐臣氏の滅亡に頻してゆく間に起る歷史的事實の中に人生の普遍なる相を見出さうとしたのである。卽ち片桐且元を中心人物として、其性格を解剖すると共

に、一方に淀君といふ人物の複雜なる性格を表現して居るのである。この曲に於て扱はれた所を見ると淀君は猜疑の心の强く、又虛榮心の極めて强い女性であつて己が家柄を鼻にかけ己れの故大閤からうけた恩寵を唯一の思出として、衰へてゆく己が周圍に順應する事の出來ない女性である。そのために眞に家を思ふものを疑つて、たゞ眼前を糊塗し追從するものを喜ぶのであつて、大野父子や大藏の局の如きを寵して且元の忠義なる心を洞察するの明なく、之をはゞみ之を陷れようとするのである。さういふ淀君の性格は殆ど遺憾なく描かれて居ると思ふ。而して且元の性格は故大閤の恩を思ふ事の厚く衰へてゆく豊臣氏の勢を挽回するに、心から努めて居るのであるが果斷決行の勇なく、又前途を達觀して計を定めるといふ人物でもなかつたのである。かくして老猾なる思慮を有する家康にむしろ籠絡され、一方に淀君の君側にあるものを制御するだけの大量なくして、次第に悲境に陷れられていつたのである。家康に對して淀君の人質たる事を約束した如きこれである。一方で人質たる事を約束し、一方ではそれを逡巡させて家康の死をまつといふ樣な因盾姑息の策を寵するのである。そのためにすべてが行きつまつて了ふ所に誤解されや

すい性格があるのであり、さうして次第に悲境に陷つてゆく且元の性格悲劇そのものに、豐臣氏の衰退してゆくのが暗示せられて居るやうに思ふ。この虛榮にして猜疑心深い淀君と、因盾な且元との性格の葛藤そこに桐一葉の性格劇としての中心があると思ふ。その間に男性として智勇備つた木村重成や小人物である大野父子や渡邊內藏之介、忠と勇とを兼ねては居るが智のたらざるために直ちに怒り直ちに感ずる伊豆守の如き人物や、公平の立場にたつ織田常眞の如き人物を配して、女性としては女性の淺慮と利己心から事を破る正榮尼や大藏局や、是等に對して正しきにたつ饗庭局を配し場面は複雜になるのであるが、かういふ事件の本幹にたつ人物の外に枝葉にわたつては居るが、且元の女のかげろふと正榮尼の次男の銀之丞とは場面に特異な色彩をそへるものとして蛇足ではないと思ふ。父を思ひ許嫁を思ひながら、大藏局などの惡計によつて濡衣をきせられ、終に死んでゆく可憐な心情と、白痴ながらかげろふを思うてやまない銀之丞が、かげろふとの婚約のなるときいて狂喜し、その死をきいて身をなげるといふ所に可憐なる涙をさそふのであつて、全體の重くるしい陰慘な場面に花やかな可憐な情景を添ふるものと思はれる。而して史實の

表面的な記載の外にその表現に抒情的な詞句を用ゐ殊に長良川の且元、重成の訣別の狀の如き激發的な事件の後に來る沈靜な蕭條たる情趣のみなぎる場面としてすぐれて居ると思ふ。全體を通じて且元の性格の因循なる所に花々しい所がないのであるが、そこに陰慘な人生そのものを暗示せしめるのであり、部分部分の描寫に於てもそれ〳〵の舞臺効果を考慮してあるのであつて、夢の場に於て太閤の盛時を思はせた如きも相當に効果のあるものと思はれるのであり、櫻痴の作の如き記述的に陷らず內面的性格を重じ、又在來の歌舞伎劇の樣な荒唐の點もなくしてそこに歌舞伎劇の進んでゆくべき道を暗示したものとして、逍遙氏の傑作であるのみならず明治文學の中でも注意すべき作と思ふ。しかしこの作に於ては全體に抒情味があるが、尙そこに事件としては完了しないのであり、且元の性格もなほ盡さない所があるのであるが、その點を完結せしめたのが沓手鳥孤城落月である。この作に於ては且元の退去後、木村、後藤、薄田等も戰死して大阪城の落城も旦夕にせまつた時から筆をおこして、淀君の狂暴性に陷つてゆくところを表してあるが、殊に且元が落城にのぞんで秀賴母子の助命を請うて一反家康のゆるしを得たのであるが、それもとげずし

て秀頼母子は落城し、且元はもえあがる火の手をながめながら倒れるといふ所に終つて居る。而して桐一葉に於てもかすかに見えて居つた且元の計劃ははつきり此篇に失敗として現れて居るのである。

中心竊に戰を期しながら大御所存命のその間は平和を陽に一時を欺き、徐に計を運さんと思ふ心の僞に爲すことおのづから模稜となり、言行に矛盾の影を現じ味方も誤つて我れを疑ふ。

かくの如くして彼はその姑息の計畫のために忠義の心をいだきながらそれを遂ぐる事を得ずに身を亡し、豐臣の天下の亡びる事を早めるといふ悲劇に陷つて居るのである。この意味に於て孤城落月は且元の性格をはつきりと現はして居るのである。

然しながらこの作はこの一篇だけでは劇的統一の中心が見えない、一の劇の一幕としての價値はあるが、一篇としては落城といふ點のみであつて力的開展の跡が見られず、たゞ一の大爆發を見得るのみである。性格としても此篇だけでは淀君の複雜なる性格も見られず、たゞ家康の老膾なる點のみが見られるのであり、且元もたゞ

家康にあやつられて居るに過ぎない様に思はれるのである。その點に於て三幕の此曲が桐一葉の最後の一幕といふ程の價値しかなかつたのであると思はれるのである。寧ろこの時代の逍遙氏の作としては桐一葉とともに牧の方を擧げるべきである。此作は時政の妻の牧の方を中心としてその陰謀事件を扱つたものである。

卽ち牧の方は己が腹に生れた政範を將軍にせんとして、稻毛入道重成父子とともに實朝を弑する陰謀を起すのであるが、義時によつてその惡謀が觀破されるのであり、政範は義時にそゝのかされて義のために自殺するのである。が更に女婿朝雅にたきつけられて朝雅を將軍にするために、牧の方が再び實朝を弑せんとして失敗するが、稻毛入道の讒によつて畠山父子も弑せられるのである。而して義時はその場にかけつけて稻毛入道を殺すといふ所に終つて居る。而してかくの如き醜惡なる陰謀事件を彩るものは稻毛重成の娘の照子であつて、許婚であつた畠山重保に父の惡事のために破約せられたために悲嘆に沈んで、父の惡事を重保に知らせるために雷雨の中にかけつけて重保に知らせるが、ゆるされないので自殺して了ふといふ悲慘な戀愛事件が點景となつて加はつて居るのである。

この曲に於て牧の方は作者自身もマクベスと同じ樣な性格の女性を描かうとしたのであると言つて居るが、また桐一葉の淀君とも類似するのである。そこにはひがみやすい淺慮な我子の愛に溺れて公平な道を失ふ女性が描かれて居るが、淀君の樣にその性格が生々として居ないのである。而してこの曲に就いては時政も性格が殆ど見えないのであり、稻毛入道父子も單に惡辣なる人物に過ぎないのである。比較的浪漫的であるべき畠山重保も義に勇む人物といふだけで、照子との關係にも花やかな所が乏しいきらひがある。殊に全篇を通じて義時の大陰謀家としての樣子が浮出て居るのであり、表に牧の方等の陰謀を暴露して忠臣らしく振舞ふとともに、陰に自己の大勢力を扶殖せんとする野心がこの篇をして一層暗いものとして居るのである。終りの畠山重保と稻毛入道等の死ぬ場合に畠山の死を惜しみながらとはいひながら一擧兩得——朽木の稻毛親子、直に過ぎたる二郎重忠——まことに造化の妙配劑

と見得をきるあたり全篇の上におほひかぶさつて居る義時の力がこの一篇を牧の方を中心として統一せしめないのである。逍遙氏はこの作を三部作の一として描

かれた事は自ら言はれる所であつて、後年になつて星月夜に實朝を描き義時の最後に義時を扱つて居るのであつて、是等によつて一篇の大戯曲が構成せられるのであるが、牧の方一篇だけを見ると史實の解釋と表現とに於て劇的燃燒がやゝ足りないと思ふ。言をかへていへば詩的な點が乏しいと思はれるが、坪内博士の是等の作に於て依田學海や櫻痴等の樣な史實そのまゝの表現よりも、そこに性格劇的な所が現れるとともに沙翁劇などの影響が加はつて、新味も加へられた所に新しき歌舞伎劇の進むべき道を示して居ると思ふ。かういふ歌舞伎劇から出た史劇が過去の題材の中に新しき時代精神を加味せんとしたのに反して、新派劇は新しき時代の皮相的な寫實から始まつて居る。第一期に於て政治小說が明治初期の社會の皮相なる寫實であつたのであるが、この新派劇の初は雪中梅や花間鶯程度の皮相なる寫實であつたのである。殊に日清戰爭などの影響によつて壯士劇といふものが出來、原田重吉などの戰爭を題材としたものが行はれるに至つたのである。是等は劇としては殆ど價値のないものであるが、三十年代に於て川上音次郎や伊井蓉峯・高田實などが出て不如歸などを演ずる樣になつて、やゝ劇として價値あるものが生じたのである。

五　正岡子規

一　子規に就いて

小說戲曲に於ける寫實主義的傾向を考へたが、次に詩歌に於ける寫實主義的傾向を考へる。しかし明治中期に於ける詩歌の運動は長詩、短詩に於て何れも浪漫主義的運動が主であつて、寫實主義的傾向は僅かに子規の俳諧の革新、及びそれにつゞいた短歌の革新とに限られて居る。この運動は自然主義時代以後に於ては盛んになつてきたが、明治中期に於ては必ずしも詩歌の中心をなすものではなかつた。しかしこの機運は歷史的に見て注意すべき運動であつたことは言ふまでもない。さうして子規の寫實主義としての寫生は俳諧に於て先づ試みられ、それを短歌の上にも用ゐたものであるから、先づ俳諧の方を考へて次に和歌の方にうつりたい。

一體子規はその生活に於ては長い間病に苦んで床の中をわが生活とした悲痛な經驗を有して居るが、その性格は極めて理智的で、すこしも感傷的の所が見られない。從つて、對象に對しても曖昧な所がなくはつきりと觀なければおかなかつたのであ

る。それが浪漫主義時代にかゝはらず、なほ寫實的傾向をとらせるに至つたと思ふ。さうして俳句和歌にこの立場を應用したのである。もとより彼が俳句和歌に寫實主義をとるに至つたに就いては、小說神髓その他の寫實主義が自ら影響したこともあらうが、子規の寫實がかなり徹底して居るのはその外面的影響のみならず、子規の素質が然らしめたと思ふ。

二　子規の俳句

先づ俳諧に就いて考へるに明治に於ける俳諧は天保の墮落的傾向をそのまゝに引きついで、月並俳句が行はれて殆ど文學的價値がなかつたのであるが、子規の俳諧はかくの如き俳句に對する革新といふ點を出發點とする。彼の俳諧に對する興味は學生時代から始まつて居るが、明治二十五年に獺祭書屋俳話を出版したのが、俳論發表のまとまつたものとして注意すべく、次いで明治二十六年に芭蕉雜談を出し、二十九年に俳人蕪村を出すに至つて俳諧史的にその寫生の立場が確立したと思はれる。即ち子規の立場は從來盲從的に崇拜せられた芭蕉に對する批判からはじまつて、更に從來閑却せられた蕪村の價値を闡明し、先づ蕪村の立場をとることによつて

寫生を唱道せんとしたのである。或は寫生論の立場によつて芭蕉と蕪村とを見なほしたと見るべきかも知れない。彼は俳諧といふ形態に就いて如何に考へて居つたかといふに、文學の形態として餘り重んじて居なかつた。俳句の前途といふ中に

其實和歌も俳句も正に其死期に近づきつゝある者なり。

といひ、また

俳句は已に盡きたりと思ふなり。よし未だ盡きずとするも、明治年間に盡きんこと期して待つべきなり

といひ、更に和歌に就いては

實際和歌に用ふる所の言語は雅言のみにして其類甚だ少なき故に其區域も俳句に比して更に狹隘なり。故に和歌は明治已前に於て略ぼ盡きたらんかと思惟するなり。

といふ悲觀的な見解を最初にいだいて居るのである。然らば何故に和歌や俳句は亡び去るべきであるかといふに一は、言葉の狹隘といふ事である。卽ち和歌や俳句は小詩形を以て、詩美を現すために言葉の上に非常なる努力を要するのであつて、そ

こに和歌を用ゐる必要が起るのである。この點に於ては俳句の方は和歌のやうに嚴密ではないが、俗語を好むものではないとするのである。それは詩歌の形態の必然的性質とみたのである。が殊に和歌はこの點により狹隘であるだけその生命も短いとするのである。かういふ言語とともに、題材や觀念の固定して居る事である。この題材や觀念に於ても長い間の和歌や俳諧の傳統を考へると、そこに新機軸を開いたやうであつて、實に同一觀念を繰返して居るのに過ぎないとして居る。さうしてまた新しい題材は必ずしも詩の美がないのであつて、文明世界になるに從つてその周圍は俗の俗であるために、これを俳句にそのまゝ用ゐがたいといふやうに考へて居るのであつて、かくて和歌俳句はそれ自身として滅亡に近づいて居ると考へたのである。この見解は明治二十五年頃の子規の俳論であるのであつて、そこには從來の和歌俳諧をそれ自身必然なものとして衰亡を認めたのであるが、かういふ見地から一轉して和歌俳句に新しい意味を與へる事によつてその存在を復活せしめようとしたのであつて、俳諧によつて先づ行はれたのである。

さうしてその第一歩は俳諧に於ける芭蕉に對する忌憚なき解剖となつたのであ

る。彼は「芭蕉の俳句は過半惡句駄句を以て埋められ、上乘と稱すべき者は其何十分の一たる小數に過ぎず。否僅かに可なる者を求むるも寔に晨星の如し」として、僅かに可なるものを二百句であるとした。かくの如くして彼は芭蕉の句で從來推賞された句を十一首ほど拔いて、その然らざる所以をといて居る。たとへば

古池や蛙飛びこむ水の音

は彼が從來の俳諧の立場から脱して閑寂なる境地を見出した意味に於て俳諧の歷史の上では必要なる句であるが、文學上餘り必要はないとして、この句は善惡を離れた句であつて文學といふ立場から見ると、かくの如き平淡なる者のみをゆるさず多少の工夫と施彩とを要するのであるとしてゐる。こゝに子規の第一の見解が見られるのである。彼は俳諧を滑稽的諧謔的な性質を中心とするといふ見解を先づ退けんとして居るが、更にさびといふ境地、平淡のやうに見えて奧深い境地のある閑寂といふ境地を排斥せんとして居る。かくの如きは心境としては窮極の所であるにしてもそれはすでに文學自體を離れて居る。其さびに安住する時文學からは離れるとするのである。かういふ立場から彼は芭蕉から閑寂の句を去り、更にさびが導

き出す道徳的宗教的境地をも去つて文學としての立場を先づとなへたのである。さうしてそこに芭蕉に於て雄壯なる句を見出し、こゝに芭蕉の最高の句としたのである。芭蕉はひろく種々の方面の句に佳句を有するが、その獨歩の地位を占める所以のものは雄健壯大の所であるとして居る。さういふ意味で芭蕉のすぐれた句を見ると

夏草やつはものどもが夢のあと

五月雨を集めてはやし最上川

あら海や佐渡に横たふ天の川

の如き句を擧げて居るのである。そこにはぬりつぶしたやうな色彩のない單色のまゝの氣分が現れて居る意味に於て芭蕉の佳句であるが、こゝに芭蕉の最高の句があるとした所に彼の藝術觀が見られるのではなからうか。和歌に於て萬葉集を喜び實朝を喜んだのもこの點と同一な心境ではないかと思ふ。卽ち彼の明晰な頭腦には混色した不透明のものは好む所ではなく、單色の鮮明に出て居る所にあつたのである。これは形態の上から見て俳句は文學であるが俳諧は文學ではないとした

のも同樣であると思ふ。俳諧はある個性の鮮明なものでなくして、その個性を無にした氣分情調の中に味があるのであらうが、さういふものは子規にとつては文學でないと思はれたのである。かういふ見地にたつた子規の芭蕉觀が芭蕉の眞髓をつくし得たかどうかは疑問があるが、とにかくかくの如き見地から靜寂といふやうな複合的のものよりも單色の雄大といふ所に目標をおいた所に、從つてその直接的表現に中心をおいた所に、彼の俳諧觀否文學觀があると言はれると思ふ。而してさういふ點から見ると芭蕉よりも蕪村の方が彼の文學觀の上に鮮明に映じてきたものと思はれるのである。彼は俳人蕪村によつて今まで埋もれてゐた蕪村を見出し、その芭蕉と異なつた俳境を鮮明に解剖するに至つたのである。

彼は蕪村を芭蕉と比較して種々特質を擧げてゐる。二三の點を見ると第一に芭蕉の句は消極的であつて蕪村の句は積極的である。卽ち壯大とか雄渾とか勁健とか艷麗とかいふ美を積極的に示して居るとするのである。子規は芭蕉に於てその雄大な句を特徵として居るが、艷麗といふ如き美は蕪村の特質であつて、むしろさういふ美には芭蕉よりまさつて居るとするのである。がこの根抵には漸く芭蕉の閑

寂味を認めてさういふさびといふやうな境地はむしろ消極的であつたとしたやうに思はれるのであり、その點から蕪村の想像的な點をば積極的と見たのではないかと思ふ。卽ち

古池や蛙とびこむ水の音

にはあるがまゝの自然の姿はあるが、そこに積極的に働きかけるものがないとしたのではないかと思ふ。蕪村が

閻王の口や牡丹をはかんとす

の如きは豪壯の中に蕪村の想像が働いて居るのであつて、それが子規の愛賞した所と思ふ。

第二に蕪村の客觀的繪畫的傾向を推賞して居るのである。芭蕉と蕪村とを比較して蕪村の方がより客觀的であることは芭蕉の

五月雨を集めて早し最上川

と蕪村の

五月雨や大河を前に家二軒

とを比較しても明らかである。が子規はその蕪村の客觀を好んだのである。また子規によれば芭蕉は人事の句が極めて少いのに對して蕪村は人事の句を多くうたつて居るとする。この點は化物の記述に興味をもち、また古典によつて平安時代の貴族生活をうたつた蕪村としては、芭蕉のやうに自然の中にのみとぢこもる事は出來なかつたのであるが、そこに子規の彼を推賞する一の理由があるのである。更に芭蕉は叙事形容に粗で風韻にすぐれて居るのに對して蕪村は精神的美に長じ、印象明瞭であるとするのである。一方はどこまでもおぼろな情趣であり、一方は印象のあざやかな事を認めたのである。その他種々の點をあげて居るが、殊に子規は芭蕉が惡句のむしろ多いのに比して蕪村の句は盡く佳句である事を推賞して居る。かういふ意味に於て芭蕉よりも蕪村により多く同感して居るやうであるが、芭蕉の價値ももとより認めて居るのである。たゞ子規に於てはその俳諧に對する見解が芭蕉よりも蕪村に近かつた事は明らかである。芭蕉に於てもその閑寂味をむしろ喜ばずして壯大な句に芭蕉の第一特色を認めた立場として、一層蕪村の印象の鮮明な客觀的な句を愛したのは當然であると思ふ。

さうしてこの客観的な表現を喜ぶ所に彼の寫生論の根據も見出されると思ふ。彼が寫生の味を解したのは明治二十七年の秋であると獺祭書屋俳句帖抄の序に記してあるが、彼の解した寫生はどういふ意かといふに

> 實際の有りのまゝを寫すを假に寫實と言ひ、寫生と言ふ、されど多少の取捨選擇を要す。取捨選擇とは面白い所をとりてつまらぬ處を捨つる事にして必ずしも大をとりて小を捨て長を取りて短を捨つる事にあらず(叙事文論)

とある。徹底的な寫實は到底存在しない點から見ても是は至當であるが、これによるとありのまゝを寫す事であり、かつありのまゝを寫す事は人事と天然との區別があるが、人事の寫實は難く天然の寫實は易いのであつて、そこで自然をうつす事が寫生の主なる職分となるのである。小さい主觀をいれないで自然のありのまゝをうつす事を目的とするに至つて居るのである。彼は「寫實程面白く作り易きはなかるべし。空想の陳腐を悟り寫實の斬新を悟る」ともいつて居るのであつて、空想や理想はやがて衰へまた常に新鮮なる事を得ないが、寫實は常に個性を對象としてそこに常に新鮮となるとするのである。

子規がかういふ立場から俳諧を見たのは至當な見であり、從來の形にはまつた俳句の境地から新しい境地を創造したのもこゝにあると思ふ。彼の句境を見ても

旅人や馬から落す草の餅

春雨や傘さして見る繪草紙屋

春雨や傘高低に渡し舟

夏野盡きて道山に入る人力車

の如く印象の鮮明な點は直ちに認められる。たゞ第四句の如きは多少未熟のそしりは免れないであらう。さうして子規の句にも

夕鳥一羽おくれて時雨れけり

の如く靜寂の境にいつたものもあるが、なほ印象が鮮明であるためにしみ〴〵とした境地へは進み得ないのを感ずる。子規の蕪村への復歸はもう一歩すゝんで芭蕉にまで到達すべきであつたと思はれる。事實子規とても三十年代に至つては蕪村よりも更に一歩進んでいつたやうに思はれるのであるが、然し子規の性格から芭蕉の正しい復歸は或は不可能であり、子規は蕪村と同一傾向の俳人であつたと思ふ。

子規の俳句に於ける革新はその弟子の虛子や碧梧桐によつて新しい展開を示してゆくのであるが、子規自身としてはこの俳句の革新を更にふかめてゆくよりも、和歌の方へその態度を進めようとしたのである。

三　和歌に於ける寫生

子規の歌に於ける見解は歌よみに與ふる書に於て見られる。子規は萬葉集を尊重して古今集を非難し、その意味から萬葉歌人を發見して居るのである。歌よみに與ふる書のはじめに

仰せの如く近來和歌は一向に振ひ不申候。正直に申し候へば萬葉以來實朝以來一向に振ひ不申候

とある言によつて、その萬葉を中心とする精神が見られるのであり、再度のそれの初めに於て

貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ集に有之候

といつた所に古今集排斥換言すれば桂園派排斥の烽火は見られるのである。さうして萬葉派歌人として子規の推賞した著しきものは實朝、田安宗武、橘曙覽の三歌人

である。實朝に對して

時によりすぐれば民のなげきなり八大龍王雨やめ給へ

の歌に對して

恐らくは世人の好まざる所と存候へどもこは生の好きでたまらぬ歌に御座候

といつて居る如く極力推賞して居るが冷靜な批判的といふよりは主張的熱情的であるために、時には矯激に失する場合もあつて、實朝を推賞する餘りに彼を古來凡庸の人と評しさるのは誤であつて「北條氏を憚つて韜晦せし人か然らざれば大器晩成の人なりしかと覺え候」とあるのもその例である。さうして子規の重んじた點は寫生であるのであつて、對象をよく見つめて、これを卒直にかつ力强く表現する所に理想をおいたやうである。たとへば

芳野山霞の奥は知らねども見ゆる限りは櫻なりけり

の「霞の奥はしらねども」を非難したのは理屈を嫌つたと見るべきであり、實朝の「武士の矢なみつくらふ」を愛したのは强いといふことを重んじたと見られるのである。

かくの如くして一面には理屈をきらつて感情の直接的表現を喜び、一方には強い調を愛したのが子規の立場であつて、さういふ立場から古今集を排斥して萬葉集を尊重し、萬葉派歌人の價値を認めたのが子規の和歌に對する立場であつたと思ふ。今日から見ればかういふ子規の立場は大體に於て至當であるのであるが、當時古今集の流れが歌壇に於て重んぜられた時、この大膽なる見解を發表したために多くの批評を招いたのであるが、それだけ子規の卓見を見ることが出來るのである。さうしてその作品に於ても子規はこの立場を實現して居るのである。

　瓶にさす藤の花ぶさみじかければたゝみの上にとゞかざりけり
　瓶にさす藤の花ぶさ一ふさはかさねし書の上にたれたり

の如きは全く寫生主義にたつものである。この客觀主義は時に生硬なるものがある。

　朝な夕なガラスの窓によこたはる上野の森は見れどあかぬかも

の如き萬葉を學んでなほ渾熟しないものがある。さうして

　いちはつの花咲き出でて我目には今年ばかりの春ゆかんとす

いたづきのいゆる日知らにさ庭べに秋草花の種をまかしむ

佐保神の別れかなしも來ん春にふたゝびあはむわれならなくに

の如きや、浪漫的の傾向のあるものもあるが、多くは寫實に徹したものであつて、子規に於て詩歌に於ける寫實主義がある程度まで完成したといつても過言ではないのである。和歌に於て明星派の浪漫主義に對抗して鐵幹是ならば子規非なり、子規是ならば鐵幹非なりといつたのはそれを示すものである。

獺祭書屋俳話

獺祭書屋主人著

俳諧といふ名稱

俳諧といふ語は其道に入りたるもの丶平生言ふ意義と一般の世人が學問的に解釋する意義と相異なるが如し。俳諧といふ語の始めて日本の書に見えたるは古今集中に俳諧歌とあるものこれなり。俳諧といふ語は滑稽の意味なりと解釋する人多く其意味に因りて俳諧連歌俳諧發句と云ふ名稱を生じ俗に又之を略して俳諧と云ふ。されど芭蕉已後の俳諧は幽玄高尚なる者ありて必ずしも滑稽の意を含まず。ここに於て俳諧なる語は上代と異なりたる通俗の言語又は文法を用ひしものを指して云ふの意義と變じたるが如し。然れども普通に俳諧社會の人が單に俳諧とのみ稱する時は俳諧連歌の意にて云ふものなり。而してこれと區別して十七字の句を發句といふが通例なれども「俳諧を學ぶ」とか又は「俳諧に遊ぶ」とか云ふが如き場合には必ずしも俳諧と發句とを區別せずして兩者を包含する程の廣漠なる意に用ふる事も少からず。斯くて終に局外の人をして往々迷を生ぜしむるとあり。(余は世上の俳諧仲間に交はりしとなければ場處によりて其意義に相違あるや否や詳しきとは知らず)

因に云ふ。芭蕉又は其門弟等が俳諧は滑稽なりと稱する其滑稽といふ語は余が前に述べたる滑稽即

一

獺祭書屋俳話　正岡子規　明治二十六年五月刊

國歌新論

末松謙澄著

(其一)

新年初刊の太陽に載する所の予の談話は予が匆卒の口授を太陽記者の筆記せしものにて文字の錯誤等尠からず例へば與謝野君が引用せる「道戲歌」云々の如き予は心學道話類に見る所の和歌の意にて「道話歌」と云ひしなり其他推して知るべし然れども大體の趣意に於ては固より大差なし而して和歌論の部分に關し君は數日來の讀賣新聞中に於て予の所論を駁し予を以て誣妄の讒論を爲せる如くに評せらるゝも予は異に予の所見を述べたる

一

國歌新論　末松謙澄　明治三十年五月刊

第三章　理想的傾向と浪漫的傾向の文學

●序説

寫實的傾向の文學に對して一方の主觀的傾向の文學として理想的傾向と浪漫的傾向の文學とがある。この理想的傾向と浪漫的傾向とは必ずしも嚴密には區別しがたいのであるが、理想的傾向が理智的傾向を多く含んで居るに對して、浪漫的傾向はより感情を中心として居る。卽ち主情的情緒的な文學を指すであらう。一方があるべき文學であるならば一方はあらうとする文學であらう。幸田露伴氏の小説と矢崎嵯峨のやの小説とを比するとさういふ區別は多少見られる。これは文學評論に於ても森鷗外や石橋忍月のそれと、北村透谷のそれを比較すれば相當に明瞭に區別せられる。さうして全體として浪漫的傾向の文學が主情的であるだけにより人生に對して關心を多く有して居る。もとよりそれは現實に立脚して居ないものではあるがより人生への意圖が明瞭であり眞劍でもあつたのである。さうして形

態から言へば小説戲曲の方は理想的傾向が多く、詩歌に於て浪漫的傾向が多い。浪漫的傾向の小説はそれが小說といふ形態をとつても詩歌的性質が多いことは矢崎嵯峨のやの小説がこれを示して居る。かくして主觀的傾向の文學として小說から詩歌の方に觀察をむけてゆくことは、理想的傾向から浪漫的傾向へ進むことになるのである。さうして浪漫的傾向の文學が人生に對する關心をより多く有して居る意味に於て、後の自然主義の文學に接續するものがある。國木田獨步の如きもむしろ本質に於て浪漫主義者であり、若き時代の島崎藤村、田山花袋が浪漫主義者であることもその點から是認せられるのである。

一　幸田露伴の小說

一　露伴の作品

紅葉が硯友社の中心として小說壇に活躍して居る時、これと幷び稱せられたものは幸田露伴氏である。露伴氏もその西鶴に私淑したる點に於て紅葉と一致し、その文は兩者類した點もないではないが、その作の中心生命に於て兩者は相違して居るのである。露伴氏の處女作は明治二十二年の初めに都の花に連載した露團々であつて材を西洋にとつてぶんせいむといふ大富豪がその女るびなの奇拔なる求婚廣告を新聞に出す事より多くの候補者が殺到したが、終にこのるびなを愛して居たしんじやといふ靑年と、結婚するに至る事を扱つた作であつて、その奇拔なる構想と筆力とを以て聲名を博したが、それより一刹那、風流佛を出して盛名更に高く、奇男子、對髑髏、眞美人、一口劍を出したが、明治二十四年には小萩集、新葉末集を著し、新葉末集の中の辻淨瑠璃の如きは、一箇の遊蕩兒であつて、藝術的思念と男性的な意氣とをもつ人物をかいて成功して居る。更に明治二十五年には尾花集を出して、その中の五重

塔は氏の藝術的感興の最高頂に達した作として露伴一代の傑作といふ事が出來る。

次に明治二十六年には風流微塵藏の大篇が出て、明治二十九年頃まで連續して居る。他の作に比して現實的傾向の比較的多い事を特色とする。これは既に明治二十四年の「いさなとり」に見られた傾向であるが、微塵藏に於て更により現實的になつて居る。しかし長篇であるだけに散漫であり、また未完に終つて居る。明治二十八年には浦島傳說に新解釋を施した新浦島が出で、二十九年には髯男が出て歷史的題材を扱つて異彩がある。後遙かに後れて明治三十六年に天うつ波といふ作を出したが、次第に小說壇より退いて了つたのである。この外にも露伴の作は多いのであるが、以上の作の如きは比較的代表作として見られ得べきものである。

而して露伴の作は露伴自身の理想、ならびに思想が卒直に吐露されて居るものであつて、その何れの作の主人公も露伴氏の理想の化身ともいふべきものであつて、作品の扱方の上に於て變遷が殆ど見られないから、こゝでは五重塔を中心とし、他の作品の考察をまじへて、その作品の人物、思想、表現等に就いて考へて見たいと思ふ。

二　五重塔を中心とした考察

五重塔は谷中の感應寺の五重塔を建立するに際して、二人の人物を中心として藝術の永遠性を現した作品である。江戸の大工の棟梁に川越源太といふのがあつて、五重塔の建立を請負はうとしたが、その弟子筋に當る十兵衛といふのが技術に於ては優秀の腕をもつが、世才に乏しきため、のつそり十兵衛と言はれて居る、この十兵衛が五重塔の建立を自らひきうけて、不朽の名を得ようと雛形まで作つて感應寺の和尚に見せる。和尚もその技術に感じ、源太と二人をよび合意の上でいづれかきめる様にといふ。源太もゆづつて二人で作らうといふが、十兵衛は一人で作りたいといふので源太も怒るが更に譲り、見取圖などを與へ蔭ながら助けようとするが、しかしそれをも辭し、獨力事を始める。源太の弟子はそれを怒り種々妨害し、或時は十兵衛も負傷させられるが、それにも拘らず終に完成する。而してその供養を行はんとする前夜、大暴風雨がおこつて江戸市中が破壞される。十兵衛は家に落ちついて居ると、寺から塔が危いから十兵衛に來る様にいふ。しかしあの塔は大丈夫といつて行かないので、更に和尚の命であると僞つて、呼びにゆくと、和尚様にも信せられなかつたかと直ちに寺にかけつけ、塔の上に上つて塔が破壞されゝばもろともにと思ふ。

源太もその塔の下に立つて塔がころぶならば十兵衞とともに死なうと決心して居つたが、塔は事なくして少しもいたまなかつた。供養の日に和尙が十兵衞之を作り源太これをなすと書かれたとある。

この作に於て、十兵衞は藝術に專念する外他念なき人物である。その藝術的天才をあくまで信じ、その天才的技術を發揮するためには年來の親分にそむく事も、やむを得ないとした。この大理想を完成するためには親分に迷惑をかけても之を忍ぶ事が出來たのである。大理想のためには小なる人情をすてるのである。かくの如き自信を以て作られた塔に對しては、いかなる大暴風雨も之をおそれなかつたのである。而も一反信じて居つた和尙が、塔危いと言はれたときいて涙をながして泣くといふやうな人を信ずること厚き人物であつた。かくの如きであつた故に、塔は彼の生命であつた。はかなき人間の命と魂とをこめた五重塔が屹然として聳ゆる限り、彼の生命と魂とはそこに生きて居る。もし塔が破壞する時にはともに命をすてようと思うたのは彼にとつてはもとより當然である。彼は藝術的天才の人格化であるからである。かくの如き藝術の完成にのみ猛進する十兵衞に對して、源太の性

格は別の意味に於て卓越して居る。源太も同じく藝術的の天才を持つ。然しながら十兵衞の如く單なる藝術的天才のみではなく、人間としての偉大なる點がある。藝術に對する熱愛と人間に對する熱愛とが渾然として融けあつた所に、十兵衞に比して更に複雜な完成された所がある。和尚が塔を十兵衞作り源太之をなすといふのは、この藝術愛と人間愛との結合された狀態をさすのである。

この凡界には求め難き奇骨と、藝道、もしくは其他の一道に專念する性格とは露伴氏の描く人物には常に見る所である。他の作に現れた人物に就いて少しく考へて見ても、風流佛の珠運は彫刻に對して熱愛をもつて居る。一口劍の主人公は劍を鍛へる點に熱愛を抱いて居る。又血紅星の皆非居士はすぐれたる詩を作る事に一切を棄てゝ沒頭して、月界の女性に招かれても心を動かさなかつたのである。が終に月姬自身が下つて招くに及んで月の世界にいつたが、そのあらゆる歡樂をつくした後にも、詩に對する熱愛は去らなかつた。月宮殿の白壁に詩を描かんとする時彼はかういつて居る。

覇國王業も煙と消え、露と散り了つて飛鳥の影止らぬ如く、宇宙をすぐる中に千年經つとも萬年すぐるとも、此白壁に墨痕殘らむ間は皆非は生るも同然なり。よしや骨は朽ち、肉は流れ去るとも詩は是我が魂なれば、不死の魂魄此壁に殘つて、下界の皆非が假り物の四大を返すを微笑せん、あら快やおもしろや。

この藝術に對する熱愛の心が彼の人物の生命である。更にひげ男を見ると、この作は武田信玄の歿後、勝賴暗愚にして長坂釣閑の如き佞人を用ゐ、馬場信房、内藤修理、山縣三郎兵衞等の忠諫をもきかずして、家康、信長と戰をしてもろくも大敗し忠臣、戰死する事件を配景として笠井大六のあくまで主家のために盡す忠義の心を現した作であるが、馬場、内藤が戰の前夜、人生のはかなさをなげいて死出の宴をくむ時、泣いて死を思ひ止らせんとしたのは笠井大六である。而して馬場、内藤等がすべて戰死した場合にも、彼はあくまでながらへて主家のために盡さんとし、敵陣にまぎれ込んで信長を殺さんとした。後、家康の部下になる事を本田忠次からすゝめられても、斷乎として衰へゆく武田のためにあくまでも盡さうとする所に、義のためにこりかたまつた彼の性格が見える。而して大六は一面に於て敵にも知己あり、味方にも路傍

の人のある事を說いて、敵ながらも健氣な柳小太郎のために同情と讃嘆とを捧げて居るのである。而してこの一片の奇骨は放蕩に身をもちくづすものにも見える。新葉末集の中の辻淨瑠璃にある西村道也はそれである。京都の名代の釜師の家に生れながら遊里に耽溺し淨瑠璃にこりかたまつて家屋をやぶり、妻にも死に別れ、親子をも捨てゝ江戸に下つて辻に淨瑠璃をうたふ樣におちぶれても、生れながらの意氣地はすてなかつたのである。さうして淨瑠璃に對する才能と熱愛とが見えるのである。また女性にしても毒朱唇の女も詩人に對する讃美の情を抱いて居る。かくの如く何れの作にしてもその人物は常に藝術的熱愛をもつか、稜々たる奇骨を有するのであつて、紅葉の描く人物とは雲泥の相違がある。紅葉の人物は多情多恨の鷲見にしても平凡なる弱い男性であり、金色夜叉の貫一も失戀のために一生を破壞する弱き人物であつて、男性的の奇骨は見られない。又紅葉の多くの女性にしても平凡なる女性である。たゞ伽羅枕の佐太夫の如きは、やゝ意地をもつ點に辻淨瑠璃の道也とやゝ匹敵も出來ようが、それも意地と手管だけであつて、道也の藝術的熱愛と似るべくもない、露伴の人物は平凡なる點はすこしも見られない。超絶的な精神

を常に抱いて居るのである。而して是等の人物は露伴氏が人間の中から得來つた人物ではなくして、氏の理想がこゝに人格化されたものである。故にその何れの人物にも露伴氏の理想が現れて居るのであつて、そこに何れの作にも共通した類型があり觀念があるのである。

三　露伴氏の人生觀

然らば露伴氏のもつ理想、人生に對する思想はどうであらうか。露伴氏の作に見える所では現實生活に於ける榮達は殆ど眼中になかつた。この世の名利は取るに足らなかつた。而して名利を超越した生活にその理想があつたのである。ひげ男の大六が、情理かねたる本田忠次の言に從つて德川の臣となつたならば、現在の幸福榮達は集るであらうが彼はもとより望む所でなかつた。小太郎が病弱ながら父の勳功のために主君初め皆々に尊敬された幸福なる生活は彼にとつては苦痛であつたのである。戰つて功を立てよう、それでなければ死が寧ろ幸であつたのである。この大きな理想なくしては生きる事の出來ないのが彼であつた。この大きな理想あつてこそ人間が自然に對してもひけを取らない點があるのである。自然と人間との

關係に就いては、五重塔の暴風雨の條に見える、大自然が一度荒れる時には、人間のあらゆるものが破壞されてゆく。人間の作つた家も、總てのものの生命までも壞されるのである。人間の生命も時といふ自然の歩みが之を破壞してゆくのである。ただ自然の力も破壞し得ないのは藝術的製作である。十兵衛が生命のほとばしりである。五重塔はこの自然の大破壞にもひるまなかつた。こゝに人間の理想がある。大六が主家のためには生命、利害を離れて向ふその忠義の心と行、これのみは滅びゆくものの中に永久に滅びざる光である。この理想の追求これが人生にとつての意義ある道である。露伴の理想はこの藝術的精進であり、それが最も具體的に現されたのが五重塔であると思ふのである。がこの態度とともに一面に於てはあらゆる現實を脱却した、卽ち生死を超越した世界への憧憬が彼の理想であつた樣である。

この理想の現れとして我々は新浦島を見る事が出來る。この作によつて理想に至る發展の跡を見る事が出來る樣に思ふ。浦島傳說は萬葉集及び丹後風土記を初め上代の文獻には屢々見えるものであつて、人間の永遠の生命と歡樂とに對する憧憬の心理を說話化したものであり、一面には龜の痕跡を有する海の女王と浦島とが

結婚する事は上代の風習であるトーテムの遺習であり、又開いてはならないといふ玉手箱を開く事によつて、すべての理想が消え失せた事は、タブーの風習を示して居るものと思はれる。がこの說話は後の文學にも種々扱はれ謠曲の浦島といふ曲は、勅使が浦島明神に參詣して不死の藥を得るといふ支那神仙式の說話が加味されて居り、近松の浦島年代記には允恭天皇が病のため帝位を退かれて丹後の濱に釣をせられてゐる。皇子が帝となつて、雄略帝となる事に對して、陰謀を企てる圓大臣それに對して、雄略天皇を助くる浦島などを配してお家騷動式說話となつて居るのである。而して明治以降にも種々作られたが、鷗外氏の玉匣兩浦島、逍遙氏の新曲浦島、ならびに露伴氏の新浦島などがあるのである。逍遙氏の新曲浦島は現實的色彩が濃厚であつて、浦島が此土に歸つてきて玉手箱を開いて忽ち老翁となつたのに對して、蓬萊にあこがれて現實を忘れた迷を悟り「蓬萊うつさん現世に」といふ所に、どこまでも現實に立脚してその上に理想を建設すべきを說いて居るのであるが、露伴氏の新浦島も浦島に對する新しき解釋を施して居る。この作は浦島太郎が龍宮に赴いてからその家をついだ次郎の子孫が代々傳へて百代目に浦島次郎といふのが現れた。少

年の時家を去つて京都で學問を學び才學すぐれて居つたが、都の七條三位といふ貴族の女を戀慕したが、姫は親のすゝめで浮橋四位の子の所に嫁したので、戀に破れた次郎は町家の女と更に戀したが結婚せんとする間際に死んで了ふので、更に廓の勇菊といふ女性に親しくなる。しかしその仇と手管多き遊女にあいて現實の榮華のすべてはかなきを觀じて、丹後の浦に靜かに漁り平和に送る父母の境遇の却つて意義あるを觀じて、鄕に歸り、漁の業をする。父母は家を讓らんとして傳來した玉手箱と讓狀とを傳へる。そして我九十九代の無事なりしを喜び、舞ひ騷ぐが忽ち父母は死に、その葬式の棺をかつぐ時其體は消えて了ふ。其靈驗に驚いて仙界を慕ふが其仙道の修しがたきを知つて魔道を修して後仙道を得ようとする。すると忽ち魔王が現はれ、其通力によつて驪山の靈泉に浴して美人にかしづかれ、更にこの世の富を奪つて作られた玉樓の中に、數十の美女美男にかしづかれるが、かゝる良民を苦める境界に居るを悲んで、もとの茫屋に居り終に石となつて生死の堺を超越する。

卽ち第一は華やかなる名利や戀愛を求むる現實の世界であり、第二はこの世の名利に超越して一介の竿を手にして、春光あまねき海邊に悠々として世を送る現實を

超越した世界である。第三は盡きせぬ歡樂のみなぎる龍宮城の如き世界である。第四は生死を超越した寂靜の世界である。第一の世界は露伴氏の、もとより理想とせざる世界である。第二の世界は傳統的な家の生活にとぢこもり、名利をはなれたある意味に於て愛すべき世界ではあるけれども、最高の理想とするには足らぬ。目もまばゆき浴殿にひたり、錦繡の美の中に眠る世界は、浦島傳說の扱ふ仙境であるが、かゝる世界の憧憬が迷である事は逍遙氏の新曲浦島にも見える所である。それは露伴氏によれば魔道である。而してこの世界から逍遙氏は再び現實に立ちかへつて、理想を建設すべきを說いたが、露伴氏は去つて生死を超越したる悟の境界に入れと說く。この境界こそ露伴氏の理想とする所であつたと思はれる。その點を力說したのが新浦島の理想であり、その境界に至る道程を示した所にこの作の興味ある點があると思はれる。この生死を超越した世界こそは神を罵り、佛を罵つた緣外緣のお妙の心境と一致するものがある。而してこの生死を超越した世界は一道に專念する十兵衞等の世界と一見矛盾する樣であるけれども、然しながら生死を超越した宇宙我と一になる事によつて、大なる我を建設することは一道に對する執心をあ

くまで淨化し、深化する事によつて得た純一無凝なる我の建設と一致するものではなからうかと思はれる。この深められ淨化せられたる我の建設こそは露伴氏の理想の中心であつた樣である。たゞ露伴氏の理想は現實界に深き省察を加へず、現實の上に立脚する事もせずして、たゞ露伴氏の冥想沈思の中にのみ得られた故に、それが美化し深められて居るけれども人性のひらめきが見られない。その境地を渇仰する事は出來ても、それは現實の人間にとつては未だ首肯する事は出來ないのである。こゝに露伴氏の理想主義のあきたらない點があると思はれる。

四　露伴後期の傾向

以上露伴氏の作品の人物ならびに思想に就いて考へたが、後年の作品に於てはなほ現實的傾向をとり入れようとした點は見られる。風流微塵藏にしてもその點が見られる。風流微塵藏はさゝ舟、うすらひ、つゆくさ、荷葉盃、きしの濱松、ひとり寐、さんなきぐるま、あかりがま、雲の袖からなつてなほ未完成であるが、もともと首尾一貫したものではない。その中には女丈夫であつて、若かりし日の戀愛の過失から不遇に日を送る女性もあり、義俠の賊として、不遇に苦しむ幼きもの丶ために身をすて丶働

くものもあるが、その中に矛盾せる人生の相は種々の點に現れて居るのである。それは明治三十六年以降發表した未完の長篇天うつ波にもその點が見られると思ふ。この作は複雜なる構想を有して居るが主なるテーマは生涯を兄弟の如く助けあはうと誓つた七人の友達の中、水野といふのはすぐれたる詩を殘す事を以て人生の理想として小學教師を以て甘んじて居つたのであるが、同僚の岩崎五十子といふ若き女性に戀する。五十子は水野をきらふ。而も水野の戀は現實の戀を離れて理想化された戀であつたのであつて、五十子が腸チブスにかゝつて命危き時に、水野は友にもそむき、自己の理想をも忘れて五十子のために盡し、醫者の事をばすべて世話するのみならず、終りには淺草觀音に日參して平癒をいのるために學校からは免職されるが、終に五十子の病は平癒するに至るのである。こゝに現實と理想との葛藤といふ點が見られると思ふ。水野を初め七人の盟友は從來の露伴氏の作品に常に見える人物である。日方は軍人となり、羽勝といふのは遠洋航海に從事し、名倉といふのは相場師ではあるが、すべて一道にあくまでも突き進まうとする點に於て一致する。殊に水野が天下を驚かす詩を殘さうとする理想は、藝術の永遠性を認める五

重塔の十兵衞や一口劒の主人公と同一である。たゞ彼等はそれをあくまで突き進んで他を顧みなかつたのであるが、天うつ波の水野はその大理想が戀愛のために亡されようとする所に相違がある。一の理想に生きる友は水野を諫める。名倉は己が利害をすてて、五十子の醫療代を拂つてやり、戀を絶對に否定しはしないが、戀に熱するために身の衰へて大理想をすてる事を悲しむ。羽勝は感情を適當に調整すべきを說いて、自然の中に浸たるべき事を說く。又日方は軍人氣質から戀愛を罪惡として彼をうつていさめる。而も水野は己れにつれなき戀をあきらめることは出來ないのである。こゝに水野は現實のために理想をうちやぶられたやうにも見え、從來の露伴氏の作品と異なつた立場をとつて居るやうにも見える。しかしながら露伴氏のもつ理想主義はこの現實的方面を理想によつて基礎づけるのである。水野の五十子に對する戀愛は淨化されたる戀愛である。彼の五十子に對する心持は彼の藝術に對する大理想と背くものではなくして、たゞ對象を異にしたゞけである。五十子に對する全我的の愛は他のすべてのものを捨てゝも之に向つてつくすのであつてそれは藝術に對する心持と同一であるのである。卽ち彼は戀愛といふ最高

の理想に向つて進む理想主義者であるのである。このすべてのものに對する全我的態度は觀音に對する日參といふ理智的にのみ見れば、凡人のなすべきと見られる事に對しても純化し理想化するのである。そこには露伴氏のもつ宗敎的智識と思想とを傾注して、佛にすがる心持を表して居るのである。彼が佛にすがる事によつて、五十子の病をなほしたのは、卽ち彼の理想を完成したといふ事が出來る。この意味に於て水野の理想に專念する心は十兵衞等と同一である。たゞ水野に於ては、理想の對象が變化してゆく所に、形から見れば理想が現實に破れた樣に見えるのであるが、本質に於ては露伴氏の在來の傾向と同一である。かくてこの作の中に見える女性にしても善惡の區別のはつきりついた、偏した人物である。五十子の家主の婆は强欲一方の人物であり、五十子の惡性の病である事をきいて、逐出さうとする程の冷酷な人物であり、己れのわづかなる利害のために五十子の死を願ふ人物であり、五十子の繼母も金の外は眼中にない人物である。而して反對に水野の寄留する家の娘お濱は、ロビンソンを慕ふ快濶な女性であり、日方が水野を諫めた餘りに打つたのを見て、おどり出て日方の頭をうつた程の意氣のある女性である。又お龍といふ女

性の如きは、己れを忘れて他人に同情するといふ心境をいだいて居るのである。かくの如くしてこの作は本質に於て露伴の從來の作を出でないものであるが、表面だけでも現實的傾向を加味した點は認められるのである。而して創作として見る時五十子の病の平癒する迄は力もあり、統一もあるのであるが、その以後は五十子の繼母の三味線の弟子であるお龍が中心となつて、現實的傾向を一層多く見る事が出來るが、こゝにはまとまつた中心觀念がうすくなり、力も乏しくなつて居るのであつて、露伴氏もそれを統一づけるだけの興味と力とを闕いたためであるか、未完のまゝに終つて居りこの以後露伴氏は創作から退いて了つたのである。氏は現實のありのまゝを精細に觀照して表現する作家でなく、どこまでも一の理想を表現する作家であつたのである事は、この天うつ波殊にその後半に於てよく現れて居ると思ふのである。畢竟露伴氏はどこまでも、理想派として立つべきであつたのに自然主義的傾向の漸く起らんとする時、その潮流にやゝ近づかんとして果さず、終に創作壇から退いて了つたと見るべきであらう。

五　露伴氏の表現

終りに露伴氏の表現及びその文章に就いて考へると、この點に於ては露伴氏も紅葉と同じく元祿文學殊に西鶴の影響を受けて出發して居る事を認めなければならない。露伴の處女作露團々は材を西洋にとつてあるが、その文章は西鶴の影響が見られ、簡潔にして力のある文で現されて居る。が殊に風流佛の文章の如きはその最も著しきもので

人間元より變な者、目盲てから其昔拜んだ旭日の美しきを悟り、巴里に住んでから澤庵の味を知るよし、珠運は立鳥の跡ふりむかず一里あるいた頃不圖思ひ出し、二里あるいた頃珠運樣と呼ぶ聲まさしく其の人と後見れば何もなし。

の如きも、てにをはを省略して簡潔に力強く文をやる所、西鶴の文の行き方である。か丶る簡潔なる文章は紅葉の文と一致する所があり、新葉末集の辻淨瑠璃の如き文のみならず、その人物の描寫の上にも似通ふ所があるのであるが、然し露伴の文の熱血ほどばしつて、奔放なる情熱の燃ゆる體は到底西鶴の文と比較する事の出來ない程、露伴その人の個性のほどばしつて居る所である。五重塔に於ける暴風雨のあれ狂ふあたりの强き力ある表現の如き、ひげ男に於ける馬場、内藤等があすの戰死の別

れの宴を清水のほとりに催して、慷慨の情をもらすあたり、露伴の理想と相俟つて肉おどるの感がある。また天うつ波の如きに於ては、友人等の諫言の如き、或は佛教觀を述べる邊りの如き熱血のほどばしるの觀があるが、敍景の文に於ても洗練されたる中に清新の趣がある。

秋は海樓の垂簾に動きてぱつと吹き來る沖の風は、夕日の餘光美はしきが中に、無限の爽涼の氣を齎らせば白帆明るき遠方の船の數々も、鉛をなして漫々たる潮の果に却つて物淋しう見え渡りて、竹芝の浦の浪靜かに增上寺の鐘聲に暮れ行かんとす。

而して紅葉の文もこの熱血ほとばしる文に對しては一歩をゆづる所がある。思ふに紅葉も表現には非常なる苦心をし最初の西鶴模倣から次第に自家獨自の文を作り來つて、多情多恨の言文一致の如き、金色夜叉の洗練されたる文の如きに至つては、自己獨自の文を作り出した。然しながら紅葉は餘りに文の技巧に腐身する餘りに雕琢の妙はあつても强い力にかけて居る。生氣に乏しい點がある。之に反して露伴はその有りあまる學識と、冥想して得た自家の理想とを奔放なる情熱を以て吐

露したものである故に、事件の描寫に寫實的精緻はかいてもその心よりあふれ出る情熱は筆おどるの感がある。この點が文の上から見た露伴の特質であると思ふ。而してこの點こそは常に純一なる人物を描き、玲瓏たる理想の世界を描くその内容と調和して、こゝに露伴の作品の基調を作つて居るのであると思ふ。

露伴氏が三十七年の頃出盧といふ長篇の詩を作り、その他歴史物語や自己の哲學を吐露した、隨筆を作り、今なほ健在である事は人の知る所である。

二　傳統的作家と主情的作家

一　二つの傾向

紅葉・露伴がそれぞ〳〵異なつた作風を以て立つた時に、なほ傾向を異にした幾多の作家が輩出したのである。其等の中で近世の傳統的傾向を多く有した作家と、新しき主情的傾向とを以て進まんとした作家とは、紅葉露伴以外にあつて、全く相反した傾向の作家といふ可きである。

前者に於ては饗庭篁村と齋藤綠雨とを見る事が出來、後者に於ては森鷗外と矢崎嵯峨のや氏とがあり、更に文學界一派を見る事が出來るのである。思ふに紅葉・露伴は明治小說の新方面を開拓したのであり、表現の上に心持の上に、獨自の境を開いては居るが、その根柢は西鶴などから出發した戲作者的な所があつたのであるが、內容形式ともに舊系統を逐つたのが篁村氏等であり、形式內容共に新しき境地を開いたのが、鷗外等の創作であると考へられる。

二　饗庭篁村と齋藤綠雨

第一に饗庭篁村は元祿殊に八文字屋自笑の影響を受けて、氣質物の性質を有する作品を現して居る。氣質は前にも言つた如く、類型的な人間生活の相を描いたもので、個性的な人間や生活は見る事は出來ないのである。かくて人生に對する特殊の新しき世界を顯現しようとせず、たゞ常識的な想像の下に築かれた人生を叙述するのであつて、そこには深刻なる悲劇もなく、平凡圓滿なる事件の解決を以て常に終つて居るのである。

氏の作品としては當世商人氣質や短篇集むら竹や新著百種の二編として出たほり出し物など、比較的すぐれたものであるが、こゝにはほり出し物によつて少しくその特質を見たいと思ふ。

四郎太郎といふ若き農夫が、衰へて今は人手に渡つて居る田地を眺めて悲しんで居るが、その母も昔の己が家の小作であつた柿崎家に雇はれて居る。四郎太郎は先祖が寶を庭に埋めたといふ夢を見て、それを掘つても何物も出ないので狂氣になるが、やがて癒る。柿崎家の女お調は、少女の時、水に溺れたのを四郎太郎に救はれたのを德として居るが、都の宮仕から歸つて來て、この零落した四郎

太郎に嫁ぐ。その結婚の夜に、大暴風雨が起つて、四郎太郎の家の庭に神木としてある椿の木がころんで、その根本から黄金の充ちた箱が出て來て、忽ち富み、横溝家と共に榮えたといふ說話である。

篁村氏はこの說話の始めに「涙を主眼とす」とあるが、これは紅葉が色懺悔に記したのを、その儘取つて記したに過ぎないのであつて、色懺悔の二人の女性がうら若くして戀に破れ、尼になつたのは、悲劇的要素を有して居るが、この作は全體に於て悲劇的と稱する事は出來ない。

作者の主張とする所は、衰へた舊家が祖先の遺澤と忠實なる家の後繼によつて回復する所にあるが、而もその回復の手段として祖先の埋めた財寶を掘出す事を扱つたのは、富豪傳說などに極めて多い事柄であつて、寫實的な立場を離れて全く空想的な心持である。もとよりかくの如き說話の形式としては、複雜であつて幾度も掘り返して事ならず、終に狂するに至るのは、主人公の信仰深いまた一面には勤勉なる性質を示して居るが、それ以上に主人公の性格なりに深い觀察は見られないのである。

一方にお調が救はれた事を感謝する餘りに零落した家に嫁ぐといふ點、また都の

奉公をしても、一點濁りに泌まぬ神の如き性質に、作者の理想的傾向が見られる。お調の兩親にしても、その他の人物も、總て恩を忘れざる敬虔なる人物であつて、それ等の人物によつて描かれた人生は、美しい理想的な生活であるが、そこには現實生活に深い根據を持たない空想的分子の極めて多い事を感ずるのである。それは西鶴を踏襲した紅葉の寫實味はないのである。寧ろ掘出し物を得んとして進んで行くのを主眼とした點に於て、理想小說と言ひ得べきであるが、而もその立場から見れば、露伴だけの强い熱と力とを見る事が出來ないのである。即ち作者が「いかなる味の物にてもなく淡白にて腹にたまらぬを以て、コレラの近因ともならず」とある如く、强い力と深い觀察とは何處にも見る事は出來ないのである。

それは表現に於ても同樣であつて、紅葉の文の如き、雕琢の美はみられず、何等の修辭も加へられないのであつて、敍述的物語的であつて、描寫といふ點に迄進まないといふ事が出來る。

この世相の解釋の上に見る樂天的光明的な態度と、その安易な表現とは、彼の作に常に共通する所である。

例へば國民の友に出た良夜といふ作品を見ても、立身の望を以て都に來て、今は活版屋の小僧となる男が、夏の夜橋上に出て沈思して居るのを、投身と巡査に誤られ、又投身せんとする女性を救ひ、後にその女性と結婚するといふ偶然なる事件を扱つたに過ぎないのであり、そこに特殊なる內面的觀察は見られないのである。

卽ち篁村のうつす所は、勝関の様な歷史的題材もあるが、多くは極めて平凡か若くは類型的な人物であり、それが偶然なる事件の起る事によつて小說となるのであつて、そこに何等の意氣なく感情なく、憤りもなくたゞ世とともに生きて行く個性的自覺のない人間が物語られるに過ぎないのである。

篁村と同じく古い傳統的世界にひたりながら全く異なつた態度をとつたものは齋藤綠雨である。綠雨は篁村が人生の明るい方面を眺めて居るのに比して、常に暗い方面のみを眺めて居る。そこには失敗があり皮肉痛罵が生れ出るのである。

綠雨は正直正太夫と號して少くして新聞記者となり、戲文隨筆に諷刺皮肉の筆をとつて、或ひは當時の小說家を批評し、世相を痛罵する事等を行つたのであるが、作品としては、門三味線、油地獄、かくれんぼの如きが傑作と稱せられて居るのである。門

三味線は下町の少女の心理を扱つて居る。美濃屋の女お菊は、十四歳ほどで、近所の荒物屋の女お濱と年も一月遲れで、非常に親しき遊友達であつたが、美濃屋へ出入りのものの子息巳之助といふ二歳ほど年上の男性と、お菊が親しむのを事ごとにひがむのであつて、その點を主として描いてある。たとへば美濃屋の家で、歌留多取の夜、お菊が巳之助の肩をもつたとて言ひ爭ひ、又ある時は、お濱の家を訪れたお菊が、雨のために傘を借りて出る出會ひ頭に巳之助と會つて共に傘に入れて歸るを二階から冷かし、また花見の鬼ごつこで、おとなしいお菊が鬼になつたのを、巳之助がお菊に代つて鬼になるのでひがみ、急に暴漢が現れて四散したのを偶然會つたお菊と巳之助とが手を連れて歸るのを、後から見たお濱が「おたのしみ」とひやかし、又三味線の師匠の家で巳之助の事を言つて溫順なお菊をいやがらせ、お稽古を二人でする時、お濱にいぢめられて、お菊と摑み合ひをするが、お濱の父母は美濃屋に恩を蒙る律義者で、お濱を連れて美濃屋にあやまりに行くといふ樣な、溫順なお菊と意地惡きひがみ心のあるお濱とをよく對照させてある。

而もそれが巳之助といふ一人の少年を中心にして居る所に、戀に目覺めてゆく少

年少女の心を巧みに表現して居ると言ふ事が出來る。而して文章は、手爾乎波を省略して、犀利な表現をなして居り、綠雨一流の皮肉が、加へられて居るのである。

更に油地獄は、目賀田貞之進といふ田舍の富豪の青年が、都に修業に出て、非常な勉强家であつたが、國のものの懇親會の席上であつた小歌といふ藝妓の事が忘られず、初めて料理屋へゆく事を覺えて、小歌に遇ひ、それからはしげ〳〵と通つてゐたが、終に棄てられたといふ點を扱つてゐる。

その青年の世慣れぬ心から藝妓の何となき一言にひかれて、次第に陷つてゆくその徑路の描寫は鋭く觀察されて居る。貞之進が紺の羽織を着て居るので、小歌が紺羽織と綽名をつけて言ふのを、外に小歌の情人が有るのであらうと邪推する邊りいかにも巧みな描寫といふ事が出來る。が要するに初心な男と遊女の手管とを巧みに寫したといふに過ぎないのである。これに對してかくれんぼの方は小春俊雄といふ粋な男性とくろうとの女性との種々の交渉を描いて居て短篇ではあるがその主人公は綠雨自身の面目をあらはして居て、綠雨も最も會心の作と考へてゐたらしい。門三味線と油地獄にはなほよそ行きの樣子が見え、かくれんぼに於て綠雨の素

地が見られるといふべきである。

要するに綠雨の扱ふものは江戶の狹斜の巷や下町であり、世に慣れざる若旦那や藝妓や下町の女の戀の縺れや口說に限られて居るのであり、從つてそれ等の中に起る心理は綠雨の得意とする所であるが、綠雨の觀察はかゝる方面にのみ向けられて、廣く人生を眺めて之を觀察するといふ所には進まなかつたのである。雨蛙といふ諷刺的な作品にしても、失はれた戀を皮肉に描いて、そこに人生に對する痛罵が見られるのである。

篁村が商人、農夫の如き質實なる人物をとつて、その勤勉なる生活を描き、かつ光明的な解釋をして居るに反して、綠雨の狹斜の巷をとつて、戀に破れてゆく方面を描いた事は、掘出物と油地獄、かくれんぼとを比較しても明らかである。而して何れも人生の一面的解釋に墮つた事は同一であるが、解釋の根柢に近世式の態度が多いために紅葉、露伴に比して、古い傳統的な作家と言ふべきであらう。

三　森鷗外の飜譯小說と創作

篁村綠雨の傳統的傾向に反して主情的な傾向を有するのは森鷗外、矢崎嵯峨の舍

氏等である。

鷗外は逍遙氏と同じく西洋文學の造詣があり、和漢文學ともに深い。たゞ逍遙氏が英文學であるに比して、鷗外は獨文學であり、又逍遙氏が日本の近世文學を主とせられるに比して鷗外は寧ろ古典的な和漢文の方に趣味を有して居られる樣に見える。從つて逍遙氏の文が淨瑠璃體や人情本式の文から始まつて居るに比して、鷗外の文は古典的の匂の高い和文調から出發して居るのであつて、之は創作に於ても飜譯に於ても同樣である。而して文學評論の上に於ても兩者は與味ある對照をなして居るのであり、逍遙氏が早稻田文學によつて沒理想論を唱へた時、鷗外は柵草紙によつて之に反對して論議したなど、種々の點に比較すべき所が多いのである。こゝで尠しく鷗外を中心とした飜譯文學を考へ、次に創作を考察する。

飜譯小說は前期に於て生硬なる飜譯があつたのであるが、明治二十年代の初めに末松謙澄の谷間の姬百合の如きは、文章も次第に洗練されて來たのであつたが、なほ飜譯的な色彩の强いものであつた。がこの時になつて、飜譯小說として極めて注意すべきものが現れた。これにも西洋文脈の細い味ひを宛ら寫し出して從來日本文

によつて現し得ない感覺と情趣とを文の中に現さうとしたものと、從來日本文によつて現されて居る表現形式をば飜譯にとりいれたものとがある。これにも更に古典文學の味ひをいれたものと、近世文學の味ひをいれたものとがある。

前者は二葉亭四迷であり、後者は森鷗外と坪内逍遙氏とである。二葉亭が浮雲の一篇によつて明治小說の上に新しい機運を投げた事は前に述べた所であるが、而も浮雲がかくの如き寫實的態度をとる事を得たのは、氏が露西亞文學の造詣によるものが多いのである。北歐文學のもつ重くるしい蒸されるやうな感覺的な所が、彼の文章なり作品を從來のものと全く異なつた境地に置かしめたのである。が浮雲に於てはなほ輕快な或る意味に於て上すべりのする描寫と筆致とがあつたが、彼の飜譯に於てはこの上すべりの點が全くなく、如何にもしつとりとした寫實的な所がはつきり現れて居る。氏の飜譯はツルゲネーフを主としてゴリキイ・ゴーゴリ、ガルシン・アンドレーエフなどにわたつて居るが、ツルゲネーフは殊に彼の心醉した所であつた。あひびき(明治二十一年七月、國民の友所載、獵人日記の一節)とめぐりあひ(明治二十一年十月、都の花)とは、先づ彼の飜譯家としての技倆を示したものである。

線の細い內面的な寫實味は、當時に於ては一歩時代に先だつたものであつた。山田美妙などの抒情味を喜んだ時代の人は、浮雲の寫實味を十分理解し得なかつた如く、彼の寫實的な感覺的な飜譯をも十分理解する事を得なかつたのであるが、後年自然主義の作家として活動した花袋とか獨歩とかが、二葉亭の譯文に心醉した事は彼等の後に言ふ所である。

而して彼が後に飜譯の態度に就いて記したものによると、外國文の意味ばかりを考へて譯すると、原文を壞す恐れがあるから、原文の音調を呑みこんでそれを移す事に努めた。そのためにコンマやピリオドもおろそかに棄てなかつたと言つて居る。又文體はその人の詩想と關係があり、一人一人文體が相違するから、一種の文體で何人の文をも譯するのは誤りであるとし、

各自にその詩想を會得して嚴しく云へば、行住座臥、心身を原作者の儘にして忠實にその詩想を移す位でなければならぬ。是實に飜譯における根本的必要條件である。

といつて居る。彼のこの飜譯に對する用意は、殆んど十分にその實際の譯文の上に

現れて居ると思ふ。而も彼も原文の逐字譯とともに意譯の効果をも認めて居るが彼の寫實的な立場はそれを行ふ事を許さなかつたと思はれるのである。がその爲めに彼は從來の日本に見られない文體を作り出す事が出來たのである。

二葉亭の態度に反して鷗外は、一字一句に拘泥する事を避けて全體の味を表はさうとして居る。この問題に就て鷗外自身も戲曲飜譯に就いて

凡そ戲曲の譯は力めて其意を失はざらしめんとするものなれば、字を追ひて原文を寫出さんとする時は、我國の人の解し得ざる怪癖の語となるべし。されば古より歐洲諸國の民の相互譯述して、殊邦文學の趣味をおのれが鄕に遷したる蹟をたづぬるに一として逐字の譯あることなし。

と述べて居るのである。而して逍遙氏の飜譯も鷗外の飜譯の態度と相似るものがある。逍遙氏の飜譯は主として沙翁の戲曲の飜譯であり、その第一期に於けるシーザーの譯から次第にその飜譯の態度に變遷はあるのであるが、原文をこなして沙翁の精神を現さんとした點は、常に一貫する所であり、そこに鷗外と一致する所があるのである。

文學評論

志がらみ草紙 第一號

「志がらみ草紙」の本領を論ず

S. S. S.

西學の東漸するや初めその物を傳へてその心を傳へず學は則ち格物窮理、術は則ち方技兵法、世を擧げて西人の機智の民たるを知て、その徳義の民たるを知らず、况やその風雅の民たるをや是に於てや世の西學を奉ずるものは唯々利を是れ圖り財に非れば喜ばず椅桐の崇幹も鏤龍の斧節も一たび薪とせられては復た黄衣の舌、綸袈の肉を孰るを免かれず天下の人士は殆ど將に彼のプラトーが政策を學ばんとせり夫れプラトーは詩人を知るが故にこれを逐はんと欲し當時の人は知らずしてこれを逐はんと欲す、その源は同じからずと雖もその歸する所は實に一轍に出でんとせり

今や此方嚮は一轉して西方優美の文學は、その深邃の哲理と共に我國に入り來れり而してその文學の種屬を問へば寫情詩あり敍事詩あり又た戲曲あり固より一體に局せずと雖も敍事詩中の一躰にして晩今、西歐諸州に盛行する小說を以てこれが主とす嗚呼、明治の天地は小說の天地となり「小說家」の語は近代西人の所謂「作詩家」に好對を與へたり

然るに我邦の文學界には外より來れる分子既に甚だ多し古、釋教の入るや重譯を經たるを以て印度の文學はこれと倶に來らず獨り支那の文學は、その政治風教に伴ひ來りて大に國風の趣味を變動せり宜なるかな今の文學士には歌人あり詩人あり國文を尊くするものあり漢文を尊くするものあり眞片假名體に長ずるものあ

めさまし草　まきの六



三人冗語

村の名物

脱天子　登仙坊　鍾禮舍

頭取。文藝倶樂部の新板の首には天外の村の名物が出て居る。北國の或る村の庄屋山下吉之丞に芳子といふ娘がある。その擬置の祝に吉之丞が鎮守樣に行く途で、放埒のために追出されて死んだ兄吉之助の子に逢うて、連れて歸ることになる。この武之助といふ子は容貌も立派で賢さうだが、さて學校にやつて見れば何も出來ぬ。併しこの子は全くの鈍根ではなく、芳子のために抱へてある女教師が親切から敎へることは善く覺える。或る時女教師があやまつて山下家の寶になつて居る花瓶を傷うて困つて居るのを見て、武之助がその瓶を微塵に毀して父の遺物の短刀を持つて山下の家を逃げる。原來村の名物といふ題は、山下が庄屋をして居る村に、美人の芳子と名僧の全然と名物が二つある

めさまし草

「文學その折々」の中に飜譯に就いて所見を述べた點があり、ジョンソンの直譯的飜譯の態度をも引用して居るが、一方にジョンソンの態度を非難して意譯を稱へるデンハムの說なども擧げて居るのである。而して是等三家の飜譯せられたるものを見ると、逍遙氏は英文學で戯曲であり、二葉亭は露西亞文學であり、鷗外は獨逸文學を主として居るが、鷗外の飜譯はその主情的であるだけ、氏の創作と共に影響する所が大きかつたのである。鷗外のこの時代の飜譯は水沫集の中に十六篇程のつて居るが、何れも舞姬などと同じ文體を以て譯されて居る。殊に埋木の如きは長篇でもあり、その主情的な所が大なる影響を與へたのである。其の中一二の作を見る。

埋木は Ossip Schubin の作である。この作の主人公はゲサといふ天才的な音樂家であつて、天才なくして一時世の人氣を得た音樂家ステルニイとの關係を主として描いてある。ステルニイは幼年にして天才あるゲサを見出して之を引き擧げたのであるが、ゲサの許嫁はステルニイが戀した女の娘であるために、思をかけゲサをして外國の演奏旅行にやらせ、其の間にゲサの許嫁と通ずるのである。ゲサは歸つて自分を迎へた許嫁がやつれて居るに驚くが許嫁は非を悔いてゲサの歸つた夜自殺

して了ふ。しかしゲサはステルニイに對する恩義は忘れなかつたが、その事を知つて大いに怒り、一方ステルニイは天才ゲサの作曲した地獄といふ曲を盜んで、自作として發表し喝采を博する。それを聞いて居たゲサはおどり出でて盜人と叫ぶが狂人扱ひにされる。かくてゲサは此度こそ傑作を作つて名聲を得たいとあせるが、今は創作的感興が失せて零落して了ふといふ天才的音樂家の末路を描いて、ゲサの感情的な性格を强く描いて居る。

又地震といふ作は Kleist の作であるが、チリ王國の首府のサンチャゴの地震を背景として描いてある。一人の少女が親の許さぬ戀に陷つたので、親は女を尼寺におし込めたが、二人は尙も忍び合つて子迄なしたので、男は獄に繫がれ女は斷頭臺に上される事になつたのである。まさに斷頭臺に引かれんとする時、地震がきて女は殺される事を遁れ、男も獄から出て、二人落ち合つて再會を喜んだのであるが、そこに集つて居る地震の避難者と共に幸ひに祈禱に行くと、僧侶がこの大地震のおこるのも神聖なる寺院を瀆した如き者があるからであるとし、今尙も茲に居るといふので怒り立つた民衆は二人を殺さうといひ殺氣漲り、二人は終に殺されて了ふといふ構想

である。

大地震といふ樣な場合に對する激動し易い心持を巧みに扱つて居ると思はれる。

その他玉を懷いて罪ありは、探偵小說であつて、當時探偵小說の流行した機運に促されて作られたものである。宮中に仕へる女學士マドレエヌ・ド・スキユデリーがあるが、ある夜下男も居ない夜、一人の短刀を持つた男が一封の手紙と首飾りを渡して行つた。それは巴里で首飾りの石工として知られたカルヂリヤックといふ者しか出來ない樣な精巧なものであつたのであつて、カルヂリヤックを呼んでそれを聞くと、自分の作であるといふので、返そうとしたが、貴女に進呈するといふので貰つて置いた。その頃、巴里の町では、首飾りを持つて居るものは殺されたりして人心が騷いで居た。ある刑事が盜人を追跡すると、ある石垣の所へ消え失せて了つた。所がスキユデリーがある日車に乘つて行くと、群衆の中から突然前の夜に來た男が出て、手紙を渡す。それを見ると、即刻首飾りをカルデリヤックに返さないと危難が起るといふのである。そこで返そうとして、次の日カルヂリヤックの家の前に行くと、カルヂリヤックがその弟子のオリキエ、に殺されたといつて、オリキエ、が拘引されて

行く。それを愛人であるカルデリヤックの女マデロンが、オリキエ、には罪はないといふが、罪狀が明白であるといつて拘引される。

然るに女學士はマデロンの痛々しい樣子に感じて、オリキエ、の無實をあかさんとその拘はれた所に行くと、それが嘗て深夜に家へ來た男であつたので、氣絕する。その後オリキエ、はスキユデリイだけには打明けるといふので、スキユデリイの家へ連れて來て委細を語る。それによると、カルデリヤックが首飾りの犯人であり、彼を殺したのは自分ではない事を云ふ。鷗外の飜譯は更に後に完成したアンデルソンの作を譯した卽興詩人等に於て最も完成したのである。

この時代の飜譯には內田魯庵も從事して、ドストエフスキーの罪と罰とを譯して居つたのであり、文學界一派の平田禿木や、上田柳村なども、その主情的傾向を以て、詩歌などの文學を移植しつゝあつたのである。

さうして鷗外は飜譯文學に用ゐた典雅な表現を更に用ゐて創作したのが、この時代の小說である。この時代に於て鷗外の創作といふ可きものは、舞姬、うたかたの記、文づかひの三篇があり、それ等は氏の飜譯と共に、明治二十五年に出た水沫集によつ

て見る事が出來るのである。

この三篇は何れも鷗外が獨逸留學時代に材を得た作品であつて、何れも若き外國婦人を主材として描いて居る。舞姫は明治二十三年頃の作であつて、日本の青年官吏太田といふのが、女優のエリスと戀愛に陷り、同棲して子迄なしたのであるが、太田を思ふ友人の好意によつて、エリスと別れて日本に歸る樣になるので、エリスは狂して了つたといふ事柄を描いて居る。

エリスの純粹なる戀愛感情と、失はれた戀の痛手に陷つてゆくその心理的過程は、複雜ではないが、如何にも純粹に描かれて居る。太田の心情は戀と功名との岐路に立つ所より起るのであつて、エリスの樣に感情のみに生きる事は出來ないのであつて、この作の中心興味は、エリスの可憐なる心にあると思ふ。鷗外はこの作をば自ら「小なる人物の小なる生涯の小なる旅路の一里塚なるべし」と言つて居るのであるがこの時代に於ける文壇に、極めて清新なる情緒を示す上に力があつたのである。

うたかたの記は、或美術學校のモデル女のマリイといふ女を中心として、日本學生の巨勢といふのを背景として描いてある。マリイの母は或夜會の折、國王の誘惑を

受け様とした事があり、マリイも父母に分れた後、ある仕立屋に世話されたが、ある四十程の人に連れられ、スタンヘルヒの湖上で誘惑されんとして遁れた如き數奇なる運命に育つたのであるが、巨勢といふ學生の同情深きに感じて、巨勢とともに舟遊をして昔を思ふ時、今は狂して居る國王が見つけて來られるので、驚いて水に落ちて溺れ、國王、侍臣も溺れるといふ如き次第を叙してある。

舞姫に比してやゝ複雜な事件であり、マリイの心持も戀愛といふよりは今少し複雜なる心境を扱つて居るが、それだけ舞姫に比して作爲的な不自然な點が多いので、マリイの心持に十分同感する事が出來ない憾みがあると思ふ。

更に文づかひはイ、ダといふ寂しいしかし懷みのある貴族の女性を中心とする。彼女にメエルハイムといふ許婚の士官がありながら、それを嫌つて、その婚を避れるために官女となるのであつて、日本の青年士官の同情あるらしき性格を見込んで官女となるべき事を叔母にたのむ文の使を賴むのである。かくてエリスにしても、マリイ・イ、ダ何れも、境遇より見ても性格より見ても、不幸なるべき人物である。而して何れも寂しき純なる性格を有して居る。その同情を求める心持から日本の青年

の親切らしき點に、心を寄せて戀となり同情となるのである。もとより日本青年は故國を離れて寂寥を感じ暖みを求めて居る所から、自然に愛と同情とを與へるのである。

而してこの三篇の日本青年は特に性格の上に於てすべての點に於て、すぐれて描寫せられず、たゞ點景的人物に過ぎないのであつて、中心となるべきものは、その若き女性の感情生活にある。そこには濁りに泌まぬ命と血のある女性がある。而して女性の感傷味が溢れて居る所に、全體の主情的傾向が見られるのである。しかし鷗外の文章は和文調で流麗な古典的の匂が高いが、それだけ奔放な情熱の發露を歷へて居る所があり仄かなる哀感が全篇に漂ふのである。

次に抒情的傾向の更に鮮明に現れたものに、矢崎嵯峨のやがある。矢崎嵯峨のやは純粹抒情的の作家であつて、鷗外よりも其の感情に於て熱烈なるものがある。先づ明治二十年になつた無味氣を見る。これは明治の第一期に現れた政治小說の口吻が著しく見えるのであるが、其處に純粹の理想に燃える强い意氣と情熱とが見えるのである。關翁山の自傳となつて居るが、そこには覇氣に富んだ青年翁山と、之を

導く泉との二人が最も活躍して居るのである。而して泉は洋學の先覺者でルッソーなどの自由民權論をも多少抱いて居る。

翁山も此洋學崇拜といふ點に於て泉と共鳴するのであるが、國家主義的見地を抱く點に於て泉と相反するのであり、そこに義絶する様になる。この點迄は第一期の政治小說の範を脫しないものであるが、この作に於て別に嵯峨のやの特質をなして居るものは、第一には泉の令孃である。泉の令孃は憂鬱そのものゝやうな人物である。笑つた事のない、人生に樂しい何物をも見出す事の出來ない人物である。月を見て慰むのさへも心から、慰められるのではない。彼女は結婚も總て呪ふ可きものであつたのである。かうして翁山と親しくしてもそれは所謂戀愛には進まないのである。かくして憂鬱そのものである彼女が衰弱して死ぬこの性格は、嵯峨のやの好んで描く性格である。

第二は人生に對する强い憤りである。それは愛を裏切る女性に向つて、師恩を忘れる男性に向つて注がれる。泉の恩澤を受けてもその零落するに及んで顧ない輕薄なる人間に向つての痛罵となる。さうして翁山自身が師に義絶せられてからの

態度は師を怨みず何處迄も師を思ふの情となるのである。そこに作者の抱いた純粋忠直の考へが見られるのである。

　かくして第三には人生の無常といふ事である。時めいたものも衰へる、青年も老いやすく、やがて墳墓に眠るのである。泉も零落して死ぬ、翁山もまた死ぬのである。かくの如く憂鬱と、無常と惡に對する憤りと、これ等は彼の力說する所であり、こゝに彼の人生觀があるのである。而してこの點を咏嘆したのが彼の作品であつたと言へる。無味氣には未だ政治小說的口吻があるが、以上の如きは政治小說の外面的より出でゝ深まつた彼の抒情的傾向を示すものである。

　而して嵯峨のやの抒情的傾向の更によく現れたものに流轉及び初戀などがある。流轉は純粋なる戀愛感情と宗敎的感情の葛藤を扱つて居る。お露といふ少女が兄と二人居る所へ、林といふ兄の友人である陰鬱なる青年が同宿する事になる。お露はこの青年を慰むる事を努め二人の間に純粋な戀が生れ出ようとするが、青年は突如去つて了ふといふのであつて、純粋なる戀愛を抒情的に表現して居るのであるが、この憂鬱なる青年の心情は、無味氣に於ける泉の娘とほゞ同じ性格と思想とを現し

て居る。

蒼白の弱々しい此世の樂を享樂し得ない心持は、人生そのものに對する絶望の心持と相俟つて、戀愛そのものをも否定しようとするのである。而して戀愛そのものをも否定する事によつて、現實を超越した宗敎的感情の世界に入らうとするのである。此作品は無味氣の如く政治小説の性質が全くなくなつて、抒情的であるために、嵯峨のや獨自の詩人的素質が一層鮮明に現れて居るのである。

更に初戀をとつて考へて見るに、流轉と同じくそこに展開せられるものは、純粹感情である。都から十日許りの暇を得て叔父と其の娘とが田舍の少年の家に歸つた時、十四の少年がその娘に對して抱いた純な戀を扱つて居る。蕨がりに行つて娘と自分のみが皆にはぐれて、互に血眼になつたその懷しい思ひ出や、別れの前の夜、人々の集つた所から離れて、ひとりのみで心から泣いたその少年の思慕の感情が自然に描かれて居る。が娘はやがて人妻となつて、産後の日立が惡くて十九で死んだ。その少年の經驗した美しい戀の夢を長い間胸に抱いて老年となつた時、彼はかういつて居る。

嗚呼皆さん自分は老年の今日迄も、其美しい容貌、其優美な清しい眼、其光輝ある綠の髮、就中おとなしやかな奧ゆかしい其たをやかな花の姿をあり〳〵と心に覺えて居るが、悲しいかな其月と眺められ、花も及ばずと眺められた其人は今何處にあるか、其なつかしい石を刻んだ苔蒸す石は依然として寂寞たる所に立つて居るが、其下に眠る彼人の聲はまた此世では聞かれない。然し斯ういふ白髮の翁が同じく石の下に眠るのもあゝもう間もない事であらう。

嵯峨のやの抱いたこの抒情的氣分は、小說といふよりは寧ろ詩に近いものである。無味氣に見える覇氣とわざとらしい誇張とが失せて、この作に於てはしんみりとした感傷と詠歎とになつて居るのであり、それだけ自然にその感情がうけとられるのである。

然しながら鷗外の作と比すると、文章の上から見ても、鷗外のは古典的な和文調であるのに、之は感情を其の儘に現さうとし、時には未熟な(中學生の用ゐる樣な)誇張的な句法が現れるのである。而して取扱はれた所を見ても、鷗外のは理智と感情との葛藤が殊に男性に於て見えるのであるが、嵯峨のやは男性も女性もたゞ感情にのみ

生きる人物であつて、そこから無常、憂鬱といふ樣な色彩が現れるのである。然し嵯峨のやにはなほ甘い感傷があるのであるが、北村透谷に至ると激しい情熱が破壞に迄導かれて居るのである。

彼の小說としては宿魂錄を擧げる事が出來る。

宿魂錄は山名芳三といふ靑年が都に出て戶澤家に寄留する中、その女弓子と戀に陷つたが、弓子の繼母のためにその家を追はれた芳三は、懊惱として許嫁のお梅にもつらく當り、終に芳三は故鄕の一室に悶死するのであり、都のお弓も芳三を慕ふ餘りに病に罹り死ぬのであり、許嫁のお梅も亦た死して了ふといふ點を扱つて居る。戀愛に破れた心持を扱つて居る點に、嵯峨のやと同じであるが、嵯峨のやの初戀の如きは白髮の翁となる迄甘い感傷の夢に醉ふ事が出來たのであつて、そこから深刻なる悲劇的な事件は起つて來ないのであるが、宿魂錄に於ては、そこから總ての物の破滅といふ恐ろしい事件に導かれるのである。

之は單に戀愛といふ問題のみに限らず、人生其物に對する透谷の態度を語つて居る。透谷の一生はやがて芳三のそれであつたと思はれる。人生の花を求めんとし

た狂熱的な心が、終にもろくも破れて二十七歳を以て終つて了つたのは、戀に破れた芳三が死ぬのと同様である。

透谷の小説は未だ小説としては未完成と思はれるのであるが、その情熱的な所はよく彼の全人格を發露させて居ると思ふ。文學界は北村透谷の外、馬場孤蝶、平田禿木、島崎藤村、星野天知等を始めとして、凡て基督的精神の教養を受けた若き青年の一團であつて、主情的傾向を以て清新な潑剌たる精神を鼓吹したのであつて、その生活は自然主義時代に藤村によつてかゝれた「春」といふ作品によつて示されてあるが、この一團の明治二十年代に於ける活動は、小説よりは詩と評論に向けられたのであるから更に別の機會に於て觀察して見たいと思ふ。

なほ二十年代に於ける作家は數多いのであるが、主情的傾向の見えるものとして、例へば硯友社の巖谷小波の如き無邪氣なる少年少女の戀愛を扱つて居るが、殊に伯林を背景としたすみれ日記の如き、日毎前を通る文房具屋の女のロザと日本の學生とのほのかな戀のもつれを描いて居るのであつて、文章に於ては鷗外の持つ古典的匂ひは見えないが、その與へる感情に於て鷗外のと同じきものがある。

高山樗牛の瀧口入道も二十六年に發表されたが、この時代の主情的な浪漫的精神が中心となつて、この時代に起りかゝつた史劇などの機運に促されて、平家の瀧口入道の戀に題材を採つて表現されたのである。其他木下尚江の「良人の自白」も現れたが、傳襲的傾向のものとして傳奇的作品も出でた。例へば須藤南翠の朧月夜、照日葵や依田學海の楠木、十津川、宮崎三昧の桂姫の如く歴史的題材をとつて近世の馬琴などの讀本の系統を引くものであり、又前期の科學小説や政治小説などの流を汲んだ矢野龍溪の浮城物語や、末廣鐵腸の南洋の大波瀾などもあるが、やゝ個性の明らかであつたものは村上浪六の撥鬢小説、黑岩涙香の探偵小説である。

浪六の作品はやゝ齋藤綠雨と似て居るものがあるが、綠雨が多く狹斜の巷を描いて居るに對して浪六は意氣と侠氣とを誇張して表現して居る。例へば三日月（明治二十四年）といふ作は、侠客次郎吉を描いた作であり、その他井筒之助にしても、破太鼓、深見笠にしても同じ題材を扱つて居る。

侠客は近世に於ける特殊な現象として、名と任侠との爲めには生をも捨てる態度は、人の心に強い同感と刺戟とを與へねば止まないのである。この意味に於て粗笨

な卑俗なものであるにしても、浪六の作品が當時の好尙を博し得たのである。この任俠的精神が人の心を捉へると同時に、探偵的興味も亦心の中に潛む意識である。

この點に着眼したのが黑岩涙香氏である。涙香は西洋の作品をとつて之を飜案したのである。大金塊、鐵面皮の如き何れも巧妙なる探偵的經路を表して居るのである。女退治の如きは英國の上流社會に於て、ある貴婦人を苦しめるために結婚をしない同盟を結ぶのであるが、反對に女に退治せられて皆結婚するといふ社會諷刺的な作品である。

かくの如く明治二十年代の末に於ては種々の傾向の作品があつたので、紅葉、露伴が漸くあかれんとするに當り、小說界は殆んど歸一する所を知らなかつたのである、がそれ等の中から次第に明瞭な存在を示して來たのが廣津柳浪や泉鏡花である。さうして柳浪に於て寫實的傾向がある程度まで完成されるとともに、泉鏡花に於て浪漫的傾向が完成されたのである。

三　浪漫主義者泉鏡花

一　鏡花の傾向

露伴以來小說に於ける理想主義、浪漫主義的傾向は泉鏡花に至つて浪漫主義者としての最高點に達したと見られる。廣津柳浪、一葉が寫實主義として徹底したに對して、鏡花は浪漫主義として徹底したと思はれる。鏡花もかつては川上眉山等と觀念小說として出發したにしても、觀念小說が固定して、眉山が文壇から退いて世を去つた時、鏡花は浪漫主義者として新しい地步を占めたのである。それは柳浪が悲慘小說としての立場から寫實主義としての立場を確立したと同樣である。たゞ柳浪に於ては悲慘小說と寫實主義とは發展的ではなくして、その作品の異なつた斷面であつたに比して、鏡花に於ては觀念小說から浪漫主義への轉向は明らかに發展を示して居る。鏡花がもし當初の觀念小說で終つたならば、鏡花は極めて小さい作家として止つたであらうが、そこから新しい展開を示した所にそのすぐれた意義がある。こゝには浪漫主義者としての鏡花を見たいのであるが、彼の浪漫主義的作品の中に

はその怪奇的幻怪的要素を根柢として、美しき妖艷な女性を多く主人公として、月と夜と、動物とを配して居る所に、浪漫的要素は濃厚であるが、しかし彼の浪漫主義には無限に憧憬する感情よりは、固定した觀念がある。これは彼が觀念小說から出發して居るためでもあり、また鏡花氏が無限なるものへの憧憬よりは過ぎしものへの感傷を多く含んで居るためとも見られる。その意味で彼の觀念的なるものを少しく見たい。

人生はかくあるといふことはかくあらうとする、もしくはあるべきとするよりも、流動的でなく固定して居る。觀念小說はその意味で新しい創造はない。現實に對する新しい見方であるとも言へる。たとへば明治二十八年の夜行巡査を見ると、一人の巡査が夜を警備する職をもつてゐたが、法のためには家もなきあはれなものが軒端にうづくまるのも追ひはらふ如き、所謂忠實であつたのである。然るに彼は愛人があつたが、彼の父が泥醉して巡査を怒罵してその仲を割かうとしたのであるが、その父は濠におちこんだので彼は戀を割かうとする惡むべきものに對しても職務といふ責任觀念のために、この醉漢を救はうとして彼も溺れて了つたのである。こ

の篇に於て鏡花が現さうとしたものは强き責任觀念である。そのためには感情をも征服することが出來るのである。又情を殺して責任を果さうとする所に人生の悲劇が構成されることを現はして居る。これは近世の作品に多く見える義理と人情との葛藤と同じく、理性と感情との葛藤である。人生には理性を無視して感情のまゝに進む所に悲劇の生ずる事も多い。然しながら感情を殺して理性によつて進む場合に一層深刻なる悲劇が構成されるのである。この作はこゝに着目して居るのである。又外科室といふ作品は一人の伯爵夫人と醫學士との戀の悲劇を扱つて居る。夫人が手術を受ける時摩醉をかけられる事をこばむのである。それは意識を失ふ事によつて彼の女の秘密を口走ることを恐れてゞある。而して彼女は摩醉をかけずして一人の醫學士の手術をうけるのであるが、手術半ばに夫人は身を起して醫學士をいだく。偶然手術するやうになつた醫學士は夫人が道行きに一目見て戀に陷つた戀人であつたのであり、二人はかくして死ぬのである。そこには戀と運命との悲劇が織りこまれて居ると思ふ。それは鏡花の見た人生である。不如意な人生の相である。理性のために感情を抑制する巡査も、不倫の戀に身を捨てる夫人

も結局は鏡花の見た人生の相であるのである。しかし鏡花はかういふ觀念から離れたのではないが、それに浪漫的傾向を加へることによつて新しい展開を示したのである。その場合にも現實的題材の中に浪漫的傾向を示すものと、超現實的傾向の中に浪漫的傾向を示すものとがある。さうして鏡花の作品の中で超現實的な作品と現實的な作品と何れがすぐれて居るかは多く論議せられる所であるが、普通には幻怪的な超現實的な作品に鏡花の特徴があるやうに言はれるけれども、むしろ現實的の方面に鏡花の特色があるのではないかと思ふ。尠くとも觀念小說的傾向を離れて居ると思ふ。

二　現實的傾向の作品

先づ現實的傾向の作品から考へると、湯島詣がある。この作は一人の遊女と遊女の腹に生れた男性との悲劇的な戀愛を扱つて居る。神月梓といふ文學士が玉司子爵の令嬢龍子に學生時代學費をもらひ、後その婿となつたが、その餘りに剛慢な妻の態度に不滿を感じ、學生時代から親しく思ふ蝶吉といふ遊女となれむつんで子爵家を出で谷中の瑞林寺に獨住みをする。蝶吉が懷姙したが墮胎したといふ事を蝶吉

を戀慕する職人にきかされ、蝶吉をさとし、かつ緣を切るので、蝶吉は初めて悔悟し、人形を身代りとしてこれを愛するが、遊女屋の姉さんに當る蔦吉がその人形をこはし蝶吉を罵倒するために狂亂となり、髮ふりみだして神月の跡をたづねまはり交番に囚はれる。その夜偶然外出した神月は警官に推何され蝶吉の事を知つて交番より蝶吉をうけとり、二人心中するのであつて、その墓に弔ふものは三人の親友と龍子とであつた。

この作に於ては遊女蝶吉の境遇が悲劇を作る根本的な動機である。藝者の子と生れその母親と食事したのは只の一度と告白する彼女は、家庭の暖かさを全然知らない憐むべき女性である。遊女として虐待と壓迫との苦しい生活を送る彼女は法律もその他の智識も皆無であつて、從つて墮胎の罪である事も知らぬのである。彼女をとりかこむものにその罪を犯させても、惡であることを知らないのである。愛人神月にその罪であることを諭され、そのために愛人との仲をさかれて、はじめてその非を悟り人形を愛することによつてその罪を懺悔しようとしたのである。而もその人形をこはされる事によつて狂亂となり、家を飛び出す事は、彼女の無智なしか

し純なる性格の自然の發露と思はれる。もし平和の家庭に生れたならば純眞なる女性となり得たであらうのに、悲しむべき境遇におかれたためにかくの如き罪を犯し、かくの如き死をするやうに至つた所に人生の悲劇があるのである。これに反して玉司夫人は華族と生れ夫神月に對する愛はあり、遊女と情死した夫の墓にひそかに詣でるだけの愛情はありながら、華族と生れたために剛慢にして夫を遇するの道を知らず夫の心を自己より離れさせるといふ所に華族に生れたことが彼を不幸にして居るといふことが出來る。又神月も遊女の子と生れ、その遊女であつた母を慕ふ心が同じ遊女である蝶吉のやさしい意氣な心に愛着を生ずる所から子爵の婿となつた地位を捨て、遊女と情死するやうな運命を導き出したのであるから、同じく境遇が生んだ悲劇といへる。彼が蝶吉の墮胎を犯したために、體面上彼女を捨てたのは、その社會をはゞかる弱い心であり、一方からいへば理性的な心であるが、その事が二人を死に導く重要なる原因であり、又蝶吉が家を飛び出した時、偶然外出したのが情死の直接動機であるから、この悲劇も單に境遇のみでなく、男の性格ならびに偶然の力もあるのであるが、全體として境遇が悲劇を産み出す黠が最も主要なる黠と思

はれる。而してこの境遇といふ事は鏡花の作品には極めて重んぜられて居るのであつて、遊女の腹に生れた男女を多く扱つて居るのは、かゝるものが不幸なる運命を導き出す可能性が多いためであらう。人から輕蔑され、而して家庭の和樂をも得ない彼等の生活がいかに落莫たるものであるかは想像に餘りある事である。而して鏡花の作を初め觀念小說は多く人生の悲劇を構成する道程を描かんとするものであつて、そのために遊女の子といふ事が常に題材とせられたのであらうと思ふ。この作は殆ど超現實的な點は見えないが、たゞ神月が新婚旅行の初めての汽車の中で人玉が飛んで居るといつたのは彼の幻怪趣味を示す言葉である。

鏡花の現實的作品としては湯島詣の如き狹斜情調を發展せしめるとともに、藝道に對する高いほこりにまで進んでいつた。通夜物語の如きは前者であり、歌行燈の如きは後者である。通夜物語は吉原の丁山を中心として、遊女の意地を現はしたと見るべく、切られお富を現代化したとも見られ得る。畫家の清（きよし）が許嫁であつたお澄をその母親の虛榮心のために失つたのを殘念に思ひ、遊女の丁山になじむ。丁山と清とが酒の醉にかこつけてお澄の親の家におしかけゆすりをするお澄の夫の六平

太もきづつき、清もきづつく、さうして、丁山の胸からしたゝる血汐で丁山の繪をかいた。そこには遊女の意地とともに藝術に對する愛が燃えて居る。血汐を以て描いた繪は生命のあふれた所に不滅の藝道の生れることを暗示するものである。富や位置を笠に着て、純粋なるものを虐げようとするに對して、遊女の意地と、藝道への熱愛のみがそれを抑へることが出來るとしたのである。さうしてこの藝道への熱愛の端的に現はれたものが歌行燈である。歌行燈は能樂師の藝道に對する熱愛を中心として鏡花の獨特の文を示して居る。この作の構想は桑名の冬の夜に主家から勘當された喜多八が、うどん屋に入りながら廓町を流す按摩の聲に耳傾ける。喜多八は謠の名人であつたが叔父の源三郎と伊勢へ行つた時、この地の高慢なうたひ師宗山を藝の上で悶死せしめたために勘當となり、諸所をへめぐる中、お三重といふ不幸な女にうたひの藝をしこむ。喜多八が桑名の町をさまよふ時、叔父の源三郎とその朋輩の雪叟とは桑名の旅籠屋にとまつた。徒然にお三重といふ遊女を招くが、その舞の一さしに、喜多八から敎へられた事を見ぬく。源三郎と雪叟とがうたひをうたひ、皷をうつとその聲をきゝ、つけた喜多八が、旅籠屋の下でうたひをうたふ。すべ

てのものが、藝の一線にふれて火花をちらす。桑名の遊廓の冬の夜の寂しさにひゞきわたるその藝術境は、血汐でかいた丁山の繪と同樣にひかりかゞやく。この藝術の力をとく點に於て鏡花の傾向は露伴にも似て居る。しかし露伴氏には燃えるやうな意氣はあるが、鏡花のやうな狹斜の匂ひがない。あはれに寂しい情趣や、妖艶な女性やはない。たゞ直接的な意志と理想とのみが見られるのである。こゝに鏡花と露伴との相違がある。さうしてこの藝術の意氣と妖艶な情調とがもつれあつた所に、鏡花の最もすぐれたものがあるのではないかと思はれる。さうしてこの現實的作品の中で、女性の意氣とともにほのかな哀感の中心を占めて居る作品としては照葉狂言が擧げ、られる。それは月光と夜の世界が現れる意味に於て、神秘的であるが、現實の中に見出された、神秘の世界である。構想としてはある少年が年上の女性に對する極めて純なる愛を表現したものである。少年は娼家に生れて親の愛をもうけない境遇であり、女性の一人は繼母に育てられて愛に餓ゑて居る靜かな女性であり、一人は照葉狂言師として旅興行をする世の辛酸をなめた女性であり、意氣に燃ゑて居るのである。少年は女狂言師の小睦につれられ旅興行をするが、幾年かの後

故郷にきて、繼母に育てられた女性の不幸な境遇を見て、小睦の手から離れて、その女性のもとにかへるといふ構想である。愛しながら、意氣のために少年を捨てる小睦の心もあくまで淸き繼母に育てられた女性もともに鏡花の好んで描く人物であるが、全體に少年の追憶を主とし、典雅な文章を用ゐて抒情味にゆたかである。好んで夜の世界、月の光、むさゝびの聲を出して、浪漫的傾向を豐富に示して居る。

通夜物語や歌行燈とは異なつた意味に於て鏡花の特色を發揮して居るのである。

三　鏡花の超現實的作品

さうして鏡花に於ては如何なる現實を描いても、そこに神秘的な超現實性が加はつてくるのであるが、一方に鏡花は純粹な超現實的な作品をもなして居るのである。否鏡花の特色はこゝにあるといふ說もあるのである。さうして是等の超現實的な作品にも觀念小說の發展としてある觀念を表現しようとした作品と、たゞ幻怪の世界そのものを描いた作品とがある。高野聖や黑百合の如きは前者であり、吉原新話の如きは後者である。高野聖は高野の說敎僧と旅にあつて一夜をあかした時にきいた說話としてある。さうしてこの作に於て男性と女性との關係を明らかに示し

てあるのである。むさゝびや牛や馬や猿になつた多くの動物は、女性に對した男性そのものを現はして居る。女性に對する執着の心が起つた時、それは馬であり、猿である。美しい淸水で女の裸體の姿を見て慾念を起す時、最早女性の囚はれであり、女性によつて制御せられるのである。而して白痴の男こそは愚かなる世の夫である。道念の堅い旅僧は初めて女性に對抗して立派なる男性となり得るのである。美しき女の裸體の姿を白桃の花と觀じ得る所に暖い息をかけられても自若たることが出來る。然しそれさへもともすればその道念の力はにぶり勝ちである。時に馬や牛の心が起るのである。神怪なるこの一家の光景はやがて作者の見た人生に於ける男と女との葛藤の縮圖である。女性を得んとして集る多くの男性はかくの如き醜きあはれむべきものである。女に對する欲念にひきづられる夫はかくの如き白痴の憐れむべきものである。而して蛇の横はる道、蛭の降る道は人生の嶮岨を示したものである。かくしてこの作品は人生に對する象徵であると言へる。然しながら、そこには女性に對する讃美の情が見える。虐げられる女性の運命とともにかくの如き美しき多くの男性を征服し得る女性の存在を示して居る所に作者の女性觀

が見えるのである。

更に幻怪の趣に富んで規模雄大な作に黒百合がある。人跡至らぬ神秘幽幻の世界に咲く黒百合を得たいと望む知事の姫君の頼みを果さうとして、花賣少女お雪がその神秘の世界に足をふみいれると、お雪を救はんとして華族の若君の瀧太郎もその世界におつかける。而して黒百合を得たお雪をば大鷲が襲ひかゝるのを瀧太郎は救ふ。この死の危險を冒す事によつて瀧太郎はお雪の愛を得ようとする。しかしお雪は盲目の夫のためにあくまでも操を守るのである。この作に於ける黒百合は人生の理想の象徵であらう。メーテルリンクの青い鳥の如く、このあるべからざる黑百合は人生の理想そのものである。これを得るものは純眞なる心をもつお雪にして初めて可能である。而も義俠の若人の助けなければこれを得ることは困難である。この理想を得ようと望み得るものは純なる心を以て向ふものにのみ可能である。瀧太郎は華族に生れて幾多の惡を行つたけれども、女賊お兼にさとされて忽ちその惡からはなれた程純眞な心の持主である。この人の知らない所から不思議なものを得たのが瀧太郎であり、お雪でもあつた。單に人の世の欲念に生きるも

のは黒百合咲く世界に於ては忽ちになげとばされて了ふ。たゞ正しく求むるものによつてのみ得られるのである。かくして黒百合は理想を求める世界を描いた所に人の世の男女性の姿をそのまゝ描いた高野聖と亦別の境地があるのである。

さうして高野聖や、黒百合には觀念が明瞭に見られるが、たゞ幻怪そのものを描いたやうな作品として吉原新話がある。吉原に於ける怪談會に鳥の死骸をもつた命の取あげ婆が忍びこんでこの中の誰れかの命をとらうといはれて一座どよめいたのは死の世界の眼前にある事を曝露されて、今更ながら驚く人間の愚かさを嘲笑して居る。

　蠅よ蠅よ蒼蠅よ一つ腸の中を出されボーンとやや殿、上臈たち私がの今此處を引取る序に蒼蠅を一つ申さう。ボーンと飛んで額、頭、首、背、手足、殿たちの身體にボーンと留まる。其を所望ぢや物干へ拔いて大空へ奪つて歸らう。名告らしやれ、蠅がたからば名告らしやれ、名告らぬと卑怯なぞ人間は卑怯なものと思ふぞよ、笑ふぞよ。

その他彼の幻怪を描いた作品は多いが、是等を見ると觀念的傾向を有するものより

も幻怪そのものを描いた作品の方により物凄いものを感ずるのである。さうしてその理由として幻怪そのものを描くに現實に材をとつたものが多い點もあげられるのである。即ち高野聖や黑百合のやうな超現實的境地よりも現實の吉原、現實の上野に幻怪が現れる方がより物すごさが作ふ。かくして幻怪なる世界の中から現實の姿が現れる。勝氣な女性、欲念に燃える男性それらが何時の間にか馬となり、半となり、妖婆となる。その現實的な要素が多くなれば照葉狂言や湯島詣になるのである。さうしてより超現實的要素が多くなれば黑百合、高野聖になるのである。

もとより彼は幻怪の世界を多く現實に求めたけれども、時間は多く夜に求め、月を配した、照葉狂言の如き殆ど幻怪は現れないのであるが、殆ど時を蒼白い月の照る夜とした事によつて自ら一種の神秘的な氣分を作り出して居る。高野聖にしても夜に於て人間の化した動物がその執着をおこして家の外をとびまはる。そこに現實を舞臺としたけれども、現實を一の神秘的な世界と化し去つて居るのである。而してその神秘的な世界に活躍するものは多くは物すごい程に美しい女性である點に、一層その浪漫的な幻怪趣味が高まるのである。

さうして以上のやうな鏡花の作品の中でどこに最も代表とすべき作品があるかといふ點になると、高野聖の如きが多く擧げられる。それは觀念の最も明瞭な點に於て如何にもはつきりとした作品である。しかしかういふ作品は餘りに觀念的であつて、具象性が乏しいそれは鏡花の初期の觀念小説の傾向をとつて、それを超現實的世界の中に現さうとしたに過ぎない。むしろその觀念をかくした幻怪物の方により多くの具體性がある。さうして更に進んでは歌行燈の如き作品こそ鏡花の最も特質を發揮した作品ではなからうか。高野聖と歌行燈との優劣論は鏡花論に於ての重要なる焦點であると思ふ。

さうしてそれらのすべてを通じて鏡花の獨特のものはその文章である。彼は表現に際しては卒直な表現をさけて、一語一語を霰の降るやうに跳躍させるのである。手爾乎波や述語を省略して名詞と名詞とを點綴してそこに、感情を飛躍させるのである。かくの如き傾向は紅葉の二人比丘尼などにも見られる所であるが、更にさかのぼれば西鶴の文章におふ所があるのである。而してその傾向を更に甚しくして獨特の文章を創造したのが鏡花であつたのである。それは一面からいへば强ひて

難解にし、誇張した表現であるともいへるが、その一語一語の中にひらめく光とつやとは我々の感覺に强い刺戟を與ふるものがあるのである。彼が次の時期に起つた自然主義時代にもなほ獨自の境地をそのまゝに維持して今日にまで至つて後に新感覺派などと近い表現を見出すのも興味ある點であると思ふ。

四　抒情詩の成立と若菜集

一　詩形の試み

筆を詩歌に運んで見たい。先づ長詩に就いて考へる。井上博士等三氏によつて作られた新體詩抄によつて新體詩が文學形態として認められたが、それから二十年代の終り、藤村、晩翠時代に至る迄には、種々の經緯が見られる。この點を少しく觀察して見る。

新體詩抄の時代は未だ長詩の形式が、成立したといふ丈けで、形式内容ともに粗笨淺薄を免れなかつたのであるが、二十年代に於て先づ形式的に次第に齊整されて來るとともに一方に、内容も次第に洗練されて來たのである。

こゝで詩形に就いて考へて見るに、明治の長詩も七五調を基礎として居る事は明らかであるが、この詩形以外に出て種々の試みをなして居るのである。それは藤村晩翠以後の象徴詩時代にも見られる所であるが、二十年代に於ても種々行はれて居るのである。明治十五年の新體詩抄も用語は蕪雜であつたが、形式は七五調であつ

たのである。

然るに二十年代に至つて八七調・八六調五五調・五七調・五七五調・十十調といふ樣に種々の形式が現れて來たのである。かくの如き詩形は單なる形式に過ぎない樣であるが、而も是等の形式によつて現れる感情・情緒の相違といふものは著しきものがあるのである。是等の詩形の相違を見るに當つて、その基本は如何なる數であるかは論議のある所である。即ち基礎を五字七字に置く立場と一二字にまで分析する立場と二三字を基本とする立場とに分れる。

詩形の基礎を五七におく事は有力な立場で、古くから行はれて居り(五十嵐氏の國歌の胎生及び發達もこの立場をとつて居られる)、二三四字を單位とする說は、三十年代に於て岩野泡鳴が說き、八木又三氏の和歌形式論に於て精細に論じてある。一二を基礎とする立論は土居光知氏の詩形論などで說かれて居るのであるが、私の考では五七字を基礎とする考と、一二字を基礎とする立場は異なつた性質のものであると思ふ。即ち五七は呼吸から來て居るのであつて、一呼吸は五字から八字迄の二句が最も適當であると思ふが、殊に五音七音は一呼吸として最も適當である。而して

一二字は拍節拍子から出發して居るのであつて、五七調も拍子から見れば、この一二字に分けられると思ふが、之は純粹の樂音的な音節であつて言語的な音節ではない。この詩形の本質的な考察は二十年代には行はれなかつたのであるが、實際の作品によつて種々試みられたのである。

先づ落合直文の孝女白菊の歌を見ると、これは井上哲次郎博士の漢詩を譯したのであつて、形式は七五調である。が前期の新體詩抄に見える七五調とは違つて詞句が洗練されて純粹感情の世界にほゞ入り得るのである。

阿蘇の山里秋ふけて
ながめさびしき夕まぐれ

然しその與へる感情は在來の和歌の與へる感傷的な哀感であつて、生々とした力に乏しいのである。敍事詩としての構想も幸うすき一少女が中心となつて、それに對する甘き同情を要求するのであつて、清新なる内容といふ事はいへないのであるが、讀んで作爲的とか蕪雜といふ感じが起らないのは、直文の詩人的素質を見る事が出來るのである。この七五調の洗練されたものを求めると、二十三年に出た宮崎湖處

子の歸省の中にある詩の如きがあるのである。

別れてはまた　あふことの
ありやいつぞと　知らねども
戀しき人は　ふるさとの
おもひいでにぞ　殘りける

その感情は未だ深くもなく新しくもないのであるが、白菊の歌が叙事詩の形をとつて居るに對して之は抒情詩であるだけに、感情のやゝ複雜なる點と力強さとを見る事が來るのである。之を形式の上から見れば、白菊の歌には七字句を四・三もしくは三・四に用ゐるのが普通であるのに、これは五・二の句を用ゐた事も格調を力強くするのに力があつたと思はれる。

この七五調を主として守るものに對して、種々の詩形を試みたものに山田美妙がある。美妙は作家として抒情的なかつ清新な作を以て立つたのであるが、新體詩の上に於ても日本韻文論といふ詩論を國民の友に發表するとともに稍々清新な感情內容をば種々の形式のもとにもつた作品を發表して居る。例へば薔薇の使といふ

作を見ると、次のやうな八六調である。

心をさとりて　うけてゑがほ
枯れゆくまでもと　胸にかざす
形はしぼめど　やはか心
心は末まで　もとのまゝに

八六調は七五調と同じく流麗ではあるが、七五調の如く一句一句で斷絶せずに、感情の波が漂渺として餘韻を示して居る樣に感ぜられる。そこに感情の浮きたつ所が見えて、日本在來の寂しみのある和歌的感情と違つたものを感ずるのである。がこの形は四四、三三といふ形になるために、全體のリズムは變化に乏しい嫌があるのである。

この八六調をば更に大きな形としたものに五七五調としたものがある。

靜けさを　たゞなつかしき　母として
かぎろひを　たゞいつくしき　つまとせん

がこの三句の詩形は一行が半ばで切れる樣な感があり、それを續けて讀まうとする

と、稍々停滯する樣な感があるではなからうか。之に反して五五調もしくは五七調は、力強い感じが起るのである。

雁過ぎて　殘燈青く

ねやの戸に　蟲歌をよす（醉沈香）

の五七調や

月冴えて　星くらし

耳盲ひて　さとくきく

永き日に　飽く人ぞ

短しと　世を思ふ（世はそのまゝ）

の五五調の如き、ひきしまつた格調をなして居る。然し五七調は萬葉時代の原始的詩形であり、五五調に比べて遙かに軟かな格調をなして居るのである。

殊に同じ詩の中に在る

鳳凰の　春も　夢なり

白き月ゑがほもにがし

となると感じの異なるのは、詞や内容の關係もあると思ふが、五七調の有する特質のためでもある。美妙はかくの如く詩形の上で種々試みをなしたのみならず、口語詩をも作つて居るのである。

磯でつみたる　つぼすみれ
これみよがしの　衣紋どめ
色がくろむを　潮かせに
たゞなら誰れが　吹かれうぞ（つぼすみれ）

是等を見ると、美妙は形式的に新詩形を試みたのみならず、詞句の上に於て種々新しき試をなして清新なる感情を表さうとした事は想像されるのである。

がこの時代に於て詩人として美妙よりも優れて居つたのは中西梅花であつて、その詩集である新體梅花詩集は個人の詩集では初めてのものである。そして形式上に種々試みをなして居る。

浦のとまやの　あけぼのゆかし
白く鷗を　そめぬいて

浦のとまやの　　あけぼのゆかし
　そなれ松風　　さつさつと

の如きは七七と七五とを交互に用ゐたのである。がその思想や感情には、特に新しいものは見られなかつたのである。

二　内容の進展

然しこの時代に於て森鷗外等の新聲社の譯詩「於母影」は譯詩を主として居るが、新體詩の進展の上に大きな意義がある。形式の上に於ても西詩の自由な表現をそのまゝとりいれて居る。「ミニョン」の歌を見ても

立わたる　　霧のうちに　　驢馬は道をたづねて
いなゝきつゝさまよひ　　ひろきほらの中には
もゝ年經たる龍の所　　えがほにすまひ
岩より岩をつたひ　　しら波のゆきかへる
かのなつかしき山の道を　　しるやかなたへ
君とともにゆかん

と十十調の中に、果しない情調がたゞよつて居る。これは八七調その他の詩形に於ても、同樣な効果を與へて居る。

於母影の中には七五調もあるが、この七五調自らの中にも發展があるのである。さうして、歸省の七五調などから於母影の中の七五調に接續する。於母影の笛の音といふ長篇の如きは

舟しはつれば夕日かげ　波のあなたにかたぶきて
さらぬもさびしきひとり旅　かねの聲さへひゞくなり

の如くさすがに清新なるものがある。一體に於母影の詩には心の底からほどばしり出た重々しい憂鬱の感情が見える。そこに在來の感情と違つたものがあるのである。之は內容にもよるのであるが、この形式が與つて力ある事は同じ題材でも八七調を七五調にかへる時に、その感情が變つて感せられるによつても明らかである。

更に於母影の中には漢詩もある。

鬼界之島在何處　雲濤浩渺不可渡
五穀不生田土疲　山谷深沮多大樹

維昔治承戊戌秋　平氏威權加八洲

而して西歐の詩の影響は浪漫的傾向と結びついて北村透谷の詩となるのであるが、其の前に外山博士等の新體詩歌集を一寸見ておきたい。

これは明治二十八年に刊行されて居るが、その前からの作もあると思ふ。明治十五年に出た新體詩抄は多く譯詩であり、かつ形式も七五調であつたが、この新體詩歌集では殆んど散文詩といふ可きものが外山博士によつて作られた事は、この時代の詩形の種々の試みに刺戟されたものであると思ふ。外山博士はその序の中に今行はれる詩形には二種あるとして、一は「峯の嵐か松風か」の形式もしくは俊基朝臣東下りの類であり、一は新體詩抄類であるとし、こゝに新しき形式を試作するといひ、在來のものでは予の思想、予の感情を感情的に語らむに不便であるとし、七五調や五七調は抵抗力少なく平穩に輕々と舌の動くために便利であるが、種々變化ある思想及び情緒は、かゝる一定窮屈なる詩歌を以てはうたはれないとしたのである。かくて博士の作られた形式はたとへば、旅順の英雄可兒大尉の如きを見ると散文的である。

開闢以來未だ嘗て今日の如く國光の輝けるはなし。開闢以來未だ嘗て今日の

如く我邦人の名譽の高大なるはなし

しかし詞句の洗練されたものもあつて、安政の地震を歌つた詩の如き

今も尚忘れざるは　　久しき昔の此夜のことなり

實に有難きものは母の愛なり　　母は其身の危きをも顧みずして一心に

子を助けんと爲しゝものなり

と感情のあふれて居るものもあるが、未だ詩として完成されたものとは言ひ難い。

二十年代の長詩に於て更に注目すべきは文學界一派である。それ等の中、先づ第一に言ふ可きは透谷である。北村透谷の特質の最もよく現れて居るのは文藝評論であつて、浪漫主義的文學論は女學雜誌、文學界等に於て發表されて居る。もとより彼の詩も未完成のものが多かつたが、其中に藝術の爲めの藝術の立場をとるものと反對に、人生の爲の藝術を力強く主張した點に於て注意すべきものがあると思ふ。殊に蓬萊曲の如き劇詩的形式を以て其熱情を表現して居る所、歴史的意義が大きい。

雲の絶間もあれよかし

わが燈火なるべき星も現れよ

この身さながら浮萍の
西に東に漂ふひまのあけくれに
なぐさめなりし此の靈山(みやま)

とある如きよくその特質を示して居る。それは藤村氏が文學界に古藤庵として發表した琵琶法師等の劇詩を生出す動機ともなつたのであらう。

三 若菜集

しかしこの時代に最も完成された詩は藤村の若菜集であつて、若菜集以前の新體詩はこゝに一の結晶を見たかの感がある。その意味で若菜集に就いて少しく考へて見たい。若菜集はすべての人の心に通ふ抒情詩であるが、抒情詩の內容として戀愛感情と別離の感情とは先づ最も著しいものであると思ふ。戀愛と別離とは距離の感情であつて、戀愛は一にならうとする感情であり、別離は別れてゆくのを痛む心持である。即ち戀愛には未來に對する憧憬が伴ふのであり、別離には過去に對する追憶の感情があると思ふ。若菜集にもこの二つは先づ見られるのである。而して戀愛感情を見ると、純粋憧憬の世界をうたつたものと、官能的肉感的の戀をうたつた

ものとある。

例へば「初戀」といふ詩にはこの憧憬的な心持が見えて居る。そこには悲しみもなく花やかな情感が見えるのである。

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の實に
人こひ初めしはじめなり。

然るに「四つの袖」や「傘のうち」といふ作を見ると、憧憬的の心持といふよりは、官能の強さを見るのである。

をとこの息のやはらかき
お夏の髮にかゝるとき
をとこの早きためいきの
霰のごとくはしるとき

この一句一句の中には初戀の純なものと違つた官能的のものを見る事が出來る

のである。感情がもつれて粘着力を持つて居る事を感ずるのである。

顔と顔とをうちよせて

あゆむとすればなつかしや

梅花の油黒髮の

亂れて匂ふ傘のうち

の如きも四つの袖と同じ感情を與へるものと思ふ。年代から云へばこの憧憬的の戀愛詩の方が先と思はれる。而して藤村氏の戀愛詩は女性を中心とする戀愛詩であつて、女性にのみ命を棄てる樣な戀があり得るとして、小春や梅川やお七の情趣的な戀をたゝへて

をとこのこひのたはぶれは

たびにすてゆくなさけのみ

といつて居るのは、純粹感情の世界にひたつた藤村氏としては當然であつたと思ふ。次に離別の詩を見ると死を悼む感情と、遠く離れるのを悲しむ感情とがあるが、挽歌の方が絶望的な感情であり、別離の歌に甘い憂愁をもつて居る事は明らかである。

しかし若菜集に於ては死の悲しみも悲哀の中に花やかな節奏が見られるのは、作者の若々しい情感があるためと思はれる。中野逍遙の死を悼んだ挽歌や「母を葬るの歌」にも甘い憂鬱が見られる。

悲しいかなや流れゆく
水になき名をしるすとて
今はた殘る歌反古の
ながき愁ひをいかにせむ

この戀と別れの感情は春と秋との感情の相違である。春の感情には憧憬と歡喜との感情がみられ、秋の歌には愛惜と寂寥とが見られる。例へば「春の歌」を見るとそこには躍りたつ樣な歡喜の聲が見られる。

春はきぬ　春はきぬ
霞よ雲よ動ぎいで
氷れる空をあたゝめよ
花の香おくる春風よ

眠れる山を吹きさませ

七五調でもいかにも明るい感じがするのである。「春の曲」にしても同様である。之に反して「秋風の歌」の如きには

ゆふべ西風吹き落ちて
あさ秋の葉の窓に入り
あさ秋風の吹きよせて
ゆふべの鶉巣に隱る

の如く蕭條の氣逼るものがあるが、それにもなほ花やかなものがあると思ふ。かくして戀愛にも離別にも春にも秋にも花やかな感情がうたはれて居るのであるが、然しながら藤村の若菜集より轉向を示すべきものとして「深林の逍遙」と「鷄」の二つを擧げる事が出來る。前者には冥想的の心持が見られ、後者には甘い情感の夢より覺めて現實的の惱みに目を開いてきた點が見られる。

力を刻む木匠(こたくみ)の
うちふる斧のあとを絶え

春の草花彫刻の
鑿の韻もとゞめじな

といふ起句を見ると重々しい考へ込む様な感情を認めるが、山精の

人にしられぬ　たのしみの
ふかきはやしを　たれかしる

人にしられぬ　はるのひの
かすみのおくを　たれかしる

にしてもその傾向を認め得るのである。而してこれと反對に「鷄」は二羽の雌雄の鷄が餌をあさりに野に出た時、一匹の雄鷄が現れて互に爭ひ雄鷄は殺されて了ふといふ所に、人生に於ける生存競爭を暗示するものがあるのである。それだけ歌ひかたは質實である。この二つの傾向が夢の覺めた後に行く可き道であると思ふ。が藤村は寧ろ後者であつたと思ふ。

その點は落梅集によつても知る事が出來るのである。然しながら若菜集の全體

を貫く色調は、若々しい花やかな情感の世界であつた。その意味に於て若菜集の巻頭の「おえふ」は若菜集の中心となるべきものと思ふ。處女の過ぎてゆくのを咏歎した聲が見られるが、そこには春の鐘の音のいつ迄も消えない様な情感が搖曳するのを覺えるのである。

水静かなる江戸川の
ながれの岸にうまれいで
岸の櫻の花影に
われは處女となりにけり

都鳥浮く大川に
流れてそゝぐ川添の
白菫さく若草に
夢多かりし吾身かな

の如き

櫻の霜葉黄に落ちて
ゆきてかへらぬ江戸川や
流れゆく水靜にて
あゆみは遲きわがおもひ

の如きこれを見ることが出來るのである。この感情の純粹にして而もあこがれと寂しさとを併せ有して居る所に、日本在來の詩的感情を融合し統一したやうに思はれるのである。七五調の殆ど行きつく所迄行つた樣に感ぜられるのである。而して若菜集を見ると七五調以外にも他の形式を用ゐて居る。たとへば「知るや君」といふ歌は

こゝろもあらぬ秋鳥の
聲にもれくる一ふしを
知るや君

の如く、七五の二句の終に「知るや君」の繰返を加へて居るが、餘り効果があるとも思はれぬ。望潮といふには毎句の初めに「いざさらば」の起句を與へて居る。月光といふ

歌を見ると八七調を用ゐて居る。

なさけは說くとも　なさけをしらぬ
うきよのほかにも　おちゆくわが身
あかさぬおもちと　この月かげと
いづれか聲なき　いづれかなしき

又「逃げ水」といふのは八六調である。

ゆふぐれしづかに　ゆめみんとて
よのわづらひより　しばしのがる

きみよりほかには　しるものなき
花かげにゆきて　こひを泣きぬ

かくの如く七五調でないものもあるが、主とする所は七五調であり。この七五調を最も有効に用ゐたのが若菜集である。而して若菜集の中にも鷄の如き或ひは天馬の如きや、強い感情を表して居るものもあるが、多くは弱々しい中に純粹感情を表

さうとしたものである。藤村のもつ感情は複雜でもなく單純であるが、少しも理智に災されざるものである。我々が民謠に心をひかれるのはその單純な然し純粹な世界である。それは人間にとつて何日迄も亡びない感情である。この意味に於て藤村の若菜集のもつ感情は人間の成長してゆく過程に於て一度は必ず經驗すべきものと思ふ。

なほ藤村氏と同時代に二十年代の末に於て長詩界に出でゝ後の展開を思はせる作家としては、たとへば岩野泡鳴氏の如きも既に明治二十六年に「十字架の影」といふ樣な詩が出た。「樹だま集」「石切り」を初め二十七年には「魂迷月中刄」といふ樣な長篇詩も作られたのである。泡鳴氏は詩形の上にも色々試みをされて居るが、寧ろ思索的にすぐれて居るが、しかし氏の思索は內へ深く冥想するのではなく、自己の思想の立場から世を批評し痛罵するといふ傾向があつて、詩人らしいしつとりした味に乏しい嫌ひはあつたと思ふ。

はじめ無くばわが身も
またをはりが無いのに

思想以てうまれ來り
　思想以てこのわづらひ

といふ如き魂迷月中双の中の一節で口語で試みて居るが、詩的な趣に乏しいと言はざるを得ぬ。

　又大西操山や湯淺半月氏なども長詩を試み、鹽井雨江氏の「深山の美人」、武島羽衣氏の「墨染櫻」や「小夜砧」などは帝國文學に現れるに至つたのである。が殊に注意すべきは土井晩翠氏と與謝野鐵幹氏とが現れてきた事であつて、晩翠氏は強い格調を有する冥想的な詩を作つて藤村氏と並び稱せられるに至り、鐵幹氏は歌壇に活動するかたはら長詩にも藤村氏の若菜集によつて一の完成に達した。

　長詩は藤村自身の展開に於てもこの浪漫的傾向を發揮して、明治三十年代に「一葉舟」「なつぐさ」「落梅集」を出して居るのであつて、その傾向は若々しい情熱から沈靜的になり冥想的になると共に、一面には勞働を歌ひ生存競爭を歌ふといふ如く現實的になり來つたが、藤村氏の詩は中心としては純粹抒情的であつたのである。

五　抒情詩より象徴詩へ

一　若菜集より落梅集へ

前節に於て藤村の若菜集が出でゝ長詩が内容形式ともに完成したといふ點を考察したが、それに引き續いて、象徴詩の全盛になる三十七八年の頃までを概觀して見たいと思ふ。

藤村の若菜集に於て、その情熱的な傾向が主調となつて居るが、漸く生活といふ方面に眼を向けたといふ事は既に見られた所である。若菜集以後に於ける彼の詩の展開もそこに基礎をもつて居るのであつて、若々しい情感の世界から人生、生活に這入つてゆかうとする傾向を示して居るのである。卽ち若菜集の後明治三十一年に「一葉舟」と「なつぐさ」とを出して居るが、これ等の集には情熱的な戀愛よりも、藝術に對する愛の感情が現れて居ると思ふ。たとへば「なつぐさ」の中の「晩春の別離」の如きにも、別れにのぞんで藝術的精進をこひねがふ心が溢れて居り、一葉舟の中の「白磁花瓶賦」にも

みしやみぎはの白あやめ
花より白き花瓶を
いかなる人のたくみより
生れいでしとしるやきみ

といふ所にも藝術愛の精神は溢れて居るのである。而して既に若菜集に見える様な情熱は沈靜して居る樣に思はれるのであり、一面には現實に入つてゆかうとする態度が見られるのである。

而して明治三十三年の落梅集に於て彼は青春の詩から別れようとして居るのである。最初の「小諸なる古城のほとり」に於ては純粹抒情的の中に叙景的叙事的の要素をとり入れて夢の世界から新しき世界へ進み行く道程にたつ旅人が現はれてくるのである。

淺くのみ春は霞みて
麥の色はつかに青し

といふ叙景的な句と

旅人の群はいくつか
畠中の道を急ぎぬ

といふ叙事的な句を統一するものは

雲白く遊子悲しむ

といふ抒情的咏嘆であるが、それ丈け若菜集などに比して複雑な情趣をうたつて居るのである。而して日々戀愛をうたふにしても「胸より胸に」の如き複雑な情趣を見る事が出來る。單なる感傷から内面的に深く入つて居るのを感ずるのである。直接的よりは譬喩的に進んで居るのであり、漸く起らんとする象徴的手法を部分的ではあるが含み來るのである。

おぼつかな春のかすみに
うち煙る夜の靜けさ
仄白き空の鏡は
俤の心地こそすれ

而して落梅集の中の「勞働雜詠」に於ては、生活そのものに這入つて行かうとする心持

がゝあざやかに見られる。

諸羽うちふる鷄は
咽喉（のんど）の笛をふきならし
けふの命（いのち）のたゝかひの
よそほひせよと叫ぶかな

そこに勞働の神聖をとなへ綾きぬにつゝまれて夢死するよりも襤褸を纒つて活きて立つ可きであるとうたつて居るのである。かくの如き態度に進んで行く所に藤村の本質的な所は存するのである。然しながら、藤村の詩のもつ特質はその優美な情趣と和らかな節奏にあつたのである。顫へる様な感情の細いリズムは單純ではあるが、まことの心から出た哀感がある。青春の戀、藝術に對する愛さういふものをうたふには、彼の詩は適當ではあつたが力强い行爲の世界をうたふには適當しなかつたと思はれる。從つて彼が青春の戀から生活に入つてゆく事は正しき道であつたが、生活をうたつた彼の詩にはそれを肯定せしむるだけの力强さがないのである。彼はこれを知つて、詩の世界から小説へ去つて了つたと思はれる。彼のこの

展開は文學思潮の展開を代表して居ると思はれるのである。

二　晩翠・鐵幹・泡鳴

この藤村と相對してゐたものに土井晩翠氏がある。晩翠氏は藤村氏と異なつて漢詩的な表現を以て力强い感情をうたつた。それだけに誇張はあり、また思索的であるやうで、なほ思想の外面をうたつて內面に深く入つてゐない感がある。眞の意味の思想的詩人ではなかつた。しかし與謝野鐵幹氏の新體詩と比較すると、同じく力强い男性的な氣魄は類似して居るが、やはり晩翠氏に於て思想的なものを多く見出すことが出來る。「萬有と詩人」といふ作を見ても「暮鐘」といふ作を見てもそれを感ずる。さうして晩翠氏に於て殊に重んずべきは敍事詩人としての傾向である。それはもとより事件の委曲を盡すといふよりは、抒情的なものと調和せしめて敍事を進行させる點である。星落秋風五丈原の如きは晩翠氏でなくてはうたへないものであつた。雄渾にして悲壯な敍事と抒情とは若きものの心をとらへるに十分であつた。浪漫的精神をこゝに認めることは出來るのである。氏が藤村氏とならび稱せられたのは不當ではなかつたと思ふ。たゞ晩翠氏は藤村氏の樣に小說に轉向す

ることをしなかつた上に、詩に於ても時代の動きに從つて展開することが出來なかつたことが惜まれる。天地有情の傾向をいつまでも持續しようとする所抒情詩より象徵詩へと向ふ傾向が氏を後に殘したと言へる。もとより氏もこの詩壇の動きを見なかつたのではなからう。氏の潔癖が推移することを好まなかつたのであらう。

さうしてこの抒情詩より象徵詩へといふ展開の途上に於て岩野泡鳴の新體詩に一の意義を認めたい。もとより泡鳴には藤村、晩翠氏のやうな表現の技巧はない。詩心から言つてもやゝ粗雜である。しかし泡鳴が一方に詩論を發表し、詩形の種々なる試みをなしたことは注意されるし、同時に氏が眞劍に物を考へる傾向は、生々しい氏の實感と相俟つて、注目すべき役割をつとめたのである。

氏が詩作家としての時期は明治二十年代の末から大正に迄渡つて居るが、初期に於ては未だ氏の特質は出て居ない。明治三十二年に嘉播の親といふがある。叙事詩的な詩であるが、詩句も感情も詩的燃燒が見えない。

人はも住める西銘の

名ある村をさ嘉播の親
子をば五たり持てれども
みたりは惡しきものにして

明治三十四年にそれ迄の詩を集めた露じもが出でて居る。感情も別に特質がなく平凡であり、藤村の如く獨自のスタイルも見られないが、既に詩形に於て七五調を固守せず、種々の形を作り出さうとしてゐたのである。「亡兒の寫眞に寄す」の一節

その輝けるまなこには
淸き油を湛へつゝ
呼べばこなたもふり向きて
綠の玉の動くらん

の如き七五調によつたもので、やゝその沈鬱な思想の外特徴はないが、十音詩として試みたものは

いさむ　いくさ　二十萬騎
よろひの袖　きら〳〵

あけぼの

金鶏あしたの消息寄せて
ひんがし靉く紫雲の綻
天風無限の愛より吹きて
あゝ今世界は新に生る。

恒星惑星胎より出で、
虚空の途踏むこの日のあした、
たてたて、天地の正氣を吸ひて
行くべきわが道無窮のあなた。

東海遊子吟　土井晩翠　明治三十九年六月刊

ああ大和にしあらましかば

ああ、大和にしあらましかば、
いま神無月、
うは葉散り透く神無備の森の小路を、
あかつき露に髪ぬれて、往きこそかよへ、

白羊宮　薄田泣菫　明治三十九年五月刊

あらぬ虹も世の歡喜
　こぞつて帶ぶる矢えびら

の如く、十音を三三四の如く誦するのである。

　みやこ遠く立ちいで
　歸り來てし　ふるさと
　ふるきことの　思ひで
　愛は忍ぶ　橋あと　（故郷の秋）

この詩形を見るとリズムが斷續して小流れの音をきく樣な感情はあるが、大きなもしくは深い感情は見られない樣に思ふ。

又五五調をも試みて居る「常世にも我はあり」といふ詩の如きはこれである。

　日は出でゝ　日は沈む
　みそらにも　海の水
　うみ邊にも　そらの色

又多少變格をも試みて居る。

むかつきの風に　吹かれて
あやの眞袖や　寒からん
負ひ射矢の
そよとも靡かぬよそ人に
相もたゝれしきぬ〳〵の
うらみはあはれ
をみなの果か
（小督）

は五七、七五調になつて居るが落つかない感を免れない。

また口語詩をも試みて居る。

わしが　をとこは
淡路の船頭で
須磨や　明石は
一つのかぢで

が詩としては未だ試を出でないのである。更に夕潮といふ詩集が、それ以後の詩を

集めて明治三十七年に出て居る。この集に至ると未だ個性の乏しかつた泡鳴の詩に個性的な感情が漸く見られるに至つたと思ふ。而してその感情をば八七調・七六調・六四調等の詩形の下に表現しようとしたのである。たとへば「女護海島」は

白帆は遙かに、戀しきものよ　(8 7調)
をとこは心に賴みの綱か

「世外の獨白」は

岩にあら波音ぞ高く　(7 6調)
朝日のぼりてこゝろ寂し
われはいづこの果を來り
われはいづこの果に行くや

「海邊雜吟」には

君とふたり　たどりて　(6 4調)
濱べに出で　けふ又
ゆるき浪を　ながめて

こゝろうごく　夕かた

これを見る時、泡鳴のもつ感情は浪漫的なものであつて、その情感は沈鬱な重くるしいものであるが、深刻な惡魔的傾向は未だ見られないのである。が次の明治三十八年の悲戀悲歌に至ると、その浪漫的傾向から漸く別れを告げようとして居るのである。「三界獨白」に於て

あゝ君わが愛悲しき戀の
みだれをさそひて春は過ぎぬ

の如きを見ると、藤村の落梅集を思ひ起させるものがある。而も藤村は勞働を歌つて小説に轉じたが、泡鳴は同じく浪漫的態度から離れて行つた後は、尙詩の世界に於て冥想的から惡魔的傾向へ進んでいつたのである。それらは第四詩集の闇の盃盤、第五詩集の戀のしやりかうべなどに於て見られるのである。

要するに泡鳴は詩の研究に於て新體詩作法や詩史の如き注意すべき功績であるが、詩の創作に於ては比較的價値が乏しかつた樣に思ふ。

鐵幹・泡鳴の外にも幾多の詩人はこの時代に輩出した。河井醉茗、横瀨夜雨の如き

も注目すべく、譯詩に於ても尾上柴舟氏はハイネの詩を明治三十四年に譯し、上田敏氏は三十四年に「みをつくし」などによつて西詩を傳へた。しかしさうした中にも抒情詩から象徴詩へといふ機運は次第に盛んになつてきた。そこに藤村晩翠の時代から泣菫・有明の時代が現れてくるのである。

泣菫はすでに明治二十九年頃から詩壇に出で、處女詩集暮笛集は三十二年に現れ、三十四年にはゆく春が出て居るから、詩壇に出たのは餘り藤村氏に遲れては居ない。有明氏にしてもすでに二十七年頃に詩を發表して居るが、處女詩集「草わかば」は三十五年に現れ、その翌年に獨弦哀歌が出たのである。さうして藤村晩翠時代から泣菫・有明時代への推移はむしろ詩風の上から來たのである。泣菫氏の古典的傾向は、藤村氏の流麗な和かい傾向に對して澁い味であつたのである。有明氏の深みのある氣分情調的な詩も、若菜集の讀者には直ちに同感はされなかつたのである。

その上に泣菫は初期の暮笛集時代には措辭に於て古典的な語と漢語的の語とを用ゐ、時に詩味を失ふ樣な散文的な詞句が挿入されてあるのである。當時枯川氏が彼の詩の中から

誰に語らん和肌に
指をさはれば此は愛しや　（村娘）

瞳こらして見入るれば
うてなにぬれる栞の粉や

の如き句を出して非難してあるのも、泣菫氏としては非難されるべき點もあつたのである。

あゝ田に飛んで餌にあける
二羽の雀は一錢か

といふ如き句も流麗なる藤村を喜んだ時に於ては、詩味の乏しいのを非難されたであらう。然しながらこれらが適當に統一された場合には典雅な調をなしてくるのであり、そのやゝ粗雜とも思はれる箇所のある表現に於て、藤村よりも寫實的に事象を寫すと共に、藤村よりも力強い感情を藏して居るのである。彼は感情をやゝ寫實的客觀的の中に包んで居るために、表面に感情が出て居ない樣な場合もあるが、その

底に憂鬱の情も悲憤の聲もあつたのである。

彼が時事を歌つた歌の如きはその憤りが露骨に現れて居るのである。例へば「ゆく春」の方に見える「あゝ杜國」の如きはトランスバールの亡國を嘆じ、遺憤九首には政治家の無理想と無節操とを憤つて居るのである。

あゝ彼の尊き御名に依りて
正しき叫びを野に揭ぐるも
白色人種に答ありや
世の道まことに非道ぞ多き

是等は寧ろ詩の美を失つて居るが、戀愛その他の感情をうたつてもそこに强い惱みが現れて居る。

暮笛集の中の「兄と妹」といふ對話風の長篇詩を見ると、兄と妹との言葉をそのまゝに寫して作者の主觀が、表れて居ない樣で、而もその中に强い感情の潛んで居るのを認めるのである。傑作である尼が紅といふ作は四行一聯の詩が百五節もある長篇であるが、尼が浮世の風を見て官能的の欲をそゝられて行く點を描いて、純粹に淸い

戀愛とは異なる官能的な黠が見られる。

　許せ沙尼が身戀ありと

　幕引きかゝげ窺へば

　　うなじうちよせしめやかに

　春たのしむか諸人の

そこに複雜なる情緖の世界を感ずるのである。

かくて彼の戀には常に苦き涙があるのである。獲物といふ作に見えるやうな戀を爭つて狩くらべをしても雌雄の鹿を見てうつに忍びず。獲物をすて戀に破れ、はげたる頭に露をおんで曉今なほ山路はしるのが彼の戀の運命である。この重くるしい情緖は殊に三十四年のゆく春に於てつよく見られるのである。

　たとへば「夕の歌」に於ては、花やかな夢のさめた重くるしい人生の黄昏の聲がきこえる。而もそれが過去を追憶する甘き涙ではなくして、現實の上に縋りついて居る苦しさである。藤村の「勞働雜咏」の樣な晴れやかな歡喜の聲ではなくして憂鬱なしかし力のこもつた嗟嘆である。

汝が行く路の夕暮
遠き京の方知らず
磧(かはら)に冷えたる石に伏すも
絶えず祈りて地に呼べ

高きうてなものぞまじ
薫る衣も願はず
蹉蹉たる此世の長き旅に
いばら薊の路より
吾子ひきたき許りぞ

「暗夜樹陰に立ちて」に於ては、その現世にすがつても生きようとする希望もうせて、死と夜と闇とおそれの未來を思ひ、朗誦した唱歌の挽歌の調である事を感じて、現世を呪ひ死を願ふ絶望の聲を聞くのである。

運命人を痛めて

この歎きに歩ましむ
願ふは死の手か希望なくも
常の平和そこに在り

この陰鬱な境地から、更に、石彫獅子の賦を見ると、永遠なるものをうたつてそこに安心を得て居る樣にも思はれる。

番者に問へば石切は
木かげの夢に耽りぬと

確立した表現の中にその信念を語つて居るのである。而してそこから泣菫の流麗なる古典調も現れてくる。彼はかくの如く見るとその感情の進展の上から見て藤村の若菜集から落梅集への推移と、暮笛集からゆく春への推移は同一の道を辿つて居る樣に見える。しかしながら藤村が有する感傷的なそれだけはなやかでもあり、單純でもある感情は、これでは沈鬱な複雜なる感情となつて居るのである。而も何れも純なる浪漫的な氣分を基調にする點に於て同一である。而して泣菫は象徵詩時代に於て白羊宮によつて更に奥深く詩の殿堂を築きあげていつたのである。

さうして有明は泣菫氏よりも素質的に、象徴詩人であつたと見られる。すでに處女詩集「草わかば」を見てもその情感は纖細であつて、藤村や泣菫のやうな情熱的な戀愛よりも神祕的で複雜であり、かつ物思はしげな近代的幽鬱の世界をうたはうとして居る。「かすかに胸」の初めにかういふ句がある。

かすかに胸にけふはまた
むかしの海の響すと
ひとり寂しきうたがひに
山邊の翁のつぶやける

年老いた翁の胸にうかんだ過ぎた日の思出が、さびしい仄かな幽鬱となつて感ぜられるのである。

それははつきりした情熱的な悲哀でないだけに、奥深いもののあるのを感ずるのである。「夕つとめ」の

祈禱をあげよと星の界の
少女のひとりその聲は

愛の泉のしたたりと

の如きには宗教的な氣分の漂つて居るのである。戀愛的な感情をうたつても直面しようとする情熱的な戀ではなくて物思ひがちな戀であり心に思念する戀である。而して獨弦哀歌に於て彼は特有の詩形を創造すると共に、その情感は一層幽遠になり纖細になつて居るのである。「草やま」といふ詩を見る。

草やま草葉みどりに匂ひ靡き
かがやく日ざしおほひて絕間なくも
靜かに夢見うかるゝ身にし添へば
ああわがこの身さながらたゞよふ影

といふ一聯をよむと、草わかばよりも更に複雜な感情のたゞよふのを見るのである。彼は大正十一年に從來の詩の悉くを集めて居るが、それには彼の詩を改作して居る。彼はその時代に於て晦澁難解を非難されたのであるが、改作を見ると平易になつて居るのを覺えるのである。前の句も

草の葉しじに靡かふ草やまにぞ

かゞやく光にほひてうつらうつら
しづかに夢見うかるゝ甘しこの日
わが身も魂もさながらたゞよふ影

となつて居るのである。後者に於ては然しながら原作に見える様な幽鬱な嗟嘆は見られないのであつて、理智的な説明的に流れて居る様に思はれるのである。詩はその刹那の感動であつて、その感動を再びする事は不可能であるに拘らず、後の思索によつて改作したのは尊い表現を破壞したやうに思はれるのである。彼は後に詩に就いて次の様な意味に解して居る。

詩は直接の事象の刺戟を介して惠まれる暗示、卽ち感覺の綜合整調そのものの開展であつて換言すれば、自然の生命の感覺的表現である。

として居る。この點を更に敷衍すると大體人間が經驗する事象は複雜であつて享樂・苦惱・悔恨・昂奮・衰頽・誘惑・耽溺等の種々の煩惱があるが、これが一度ある衝動を受ける事によつて、暗示の世界の空氣に浸深する時、個人的主觀的に過ぎなかつた諸經驗が、始めて律動的に開展せられて客觀化されるのを所謂有明が感覺の綜合整調とい

ふのであつて、最近起りつゝある新感覺派などと類似した立場をとつて居るのであつて、こゝに象徴詩的傾向を見るのである。

有明がかくの如き傾向は西詩の影響が著しいのであつて、ロセッチーやキーツを愛誦しボードレールやベルレースに傾注し是等を飜譯して居るのであつて、上田敏氏の海潮音などとともに西詩を傳へる上に功績があつたのである。而して三十八年の春鳥集は象徴詩の初と言はれる者であつて、之より象徴詩が詩壇の中心となり、泣菫・有明の時代を現出したのであり、他の詩人も亦之に追髓して行つたのである。象徴詩時代は小説に於ける自然主義時代に匹敵するものであつて、之に就いては餘說で概觀したいと思ふが、三十年代の初期に於て、藤村、晩翠の時代から泣菫、有明の時代への推移は詩の發達の上に注意すべき現象と思ふ。

六　浪漫的傾向の短歌

一　落合直文の和歌革新

明治短歌に於ける第一期は舊派の傳襲に過ぎなかつたに反して、二十年代に於て漸く新しい機運に向つてきたことを知るのである。落合直文の短歌に於ける位置は絶對的價値は別として歴史的には俳句の正岡子規に匹敵するものがある。落合氏は長詩の上では特に新しいものはなかつたが、その表現に於て清新なるものを作りあげた。而して短歌界に於ては長詩に於けるよりも一層はつきりした新機運を導出したのである。がなほその特質は清新なる表現にあるのであつて、感情や物の見方の上に特に新しいものを多く求める事は出來ない。もとより景樹の系統を引いた堂上派から見れば内容に於ても新しい所があるが、落合氏のとらへた程度の内容は幕末の言道や曙覽などの新しい歌人のとらへ得た所であり、特に明治の新空氣を見出す事は出來ないのである。彼の歌に

　菲をくづす音ばかりして旅やかたしづかに春の夜は更けにけり

といふのがある。静かな春の夜の旅の情趣は十分味はれるのであるが、細川幽齋の衆妙集にある

やま人の住家とやいはむみだれ碁の音してふくるともしびの影（山館燈）

といふ歌に比すると、幽齋の歌には「住家とやいはむ」にしても「ともしびの影」にしても落合氏の歌に比すると陳套な所が見えるが、その着想は全く同一であると思ふ。

緋縅の鎧をつけて太刀はきて見ばやとぞおもふ山櫻花

この歌を見ると「緋縅の鎧をつけて」の如きに、清新な表現が見られ、山櫻花に對する聯想としては巧みに思はれるが、それ以上にこの歌から生々とした感動を見ることは出來ないのであり、又自然に對する深い凝視といふものをも認めることは出來ないのである。然しながら

小瓶をば机の上にのせたれどまだ〳〵長し白藤の花

の歌の如きを見ると、卒直に物をながめて居る事を感ずるのであつて、生々とした態度を見るのであるが、かくの如きはもとより少くして、多くはやゝ清新な表現を以て浪漫的ではあるが、微溫的であり、又空想的である感情をうたつて居るのが多いと思

はれる。二三擧げると

さわ〳〵とわが釣りあげし小鱸の白きあぎとに秋の風ふく

原町にめしひ二人が杖とめて秋の夕を何かたるらむ

の如き、第一首の第一、二句には清新な趣はあるが、下の句に空想的な點が見られ、第二首は全然空想的である。しかし

父と母といづれがよきと子に問へば父よといひて母をかへりみぬ

父君よけさはいかにと手をつきてとふ子を見れば死なれざりけり

の如きには眞情あふれて、人にせまるものがあるのである。たゞ直文が幕末の曙覽や言道に比してどの點まで進んだかには疑問がある。しかし桂園派の末流の行はれた時代に直文氏の與へた影響は大きいものがある。殊に直文氏が多くの門下を養成して明治短歌の革新をとげさせた功勞は紅葉、子規等とならんで注意されるべきである。明治二十五年に淺香社を組織してから與謝野鐵幹・金子薫園・尾上柴舟・鹽井雨江・大町桂月諸氏その他多くの歌人を輩出したのである。直文氏はこれらの門下に向つてそれ〳〵自己の個性のまゝに進展すべきやうにつとめたのであつて、題

詠を行つても、從來の題とは趣を異にして

梅散る乳母車に小兒ねぶれり

丹躑躅のかげに白き蛇ねぶれり

橋落ちて小僧かへらず

といふ如き淸新なる詩境を與へて居るのである。さうして直文氏の浪漫主義は與謝野鐵幹氏を生じ、金子薰園氏、尾上柴舟氏を出すに至つてその極盛に達したと思ふ。がそれらの中で鐵幹氏を中心とする明星派の歌は新派和歌の最初の主潮となつたことは否まれない。次にその點を考察したい。

二　明星派の短歌

明星派の短歌は與謝野鐵幹氏によつてはじめられるとともに、その弟子で後に鐵幹氏の妻となつた晶子氏の歌によつてその浪漫的特質を最もよく發揮して歌壇の中心をなすに至つたのである。さうして二氏の周圍に集つた多くの歌人によつて、その光は一層多きものとなつたのである。さうして明星派の機關雜誌としての明星は明治卅三年四月に發刊され、明治四十一年、十一月百號を以て一旦廢刊された

毒草

鐵幹
晶子 共著

一

絶句

ゆきずりにあゝただひと眸、それもえ
にしや、あゝただひと眸星のまなざし。
わが戀は火中の車、かた輪ぐるまよ、た
だに怨を殺せて燃えける。

毒草 與謝野鐵幹 晶子 明治三十七年五月刊

旅情

島崎藤村

星の歌

蒲原有明

白桃集

新派の人の花見



新詩社詠草(二)

明星 第一號

のであつて、その間が大體全盛期であつたと言へる。

鐵幹氏が從來和歌の中心を占めてゐた高崎正風を中心とする歌に反對した見解をのべたのは明治二十七年三月「亡國の音」(二六新聞)といふ文を發表して非丈夫的和歌を非難し丈夫の歌を主張したのに見られる。さうして二十九年七月に出た「東西南北」の序に「小生は詩を以て世に立つ者にあらず候へども短歌にもあれ、新體詩にもあれ、世の專門詩人の諸君とは大に反對の意見を抱き居る者に御座候。されど最早議論の時代にあらずと心得候へば、申し述べず候」とある言と併せて鐵幹氏の新しい傾向を見ることが出來るのである。さうして末松謙澄が明治三十年の正月の太陽に歌に對する見解を發表して當時の歌壇の傾向を非難して、景樹の模倣であつて懦弱優柔の風に陷つたことを說いたのに對して、鐵幹氏は讀賣新聞に反對論を書いて、優柔の歌はすでに今は失はれて居り、また景樹を模倣するのではなく、個性に從つて自己の歌をよむのが新しい歌の傾向であるとしたのである。これに對して謙澄は更に答へたのが同年の一月から二月にかけて讀賣新聞に發表し、同年の五月單行本とした國歌新論であるが、ともあれこれによつて、鐵幹氏の傾向は大體知られるの

であり、この點が更に正岡子規との對立となつたのである。ともあれ、鐵幹氏は丈夫の歌を主張した點に景樹の古今的傾向とは異なるのであるが、しかしその場合に鐵幹氏は力強い感情を率直に表現する萬葉的傾向よりは激越な表現技巧によつて、丈夫ぶりを表さうとする傾向となつたのである。二十九年の東西南北はかういふ傾向を代表するものであつて、その中の

韓にしていかでか死なむわれ死なばをのこの歌ぞまた廢れなむ

韓にしていかでか死なむ益荒夫のかばね埋めむよき山もなし

かういふ歌を見ると漢詩的表現技巧をかりて、大丈夫の精神を表さうとしてある程度まで成功して居る。それは土井晩翠氏の新體詩と同巧の立場である。若々しい情熱のみなぎつて居る時代には深くほりさげた情感よりも、かうした粗雑ではあるが、力のある表現の方が喜ばれたのは當然である。現實に深く足を下さない空想的な浪漫的精神と一致するものである。これは叙景的な題材をうたつても

十二宮むかしの榮華あともなし夕かせ寒く驢馬一つ立つ

思ふこといはむとすれば友はあらずさよふけてきく山ほととぎす

といふやうな感懐歌らしい表現となるのである。中には

青柳のかげゆく水に月見えて水鷄なくべく夜はなりにけり

の如き、純叙景的な歌もあるが、かういふ歌には鐵幹氏の特質はむしろ現れてゐないのである。ともあれかういふ東西南北の傾向は明星派の出發點として忘れられないのである。

然し晶子氏が次第に明星派の中心となるに從つて、鐵幹氏の歌も纖細な情緒の加はつてきたのであつて、三十四年三月に刊行された紫に於てはこの傾向が見られるのである。もとより纖細な表現とまではゆかず

親はありきむかし一人の親はありき百合の園生にふとはぐれたり

酒をあげて地に問ふ誰か悲歌の友ぞ二十萬年この酒冷えぬ

の如きもあるが、しかし

おばしまに柳しづれて雨ほそし醉ひたる人と京の山見る

の如きは題材的にも、戀愛的な情緒となつてくるのを見る。こゝには鐵幹氏自らの展開もあらうが、晶子氏の歌風の影響もみのがすことは出來ない。事實紫の出た同

年八月には晶子氏の最初の歌集であるみだれ髪が出て歌壇に大きな反響を與へたのである。

亂れ髪は晶子氏の歌人としての名聲を忽ち大ならしめたとともに、所謂明星派短歌の一般に與へる概念もこの歌集の歌によつて示されて居るとも言へる。亂れ髪の卷頭の

夜の帳にさゞめき盡きし星の今を下界の人の鬢のほつれよ

の歌を見ても、大膽な表現の中に異常の感覺の見られるのであるが、更に

清水へ祇園をよぎる櫻月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき
やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を說く君
入かへさず暮れむの春の宵こころち小琴にもたす亂れ亂れ髪
夕ぐれを花にかくるゝ小狐のにこ毛にひびく北嵯峨の鐘
下京や紅屋が門をくゞりたる男かはゆし春の夜の月
春みじかし何に不滅の命ぞと力ある乳を手にさぐらせぬ
道をいはず後を思はず名を問はずこゝに戀ひ戀ふ君と我と見る

の如き歌を抄してくると、晶子氏の短歌として普通に言はれて居る歌をつくして居る感がある。かういふ歌に對して當時も種々の批評があり、また晶子氏自らが後に抄した現代短歌全集には第二歌集、小扇、第三歌集毒草(鐵幹氏と合著)とともに一首もとられて居ないのであるが、晶子氏の歴史的價値は亂れ髮によつてかなり多くのものを代表して居るのである。それは逍遙氏の歴史的價値が小說神髓や當世書生氣質に於てかなり多くのものを表して居るのと同樣である。そこには傳統を破つた巧みな表現とともに、永遠なるものよりも現實的な官能、愛欲の情熱に中心をおいた點が見られるのである。而して鐵幹氏のそれと同じく叙景的な歌であつても、客觀的な歌とならずして抒情的となる事は前記の「淸水へ」「夕ぐれを」の歌に於ても見られる所である。

さうして晶子氏は亂れ髮以後明治年間だけでも小扇(明治卅七年一月)毒草(明治三十七年五月鐵幹氏と合著)戀ごろも(明治三十八年一月、山川登美子、增田まさ子合著)舞姬(明治三十九年一月)夢の華(明治三十九年九月)常夏(明治四十一年七月)佐保姬(明治四十二年)春泥集(明治四十四年一月)靑海波(明治四十五年一月)の十集を發表して居るの

であつて、これに大正昭和時代になつた「夏より秋へ」「さくら草」「朱葉集」「舞ごろも」「晶子新集」「火の鳥」「太陽と薔薇」「草の夢」「流星の道」「瑠璃光」「心の遠景」「滿蒙の歌」「霧島の歌」等を合せると極めて多くの歌集を發表したことになる。その間相當に多くの變化が認められ、殊に大正以後に於ては華麗なる表現から極めて質實になつて來て居るのを見る。しかし晶子氏の歌はさういふ變化を通してなほ一貫したものがある。それはやはり亂れ髮のもつ傾向を根柢として居ると言はれるであらう。さうして明治時代の歌集に就いて見ると小扇は亂れ髮の大體の傾向を同じくしながら多少とも靜觀的になつてきたとも言へるであらう。

君さらばさらば二十を石に寢て春のひかりを悲しみ給へ
うらわかき胸あふれたる息の香を紅のかをりと君きくらむか

の如きにもしみ〴〵としたものが見られる。これは毒草の中の

母こそは何に生きしと知らむ日の汝が頰おもへばうつくしきかな

にも見られるであらう。また戀ごろもの中の

海こひし潮の遠鳴りかぞへつゝ少女となりし父母の家

にも見られるがなほ叙景的の歌に

金色の小さき鳥のかたちして銀杏するなり丘の夕日に

とある如く、華やかな美のあることは言ふまでもない。晶子氏は自然のかそかな旋律に耳を傾けるよりは視覺の上に華やかな繪を見る人である。この戀衣の中には

鎌倉や御佛なれど釋迦牟尼は美男におはす夏木立かな

も收められてある。さうしてそれ以後の歌集を見る時、その奔放な情熱は連續して居るが、次第に反省が加はり、沈鬱な味が加はつてきたのである。舞姬の中の

石まろぶ音と混りて深山鳥大雨の中に啼けるわびしさ

常夏の中の

秋の雲はかなごころの人待ちに涙ながしてありと思ひぬ

山寺の一重のさくら散るに似てさびし夜明の星消ゆる空

あな寂し白丁十たり目をすぎぬ近づく秋を思ふまぼろし

春泥集の中の

一人居て雁を聞くかな味わるき夜の食事の一ときののち

しろがねの箔の屏風の古びゆくさまにも秋の冬になり行く

の如き寂寥の心情が現れて居ると見られる。戀愛にも反省の心が起つてきたと見られるであらう。さうして春泥集や青海波の時代に至つては、尾上柴舟氏の

しづやかに月は照りたり天地の心とこしへ動かぬがごと（靜夜）

あひよりて呼び泣く中に靜かにも眠りてさめぬ人の尊さ（永日）

の如き思念的の歌や

つけすてし野火のけむりのあか〳〵と見えゆく頃ぞ山はかなしき（日記の端より）

の如き纎細にして寂寥なるものと異なるものはあるにしても近づいて居るのであり、薫園氏の

あけがたのそゞろありきにうぐひすの初音ききたり藪かげの道（片われ月）

朝霜をふみてとひ來し師の門や御咳のこゑの今朝はきこえず（小詩國）

すすき野やゆふべに近き秋の日のきらめき薄う雲流れゆく（伶人）

の如き溫雅な歌風にも近いものがあらう。また信綱氏の

ゆく秋の大和の國の藥師寺の塔の上なる一ひらの雲（新月）

の如きすつきりした叙景歌は晶子氏の歌に見られないかも知れない。

世にあはぬ調をひとりしらぶべし人の門にはいかでたつべき（思草）

人の世に罪なき人の誰かあらむ誰か定むる人の子の罪（思草）

のやうな理智的な感懷をうたつた歌は見られないかも知れない。しかし

蛇つかふ若き女は小屋いでて河原におつる赤き日を見る

薄き日は壁畫に匂ふなつかしき慈眼にすがりなかまくほしき

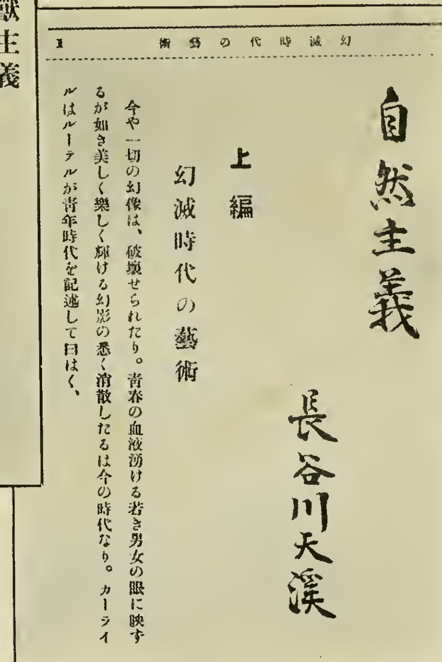
月しろき林にひゞく秋のかせ朧の涙のかなしき夜かな

等になるとその表現技巧に於て初期の晶子氏にも似たるものがある。さうして晶子氏の歌はたとへ叙景であるにせよ、多くの抒情的要素が見られるのであつて、それは正岡子規からの寫生主義の歌と異なるものが多いのである。そこに短歌に於ける浪漫的傾向を見られるのである。

餘說　自然主義の文學

序　說

明治中期の文學が寫實主義と浪漫主義、理想主義との對立時代であつたとするならば、明治後期はさういふ二の傾向が更により高き統一に於て自然主義文學を生出したと言へる。即ち自然主義文學はその寫實的に現實を觀照する點に於て寫實主義の流れをくむやうであるが、しかし明治中期の寫實主義が、たゞ表現方法としての寫實性といふ事にのみ重きをおいて、それが人生への關心を注意しなかつた點は、明治中期の寫實主義に人生的立場のかけてゐた點であり、その點は中期の理想主義特に浪漫主義に於て見られる傾向であつたから、後期の自然主義はむしろ中期の浪漫主義のもつ人生的傾向をより高めて、同時に表現方法としての寫實性をとりいれたことになるのである。これが自然主義作家が、中期の寫實主義作家から生れずして、



自然主義

長谷川天渓

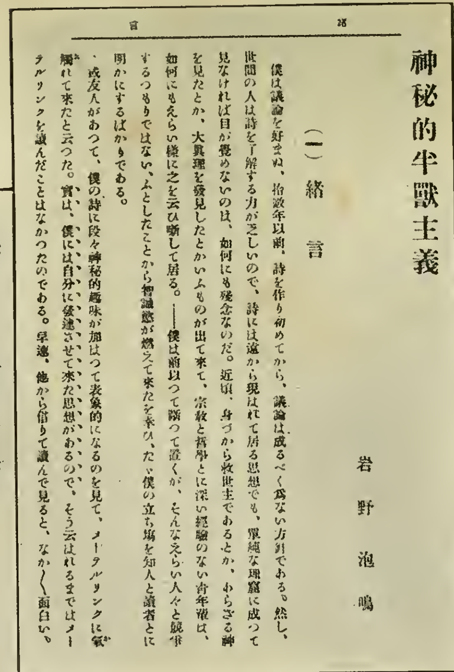
上編

幻滅時代の藝術

今や一切の幻像は、破壊せられたり。青春の血液湧ける若き男女の眼に映ずるが如き美しく楽しく輝ける幻影の悉く消散したるは今の時代なり。カーライルはルーテルが青年時代を記述して曰はく、

自然主義　長谷川天渓

明治四十一年七月刊



神秘的半獣主義

岩野泡鳴

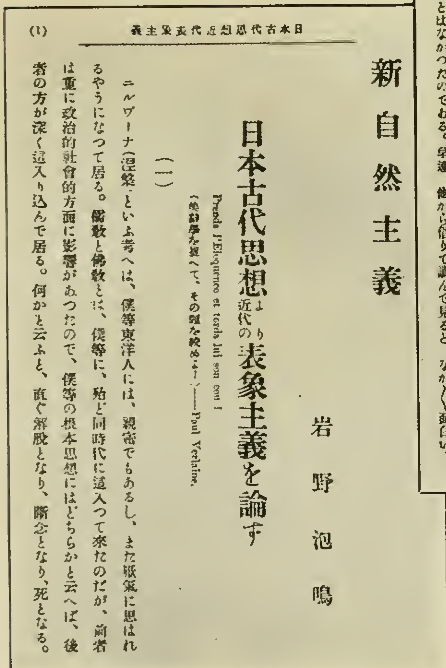
(一) 緒言

僕は議論を好まぬ、拾数年以前、詩を作り初めてから、議論は成るべく為ない方針である。然し、世間の人は詩を了解する力が乏しいので、詩には遠から現はれて居る思想でも、單純な理窟に成つて見なければ目が覺めないのは、如何にも殘念なのだ。近頃、身づから救世主であるとか、からざる神を見たとか、大眞理を發見したとかいふものが出て來て、宗教と哲學とに深い經驗のない青年輩は、如何にもえらい樣に之を云ひ囃して居る。――僕は前以つて斷つて置くが、そんなえらい人々と競爭するつもりではない、ふとしたことから智識慾が燃えて來たを幸ひ、たゞ僕の立ち場を知人と讀者とに明かにするばかりである。

或友人があつて、僕の詩に段々神秘的趣味が加はつて表象的になるのを見て、メーテルリンクに感かぶれて來たと云つた。實は、僕には自分に發達させて來た思想があるので、そう云はれるまではメーテルリンクを讀んだことはなかつたのである。早速、他から借りて讀んで見ると、なか〳〵面白い。

神秘的半獣主義　岩野泡鳴

明治三十九年六月刊



新自然主義

日本古代思想より近代の表象主義を論ず

岩野泡鳴

Prends l'Eloquence et tords lui son cou !
(雄辯學を捉へて、その頸を絞めよ！)――Paul Verlaine.

(一)

ニルヴーナ(涅槃)といふ考へは、僕等東洋人には、親密でもあるし、また厭氣に思はれるやうになつて居る。儒教と佛教とは、僕等に、殆ど同時代に這入つて來たのだが、前者は重に政治的社會的方面に影響があつたので、僕等の根本思想にはどちらかと云へば、後者の方が深く這入り込んで居る。何かと云ふと、直ぐ解脱となり、斷念となり、死となる。

新自然主義　岩野泡鳴

明治四十一年十月刊

却つて浪漫主義作家の成長であつた所以である。

さうしてこの自然主義は作品よりも評論の方が先行してゐた觀があるのは、明治中期の寫實主義の場合と同樣であるが、しかし自然主義理論は寫實主義の場合よりもより溌剌たるものがあつた。卽ち小杉天外氏のゾライズムの提唱は單なる理論の紹介であつたにしても、田山花袋の平面描寫論の如きは相當に力にみちた主張であつた。殊に、島村抱月が「文藝上の自然主義」「自然主義の價値」に於て說いた所は自然主義理論の精細なる組織づけであつた。抱月が前期自然主義と後期自然主義とに分けたことは、自然主義理論の多樣性を說明する上に、適當なる區別であつたし、本來自然主義に對して印象的自然主義を說いたのは自然主義が單なる眞の領域から美の領域に入つてゆく事を暗示するものであつた。卽ちはじめ自然主義の中心は眞にありとしながら、後に眞も美の一要素であるとしたのは多少の矛盾もあるが、これは自然主義の當然なる發展であつたのである。抱月の外に長谷川天溪氏の如きも抱月と大體同じ所說を熱情的にといたが、後に自然主義と漱石等の高踏派とを同一に見ようとしたのは、やはり自然主義理論からの新しい發展であり、殊に岩野泡鳴の

神秘的半獸主義や、表象主義的自然主義は次第に自然主義に主觀性を加ふることを要求した點が見られ、描寫論に於ける一元描寫論もそれを裏づけるものであつた。かくの如くして自然主義理論の完成はやがて一方に後藤宙外の非自然主義や、夏目漱石の非人情や則天去私の文學論を生み出したのである。ともあれ自然主義理論が與へた意義は大きいものがあり、創作に於ても小說を中心として、戲曲、詩歌の上にもそれ〴〵影響を與へて居るのである。次にこの點を考へて見たい。

一　自然主義時代の小説

一　自然主義の作家

自然主義の作家としては島崎藤村、田山花袋、正宗白鳥、德田秋聲、國木田獨步諸氏を初め極めて多いがこゝには一括して是等の作家の基調、自然主義的思潮に就いて二三の作を中心として考へて見たい。

自然主義の作品は從來の作者が主觀によつて人生の形相を作り上げる態度と異なつて、客觀的に人生の如實の姿を再現する事によつて人間そのものを本質的に理解しようとした事は明らかである。この立場から見る時、すべての權威、傳統、理想がはかなき幻影であつた事に氣付くのである。天上の星に對する憧憬は多くの青年をして情熱と讃美との高鳴りを擧げしめた。而してこの幻影を得んとして勇敢に戰ひ求めた結果それらの傳統、權威がはかなき幻影であつた事に氣付く時、理想を失つた現實の上に投出された醜き弱き人間を見出すのである。我々はこの點を先づ島崎藤村氏の作に於て眺める事が出來る。

二　島崎藤村

藤村氏が文學界の同人として憧憬と夢の抒情詩人であつた時代から、自然主義の作家として現れる推移を考へると、思潮そのものの時代的推移を最も具象的に見る事が出來る。二十年代に於ける北村透谷等の文學界の文學的運動は硯友社の如く、それ自身として完成された藝術運動となるには至らなかつた樣であるが、その感情の嵐が硯友社の運動に比して、如何に眞實な人性の下にたつてゐたかは何人も氣付く所である。それらの間に於て透谷は敗れ他の多くの同人が西歐文藝の研究の方面に走つていつたのに反して、ひとり藤村が詩より小說へと歩みながら思潮の推移を體驗してゆく態度は最も興味あるものと思ふ。自然主義時代の藤村氏の作に於て、最も注意して見たいのは破戒、家、春である。

破戒は藤村氏の信州の敎師時代の作であつて、丑松といふ新平民の靑年が新平民たる事を告白してはならないといふ親の戒を破つて、生徒の前に新平民たる事を告白して奉職して居る學校を去る點を骨子として、信州の鄕土的色彩を描きながら人間の葛藤を描いて居る。而して最も注意せられるのは新平民を描いたことである。

貴族と平民との關係は古くより見られる所であり、文學に於ても貴族文學と平民文學といふやうな名稱さへも與へられて居る。而して平民の力が伸展するにつれて所謂新平民に對する意識が强く現れて來たのである。平民の力が伸展しながら同じ平民であるべき新平民が尙壓迫と輕蔑との間に苦しめられる事はあり得ない事である。この破戒に於て新平民である丑松は如何に一般から壓迫と輕蔑とを受けたか。同僚よりは擯斥され、社會よりは輕侮の眼で見られつゝある丑松が、周圍への態度には痛切なるものがある。丑松の父はこの壓迫に堪へかねて退き又丑松をも同樣な態度をとらしめようとした。そこに新平民たることを隱すことを敎へた。しかし新しき一個の人間としての丑松は勇しく新平民たることを告白した。その悲痛なる心をこの篇に見る事が出來るのであつて、丑松はそのために地位をすて、彼をしたふ敎子をすて、飄然として去らなければならなかつたのである。然しながら彼が私は穢多ですと叫ぶ時に虐げられたものから解放された喜びがある、全體として渾然たる統一のある中に眞實に生きてゆく精神が漲つて居り自然主義時代の初期の作品として幾分浪漫的な所が見られるが、客觀的の平明なる描寫の中に從來の

作には見る事の出來ない樣な淸新なる點を有するのである。

此破戒の次に現れた長篇春は明治四十一年に刊行されて居るのである。作者自身及び北村透谷、馬場孤蝶等の文學界の青年が步んで來た道が客觀的に描かれて居る。破戒に於ては全體の構想の上に事件の上にまとまつた劇的展開を認める事が出來る。が春に至ると人間生活のある斷面を切離した如き感が多くて、事件の必然的展開を豫想せしめないのである。作品の中の人物は何れも眞率に理想を求めてやまぬ青年であるが、而も何れも現實と理想との間に融合し難き點を認めて惱んで居るのである。殊にそれらの人物の中で藤村自身である岸本と北村透谷である青木との二人は殊に多くなやみ眞劍に戰つて居るのである。現實のまゝに流れてゆくものにはこの艱みはない。たゞ現實に足を下しながら理想を求めてやまぬ眞率なものにのみ、この心的葛藤が生ずるのである。この現實の苦悶は現實に對する反抗となり、更に漂泊の心を呼び起す。長明もそれであつた。西行・芭蕉もそれであつた。岸本も頭を剃つて漂泊の旅に出た。而して命をもたち切らうとしてなほ生の意識が彼を再び現實に歸らしめたのである。が青木の方はこの現實との戰に敗れ

て了つた。岸本よりもより狂熱的な理想に燃えた靑木は、戰つて敗れたのである。彼は結婚に破れ功名に破れたのである。靑木はかういつて居る。

我々は世間の人に比べて見て決してはづかしい結婚をしたとは思はん。われわれの家庭もさうだ、我々の仕事もさうだ、唯矢盡き刀折れたんだ。

靑木は自殺をはかり狂人となり終に倒れたのである。全體に於て內面的必然はあるが外面的必然は無いのである。柳浪の作品の樣な悲慘なる事件を引きおこす外面的必然は見る事が出來ないのである。靑木は何故に死んだか、それを理解し得るのは內面的に於てのみ可能である。現實の苦鬪の間になほ自己を開いてゆく岸本が

あゝ自分のやうなものでもどうかして生きたい。

と仙臺へ赴任する汽車の中で寂しい降雨の音を聞きながら空想の世界を夢みつゝ言つた言葉は、寂寥たる人生の中に響く力强き本然的な叫びであつたのである。卽ちこの作品は現實と理想との葛藤により理想の破れてゆく經路を描いて居るのであつて、破戒よりも表現に於てより多く自然主義的である。

第三の家は春よりも更に人間生活へ奥深く滲透して居るのである。春に現れて居る人物は何れも抒情的な理想を求めてやまない青年である。故に其生活も若々しい主情的理想的な氣分が流れて居るのであり、社會の實生活には深く滲透して居ないのであるが、家に於ては青年が家を持ちそこに複雜な人生の相を體驗して居る所に、更により現實主義的な內容が扱はれて居るのである。思ふに破戒に於て扱はれた樣な新平民の壓迫とその解放とともに更に注意すべきはこの傳統的な家といふ事であらう。家族制度の傳統的な尊重は家をして個性と個性との融合和樂の所とするよりは、祖先祭祀としての家と、戶籍の上の家とせしめた。そこに家に對して種々の反省すべき點が生ずる。自然主義的思潮はこの傳統的な家の眞實を凝視した。この立場から藤村氏の家といふ作品を見る事が出來る。この作は三吉といふ作者自身であるらしき青年作家が新しき家庭を作り行く經路を主として、三吉の生れた家である小泉家、ならびに姉の嫁いだ橋本家といふ舊家の亡びてゆく經路を描いて居る。信州の田舍に於ける舊家として、その附近の者から神の如くに敬はれ、村の者のためには費用を出して惜まない樣な寧ろ華美なる生活が次第に家をついば

みつゝあるのである。それらの家にはお家大事とつとめる忠僕嘉助があると共に、家よりも個性を重んじ因襲の渦巻の中に生命をすりへらされる事を恐れる正太の如き人物があるのである。而して家より個性へといふ信念は田舍より都會へといふ心境を引出して正太も都會への憧憬を感じ屢々家を出ようとするのである。實質より形式を重んじようとする傳統的の家は一面には經濟的打擊のために、一面には享樂的個人主義のために破壞されてゆくのである。衰へゆく家を回復せんとすればする程逆境に陷りゆき幾度か獄舍に苦む樣にひきづられゆく小泉實もいたましき犧牲的人物と言ふ事が出來る。かくの如き舊家の衰へゆくに反して新しく作られる家も又苦難多きものである。新しき家に對して憧憬と希望とにみちた三吉とお雪とが新しき家を作つて感じ得たものは失望と懷疑とであつた。妻が既に愛人のあつた事は第一の失望であつた。而して妻が次第に世帶染みて自己の境地と次第に距離の生じてゆく事は第二の失望である。妻より見ても夫が自己の心境と遠つた所に進みゆく事は寂寥の至りである。他の若き敎養ある女性と夫が親みゆく事は、妻にとつて堪へ難い苦痛であり、夫に離緣を求めようとするに至つた心境も、

十分理解する事が出來るのである。新しき家と幾度か破壞せられようとする家は希望と憧憬とを失つた家である。舊き家と新しき家とそこには何れも實質なき形骸のみ横たはる。藤村の家はこの家を中心としてそこに夫婦の交捗、親と子との交捗、更に家と社會との交捗が如實にそれだけ痛ましくも描かれてある。此作品程、人間生活の全視野にわたつて觀察せられ表現せられた作品は餘りないと思はれるのである。

藤村の作品はかくの如く傳統、權威、理想の現實との交捗によつて破壞されゆく經路を寫實的の筆を以て表して居るが、藤村氏の有する感傷味は是等の作品に於ても全く失はれて了はないのである。若菜集の有する抒情的な感傷が是等の作の上に不用意の中に見る事が出來るのである。破戒に於て丑松が同じく新平民である先輩に對する崇敬の如き、其先輩とともに高臺から信州を見下す描寫の如き著しく浪漫的傾向を有する事を認める。春にしても作中の人物は浪漫的傾向を有して居るのであつて、中澤臨川が家の序に於て藤村氏を露西亞のツルゲネーフに類似を有するとして

兩者ともリアリストでありながら、心底は詩人である。その作物は努めて平明に實人生の描寫を狙ひ九分までは眞を以て讀者をうなづかせる、殘りの一部は感情で補つてゐる。

と言はれて居るのは妥當であると思はれる。線の細い印象的な點を認めるのであつて、現實の悲慘なる場面を描いても懷しき情趣がたゞよつて居るのである。ツルゲネーフがドストエフスキーやゴルキイに比して人生に喰こむ力が稀薄であるとすれば、それは藤村氏の作品に於てもまた然く言ふ事が出來ると思はれる。(藤村氏は後に人道主義的傾向が起るに及んで新生の如き作品によつて、更に一歩を進めた事は藤村氏の作品を考へる上に興味ある事である。)而して藤村氏と並んで自然主義作家として並び稱せられた田山花袋氏を考へる時一の相違を見る事が出來る。

三　田山花袋

花袋も最初は浪漫的傾向を有する作家であつたのであるが、自然主義的に展開した點に於て、藤村氏と同一の道を進んで居るが、花袋氏は藤村氏の多少印象的な傾向と違つてあくまで客觀的に事象を寫さうとする所に特質を有する。所謂平面描寫

と言はれたのは是であつて、フランスの自然主義作家の影響をうけて自然主義として藤村氏よりも徹底して居ると言ふ事が出來る。もとより花袋にしても平面描寫を理想とはして居ても、なほ感傷的な點は多く見られるのであるが、立場としては客觀的な態度をとつて居るのである。藤村氏の描く人物は一面に於て理想を抱くロマンチストの性質を有して、現實の上にあらうとするものを求めて居るのであるが、花袋氏の作品は全く現實そのものに直面してそこに生きもがいて居る人物をありのまゝに描かうとして居る。重右衛門の最後には理想も傳統も引離した現實の人間の幾多の本能性をとらへて、そこに性欲描寫が多く見られるのである。この點に着目したものに元祿の西鶴が見られるのであるが、花袋氏もこの點が見られるのである。蒲團の如きはこの點を描いたのであつて小栗風葉の戀ざめの如きとともに、この本能性を描寫した作品としてその特質を最も明らかに伺ひ得べきものである。かくて花袋氏の描く人生は重くるしき壓倒される如き感じを現して居るのである。藤村氏の春と同年に出た生の如きはこの點を明らかに描いた注意すべき作と思ふ。そこには弟等を世に出すために覇氣にみちた精根をからして了つた兄の錄といふ

人物がある。鐐の後妻のお桂鐐の妹で嫁いで居るお米といふ人生の暗い經驗に柔順な心を失つて居る二人が、家庭に於て常に爭鬪する。而して死んだ老母の形見分けに二人はつかみ合ひをして爭ふのである。皮肉な勝氣な而して溫情もある老母が、病のために次第に衰へて死んでゆく經路はたゞに一人の女性の死ではなくして、人間そのものの必然的な運命を暗示して居る。鐐の弟であり作者自身であるらしき銑之助はかういつて居る。

鐐は母親の一生に同情したけれどもそれがいつもの同情とは不思議にも異つて居た。常には母のかうした境遇に身を置くに至つた經路やら正直な我儘な性質から萠した悲劇やらに淚をそゝいで、快樂といふ快樂をもとげずに自から身を亡して行くのを悲むのであつたが、今宵は何故か母親の死が人類一般の死と相關聯して居てどうせ一度は死ななければならぬ人間の儚なさがひしと胸に迫つた。銑之助の眼には草の主えた墓と、生れたばかりの赤兒と、白髮の老人と、死に瀕した母親とが眼前を通り過ぎた。深い深い生の悲哀が其多感多情の胸を抉つて熱い淚がほろ〳〵と頰から落ちた。

艱み苦み爭ひ、さうして時の經過とともにすべてのものが死んで行くのである。人間は己れの利害に當面する時爭ふ。そこに醜惡なる人生が現れる。利害無き所には樂しい平和な狀態が現れる。爭の絕間なかつた鐐の家が老母の死によつて却つて平和になる。是等人生の姿がまざ〳〵と描かれたのが生である。藤村氏の作に比して寧ろ暗い人生の姿に當面するのを覺えるのである。花袋の作はこの他にも妻や罠や田舍教師を初め數多いのであるが、何れにも重くるしき人生が見られるのであるが、花袋はこの壓倒する如き人生の姿を時によつて解決せしめて居る。如何なる悲みも艱みも時が洗去つて了ふと考へるのである。逝くものをして逝かしめよ、滅ぶべきものを滅ばしめよ愛欲の艱みも個性の爭鬪も、時が解決して行くのである。この思想は氏の作の一轉機を示した殘雪の如きにも明らかに見えるのである。この點に花袋氏の消極的なあきらめ、若しくは運命論的な思想が見られると思ふのである。

四　その他の自然主義作家

この立場は自然主義的作品の先驅ともいふべき國木田獨步の作品にも見られる。

國木田獨歩は是等に比すると短篇的作家であるだけに、精細な描寫には乏しいが、その直截の中に、人生の眞實を傳へて居る。殊に獨歩は人生に對する驚きを先づ經驗した作家として、その清新な人生觀照の態度は、小說家としてよりもむしろ詩人として見られる。獨歩が明治三十年に書いた「忘れえぬ人々」や源をぢはむしろ浪漫的色彩の多いもので、殊に源をぢの如き敗殘の生を送る源をぢが不良少年をわが子のやうにして可愛がるが結局、源をぢをそむいてゆく事に對して、この世に望みなきものの感ずるさびしさを描いて居る。表現も華やかである。が次の三十四年に出した最初の短篇集武藏野に於て、その透徹した自然觀照に於てやうやく自然主義的色彩を見出してきた。それは二葉亭四迷のあひびき等から影響をうけたと思はれるのであるがこの武藏野の中にある、牛肉と馬鈴薯に於ては人生に對する二の型を冷徹に觀照したといふ事が出來る。こゝには現實に對する鋭い觀照が見られるのである。さうして現實に對する驚きを感じて居るのである。この點は三十五年の運命論者に於て一層明瞭に見られる。運命論者は戀しあつて結婚した妻は己れと父を異にする妹であることを後に知るのである。即ち自分を生んだ母はある男と關係

して病む夫をすて出奔し、後に女子を生むのである。父に死なれ母にすてられて父の友人へ子として養はれた彼が、一人の寡婦とその女に近づき、その女の養子になるのであるが、それが妹であつたのである。この悲慘なる事實に當面してこの戀をすて、離緣しようとしても妹に對する戀をすてる事は出來ないのである。こゝに現實の不可抗的な運命がある。而もこの運命のまゝに從ふより道のないのを見出すのである。このいたましい現實は餘りに理智的にまとめられて居るといへばいへるが、現實の一面を端的に示すものである。

さうして同年の酒中日記は一層現實の諦視のひろい點に於てすぐれた作である。妻の母の非道なるため、掛金を母にうばはれる。そのためにひろつた金をかくす所から、それを妻に、見出され、妻は自殺する。學校を去つて、島にのんきな生活をするが、酒にひたりつゝ、過去を記した日記である。

さうして獨步としても四十一年の竹の木戶、二老人に於てしづかな穩かな人生を描いて居る。炭をぬすむ隣の妻、それを靜かに觀照して居る。さうしてこの境地に達して獨步は同年六月に死んで居るのである。

而して自然主義作家の中に於て正宗白鳥、德田秋聲の如きも特質を有する作家である。白鳥氏の作品には虛無的な思想がたゞよつて居る事を感ずる。人生に疲れ切つた聲をあげて悲む事も出來ない樣な敗殘の人生である。彼が名をなした何處へといふ作に見える菅沼健次は人生に對して强い理想をいだく事が出來ず、すべてのものに集中する事の出來ない自分をもてあまして、その結果官能を追求するといふ人物を描いて居る。卽ち

> 激烈な刺戟に五體の血を湧立たさねば、日に日に自分の腐り行くを感じ、青春の身で只時間の蟲に食はれつゝ生命をつないでゐる現狀を堪らなく思つた。

といふ如き生活に、理想も破壞された世紀末的思想を見る事が出來るのである。而して個性の價値を認める事の出來ない態度は家庭の意義をも認める事が出來ないのである。泥人形といふ作に於ては家の傳統のためにのみ生きる妻が、泥人形の如きであると觀じた所に家に對する近代的な絶望が見られる。藤村の家は家を全體として描寫してあるが、白鳥氏の態度は端的にその急所をついて居るのを見るのである。而してまた藤村、花袋が現實をそのまゝに描いてもそこに事象を統一せしめ

る思想感情があるに對して、白鳥氏の虚無的な態度はすべての思想感情を分裂せしめて居るのであつて、ある意味に於て自然主義的態度を徹底せしめたともいへるのである。當時岩野泡鳴が藤村・花袋を寧ろ貶して白鳥をあげたのはその點を認めたものと思はれる。而して白鳥氏にはなほ虚無的な思想が一貫して居る樣に見られるが、德田秋聲氏になると全く現實をそのまゝに現した樣に見えるのであつて、主觀的な所は殆ど見られないのである。その文章も極めて質實であつて、感傷も花やかさも全く見られないのであるが、現實味は一層多い樣に思はれる。たとへば彼の傑作ともいはれる黴にしても、一人の男性が女性にあつてそれを戀し妻に迎へ子供が生れてゆく經路を描いてあるに過ぎないが、そこに暗い人生の相が自然のまゝにうけいれられるのであり、又爛れの如きも一人の會社員が娼妓上りのお增といふ女性を妻にしてゆく間に起る、家庭生活の暗い氣分がいかにも自然のまゝに描かれて居るのである。そこに藤村・花袋・白鳥等と異なつた獨自の世界を描いて居るといひ得るのである。

自然主義作家は是等數氏の外にも多いのであつて、小栗風葉の如きもそれであり、

又二葉亭四迷の如きもこの時代になつてその面影と平凡との二作によつて、浮雲に於て示した寫實的傾向を更に展開せしめて居るのである。而して以上の僅かな概觀によつて見られる自然主義は現實をありのまゝに眺めて、權威、家、理想等あらゆるものから離れ解放されてたゞ一個の人間として、現れてくるのである。本能になやみ利己的爭鬪になやみ生きてゆく人間の姿が現れるのである。光明は何處にも見られないのである。而して是等を描くに從來の寫實小說とは違つて事件は平凡であつて何人も體驗した生活である。讀んで事件の變化に驚く事はないが、そこに自己を暴露された感を自らに持つのである。華麗なる文辭を弄する事なくして、たゞ自然のまゝに表現されて居るのである。この自然主義に比すれば從來の作品は餘りに不自然と作爲と空想とに滿ちたものであつた。自然主義の作品に至つて人は初めて人生そのものの眞實を認めたのである。

五　餘裕派と唯美派

然しながら自然主義的作品は人生のありのまゝの姿を現して居る樣であるけれども、人生は果してかくの如き醜き理想なき光明の無いものであらうか。重くるし

き世界、なやましき爭鬪の世界のみに滿ちて居る、かくの如き人生が人間生活の本質的な一面であるにしても、そこには更に理想に燃えた光を求むる何物かがなければならぬ。人生に對するあらゆるものの破壞とともに新たなる建設がそこに認められなければならないのである。露伴の求むる如き理想化の世界は此人生に見られざるとするも、その愛欲と利己との間にも一念の光明を求むる人間の理想的道念は燃えて居る。此點を閑却してたゞ醜惡なる現實生活をのみ眞なりとするのは、人間性そのものの全部を眺めたと言ふ事は出來ない。こゝに自然主義の缺點もあるのであるが、然しながら思潮の變遷を眺むる時空想的な浪漫主義の夢に破れたものの陷るべき點は、常に理想なき、現實主義である。この寫實的な現實主義の洗禮を受けなければ、眞の人性の正しき步に入る事は出來ない。初めて物を眺める正しき基礎を與へた點に於て自然主義の勃興は極めて意義あるものである。

然しこの時代に於ても傾向を異にした作家も無いではない。夏目漱石を中心とした高踏的餘裕派の作品と、谷崎潤一郞氏を中心とする唯美主義的作品の如きは、その最も著しきものである。是等に就いて一言するならば夏目漱石が俳人より出で

て作家となつた點は西鶴の如きに類似して居るのであるが、この俳人より出でたことが漱石の作品の色調の重要なる點となつて居るのである。自然派は客觀描寫をとつて居るけれども、その全體に於ては人間の心の苦悶があふれて居る。從つて作品の悲調は暗いたよりないものであるが、餘裕派の作品は傍觀的な態度を以て觀察し描寫されるために、それによつて人生そのものに當面する樣な眞劍さが見られないのである。漱石の最初のすぐれた作である我輩は猫であるを見るとき、氏の物を見る場合に於ける餘裕のある態度は明らかに現れて居るのである。虞美人草にしても坊ちやん、三四郎「それから」、行人、明暗と彼の作品をたどつて見ても、常に自然派の樣な暗いじめ〳〵した氣分は見えないのである。もとよりこの間に相當の變遷は認められるのであつて、初期の草枕にしても虞美人草にしても華麗なる表現を用ゐて居り、殊に倫敦塔の如きには浪漫的な香が高いのである。而して次第に華麗なる表現から内面的に進み心理的な觀察を下して居るのである。然しながら後年の心理描寫にしても理智的な態度で、心理の變遷を傍觀的に眺めて居るのであり、そこにユーモアも見る事が出來るのである。「それから」に扱はれた題材にしても心に扱は

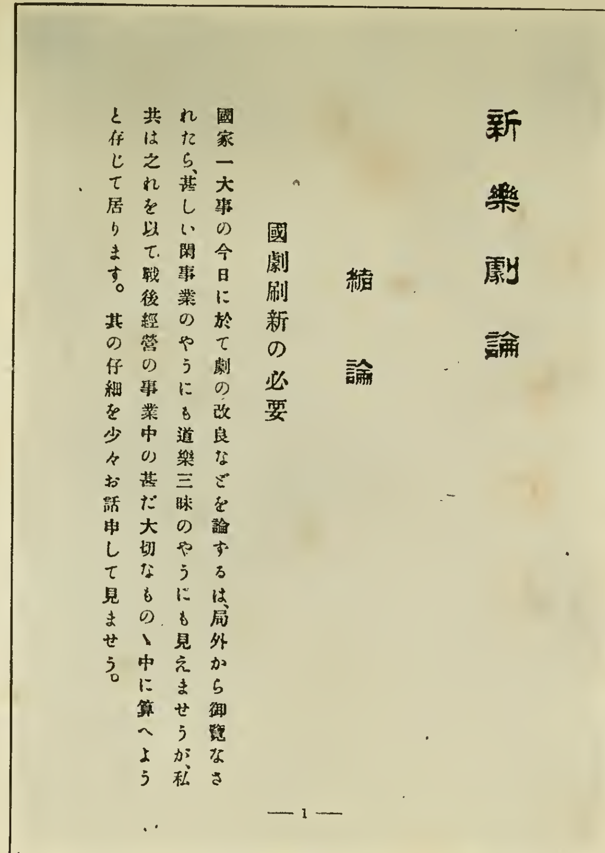
れた題材にしても、相當な人生の悲劇的材料を捉へながらそれを讀んで深い人生の苦悶の中にひきいれられる事なく、かゝる悲劇的葛藤の解釋をきく様な心持を感ずるのである。かくてその心理的作品の展開に於て浪漫的から寫實的心理的傾向に進んでゆくのではあるが、その根抵に於て常に我輩は猫であるの境地は離れないのである。即ち草枕に於て作者が繪師の口をかりて述べた非人情の世界は是である。非人情は不人情と違つて人情から超越して大きな我の世界に到達する事である。小なる人間の自我から見れば哀樂のために泣き笑ふ心境もこの大きな世界から見る時はすべてが無であり、又大きな實の世界でもある。所謂則天去私の境地は漱石氏の態度であつたのである。この立場から見る時自然派の作品に見える人の世の艱み悶え焦燥する心持の如何に愚かに見えるであらうか。然しながら一面から見れば迷ふ所に疑ふ所に新しい道が、拓かれてゆく事を思ふ時、自然派の作品が人間の展開の一の道程として更に拓けてゆく道を期待する事が出來るが、この則天去私の大きな統一點に到達し、そこから人生に向ふものは展開といふ事があり得ないのであつて、完成の喜びはあるが、未完成の潑剌さが缺如して居る事はやむを得ない事と

思はれる。然しながらまた一面より見て、自然派から更に展開した新理想主義、人道主義的傾向がこの漱石等の立場から多くの影響をうけて居るとも見られるのであつて、その意味に於て自然主義より一歩進んだ立場であるとも言ひ得るのである。この餘裕派の作品としては高濱虚子の俳諧師・續俳諧師の如きがあるが、その寫實の態度に於て漱石に近づいては居るが、漱石の冷靜な心理解剖には到つてゐないのであつて、作者自身である三藏の觀照の態度は餘裕派的であるが、十風夫婦の破壞されてゆく生活の描寫には自然派的傾向が見えると思ふ。

この自然派と餘裕派とはその人生の觀照の態度に於て非常な相違はあるが、何れも人生のための藝術であつたに比して谷崎氏等の唯美主義的傾向は藝術のための藝術を創作した所に、特異の境地があるのである。谷崎氏の描く所はありのまゝの人生でもなく人生の中から一の美をえぐり出して居るのである。その美は道德的な美でもなく又生々とした現實の醜さを情趣化する事によつて得られる美でもなく、人生の中から感覺的な美を見出さうとして居るのである。それはボードレエルなどの稱へた惡の中に見られる美でさへもあるのである。默阿彌の白浪物の中に

見える惡の中に見える美、それは思想や感情を超越した感覺に訴へる美である。潤一郎氏の處女作ともいふべき刺靑に見える怪奇な美、少年に見える幻想的な美、惡魔の中に見える官能の如きは人生的意義をはなれた美である。かくの如き美を描いたのが潤一郎氏等の立場であつて、從來の作品に見える美とは全く違つて純粹感覺的の美である。默阿彌がこの感覺的美をねらひながら一面に於て勸善懲惡主義をとつたに比して潤一郎氏等の立場は道德、理想を超越し、人生をも超越してたゞ美のみを追求した所にその徹底した唯美主義的傾向が見られるのである。

かくの如く餘裕派作家や唯美主義的作家が自然主義時代に於て、もしくは自然主義の衰退せんとする時代に存在し、次の時期への契機となつたことは明らかであるがなほ自然主義作家が中心となつてゐたのである。さうして自然主義は評論及び小說に於て最も著しく見られるのであるが、他の戲曲、詩歌にも自然主義の影響は著しく見られるのである。



新樂劇論

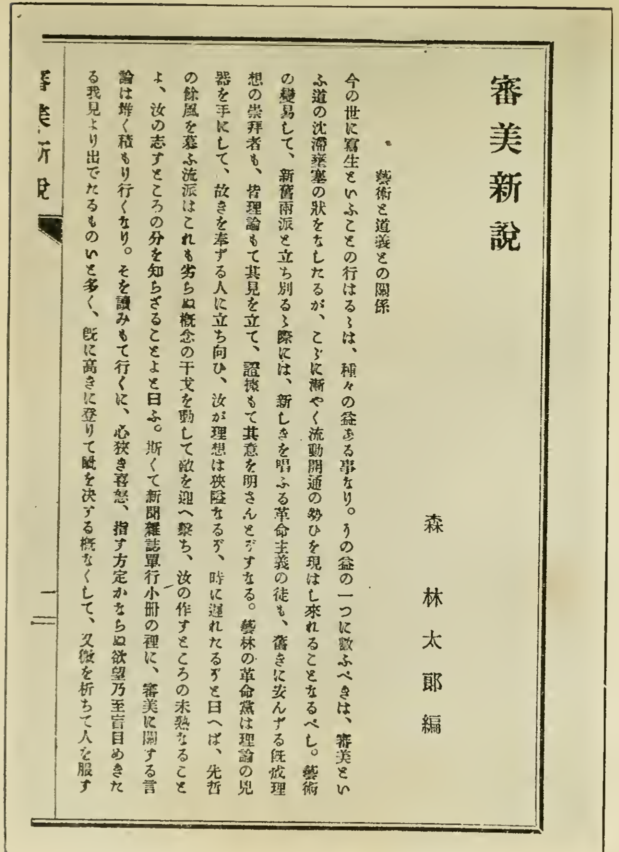
緒論

國劇刷新の必要

國家一大事の今日に於て劇の改良などを論ずるは、局外から御覽なされたら、甚しい閑事業のやうにも道樂三昧のやうにも見えませうが、私共は之れを以て戰後經營の事業中の甚だ大切なものゝ中に算へようと存じて居ります。其の仔細を少々お話申して見ませう。

— 1 —

新樂劇論　坪内逍遙　明治三十七年十一月刊



審美新說

森林太郎編

○藝術と道義との關係

今の世に寫生といふことの行はるゝは、種々の益ある事なり。その益の一つに數ふべきは、審美といふ道の沈滯壅塞の狀をなしたるが、こゝに漸やく流動開通の勢ひを現はし來れることなるべし。藝術の變易して、新舊兩派と立ち別るゝ際には、新しきを唱ふる革命主義の徒も、舊きに安んずる旣成理想の崇拜者も、皆理論もて其見を立て、證據もて其意を明さんとぞするなる。藝林の革命黨は理論の兇器を手にして、故きを奉ずる人に立ち向ひ、汝が理想は狹隘なるぞ、時に遲れたるぞと曰へば、先哲の餘風を慕ふ流派はこれも劣らぬ概念の干戈を動して敵を迎へ擊ち、汝の作すところの未熟なることよ、汝の志すところの分を知らざることよと曰ふ。斯くて新聞雜誌單行小冊の裡に、審美に關する言論は堆く積もり行くなり。そを讀みもて行くに、必狹き客怒、指す方定かならぬ欲望乃至盲目めきたる我見より出でたるものいと多く、既に高きに登りて瞰を決する概なくして、又彼を折ちて人を服す

審美新說　森鷗外　明治三十三年二月刊

二　戯曲及詩歌に於ける自然主義の影響

一　近代劇論

坪内逍遙氏によつて樂劇が主張されて居つた時、一方に近代劇が中村吉藏氏等によつて主張されたことは興味ある現象であつたのである。思ふに明治の演劇論の中で史劇論や樂劇論は從來の歌舞伎を主とする演劇論に對して新しい一歩を開いたものではあつたが、なほ歌舞伎そのものを一面には有して居たのであつた。然るにこの近代劇論はさういふ傳統的なものから離れて全然西洋の藝術論の影響をうけたものであつたのである。この近代劇論は自然主義的思潮の影響の上にたつことは明らかで、同時にイプセンの飜譯劇が輸入の結果新しく主張されたものであるのである。飜譯劇がある點まで文學思潮の推移によつて變化する事は自然の勢であつて、二十年代に譯されたのは逍遙氏の沙翁劇や殊に鷗外氏のうもれ木や折薔薇の如き浪漫的色彩の多かつたものであつたが、この三十年代の終りになつてかつては無花果の如き作品を作つた中村吉藏氏がイプセンの飜譯劇をはじめ、高安月郊や

小山內薰の如きも飜譯劇とともに演劇新潮の如き演劇論を發表して居るのである。その主張はイプセン劇などの內容が示す如く、從來の歌舞伎劇の傳統から全く離れて內容的な劇となつたのである。卽ちイプセンの作品は從來被はれてゐた社會の罪惡や醜さを暴露したのであつて、ノラの如きは家庭の內に人形の如くあつたのが覺醒の結果無自覺な自已に不滿を感じて家を去るといふ所に現實的な自然主義的な內容を有するのである。權威あるものも幽靈であつたのである。かういふ意味に於て現實主義的な立場が生じたのである。これは單に飜譯劇のみならず中村吉藏氏等の作品によつてもこの傾向が見られるのである。卽ち中村氏の剃刀の如きはその傾向をよく示して居る。また松居松翁の茶を作る家に於ては美しい傳統美の中にあるやうな宇治の茶を作る家の破壞されてゆく經過を描いて居るのである。茶を作る家の主人は僅かの保險金をうるために放火するのである。また田舍をあこがれて都會から田舍にかへつたその家の長男とその妻君とは田舍に幻滅を感じて去る。こゝに現實暴露の悲哀があるのである。かくの如き傾向はかつての新派が皮相なる社會の描寫であるに對して、更に深刻なる現實凝視であるのである。た

だ演劇の有する特性が純粋の寫實主義よりは象徴的になつて居る所もあるが、それは舞臺上のリアリズムとしては當然の事であつたのである。こゝに近代劇が自然主義的洗禮によつて變化してゆく經過を見ることが出來るのである。これは小山内氏の歐州の近代劇の紹介と相俟つて注目すべき現象であつたと思ふのである。

二　詩歌に於ける自然主義的影響

かういふやうに小說、劇に於て自然主義運動が盛んになつた時、詩歌も自らその影響をうけるに至るは當然である。たゞし詩歌そのものの形態的性質のために相違はあるのである。卽ち和歌に於ては明星一派の浪漫詩が未だ盛んではあるが、しかし明星派から出た石川啄木の如きは人生的歌人として素朴なる表現の中に現實をうつして居るのであり、また尾上柴舟氏の門から出た若山牧水、前田夕暮の、如きも、字餘り、字足らずを行ひ、素朴なる表現を用ゐて現實的傾向を示して居る。若山牧水の

わが肌に觸るるものの眼にうつるもののいづれか痛き冷笑にあらざる

饑ゑたる蟲幹にひそめる樹のごとくわが家の何處にか冷たさのあり

梟のごとくわれを見守るもあり。杜鵑の如くかすめ行くもあり。悔ぞ群れたる

の如き破格を多く用ゐて居るのである。牧水のかつての
幾山川こえさり行かばさびしさのはてなむ國ぞ今も旅ゆく
とは大なる相違があるのである。さうしてこの寫實的傾向は明星派に反對した正岡子規に於て明らかに現れて居ることは言ふまでもないが、明星派のとなへた浪漫的傾向の中にも晶子の感覺的傾向はやはり自然主義的影響が多少ともあると言へるのである。石川啄木の如きも明星派から出て居るのである。かういふやうにして最も抒情詩的であつた短歌にもこの傾向が見られるのであるが、俳句に於ては既に二十年代に於て正岡子規によつて企てられた革新運動は寫實的傾向の運動であつたのであり、その運動が更にこの期に於ては碧梧桐氏によつて新傾向句によつて一層寫實的傾向は強くなつたと思ふ。

さうして長詩に於ては藤村晩翠の抒情詩から泣菫・有明氏によつて象徵詩運動となつたのである。この象徵詩は上田敏氏がベルレエヌ等のフランスの象徵詩を輸入されてから日本の詩壇にも起り來つた運動であつて、たとへばベルレエヌの
秋の日の

ヸオロンの
ためいきの
ひたぶるに
うら悲し

鐘のおとに
胸ふたぎ
色かへて
涙ぐむ
過ぎし日の
おもひでや

げにわれは
うらぶれて
こゝかしこ
さだめなく

とび飛らふ

落葉かな(落葉ベルレエヌ)

の如きを見ても分る如く氣分象徵的な表現である。かういふ象徵的表現は自然主義とは異なつた最も藝術至上的な傾向であつたかに見える。けれどもかういふ象徵詩の中からも自然主義的傾向のあることは岩野泡鳴の象徵詩論によつても見られるのである。泡鳴の象徵詩運動は生の刹那の象徵としての象徵主義であつて、彼の自然主義的表象詩論を見てもこの點が言はれる。彼は新しく發展すべき詩の傾向として

宗敎的形式の脫却

懷疑と煩悶

神經と自然との燃燒流化

刹那的生欲の發現

心熱

新語法と新用語

新リズム

等を擧げて居る。殊に自然主義的な立場から言へば刹那的生欲の發現は象徴主義の自然主義的基礎を示すものであると思ふ。さうして彼が「日本古代思想より近代の表象主義を論ず」の如きになると、象徴は單に表現方法といふよりは、文學の本質としての象徴であるのである。そこに最初の象徴詩とは多少異なつた意味になつて居るが、これは自然主義的影響とみてよいと思ふ。かういふ詩歌に對する疑は片上天弦も「詩歌の根本疑」といふ論に於て述べて居る。

複雜にして變化無限なる所謂主觀の反應感が如何にして一定の形式の中に收められ、而して其の感味の表現に遺憾なきを得るか、この問題は須く將來の詩人の自から解決すべきものである。吾等の疑ひは實にこの相扞格せんとするこの二者調攝抱擁が幾何の處まで遺憾なく行はれ得るかといふに在る。否更に斯くの如きことは其の根本に於て可能であるか否か二者は永久に其の極めて不十分なる觸接の狀態を以て終始するものではないか。而して詩歌そのものがまた斯くの

ごとくにして、永久に一種の不十分なる文藝の形式として存在すべきものではなからうか。詩歌はその根本の制約に於て終に相違はざるべき二者の相抱擁せんとする甲斐なき力を豫想するものではないか。吾等は實に斯くの如く疑ふを禁じ得ざるものである。

かういふやうにして詩に對する疑は起され、これが實際の詩作に於て自然主義的な感覺をうたふやうになり、口語詩の勃興によつて石川啄木等と同樣な自然主義的傾向が詩の上に現れてくるのである。

明治文學史年表

吉田精一
廣田榮太郎 編

年次	明治元年(1868)	明治二年(1869)	明治三年(1870)
作品・評論 詩・歌・俳句			
作品・評論 小說・戯曲	白縫物語(種彦)〔一月〕 假名讀八犬傳(魯文)〔一月〕		西洋道中膝栗毛(魯文)〔九月〕
作品・評論 雜	訓蒙窮理圖解(諭吉)	世界國盡(諭吉)〔八月〕 西洋事情第二篇(諭吉)	眞政大意(弘之)〔七月〕
作家・事件	中外新聞發刊〔二月〕 五ケ條の御誓文發布〔三月〕 江湖新聞發刊〔四月〕 藻鹽草發刊〔四月〕 江戸を東京と改稱〔七月〕 明治と改元〔九月〕 東京奠都〔十一月〕 誕生―美妙・透谷・蘆花・魯庵・麗水 死去―靜軒・曙覽・言道	新聞紙印行條令公布〔二月〕 小學校設置〔三月〕 出版條令制定〔五月〕 藩籍奉還〔六月〕 昌平校を改め大學校とし開成・醫學の二校付屬〔六月〕 宮中歌道御用を侍從所にて取扱ふ〔十一月〕 誕生―眉山・水蔭・桂月・青々・千亦・雨江・月郊・孤蝶	歌御會始復興〔一月〕 中學校設置〔九月〕 徵兵規則頒布〔十一月〕 誕生―乙羽・小波・臨風・筑水

明治四年(1871)	明治五年(1872)	明治六年(1873)
		横文字百人一首(黒川眞頼)
安愚樂鍋(魯文)〔十二月〕 釋迦八相倭文庫(應賀)	胡瓜遣(魯文)	通俗伊蘇普物語(渡邊溫譯)〔四月〕
西國立志編(正直)〔七月〕	學問のすゝめ(諭吉)〔二月〕 童蒙教草(諭吉) かたわ娘(諭吉)	文字の教へ(諭吉) 暗誦十詞(諭吉) 文明開化(祐一)〔九月〕
兩京・大阪間に郵便設置〔一月〕 横濱每日新聞發刊〔四月〕 新聞雜誌發刊〔五月〕 斬髮廢刀令公布〔五月〕 廢藩置縣〔七月〕 岩倉具視等歐米派遣〔十月〕 聖書の飜譯・出版 誕生—樗牛・抱月・獨歩・晩翠・古白・花袋・秋聲 死去—文雄	女學校設置〔二月〕 東京日日新聞發刊〔三月〕 東京に圖書館開設〔四月〕 郵便報知新聞發刊〔六月〕 正直同人社創設〔七月〕 學制發布〔八月〕 太陽暦採用〔十一月〕 誕生—藤村・一葉・綺堂・碧梧桐・信綱・酒竹	徴兵令公布〔一月〕 東京假名書新聞發刊〔一月〕 明六社設立〔二月〕 征韓論破れ隆盛等辭職〔十月〕 誕生—泡鳴・梁川・鐵幹・鏡花・四方太 死去—知紀

明治七年(1874)	明治八年(1875)	明治九年(1876)
讃美歌		明治歌集（橘東世子編）〔一月〕
佐賀電信録（魯文）	復古夢物語（春輔）〔四月〕 近世櫻田紀聞（春輔）〔五月〕 暴夜物語（永峯秀樹譯）	春雨文庫（春輔）〔一月〕 金之助の話（香雪・繪入新聞）〔十一月〕
開化問答（爲治）〔三月〕 東京新繁昌記（誠一）〔四月〕 柳橋新誌第二編（柳北）〔四月〕 京猫一班（柳北）	國體新論（弘之）〔一月〕	
歌御會始に國民一般の詠進許可〔一月〕 民選議院設立建白〔一月〕 佐賀の亂〔二月〕 明六雜誌創刊〔三月〕 臺灣征伐〔四月〕 朝野新聞發刊〔九月〕 讀賣新聞發刊〔十一月〕 誕生―虚子・醉茗・小劍・天來・敏・猪之吉・霞村・花外 ★狂詩・ローマ字論・開化文學隆盛	大阪議會〔二月〕 襄等同志社創立〔一月〕 同開校〔十一月〕 平假名繪入新聞發刊〔四月〕 假名讀新聞發刊〔十一月〕 明六雜誌廢刊〔十一月〕 誕生―風葉・米次郎・夘治・紫紅・鼠骨 死去―蓮月 ★民選議院開設の議論囂々	熊本花岡山同盟〔一月〕 東京新誌創刊〔四月〕 同人社文學雜誌創刊〔七月〕 熊本・萩の亂〔十月〕 美術學校設立〔十月〕 誕生―有明・秋江・天溪・柴舟・赤彦・薫園・水穗

明治一〇年 (1877)	明治一一年 (1878)	明治一二年 (1879)	明治一三年 (1880)
舊譯聖書詩篇 明治現存三十六歌撰（山田謙益編）（六月）	開化新題歌集（大久保忠保編）（十一月）		類題明治新和歌集（容盛編）（五月） 明治開化歌集（弘綱編）（七月） 開化新題歌集第二編（忠保編）（十一月）
鹿兒島戰記（仙果）（二月） 櫻田實記（仙果） 楊牙兒奇談（孝平譯・花月新誌）（九月）	鳥追お松海上新話（彥作）（一月） 夜嵐阿衣花廼仇夢（勘造）（六月） 八十日間世界一週（忠之助）（五月） 花柳春話（純一郎）（十月）	高橋於傳夜叉譚（魯文）（二月） 島田一郎梅雨日記（起泉）（六月） 哲烈禍福譚（春松譯）（四月） 霜夜鐘十字辻筮（默阿彌・歌舞伎新報）（十二月）	情海波瀾（欽堂）（六月） 澤村田之助曙草紙（起泉）（七月） 春風情話（逍遙譯）（四月） 龍動鬼談（勤譯）（十一月）
日本開化小史（卯吉）（二月） 民約論（服部德譯）	通俗民權論（諭吉）	修辭及華文（大麓）	
花月新誌創刊（一月） 西南の役（二月） 團々珍聞・穎才新誌創刊（三月） 大學校を東京大學と改稱 誕生—泣菫・吉藏・瓊音・空穗・清白 ★西南役を主題とする小說輩出	大久保利通暗殺（四月） 新富座開場（六月） 誕生—武郎・靑果・晶子・龜雄・夜雨・冬彥・東洋城 死去—磐溪・鶯山 ★自由民權論唱導さる ★この比より毒婦小說夥し	學士會院設立（一月） 大阪朝日新聞發刊（一月） 歌舞伎新報創刊（二月） 敎育令公布（九月） 國會開設建白（十二月） 誕生—白鳥・節・荷風・橙里・登美子・月斗・亞浪 死去—由淸	集會條令公布（四月） 東京大學第一回卒業（七月） 六合雜誌創刊（十月） 板垣退助自由黨組織（十一月） 誕生—白村・梅溪 死去—芳樹・辨玉・季知

明治一四年(1881)	明治一五年(1882)	明治一六年(1883)	明治一
小學唱歌集第一集（八月） 開化新題和歌梯（弘綱編）（九月）	**新體詩鈔**（正一・良吉・哲次郎）（八月） 新體詩歌（節編）	東京大家十四家集（平井天満編）（十月）	開化新題歌集第三編（忠保編）（一月）
天衣紛上野初花（默阿彌）（三月） 島衞月白浪（默阿彌）（十一月）	虛無黨退治奇談（忠之助譯）（九月） 自由之凱歌（夢柳譯）（十月） 西洋血潮小暴風（百衞譯）（十二月）	**經國美談**（龍溪）（三月） 千代田刄傷（南翠・開化新聞）（四月） 汗血千里駒（柴瀾）（五月） 明良二葉草（應賀）（六月） 人肉質入裁判（勤譯）（十月）	世路日記（香水）（六月） 春窓綺話（誠一譯）（一月）
政理叢談（兆民）（三月）	美術眞說（フェノロサ） 人權新說（弘之）（九月） 民約譯解（兆民）（十月）	維氏美學（兆民譯）（十一月） 天賦人權論（辰猪）（一月）	文明東漸史（鳴鶴）（九月）
東洋自由新聞發刊（三月） 東洋學藝雜誌發刊（十月） 國會開設の大詔煥發（十月） 自由黨結黨式（十月） 誕生―草平・薫・葉舟・乙字・純・英子 死去―式部・忠秋	改進黨組織（三月） 時事新報發刊（三月） 板垣退助遭難（四月） 東洋社會黨組織（五月） 自由新聞發刊（六月） 第一回繪畫共進會開催（九月） 東京專門學校創立（十月） 福島事件（十二月） 誕生―未明・三重吉・長江・生馬・青峯・茂吉・順・比露思 死去―千浪・松根	板垣退助歸朝（六月） 官報發刊（七月） 誕生―直哉・雨雀・御風・光太郎・八千代・白川・甲之・滉・東明・蕭々・夕暮 死去―具視 ★この比より政治小說熾なり	加波山事件 自由黨解黨（十月） 角藤常憲壯士芝居を初む（四月）

七年(1884)	明治一八年(1885)	明治一九年(1886)
	十二の石塚(半月)〔十月〕 明治現存續三十六歌撰(豊島有常編)〔四月〕 東京大家十四家集評論(胤平)〔十二月〕 東京大家十四家集評論再辨(御巫清直)	新體詞選(美妙編)〔八月〕
春鶯囀(直彦譯)〔三月〕 自由太刀餘波鋭鋒(逍遙譯)〔五月〕 牡丹燈籠(圓朝)〔十月〕	黒白染分韁(種彦)〔三月〕 **當世書生氣質**(逍遙)〔六月〕 **佳人の奇遇**(柴四朗)〔十一月〕 慨世士傳(逍遙譯)〔二月〕 鬼啾々(夢柳譯)〔九月〕 繫思談(茂吉・庸夫譯)〔十一月〕 水天宮利生深川(默阿彌)〔二月〕	妹と背鏡(逍遙)〔一月〕 京わらんべ(逍遙)〔三月〕 內地雜居未來の夢(逍遙)〔四月〕 當世商人氣質(篁村)〔六月〕 雪中梅(鐵腸)〔八月〕 二十三年國會未來記(誠一)〔十月〕 政海の情波(渡邊治譯)〔十月〕
	小說神髓上卷(逍遙)〔三月〕 文學論(長雄)〔九月〕	演劇改良論私考(正一) 演劇改良意見(謙澄・時事新聞その他)〔十月〕 日本文章論(謙澄)
かなのくわい創立 京城の變〔十二月〕 誕生―井泉水・星湖・暮鳥・豊隆・仲・胡夷 死去　仙果・柳北・容盛	ローマ字會起る〔一月〕 **硯友社結成**〔三月〕 女學雜誌創刊〔七月〕 都新聞社設立〔九月〕 內閣設置〔十二月〕 誕生―實篤・白秋・杢太郎・牧水・哀果・秀雄・萬里・介春 死去―種彦	反省雜誌創刊〔一月〕 帝國大學令發布〔三月〕 明治學院創立〔六月〕 大八洲學會雜誌創刊〔七月〕 演劇改良會設立〔八月〕 やまと新聞發刊〔八月〕 東洋學會雜誌創刊〔十月〕 誕生―潤一郎・利玄・啄木・勇・明子・彌生子・嘉香・千樫・葭子 ★演劇改良論起る

明治二〇年(1887)	明治二一年(1888)
國學和歌改良論（義象・由之）（七月） 歌學新論（高世）（十二月） 國學和歌改良不可論（八千穂）（十二月）	孝女白菊の歌（直文）（五月） 新撰さんびか（五月） 明治唱歌（建樹）（十二月） 言文一致歌（甕臣・東洋學會雜誌）（三月） 長歌改良論（弘綱・筆の花）（九月） 和歌を論ず（思軒・國民之友）（九月）
花間鶯（鐵腸）（二月） 屑屋の籠（天囚）（五月） 新粧の佳人（南翠）（五月） **浮雲**（四迷）（六月） 風琴調一節（美妙・以良都女）（七月） 月謠荻江一節（圓朝）（三月） 黄薔薇（圓朝）（四月）	綠簑談（南翠）（五月） 藪の鶯（花圃）（五月） **夏木立**（美妙）（八月） もしや草紙（櫻癡）（十一月） 谷間の姫百合（謙澄譯）（二月） **あひびき**（四迷譯・國民之友）（七月） めぐりあひ（四迷譯・都の花）（七月） 人耶鬼耶（涙香譯）（十一月） 大杯觴酒戰强者（默阿彌）（五月） 月梅薫朧夜（默阿彌）（五月）
近來流行の政治小說を評す（蘇峯・國民之友）（七月） 演劇史（谷口政德）（七月） 日本道德論（茂樹）（三月） 新日本の青年（蘇峯）（四月）	インスピイレエション（蘇峯・國民之友）（五月） 薩長の前途を占ふ（雪嶺・日本人）（二月）
國民之友創刊（二月） 哲學雜誌創刊（二月） 鹿鳴館假裝舞踏會（四月） 學位令公布（五月） 以良都女創刊（七月） 出版月評創刊（八月） 音樂學校開設（十月） 保安條令公布（十二月） 誕生―幹彥・有三・善藏・良平・瀧太郎 死去―直助 ★和歌改良論起る ★蘇峰の平民主義一世を風靡す	政教社結成・日本人創刊（四月） 弘之・鱗祥等初めて博士號を受く（五月） 我樂多文庫創刊（五月） 宮中御歌所設置（六月） めざまし新聞東京朝日と改稱（七月） 都の花創刊（十月） 少年園創刊（十一月） 美術學校設立（十月） 小說萃錦創刊（十一月） 大阪每日新聞發刊（十一月） 大和錦創刊（十二月） 明治文庫創刊（十二月） 高島炭鑛事件 誕生―淳・善郞・朔太郎・元麿・柳虹・次郎・民藏・篤二郎・莫哀・阿佐緒

明治二二年 (1889)	
新體詩批評（清風・國民之友）〔一月〕 いさり火（建樹）〔一月〕 **於母影**（鷗外・直文・通泰・鑚次郎・君子譯・國民之友）〔三月〕 長歌改良論辨駁（胤平・筆の花）〔三月〕 和歌及新體詩を論ず（由之・東洋學會雜誌）〔十二月〕	
胡蝶（美妙・國民之友）〔一月〕 細君（逍遙・國民之友）〔一月〕 初戀（嵯峨のや・都の花）〔一月〕 **露團々**（露伴・都の花）〔二月〕 **色懺悔**（紅葉）〔四月〕 一刹那（露伴・文庫）〔五月〕 むら竹（篁村）〔七月〕 野末の菊（嵯峨のや・都の花）〔七月〕 いちご姫（美妙・都の花）〔七月〕 流轉（嵯峨のや・國民之友）〔八月〕 風流佛（露伴）〔九月〕 殘菊（柳浪）〔十月〕 探偵ユーベル（思軒譯・國民之友）〔一月〕 瞽使者（思軒譯・國民之友）	盲長屋梅加賀鳶（默阿彌）〔六月〕 四千兩小判梅葉（默阿彌）〔八月〕 文覺上人勸進帳（學海・寶岑）〔九月〕
美辭學（半峰）〔五月〕 小說八宗（綠雨・讀賣新聞）〔十一月〕 演劇改良論者の偏見に驚く（鷗外・しがらみ草紙）〔十月〕 今の諸家の小說論を讀みて（鷗外・しがらみ草紙）〔十一月〕 再び劇を論じて世の評家に答ふ（鷗外・しがらみ草紙）〔十二月〕	
新小說創刊〔一月〕 憲法發布〔二月〕 森有禮刺さる〔二月〕 新聞日本發刊〔二月〕 我樂多文庫文庫と改題〔三月〕 新著百種刊行〔四月〕 帝室博物館開設〔五月〕 大隈重信傷けらる〔十月〕 歌舞伎座落成〔十月〕 **しがらみ草紙創刊**〔十月〕 小文學創刊〔十一月〕 國華創刊〔十二月〕 大和錦廢刊〔十二月〕 誕生―犀星・幸次郎・萬太郎・健・露風・寬・眞澄・英一・朽葉・憲吉 死去―祐命 ★條約改正反對の聲喧し ★活歷物全盛	死去―芳崖・辰猪・行誠・禮嚴 ★この比文學雜誌輩出 ★國粹主義運動漸く盛なり

明治二三年（1890）	明治二
醉沈香（美妙・國民之友）〔十月〕 日本韻文論（美妙・國民之友）〔十月〕 詩歌論一班（操山・日本評論）〔十二月〕 千代田歌集第一・二編（弘綱撰）〔一・十二月〕	新體梅花詩集（梅花）〔三月〕 蓬萊曲（透谷）〔五月〕 美妙齋主人が韻文論（鷗外・しがらみ草紙）〔十月〕 青年唱歌集（美妙） 新說歌がたり（秋香）〔十一月〕
緣外緣（露伴・日本之文華）〔一月〕 **舞姫**（鷗外・國民之友）〔一月〕 新色懺悔（紅葉・讀賣新聞）〔二月〕 おぼろ舟（紅葉・讀賣新聞）〔三月〕 浮城物語（龍溪）〔六月〕 葉末集（露伴）〔六月〕 歸省（湖處子）〔六月〕 伽羅枕（紅葉・讀賣新聞）〔七月〕 一口劍（露伴・國民之友）〔八月〕 うたかたの記（鷗外・しがらみ草紙）〔八月〕 犬蓼（綠雨）〔八月〕 うもれ木（鷗外・しがらみ草紙）〔四月〕	花守（水蔭・都の花）〔一月〕 こがね丸（小波・少年文學）〔一月〕 文づかひ（鷗外）〔一月〕 風流艷魔傳（露伴・しがらみ草紙）〔二月〕 三日月（浪六）〔四月〕 闇中政治家（抱一庵）〔六月〕
初學小說心得（綠雨・讀賣新聞）〔二月〕 小說評註問答（綠雨・讀賣新聞）〔三月〕 外山正一氏の畫論を駁す（鷗外・しがらみ草紙）〔五月〕 日本文學史（參次・鍬三郎）〔十月〕 小說三派（逍遙・讀賣新聞）	悲哀の快感（操山・國民之友）〔三月〕 春のや漫筆（逍遙） 逍遙子の諸評語（鷗外・しがらみ草紙） ・所謂小說三派論これなり **沒理想論**（逍遙・早稻田文學）〔十月〕
日本の文華創刊〔一月〕同廢刊〔十二月〕 國民新聞發刊〔二月〕 日本文學全書刊行〔四月〕 江戸紫創刊〔六月〕 衆議院議員選擧施行〔七月〕 國學院創立〔七月〕 教育勅語發布〔十月〕 日本歌學全書刊行〔十月〕 帝國議會召集〔十一月〕 聚芳十種刊行〔十二月〕 誕生―與志雄・耿之介・碎花・省吾・惣之助・白葉・邦子 死去―冬道・讓 ★時事政治小說漸く跡を斷つ	板垣退助等自由黨脫退〔一月〕 文學世界創刊〔三月〕 なにはがた創刊〔四月〕 露國皇太子大津事件〔四月〕 史海創刊〔五月〕 川上音次郎新劇板垣退助を演ず〔五月〕 葦分船創刊〔七月〕

四　年　(1891)	明治二五年 (1892)
新撰歌典（直文）〔十一月〕	詩歌論（操山・青年文學）〔七月〕 歌の栞（信綱）〔四月〕 香川景樹翁の歌論（操山・國民之友）〔九月〕
かくれんぼ（綠雨）〔六月〕 いさなとり（露伴・國會）〔六月〕 二人女房（紅葉・都の花）〔八月〕 風流佛（露伴・國民之友）〔八月〕 新葉末集（露伴）〔十月〕 **五重塔**（露伴・國會）〔十一月〕 油地獄（綠雨）〔六月〕 夏小袖（紅葉・讀賣新聞）〔十二月〕 血紅星（露伴・自由新聞） 辻淨瑠璃（露伴・國會） 水沫集（鷗外譯）〔七月〕 春日局（櫻癡）〔五月〕	**三人妻**（紅葉・讀賣新聞）〔三月〕 二日ものがたり（露伴・國會）〔五月〕 浴泉記（きみ子譯・しがらみ草紙）〔十月〕 **即興詩人**（鷗外譯・しがらみ草紙）〔十一月〕 罪と罰（魯庵譯）〔十一月〕
早稻田文學の沒理想（鷗外・しがらみ草紙）〔十月〕 ・所謂沒理想論の論戰茲に初る翌年六月畢る 眞善美日本人（雪嶺）〔三月〕 僞醜惡日本人（雪嶺）〔三月〕 幕府衰亡論（櫻癡・國民之友）	文學一斑（魯庵）〔三月〕 我觀小景（雪嶺）〔十一月〕
千紫萬紅創刊〔七月〕 **早稻田文學創刊**〔十月〕 衆議院解散〔十月〕 誕生－正雄・浩二・和郎・土明・藻風 死去－弘綱・敬宇・三溪・弘之・梅花・實美 ★前年よりこの兩三年文學評論盛なり	衆議院總選擧〔二月〕 歌學創刊〔三月〕 東洋自由黨創立〔八月〕 歌林創刊〔九月〕 明治の歌創刊〔十一月〕 子規新聞日本に俳句を初む〔十一月〕 萬朝報發刊〔十一月〕 小櫻緘創刊〔十一月〕 誕生－八十・春月・春夫・龍之介・成吉・大學・陽吉 ★井上哲次郎と高橋五郎等との間に宗教・教育衝突の論起る ★探偵小說流行の兆

明治二六年(1893)	明治二七年(1894)	
天地初發(半月・國民之友)〔一月〕 國詩の形式に就いて(操山・早稻田文學)〔十月〕 湖處子詩集(湖處子)〔十一月〕 歌學會歌範評論(胤平)〔四月〕 大八洲學會詠歌邪正論(胤平)〔四月〕 獺祭書屋俳話(子規)〔五月〕 ・前年新聞日本に連載せしものなり **芭蕉雜談**(子規・新聞日本)〔十一月〕	歐米名家詩集(建樹譯)〔一月〕 湖上の美人(雨江譯)〔三月〕 明治歌集(信綱編)〔二月〕 くちなしの花(樂)〔三月〕 **亡國の音**(鐵幹・二六新報)〔三月〕	深山の美人(雨江・帝國文學)〔一月〕 可兒大尉(正一・帝國文學)〔二月〕
さゝ舟・風流微塵藏第一(露伴・國會)〔一月〕 賤機(眉山・讀賣新聞)〔五月〕 心の闇(紅葉・讀賣新聞)〔六月〕	櫻の御所(弦齋・都新聞)〔一月〕 瀧口入道(樗牛・讀賣新聞)〔四月〕 吉野拾遺名歌譽(學海)〔六月〕 桐一葉(逍遙・早稻田文學)〔十一月〕	たけくらべ(一葉・文學界)〔一月〕 不言不語(紅葉・讀賣新聞)〔一月〕
讀我觀小景(操山・六合雜誌)〔二月〕 **人生に相渉るとは何の謂ぞ**(透谷・文學界)〔二月〕 內部生命論(透谷・文學界)〔五月〕 吾國の史劇(逍遙・早稻田文學)〔十月〕 靜思餘錄(蘇峯)〔五月〕 小羊漫言(逍遙)〔六月〕 マコウレー(三叉)〔八月〕 ウオルズウオルス(湖處子)〔十月〕 ゲーテ(伊作)〔十一月〕 吉田松蔭(蘇峯)〔十二月〕	文學者となる法(魯庵)〔四月〕 エマルソン(透谷)〔四月〕 透谷集〔十月〕	海外騷壇(敏等・帝國文學) 連載 ユーゴー(一太郎)〔五月〕
文學界創刊〔一月〕 三籟創刊〔四月〕 **直文淺香社成立** 都の花廢刊〔六月〕 二六新報發刊〔十月〕 誕生―正夫・宗治・愼吾・次郎 死去―默阿彌 ★愛山・透谷の間に文學の本質に關する論爭あり ★史傳・歷史小說流行 ★歌壇・俳壇革新の聲起る	小日本發刊〔二月〕 東京文學創刊〔二月〕 日淸開戰〔七月〕 征淸の勅下る〔八月〕 しがらみ草紙廢刊〔八月〕 酒竹筑波會成立〔十月〕 誕生―政二郎・茂索 死去―魯文・透谷・幹文 ★ケーベル博士大學にて哲學を講義す	帝國文學創刊〔一月〕 **太陽創刊**〔一月〕 **文藝俱樂部創刊**〔一月〕 青年文創刊〔二月〕

明治二八年 (1895)

小夜砧（羽衣・帝國文學）〔六月〕
新體詩歌集（正一・秋香・萬年・正臣）〔九月〕
我邦將來の詩形と外山博士の新體詩（樗牛・帝國文學）〔十月〕
新體詩の形について（抱月・早稻田文學）〔十月〕
逍遙遺稿〔十一月〕
俳諧大要（子規・新聞日本）〔十月〕

新浦島（露伴・國會）〔一月〕
大盃（眉山・文藝倶樂部）〔一月〕
書記官（眉山・太陽）〔二月〕
變目傳（柳浪・讀賣新聞）〔二月〕
ありのすさび（宙外・早稻田文學）〔四月〕
夜行巡査（鏡花・文藝倶樂部）〔四月〕
阿千代（美妙・文藝倶樂部）〔四月〕
改良若殿（天外・讀賣新聞）〔四月〕
黑蜴蜓（柳浪・文藝倶樂部）〔五月〕
外科室（鏡花・文藝倶樂部）〔六月〕
門三味線（綠雨・讀賣新聞）〔七月〕
すみれ日記（小波・國民之友）〔八月〕
うらおもて（眉山・國民之友）〔八月〕
にごり江（一葉・文藝倶樂部）〔九月〕
女房殺し（水蔭・文藝倶樂部）〔十月〕
暗潮（眉山・讀賣新聞）〔十一月〕
十三夜（一葉・文藝倶樂部）〔十二月〕
松風（眉山）〔十二月〕

日淸講和〔四月〕
遼東還付〔五月〕
小說百家選廢刊〔六月〕
少年園文庫と改題〔八月〕
竹冷秋聲會設立〔十月〕
死去—淸矩・毅・新二
★觀念小說・悲慘小說簇出
★閨秀小說家振ふ
★子規の日本派盛なり
★この年より文學雜誌簇出

明治二九年 (1896)	明治
北沼山の歌（巽軒・帝國文學）〔一月〕 **東西南北**（鐵幹）〔五月〕 一葉舟（藤村・文學界）〔十月〕 花紅葉（雨江・桂月・羽衣）〔十二月〕	天地玄黃（鐵幹）〔一月〕 抒情詩（嵯峨のや・獨步・花袋・國男・玉茗・湖處子）〔二月〕 この花（新詩會編）〔三月〕 破鐘の響（晚翠・帝國文學）〔四月〕
多情多恨（紅葉・讀賣新聞）〔二月〕 **たけくらべ**（一葉・文藝倶樂部）〔四月〕 **今戸心中**（柳浪・文藝倶樂部）〔七月〕 信濃屋（柳浪・籠まくら）〔九月〕 河內屋（柳浪・新小說）〔九月〕 寢白粉（風葉・文藝倶樂部）〔九月〕 闇のうつゝ（宙外・新小說）〔九月〕 照葉狂言（鏡花・讀賣新聞）〔十月〕 十五少年（思軒譯・少年世界）〔三月〕 片戀（四迷譯）〔十一月〕 牧の方（逍遙・早稻田文學）〔一月〕 **桐一葉**（逍遙）〔二月〕	**金色夜叉**（紅葉・讀賣新聞）〔一月〕 一葉全集〔一月〕 源おぢ（獨步・文藝倶樂部）〔八月〕 絃聲（眉山・文藝倶樂部）〔十月〕
情劇は果して夢幻劇なるか（樗牛・太陽）〔四月〕 ・この事に關し鷗外との論爭つづく 文學その折々（逍遙）〔九月〕 月ぐさ（鷗外）〔十二月〕	我邦現今の文藝界に於ける批評家の本務（樗牛・太陽）〔六月〕 明治の小說（樗牛・太陽）〔六月〕 春のや主人の「牧の方」を評す（樗牛・太陽）〔八月〕
めさまし草創刊〔一月〕 音樂學校第一回演奏會開催〔四月〕 **新小說復刊**〔七月〕 新聲創刊〔七月〕 世界の日本創刊〔七月〕 大和琴創刊〔八月〕 いさゝ川創刊〔十月〕 俳諧秋の聲創刊〔十一月〕 江湖文學創刊〔十一月〕 死去―一葉・賤子　鐵腸 ★世界主義提唱	ホトヽギス創刊〔一月〕 金本位制施行〔三月〕 新著月刊創刊〔四月〕 新作文庫創刊〔五月〕 日本主義創刊〔五月〕 古社寺保存法公布〔六月〕

三〇年 (1897)

松蟲鈴蟲(天遊・天來)〔五月〕
愛吟(鑑三譯)〔七月〕
若菜集(藤村)〔八月〕
雲月花(建樹)〔九月〕
國歌新論(謙澄)〔五月〕
・讀賣新聞紙上における鐵幹との論爭を纏めたものなり
俳人蕪村(子規・新聞日本)〔四月〕
新派俳家句集(泥牛編)〔十一月〕

畜生腹(柳浪・太陽)〔十月〕
小公子(賤子譯)〔一月〕
うき草(四迷譯)〔四月〕
かげ草(鷗外・喜美子譯)〔六月〕
春雨傘(櫻癡 新小說)〔五月〕
沓手鳥孤城落月(逍遙・新小說)〔九月〕

・これより逍遙との間に史劇本質論起る
日本主義(樗牛・太陽)〔五月〕

京都帝國大學開設〔九月〕
社會問題研究會結成
明治小說文庫創刊〔十二月〕
俳諧文庫刊行
誕生―義三郎・古賀
死去―思軒・周
★日本主義隆盛
★社會主義思潮發生
★新詩壇確立

明治三一年 (1898)

山高水長(大月隆編)〔一月〕
一葉舟(藤村)〔六月〕
黄菊白菊(桂月)〔十二月〕
夏草(藤村)〔十二月〕
歌よみに與ふる書(子規・新聞日本)〔二月〕
新俳句(碧玲瓏・三川・東洋編)〔三月〕

二日物語(露伴・文藝俱樂部)〔二月〕
暮の廿八日(魯庵・新著月刊)〔三月〕
笈摺草紙(鏡花・文藝俱樂部)〔四月〕
戀慕ながし(風葉・讀賣新聞)〔九月〕
通夜物語(鏡花・大阪每日新聞)〔五月〕
不如歸(蘆花・國民新聞)〔十一月〕
親ごゝろ(四迷譯・文藝俱樂部)〔七月〕

ワルトホイットマン(樗牛・太陽)〔五月〕

文學界廢刊〔一月〕
心の花創刊〔二月〕
憲政黨組織〔六月〕
猪之吉いかづち會結成〔六月〕
國民之友廢刊〔八月〕
ホトヽギス東京より發刊〔十月〕
社會主義研究會創立〔十月〕
早稻田文學廢刊〔十一月〕
★倫理研究熱勃興
★社會小說出づ

明治三二年(1899)	明治三三年(1900)	明治三
天地有情(晩翠)〔四月〕 暮笛集(泣菫)〔十一月〕 深山櫻(建樹)〔十一月〕 新撰詠歌法(羽衣)〔一月〕 和歌壇の革新に就いて(貞利・讀賣新聞)〔二月〕	詩美幽韻(醉茗編)〔六月〕 夜濤集(月郊)〔十二月〕 朝嵐夕雨(月の桂のや・春塘)〔十一月〕	無弦弓(醉茗)〔一月〕 鐵幹子(鐵幹)〔三月〕 むらさき(鐵幹)〔四月〕 晩鐘(晩翠)〔五月〕 暗香疎影(雨江)〔六月〕 露じも(泡鳴)〔七月〕 小百合集(臥城)〔七月〕 落梅集(藤村)〔八月〕 片袖第一集(鐵幹編)〔九月〕
おぼろ夜(綠雨・文藝倶樂部)〔一月〕 落紅(魯庵・太陽)〔三月〕 蛇いちご(天外)〔四月〕 鬘下地(風葉)〔九月〕 己が罪(幽芳・大阪毎日新聞)〔九月〕 湯島詣(鏡花)〔十一月〕	**高野聖**(鏡花 新小說)〔二月〕 思ひ出の記(蘆花・國民新聞)〔三月〕 はつ姿(天外・二六新報)〔五月〕	武藏野(獨步)〔三月〕 註文帳(鏡花・新小說)〔四月〕 さめたる女(風葉・新小說)〔五月〕 無花果(春雨・大阪毎日新聞)〔五月〕 ふところ日記(眉山)〔九月〕 錦木(春葉・新小說)〔十二月〕
朝茶の子(魯庵・新小說)〔六月〕 審美綱領(鷗外)〔六月〕 時代管見(樗牛) 時代の精神と大文學(樗牛・太陽)〔二月〕	國文學史十講(矢一)〔一月〕 土井晩翠に與へて當今の文壇を論ずる書(樗牛・太陽)〔二月〕 審美新說(鷗外)〔二月〕 文學小觀(桂月)〔二月〕 風雲集(抱月・宙外・青々園)〔四月〕 バイロン(實)〔十月〕 シェレー(佳澄)〔十一月〕	**文明批評家としての文學者**(樗牛・太陽)〔十月〕 姉崎嘲風に與ふる書(樗牛・太陽)〔五月〕 英文學史(逍遙)〔六月〕 美的生活論(樗牛・太陽)〔五月〕 文藝論集(敏)〔十二月〕
貞利わかな會設立〔一月〕 反省雜誌中央公論と改題〔一月〕 **根岸短歌會成立**〔三月〕 條約改正實施〔七月〕 東京新詩社創立〔秋〕 死去―良吉 ★家庭小說流行 ★寫生文出づ	太平洋創刊〔一月〕 歌舞伎創刊〔一月〕 **明星創刊**〔四月〕 北清事變〔五月〕 政友會成立〔九月〕 小天地創刊〔十月〕 死去―濤風・敦子・正一・圓朝・操山・武鄕 ★子規鐵幹不可並稱說起る ★田園小說出づ	新文藝創刊〔一月〕 精神界創刊〔一月〕 女學世界創刊〔一月〕 社會民主黨組織〔五月〕 星亨刺殺さる〔六月〕 白虹創刊〔七月〕 俳聲創刊 死去―諭吉・乙羽・兆民 ★ニイチェ主義喧し

四　年　(1901)	明治三五年(1902)
ゆく春（泣菫）〔十月〕 ハイネの詩（柴舟譯）〔十一月〕 片袖第二集（鐵幹編）〔十二月〕 かたわれ月（薫園）〔一月〕 迦具土（躬治）〔七月〕 **みだれ髪**（晶子）〔八月〕 新派和歌評論（黑瞳子）〔十一月〕 春夏秋冬（子規選）〔五月〕	草わかば（有明）〔一月〕 夕月（夜雨） 半月集（半月）〔十一月〕 うもれ木（鐵幹）〔十二月〕 玉匣兩浦島（鷗外）〔十二月〕 叙景詩（薫園・柴舟）〔一月〕 つゆ草（みづほのや）〔二月〕 新派和歌大要（鐵幹）〔六月〕 新派和歌辭典（日本新詩學會編）〔七月〕 **獺祭書屋俳句帖抄**（子規）〔四月〕
はやり唄（天外）〔十二月〕 イプセンの社會劇（月郊譯）〔十月〕 みをつくし（敏譯）〔十月〕	黑潮（蘆花・國民新聞）〔一月〕 涼炎（風葉・新小說）〔四月〕 重右工門の最後（花袋）〔五月〕 地獄の花（荷風）〔七月〕 沼の女（風葉・新小說）〔八月〕 春光（秋聲・文藝界）〔八月〕 雨（柳浪・新小說）〔十月〕 舊主人（藤村・新小說）〔十一月〕 起誓文（鏡花・新小說）〔十一月〕 酒中日記（獨歩・文藝界）〔十一月〕 卽興詩人（鷗外譯）〔九月〕 噫無情（涙香・萬朝報）
詩聖ダンテ（敏）〔十二月〕 最近海外文學（敏）〔十二月〕 一年有半（兆民） 宗門の維新（智學）〔四月〕	審美極致論（鷗外）〔二月〕 新美辭學（抱月）〔五月〕 文界の大魔王（鷹太郎）〔七月〕 宗教的眞理の性質（梁川・早稲田學報）〔一月〕 日蓮上人とは如何なる人ぞ（樗牛・太陽）〔七月〕 新社會（文雄）〔七月〕
★浪漫主義隆盛 ★文壇照魔鏡事件・文壇廓清論起る ★満之の精神主義青年思想界風靡	日英同盟〔一月〕 龍土會創集〔一月〕 文藝界創刊〔三月〕 藝文創刊〔六月〕 東京專門學校早稲田大學と改稱〔九月〕 萬年艸創刊〔十月〕 死去－樗牛・子規・茂樹・採菊 ★宗教熱・哲學熱起る

明治三六年（1903）	明治三七年
日本國歌（白星）〔二月〕 獨弦哀歌（有明）〔五月〕 社會主義詩集（花外）〔八月〕 長曾我部信親（鷗外）〔九月〕 日蓮上人（紫紅）〔十月〕 思草（信綱）〔十月〕	鶯の歌（敏・明星）〔一月〕 七つ星（白星）〔一月〕 花外詩集（花外）〔二月〕 詩人蒲原有明を論ず（天壇・帝國文學）〔三月〕 出廬（露伴・讀賣新聞）〔三月〕 毒艸（鐵幹・晶子）〔五月〕
泊り客（春葉・新小説）〔一月〕 魔風戀風（天外・讀賣新聞）〔二月〕 舞の袖（鏡花・新小説）〔四月〕 みだれ箱（綠雨）〔五月〕 天うつ浪（露伴・讀賣新聞）〔九月〕 寫生文集（子規・四方太）〔九月〕 白羽箭（鏡花・文藝倶樂部）〔十一月〕 風流線（鏡花・國民新聞）〔十二月〕 聖人歟盜賊歟（抱一庵譯）〔三月〕 椿姫（秋濤譯）〔五月〕 鐘樓守（紅葉）〔十二月〕 大鹽平八郎（月郊）〔一月〕 江戸城明渡（月郊）〔五月〕	紅葉全集〔一月〕 水彩畫家（藤村・新小説）〔一月〕 火の柱（尚江・毎日新聞）〔五月〕 良人の告白（尚江・毎日新聞）〔十一月〕
デカダン論（無書子・帝國文學） 社會主義神髓（秋水）〔五月〕 プラトン全集（鷹太郎譯）〔十月〕 天人論（涙香）	樗牛全集〔一月〕 新樂劇論（逍遙）〔十一月〕 露骨なる描寫（花袋・太陽）
不如歸新派劇に演ぜらる〔四月〕 左千夫馬醉木創刊〔六月〕 薫園白菊會成立〔十月〕 白百合創刊〔十一月〕 平民新聞發刊〔十一月〕 卯杖創刊 死去―紅葉・直文・滿之・團十郎・菊五郎・歌子 ★藤村操華嚴瀧に投身自殺・この比青年の懐疑的傾向濃厚なり ★新劇運動緒につく ★譚詩・譯詩流行	平民新聞紙上に非戰論掲載〔一月〕 日露開戰〔二月〕 時代思潮創刊〔二月〕 桐一葉上演〔三月〕 新潮創刊〔五月〕 七人創刊〔十一月〕 孫文亡命し來る〔十二月〕 柴舟車前草社創立

(1904)

藤村詩集（藤村）〔九月〕
新曲浦島（逍遙）〔九月〕
大西博士全集第七卷（操山）〔十二月〕
夕潮（泡鳴）〔十二月〕
小扇（晶子）〔一月〕
萩之家遺稿〔五月〕
竹之里人撰歌（眞一郎編）〔五月〕
銀鈴（柴舟）〔十一月〕
竹之里歌（子規）〔十一月〕
連句論（虚子・ホトヽギス）〔九月〕

日蓮上人辻說法（鷗外・歌舞伎）〔二月〕

死去―永機・綠雨・抱一庵・八雲・左團次・愚庵
★自然主義の聲漸く喧し.

明治三八年

山上湖上（みづほのや・山百合）〔三月〕
夏花少女（林外）〔三月〕
あこがれ（啄木）〔五月〕
二十五弦（泣菫）〔五月〕
悲戀悲歌（泡鳴）〔六月〕
白玉姬（泣菫）〔六月〕
塔影（醉茗）〔六月〕
靑海波（醉茗編）〔六月〕
金帆（柴舟）〔六月〕
夏姬（露風）〔七月〕
春鳥集（有明）〔七月〕
小野のわかれ（薰）〔九月〕
まひる野（空穗）〔九月〕

我輩は猫である（漱石・ホトトギス）〔一月〕
倫敦塔（漱石・帝國文學）〔一月〕
亙漢（嵯峨のや・新小說）〔二月〕
靑春（風葉・讀賣新聞）〔三月〕
獨步集（獨步）〔八月〕
土偶木偶（露伴・新聞日本）〔九月〕
薤露行（漱石・中央公論）〔十一月〕

見神の實驗（梁川・新人）〔五月〕
神經質の文學（孤村・帝國文學）〔六月〕
・これより浩々歌客との間に象徵詩論爭行はる
梁川文集（梁川）〔七月〕
文藝觀（天溪）〔八月〕
病間錄（梁川）〔十月〕
表象主義の文學（天溪・太陽）〔十月〕
國文學全史・平安朝編（作太郎）〔十月〕

奉天の役〔三月〕
牧の方上演〔四月〕
日本海の海戰〔五月〕
新古文林創刊〔五月〕
ポーツマス講和條約〔九月〕
日比谷公園國民大會開催・警察署燒打事件〔九月〕
空穗十月會設立〔十月〕
死去―鼎軒・寧齋
★象徵詩頓に興る

(1905)	明　治　三　九　年
海潮音(敏譯)〔十月〕 花守(夜雨)〔十一月〕 新曲かぐや姫(逍遙)〔十一月〕 戀ごろも(登美子・雅子・晶子)〔一月〕 小詩國(薫園)〔三月〕 睡蓮(御風)〔九月〕	ゆく雲(花外)〔一月〕 すひかつら(無涯)〔二月〕 あららぎ(葉舟)〔二月〕 日本民謠概論(素琴 帝國文學)〔二月〕 **白羊宮**(泣菫)〔五月〕 孔雀船(清白)〔五月〕 象徴詩釋義(敏・蘩苑)〔五月〕 東海遊子吟(晩翠)〔六月〕 あやめ草(米次郎編)〔六月〕 花妻(林外)〔六月〕 花守日記(夜雨)〔七月〕 白羊宮合評(鐵幹等・明星)〔七月〕 葛城の神(泣菫・早稲田文學)〔七月〕 豊旗雲(米次郎編)〔九月〕 ささぶえ(白羊)〔十月〕 舞姫(晶子)〔一月〕
復活(魯庵・新聞日本)〔四月〕	海異記(鏡花・新小説)〔十月〕 野菊の墓(左千夫・ホトトギス)〔一月〕 **破戒**(藤村)〔三月〕 運命(獨歩)〔三月〕 コブシ(天外・讀賣新聞)〔三月〕 坊ちゃん(漱石・ホトトギス)〔四月〕 觀音岩(眉山)〔四月〕 千鳥(三重吉・ホトトギス)〔五月〕 漾虚集(漱石)〔五月〕 **草枕**(漱石・新小説)〔九月〕 其面影(四迷・東京朝日新聞)〔十月〕 常闇(逍遙・早稲田文學)〔二月〕 櫻時雨(月郊・新小説)〔五月〕
	囚はれたる文藝(抱月・早稲田文學)〔一月〕 神秘的半獣主義(泡鳴)〔六月〕 ルキ王家の夢のあと(抱月・早稲田文學)〔九月〕 明治文學史(準太郎)〔十二月〕 進化と人生(淺次郎)
	藝苑創刊〔一月〕 **早稲田文學再刊**〔一月〕 文藝協會設立〔二月〕 文章世界創刊〔三月〕 趣味創刊〔六月〕 常磐會設立〔六月〕 佐保鹿創刊〔九月〕 文藝協會第一回公演〔十一月〕 夕暮白日社創立〔秋〕 死去―櫻癡・斎之 ★プラグマティズム紹介され學界思想界の問題となる ★民謠研究熱起る

明治四〇年　(1906)

伶人（薫園）（四月）
萩之家歌集（六月）
明暗（空穂・葉舟）（七月）
夢の華（晶子）（九月）
池塘集（霞村）（十一月）
續春夏秋冬（碧梧桐編）（八月）

湖畔の悲歌（胡夷）（一月）
二十八宿（夜雨）（二月）
新體詩論（作太郎・帝國文學）（二月）
日本民謠全集（林外編）（三月）
朝花夜花（雨情）（三月）
管絃（愛雄）（四月）
うた日記（鷗外）（九月）
消なば消ぬがに（甲之）（十一月）
新體詩の作法（泡鳴）（十二月）
わかき日（萬里）（三月）
わがおもひ（薫園）（三月）
靜夜（柴舟）（五月）
秋香集（秋香）（六月）
哀樂第一（夕暮）（十一月）
三千里（碧梧桐）

鶉籠（漱石）（一月）
婦系圖（鏡花・やまと新聞）（一月）
山彦（三重吉・ホトヽギス）（一月）
塵埃（白鳥・趣味）（二月）
焔（秋聲・國民新聞）（四月）
風流懺法（虛子・ホトヽギス）（四月）
千代紙（三重吉）（四月）
南小泉村（青果・新潮）（五月）
濤聲（獨歩）（六月）
虞美人草（漱石・東京朝日新聞）（六月）
無憂樹（鏡花）（六月）
春葉集（春葉）（七月）
愁人（未明）（七月）
蒲團（花袋・新小說）（九月）
紅塵（白鳥）（九月）
第一人者（青果・中央公論）（十月）

文藝講話（敏）（三月）
藝術と人生（信策）（六月）
新體詩史（泡鳴・新思潮）
論理的遊戲を排す（天溪・太陽）（十月）
囘光錄（梁川）（四月）

向日葵創刊（一月）
日本人日本及日本人と改題（一月）
第二次平民新聞發刊（一月）
觀潮樓歌會創集（三月）
白百合廢刊（四月）
西園寺公文士招待（雨聲會）（六月）
新思潮創刊（九月）
文部省主催美術展覽會第一回開催（十月）
文藝協會第二回演藝會に土井春曙「ハムレット」を演ず（十一月）
早稻田詩社起る
死去―梁川・羯南・西崖・美靜
★文章世界・早稻田文學に自然主義論主として載る
★自由・口語詩勃興の氣運動く
★新傾向俳句風靡

明治四一年 (1907)

有明集(有明)〔一月〕
有明集を讀む(御風・早稲田文學)〔三月〕
闇の盃盤(泡鳴)〔四月〕
御風詩集(御風)〔六月〕
獨逸の抒情詩に於ける印象的自然主義(天壇・早稲田文學)〔六月〕
口語詩問題(抱月・早稲田文學)〔十一月〕
常夏(晶子)〔七月〕
海の聲(牧水)〔七月〕
新春夏秋冬(東洋城編)
俳句界の新傾向(乙字・アカネ)〔二月〕
新傾向大要(碧梧桐)〔六月〕

何處へ(白鳥・早稲田文學)〔一月〕
一兵卒(花袋・早稲田文學)〔一月〕
竹の木戶(獨步・中央公論)〔一月〕
二老人(獨步・文章世界)〔一月〕
鷄頭(虛子)〔一月〕
草迷宮(鏡花)〔一月〕
生(花袋・讀賣新聞)〔四月〕
春(藤村・東京朝日新聞)〔四月〕
家鴨飼(青果・早稲田文學)〔四月〕
沼夫人(鏡花・新小說)〔六月〕
あめりか物語(荷風)〔七月〕
出產(秋聲・東京朝日新聞)〔八月〕
獨步集第二(獨步)〔八月〕
平凡(四迷・東京朝日新聞)〔十月〕
凋落(秋聲・讀賣新聞)〔十月〕
戀ざめ(風葉・新聞日本)〔十一月〕
綠髮(未明)〔十二月〕
青果集(青果)〔十二月〕
思軒全集〔五月〕

鷄頭序(漱石)〔一月〕
文藝上の自然主義(抱月・早稲田文學)〔一月〕
現實暴露の悲哀(天溪・太陽)〔一月〕
所謂餘裕派小說の價値(天溪・太陽)〔三月〕
自然主義の價値(抱月・早稲田文學)〔五月〕
無解決と解決(天溪・太陽)〔五月〕
自然主義(天溪)〔七月〕
我國に於ける自然主義を論ず(王堂・明星)〔八月〕
非自然主義(宙外)〔九月〕
新自然主義(泡鳴)〔十月〕
日本國民性十講(矢一)

馬醉木廢刊〔一月〕
アカネ創刊〔二月〕
わか竹創刊〔五月〕
森鷗外臨時假名遣調査委員會に於て新假名遣案に反對す〔六月〕
白日社再興〔六月〕
都會詩社結成〔八月〕
アラヽギ創刊〔十月〕
戊申詔書下る〔十月〕
明星廢刊〔十一月〕
死去―獨步・眉山・春汀・誠一・欒・雀志
★世紀末的頹廢思潮漲る

(1908)

三四郎（漱石・東京朝日新聞）〔九月〕
二家族（白鳥・早稲田文學）〔十月〕
復活前編（魯庵）〔十月〕
お夏物狂ひ（逍遙・早稲田文學）〔二月〕

明治四二年

邪宗門（白秋）〔三月〕
野菊（建樹）〔四月〕
廢園（露風）〔九月〕
佐保姫（晶子）〔六月〕
永日（柴舟）〔八月〕
日本俳句鈔（碧梧桐編）

煤煙（草平・東京朝日新聞）〔一月〕
耽溺（泡鳴・新小説）〔二月〕
ふらんす物語（荷風）〔三月〕
森（葉舟・讀賣新聞）〔三月〕
白鳥集（白鳥）〔五月〕
それから（漱石・東京朝日新聞）〔六月〕
ギタ・セクスアリス（鷗外・スバル）〔七月〕
眉山全集〔七月〕
大川端（薫・讀賣新聞）〔八月〕
落日（白鳥・讀賣新聞）〔九月〕
妻（花袋・新聞日本）〔十月〕
芽生（藤村・中央公論）〔十月〕
白鷺（鏡花・東京朝日新聞）〔十月〕

文學評論（漱石）〔三月〕
近代文藝の研究（抱月）〔六月〕
懷疑と告白（抱月・早稲田文學）〔九月〕

スバル創刊〔一月〕
牧水創作創刊〔三月〕
自由詩社成る〔五月〕
伊藤博文ハルピンに射殺さる〔十月〕
創作休刊〔十月〕
屋上庭園創刊〔十月〕
自由劇場起る・第一回公演「ボルクマン」〔十一月〕
文藝革新會組織
死去―四迷・學海・登美子
★耽美享樂派文學行はる
★新劇運動漸く盛なり
★この二・三年歌壇に自然主義傾向盛なり

(1909)	明治四三年
	草山の詩(霞村)〔一月〕 霧(醉茗)〔五月〕 櫛の葉(寛)〔七月〕 路傍の花(柳虹)〔十一月〕 寂しき曙(露風)〔十一月〕 獨り歌へる(牧水)〔一月〕 **收穫**(夕暮)〔三月〕 醒めたる歌(薫園)〔三月〕 相聞(寛)〔三月〕 驕樂(元)〔三月〕 **別離**(牧水)〔四月〕 Nakiwarai(Aikwa)〔四月〕 禮嚴法師歌集(寛編)〔八月〕 冬道翁歌集〔九月〕 **酒ほがひ**(勇)〔九月〕 鷄冠木(孝子)〔十月〕
田舎教師(花袋)〔十月〕 冷笑(荷風・東京朝日新聞)〔十月〕 すみだ川(荷風・新小説)〔十二月〕 寄生木(蘆花)〔十二月〕 プラムウラ(鷗外・スバル)〔一月〕 一幕物(鷗外)〔一月〕 ハムレット(逍遙)〔十二月〕	**歌行燈**(鏡花・新小説)〔一月〕 **家**(藤村・讀賣新聞)〔一月〕 渦卷(敏・國民新聞)〔一月〕 青年(鷗外・スバル)〔三月〕 綠(花袋・毎日電報)〔三月〕 盲魚(青果・中央公論)〔三月〕 門(漱石・東京朝日新聞)〔三月〕 別れた妻に送る手紙(秋江・早稲田文學)〔四月〕 土(節・東京朝日新聞)〔六月〕 放浪(泡鳴)〔七月〕 足跡(秋聲・讀賣新聞)〔八月〕
	文明思潮を描ける文學(抱月・早稲田文學)〔一月〕 悲哀の哲理(泡鳴・文章世界)〔一月〕 文藝史・太陽臨時増刊〔二月〕 思想問題(敏) 自己と分裂生活(抱月・早稲田文學)〔七月〕 日本歌學史(信綱)〔十月〕 意志と現識としての世界(正治譯)〔九月〕
	創作再刊〔三月〕 **白樺創刊**〔四月〕 三田文學創刊〔五月〕 日韓合併〔八月〕 幸德秋水大逆事件〔八月〕 新思潮再刊〔九月〕 劇と詩創刊〔十二月〕 文藝委員會設置 死去　秋香・作太郎・美妙・楠緒子・湖山・幹雄 ★新理想文學起らんとす

明治四四年	(1910)
春のゆめ（夕暎）〔五月〕 **思ひ出**（白秋）〔六月〕 夜の舞踏（東明）〔六月〕 春泥集（晶子）〔一月〕 路上（牧水）〔九月〕 大和田建樹歌集（福島四郎編）〔十一月〕 山河（薫園）〔十二月〕 俳壇最近の傾向を論ず（井泉水・層雲）〔四月〕	短歌滅亡私論（柴舟・創作）〔十月〕 朝夕（稲里）〔十一月〕 **一握の砂**（啄木）〔十二月〕
斷橋（泡鳴・毎日電報）〔一月〕 發展（泡鳴・大坂新報）〔四月〕 少年（潤一郎・スバル）〔六月〕 泥人形（白鳥・早稲田文學）〔七月〕 紅茶のあと（荷風・三田文學）〔八月〕 黴（秋聲・東京朝日新聞）〔八月〕 雁（鷗外・スバル）〔九月〕	微光（白鳥・中央公論）〔十月〕 三昧線堀（鏡花・三田文學）〔十月〕 **刺青**（潤一郎・新思潮）〔十一月〕 二葉亭全集 獨歩全集 人形の家（抱月・早稲田文學）〔一月〕 續一幕物（鷗外）〔一月〕 牧師の家（春雨・東京朝日新聞）〔二月〕 象（潤一郎・新思潮）〔十月〕 河内屋與兵衛（勇・新思潮）〔十一月〕
妄想（鷗外・三田文學）〔三月〕	
幸徳秋水等死刑〔一月〕 詩歌創刊〔四月〕 層雲創刊〔四月〕 新思潮廢刊〔五月〕 車前草創刊〔九月〕 青踏創刊〔九月〕 創作休刊〔十月〕 朱欒創刊〔十一月〕 文藝協會組織を改め帝劇に「人形の家」を上演す〔十一月〕 死去—槐南・建樹・閑藏・音次郎 ★南北朝正閏論大いに行はる	

	(1911)	明治四五年 (1912)
		習作（挽歌）〔一月〕 夜の葉（葵村）〔五月〕 忽忘草（白秋・露風）〔六月〕 夜（楓花）〔十月〕 南方の花（元）〔一月〕 青海波（晶子）〔一月〕 黄昏に（哀果）〔二月〕 空穗歌集（空穗）〔四月〕 歌ものがたり（正風）〔五月〕 悲しき玩具（啄木）〔六月〕 陰影（夕暮）〔九月〕 死か藝術か（牧水）〔九月〕 水莊記（勇）〔十月〕 新月（信綱）〔十一月〕 芭蕉の境涯（乙字・人生と表現）〔一月〕
	毒（白鳥・國民新聞）〔十月〕 お目出度き人（實篤）〔十二月〕 信西（潤一郎・スバル）〔一月〕 修善寺物語（綺堂・文藝倶樂部）〔一月〕 和泉屋染物店（杢太郎・スバル）〔三月〕	彼岸過ぎ迄（漱石・東京朝日新聞）〔一月〕 惡魔（潤一郎・中央公論）〔二月〕 返らぬ日（三重吉）〔三月〕 魯鈍な猫（未明・讀賣新聞）〔四月〕 物云はぬ顔（未明）〔五月〕 少年の笛（未明）〔五月〕 新橋夜話（荷風）〔九月〕 世間知らず（實篤） 行人（漱石）〔十二月〕 みれん（鷗外譯）〔七月〕
		近代文學十講（白村）〔三月〕
	★新しき女性現る ★人道主義文學興る	文藝委員會坪内逍遙に賞牌賞金を贈る〔三月〕 車前草休刊〔三月〕 自然創刊〔四月〕 モザイク創刊〔四月〕 文藝協會「故郷」上演禁止さる〔五月〕 米價騰貴・細民窮乏〔七月〕 明治天皇崩御〔七月〕 大正改元〔七月〕 乃木大將殉死〔九月〕 死去―正風・啄木 ★自然主義漸く行きつまり新理想主義・新浪漫主義など之に代らんとす

索引

あ

い・ゐ

う

え

お・を

か・が

き・ぎ

く・ぐ

け・げ

こ・ご

さ・ざ

し・じ

す

せ・ぜ

そ・ぞ

つ

て・で

と・ど

ひ・び

ふ・ぶ

昭和七年十月二十日印刷
昭和七年十月廿三日發行
昭和七年十一月十五日再版印刷
昭和七年十一月十八日再版發行
昭和八年九月八日三版發行
昭和十一年二月十五日四版發行

（明治文學序說）
定價金貳圓五拾錢

著作權所有

著作者　藤村　作
　　　　久松潛一

發行者　來島正時
東京市神田區神保町二丁目十番地

印刷者　小笠原秀雄
東京市神田區錦町三丁目廿六番地

印刷所　秀好堂印刷所
東京市神田區錦町三丁目廿六番地

發行所　山海堂出版部
東京市神田區神保町二丁目十番地
電話九段一三一〇番
振替東京二一六九一番